

尖石

茅野町教育委員会

尖石

宮坂英式著

茅野町教育委員会

1957年刊

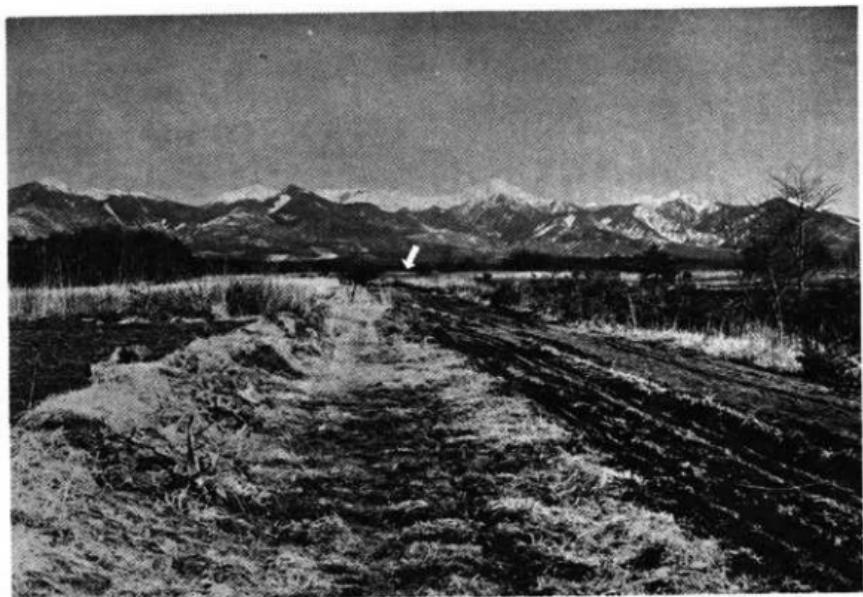


図 絵 1 八ヶ獄連峰と遺跡の遠望

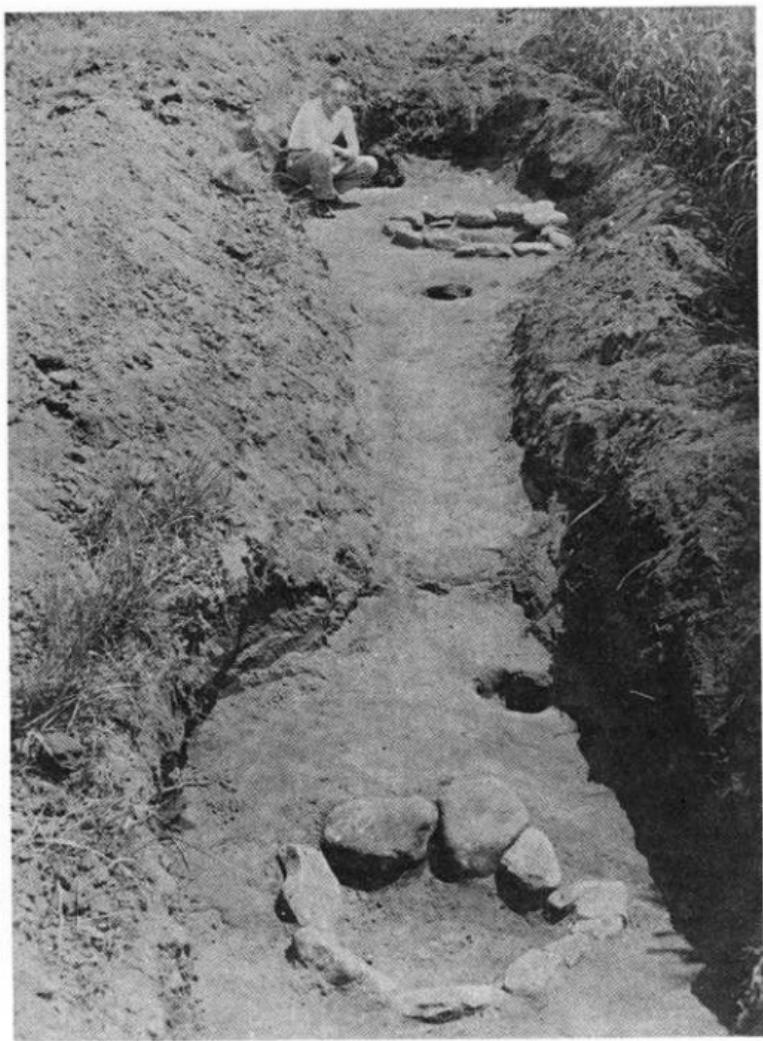


図 絵 2 炉 址 と 著 者 (昭和 8 年)

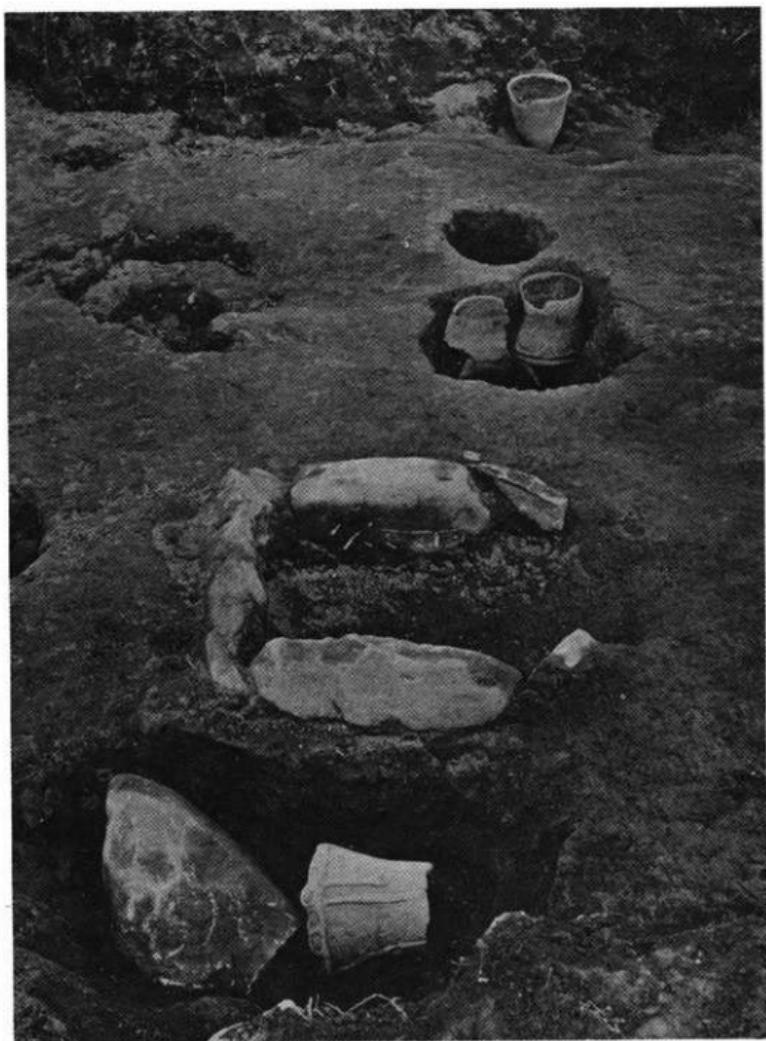


図 絵 3 尖石第一六住居址 一炉と埋甕—北方より

「尖石」復刻版刊行に当つて

日本の屋根と称せられる長野県には、原始時代の遺跡が数多く発見されている。その中でも、蓼科・八ヶ岳の西山麓を占めるわが茅野市には、古代人の遺跡がとくに多い。その代表であり、最も早く発掘調査されたのは、尖石遺跡である。

この尖石遺跡は、昭和二十七年に国の特別史跡に指定され、この発掘調査報告書が「尖石」であり、昭和三十二年に刊行された。

この遺跡の発掘と研究報告書「尖石」は、宮坂英式先生の畢生の事業である。しかも、先生が独力で家庭を犠牲にして成就したと申しても過言ではない。

この大著は年月を経るにつれて、いよいよ高く評価され、需要も増大してきた。この時に当り、著者宮坂先生は、昨昭和四十九年四月吉川英治文化賞を受賞され、本年三月四日には、八十八歳の米寿を迎えた。

これを記念して先生の名著「尖石」の復刻版を刊行して、茅野市名譽市民である宮坂英式先生の功績を顕彰するとともに敬意と感謝を捧げる次第である。

昭和五十年三月

茅野市長
原田文也

序文

文教の国信濃には、文化の面だけでも誇るに足るいくつかのものがあるが、古代文化に、尖石の特別史跡と平出の史跡の二つを持つことから数えてよいと思う。さきに平出遺跡の豪華な調査報告が刊行されて、学界を騒わしたが、今ここに尖石遺跡の質実な学究的報告書が出版されるに当り、感慨深いものがあるとともに、万能の敬意をもつてこれを慶ぶものである。一方が中央学界人を中心とした四年余の華々しい調査事業であり、國と県と朝日新聞社との後援によって行われたのに対し、これは僻村の一学究による二十余年の努力の結晶であることがある。大古の祖先の足跡を彰して、また野人の過去の文化と生活とを明らかにした功績に甲乙はないが、対照の妙は保存されている史跡の性格に示されて興味が深い。

八ヶ嶽山麓のあの高い高原地帯に、数千年前の石器時代人が早く集落を作ったことを知り、住居址の群集に石器の美しさに、又土器の精妙の装飾文様に、最初の日本人の一群がここに栄えた事実が明らかにされた時、まず考古学者が驚いたのである。しかも宮坂英式氏とこれを助けた村と学校との献身的の懸まざる調査と研究とが、遂に日本に於けるこの種の遺跡の最初の特別史跡に選ばれたことは、更に驚嘆すべき事実と言つてよい。恵まれた環境にある大学や研究室の学者が、それ相当の仕事をするのは当然と思うが、独力自身の奮闘と山村人の心からなる援助だけで、大学教授をも凌ぐ業績を成就したことこそ特筆しなければならぬ。豪華な装訂と贅沢な図版

を十分に飾ることは出来なかつたかも知れないが、この輝かしい多年の研究の結晶が、嚴正の科学的報告として美しい文字に綴り出された慶びを、宮坂氏とともに私たちも心から祝いたい。

宮坂氏は、篤実温厚にして内に熱情を藏する代表的な信州人の一人である。尖石遺跡から出発して、いやしくも縄文文化中期遺跡に対しては多年黙々と研究の歩を進め、その途の第一人者と言って誤りでない。広大の尖石遺跡が悉く縄文中期のものであるという性格が、中期の遺跡を正しく理解する絶好の場所で、その点で宮坂氏に大きいに幸したと言える。この老学究が、自ら手掛けた多年の調査の結果を、忠実に懇切に記録したこの報告書こそ何よりも貴いものと学界に紹介するものである。

そして、信州の誇が更に一つ増加したことを郷里の人々に報告して私の序言としたい。

昭和三十二年十月十日

日本考古学協会委員長

藤田亮策

序 文

宮坂英式先生が二十余年の努力を傾注された尖石発掘の研究資料は誠に浩瀚なものである。これを整理して後世に残すことは時を同じうして生きたものの義務と思い、昭和三十年十二月このことを企て、長野県教育委員会の協力を得て出版の業を起そうとしたが、遂に成らず、更に昭和三十一年、名だたる書肆、新聞社等に協力を求めたがまた成らず、今年茅野町教育委員会は独立この業を成さんと決し、東京大学八幡一郎先生の絶大なる御後援を唯一の力として、一方に宮坂英式先生には原稿整理のことに専念を希い、一方に東京神田の座右寶刊行会の好意を求め、ようやく出版の業をすすめることに至つたものである。この間八幡一郎先生には、東南アジア調査出張準備中の極めて御多忙の中を、親しく原稿の校閲、御指導、また書肆への依頼注文等、万般に亘つて非常なる御厚意をお寄せいただいた。学問を愛せられる八幡一郎先生の尖石遺跡発掘の初期以来、かわらぬ御厚情御熱意の賜であつて誠に感謝に堪えないところである。

本書の刊行によつて宮坂英式先生が二十余年間一身一家の危殆を顧みず、嘗々として没頭せられた尖石遺跡解明の努力は実を結ぶものといふべく、茅野町教育委員会が宮坂英式先生畢生の偉業を讃え世におくる所以のものもここにある。況く大方の御購読を希うものである。

ここに改めて、宮坂英式先生の永年の御努力に感謝するとともに、始終変わぬ八幡一郎先生の御厚意御熱情に對し深く感謝し、序とする。

昭和三十二年九月二十五日

長野県茅野町教育長

小 口 伊 乙

序 文

宮坂英式先生の「尖石」発刊に当り、八幡一郎先生より私に序文をと申されました。浅学菲才にて御辞退申上げたところ、再三の御言葉により、ついお受けいたすことになりました。

宮坂英式先生とは、幼少より成長を共にした關係上、先生の御性格は夙に知悉しておるところですが、温和の中にも、特に、黙々として一つのことを、強い意志をもつてつらぬき通すと言うところは、既に幼にして、例え遊びに於てさえ、その片鱗をみせておりました。この御性格が、後に尖石遺跡の研究に邁進されるところとなつたのであります。當時、先生は小学校に奉職されており、七人の妻子を擁して生活は苦しく、またこの研究に對して理解するところのなかつた村人たちの嘲笑の中に、独力よく尖石遺跡の発掘調査に精魂を傾けたのであります。この間、学界の認めるところとなり、特に、今井登志喜・八幡一郎・斎藤忠の諸先生の御協力御指導を得られたことは、先生にとって何よりの幸いであったと申すことができましよう。

昭和二十六年より私が村政に携わることになり、微力ながら直接尖石遺跡の保存と顕彰に尽し、尖石大学講座の開催、考古博物館の建設等、先生の永年の御研究に対し、世人を啓蒙し、尖石に対する関心を深め、聊なりとも貢献し得たことを幸いと思う次第です。この間宮坂先生には、長野県教育委員会の表彰、藍綬褒章、第一回信毎文化賞を受けられたことは何よりの喜びとする所であります。

この度、先生の生涯の御研究の集大成「尖石」の上梓に当り、その経緯の一端を述べ序とする次第であります。

尖石遺跡保存会委員長

小 平 吉 一

目 次

口絵図版

序 文

日本考古学協会委員長 藤田亮策
長野県茅野町教育長 小口伊乙
尖石遺跡保存会委員長 小平吉一

口絵一覧

図版一覧

挿図一覧

序 説

尖石遺跡の発掘調査

初期の調査

昭和十五年度の発掘

昭和十六年度の発掘

昭和十七年度の発掘

昭和二十九年度の発掘

尖石住居址記述

昭和十五年発掘

昭和十六年発掘

昭和十七年発掘

昭和二十九年発掘

与助尾根遺跡の発掘調査

第一次発掘（昭和二十一・二十二年）

第二次発掘（昭和二十三年）

第三次発掘（昭和二十四年）

第四次発掘（昭和二十五年）

第五次発掘（昭和二十七年）

住居址の総観

序
論

住居址外の特殊施設

住居址集成

尖石遺跡堯掘住居址細目集成

与助尾根遺跡発掘住居址細目集成

尖石式土器の形式

尖石遺跡住居址出土土器集成

与时屋根遺跡住居址出土土器集成

尖石遺跡住居址出土石器類別表

与史前根遺跡住居址出土土器類別表

後記

跋

コロタイプ図版

口絵・図版一覧

口
繪

八ヶ嶽連峰通路の遠望

圖版一
糸石第一六田廻塙—炉と煙突—北方より
炉址が多數発見された林道

圖版二 林道地点で発見された廻入りの炉址 上

林道JJ地点の入り口下右
第一主轄上—西刀より一

第二住居跡(右)及び第三住居跡(左)——西方面

第三十一回

圖版三 第四住居址—西方より—上

第八址床上に

第七住居址
第五庄母社——南

圖版八	第五住居址—南方より一 第八住居址—東方より一 第九住居址—南方より一
-----	---

國
憲
元

第三〇住居址—東方より

粘土入りの穴(右)

第一〇住居地—北方より一 下

図版二 第一四・第一五・第一六各住居址の重複—北方より—上

圖版二 第一八址堆土中に集積散乱する土器 上

図版三 第一八号堆土中より出土せる土器

圖版三 第二〇址に埋めてあつた甕 上 下

國 輄 三 第二四住居址の發掘—南方より— 上

図版二 第二六住居址床上の特殊遺構 上
第二六住居址特殊遺構を除き、さう

第二七住居址内の特殊選挙 下

第二八住居址(右)と第二九住居址(左)——西方より——下

図版三 第三一住居址—南方より— 上

第三一住居址の石器炉 下

三笠首頭下、第三三住居址を標示指 下

第三三住居址 下

第三三住居址出土器 上

同上石器炉 下

与助尾根第一住居址—東南隅より—

与助尾根第三住居址（右）と第四住居址（左）—東方より

— 下

同上石器炉 下

与助尾根第四住居址—東方より— 上

同上石器炉と石棒 下

同上石器炉出土器と石棒 下

与助尾根第五住居址 上

与助尾根第七住居址—西方より— 下

与助尾根第七住居址—西方より— 上

与助尾根第七址の石器炉と石棒 上

同上石器炉の近景 下

同上石器炉出土器 上

与助尾根第七住居址—東方より— 上

同上石器炉 下

同上石器炉出土器と石棒 上

与助尾根第九住居址 上

与助尾根第一二住居址 下

与助尾根第一二住居址の発掘作業 下

与助尾根第一二住居址の発掘作業 上

与助尾根第一二住居址の発掘作業 下

与助尾根第一二住居址 上

与助尾根第一五住居址—東方より— 下

与助尾根第一五住居址—北方より— 上

同上北西隅にある石器の復原 下

与助尾根第一五住居址に於ける—土器の出土状態 上

与助尾根第一五住居の石器を外した状態 下

与助尾根第一五住居 下左

与助尾根第二址的土器 下右

与助尾根第一六住居址 上

同上内穴炉 下

与助尾根第一七住居址 上

同上穴炉と石壺 下

与助尾根第一八住居址堆土中の土器と床面との關係 上

与助尾根第一八住居址 下

与助尾根第一九住居址 上

与助尾根第一九住居址—西方より— 下

与助尾根第一〇住居址 上

与助尾根第一〇住居址 下

与助尾根第一一住居址 上

与助尾根第一一住居址 下

与助尾根第一五住居址 上

与助尾根第一五住居址 下

与助尾根第一七住居址 上

与助尾根第一七住居址 下

与助尾根第一八住居址 上

与助尾根第一八住居址 下

与助尾根第一九住居址 上

与助尾根第一九住居址 下

与助尾根第一〇住居址 上

与助尾根第一〇住居址 下

与助尾根第一一住居址 上

与助尾根第一一住居址 下

与助尾根第一一住居址 上

与助尾根第一一住居址 下

与助尾根第一一住居址 上

与助尾根第一一住居址 下

与助尾根第一一住居址 上

与助尾根第一一住居址 下

尖石遺跡複数件住居址分布図(二二五分ノ一)	与助尾根第二七住居址実測圖	捕國右	与助尾根第一三住居址実測圖
与助尾根複数件住居址分布図(二二五分ノ一)	与助尾根第二八住居址実測圖	捕國丸	与助尾根第一四住居址実測圖
尖石、与助尾根山脈地形及び住居址分布図(一五〇〇分ノ一)	与助尾根第二八住居址実測圖	捕國丸	与助尾根第一五住居址の礫石下にあった赤文鏡
尖石等複数件住居址分布図(一〇万分ノ一)	与助尾根第一六住居址実測圖	捕國丸	与助尾根第一六住居址実測圖
訪談部道路分布図(一〇万分ノ一)	与助尾根第七住居址の上部復原(窓口切土設計図)	捕國丸	与助尾根第七住居址の上部復原(窓口切土設計図)
	与助尾根第一七住居址実測圖	捕國丸	与助尾根第一七住居址実測圖
	与助尾根第一七住居址希見土器	捕國丸	与助尾根第一七住居址希見土器
	与助尾根第一八住居址実測圖	捕國丸	与助尾根第一八住居址実測圖
	与助尾根第一九住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第一九住居址實測圖
	与助尾根第二〇住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二〇住居址實測圖
	与助尾根第二一住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二一住居址實測圖
	与助尾根第二二住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二二住居址實測圖
	与助尾根第二三住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二三住居址實測圖
	与助尾根第二四住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二四住居址實測圖
	与助尾根第二五住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二五住居址實測圖
	与助尾根第二六住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二六住居址實測圖
	与助尾根第二七住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二七住居址實測圖
	与助尾根第二八住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二八住居址實測圖
	与助尾根第二九住居址實測圖	捕國丸	与助尾根第二九住居址實測圖
	尖石式第ニ類土器実測圖	捕國丸	尖石式第ニ類土器実測圖
	尖石式第三類土器実測圖	捕國丸	尖石式第三類土器実測圖

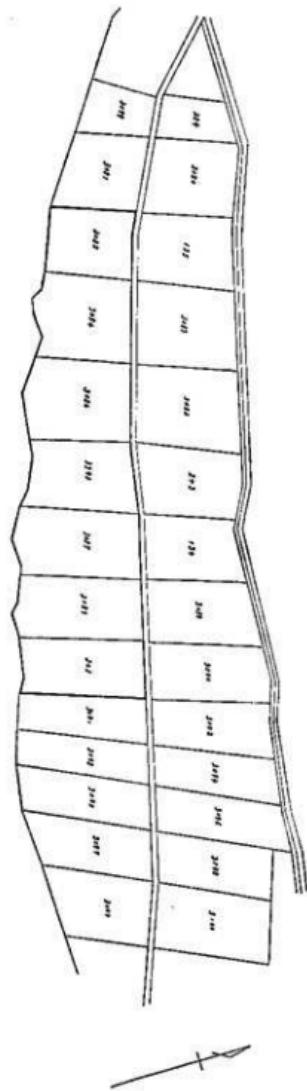
折込圖版一覽

尖石遺跡絕指堅穴住居址分布圖(一五分ノ二)

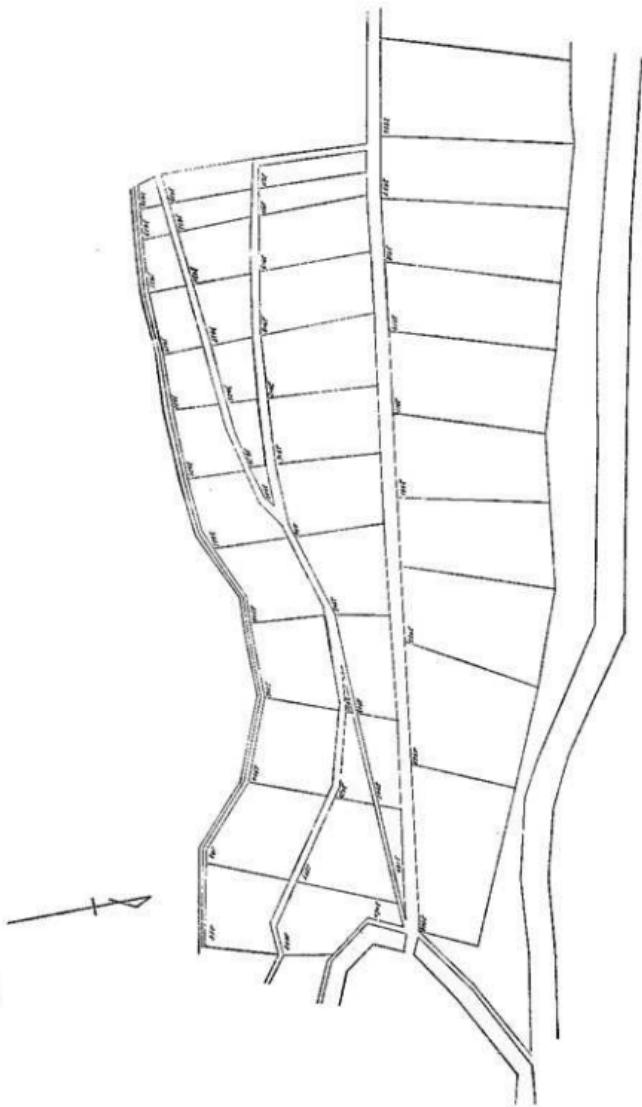
与助尾根遺跡発掘調査報告書(二二五分ノ一)

國防部總參謀部圖(二〇四四二)

尖石遺跡區域圖（縮尺一八〇〇分之一）



与助尾根遺跡区域圖 (縮尺一八〇〇分之一)



尖

石

宮坂英式

序 説

地理的概観

日本中部山岳地帯の脊梁の一翼として、弧状をなす蓼科八ヶ岳火山脈——南方八ヶ岳の権現岳付近から北方蓼科山に及ぶ、長さ二〇軒の弧線上に並列する最高二八九九・二米の赤岳を主峯とする多数の大火山から成る山脈——の西方内側にできた大扇状地域の北部を俗に北山浦地方といふ。

それは、八ヶ岳山脈の一峯天狗嶽の爆裂が放流した大規模の泥流から成る、標高一二〇〇米から九〇〇米の緩傾斜で、西方に展開する広袤八軒四方に亘る地形的にも地質的にもよくまとまった地域である。

この泥流地域は八ヶ岳の火山活動中、比較的末期に近い活動によつて作られ、その基盤として基底礫塊岩及びその上に堆積された礫層と、その上に発達した浮石層を挟むローム層とをもつていて。更に、この上に数条のコンセクニントの谷が、標高一三〇〇米辺の地点を頂点とし、圓扇の骨状に西方に展開し、地域をいずれも東西に長い広い数個の台地に区分する。またこれらの谷は、ほぼ東西に走つ



第三圖 尖石さま



図
擇 四 2 (1) 与助尾根遺跡 (2) 尖石遺跡 (3) 新水掛遺跡
(4.5) 鳴田遺跡 (6) 金堀場遺跡

てゐる関係上、南北の両斜面が光熱に対する風化の程度に相違対照を來し、一般に北側に急に、南側に緩かな側面をつくる。

今日、この地域は、その基脚部から葉身部へと上るに従い景観に変化が見られる。第一は、林草地の未墾地帯に、第二は谷底が主として水田に、台地上は専ら畑の耕地帯に、第三は谷底が同じく水田であるが、南側の緩傾斜面から台地へかけて畑地に、また台地上は高燥を尊ぶ集落と道路が、時として水便を得て水田をも配置しながら集落耕地帯をなす三地帯に分かれるのである。

日本文化の曙光とともに、既に石器時代人が、その文化をここに移植し繁栄を極めたために、各所にその遺跡が分布し、降って歴史時代に入つては、夙くも、延喜式に信濃一六牧の一たる大塙牧として、また和名抄には山鹿郷としてその名を列ねてから、現在茅野町豊平・湖東・北山・米沢の四地区二五部落を抱擁するに至るまで、諏訪盆地に対し有力な集落帯を構成している。

考古学的背景

殊に石器時代においては頗る殷賤を極めたものと思われ、この山麓の他の地域とともに、全國稀に見る濃厚に遺跡の分布する文化圏を作る。これを大正十四年に刊行された諏訪史第一巻に徵するに、諏訪郡内遺物発見地数四五五のうち実に一二七の多数を占め、且つ、今に新出土地発見のあとを絶たない。即ち地域全体がさながら一大遺跡地の觀を呈し、往時の盛大さをしのばしめるものがある。

私は専ら尖石遺跡を中心として、昭和五年以降年々調査に努めて来た。

この地域は中部山岳地帯の一般の例に洩れず北山村上之段・湖東村山口字中原・豊平村尖石・日向家上・小泉山西山麓上ノ平・玉川村長峯等を中心として、繩文式中期の文化を主体とする。黎明期の捺型文土器は発見されていないが、次に現われたいわゆる尖底織維土器は、その一例が北山村立科山腹中の標高一二八三メートル高距地、^{註(1)} 東伏見伯別邸敷地内から出土している。それらは断片となつて発見されたが、ほぼ全形がうかがわれる。即ち胴は余り屈曲せず、底が尖った土器で、内外面に梯のどきもので引摺いたような条痕があり、器壁の内部に炭化せる植物織維層が認められる。これとともに石皿一点と黒曜石數塊とが共伴している。これと同類かと思われる破片が、微量ながらも上之段・豊平村御作田裏の兩遺跡から発見されている。次に続く諸磯式土器は、上之段・豊平村上場沢尻定田・同村南大塙尻・塙之目日向尻の各地からその破片が採集された。殊に泉野村上楓木城山の南堀丸^{註(2)}生戸では、新しくその遺跡を発見、住居址一ヵ所を発掘し、目下調査中である。また北山村芹ヶ沢尻にある諏訪鉢山松原荷受場敷地内に開設した道路の両側には、住居址の断面が露出し、その堆土中に含まれれた土器破片によって、この地点が諸磯式に属する遺跡であることを知った。

縄文式文化中期のその初頭にあたる阿玉台式はその破片が上之段^{註(3)}で摘出され、また尖石遺跡の第一八址と与助

尾根遺跡の第二址とは、これに属する住居址であった。なお豊平村御作田裏上ノ平とこの山麓の最南端たる境村信濃境^(注2)流坂の西遺跡にもこれに属する住居址がある。豊平村下古田梨之木にも阿玉台式土器が認められるが、まだ発掘してはいない。

次に勝坂式に入ると、後続する加曾利E式とともに、俄然その色彩が濃厚になり、遺跡としてこの影響を蒙らないものはない。遺跡はその区域広大に、遺物殊に土器は、その出土量が極めて増加し、その生活力が旺盛であつたことを語る。これに属する主要な遺跡としては、標高一〇〇〇米の線に沿つて、北から上之段・北山村芦ヶ沢長峯・湖東村山口中原^(註3)の遺跡が挙げられる。豊平村にては、尖石を中心とし、与助尾根・新水掛・鴨田・金堀場等が南北二軒に亘る一直線上に連続して、ここに一大集落址群を作る。これより南して、泉野村中道日鳴寺址から遠く南端の流坂遺跡を経て、ここに東し、やがて山梨県下の日野春^(註4)・勝坂^(註5)の遺跡へと順次に連結する。なおこれより標高低き八四〇米の線に、豊平村南大塩家尻^(註6)・經塚^(註7)から同村日向家上・塩之自家尻、それから小泉山を中にしてその東側に御作田裏上ノ平、西山麓に牛宮原向う台地上^(註8)の上ノ平、更に玉川村荒神を経て同村長峯を通じて、それぞれ遺跡が連続して存在する。

後期に至ると、衰微の一路を辿り、僅かに上之段・南大塩家上・立石・上場沢上新水掛・下古田宮原上ノ平の各遺跡から、中期の遺物とともに堀之内式土器が併出する。もっとも上之段は湖東村山口中原遺跡とともに相当に濃厚に、且つ晩期亀ヶ岡式に比定すべき漆黒堅緻の小形土器を出土し、上之段にてはこれに属する平地住居址をも発掘した。

弥生式土器を本体とする遺跡は、まだ発見されていないが、条痕のような引搔き文のある庄之畠土器破片は、上之段から摘出されており、また後期の波状横目文の土器破片が次の埴部祝部土器破片とともに、稀薄ながら上之段、これに接近する矢ノ口・豊平村の広見山竜神平・山寺前・南大塩櫻現林・日向家上・宮原・長倉等の各地

点で発見されている。また蓼科山中大河原峠の沿道からも櫛目文土器の破片が採集されているし、櫛現林からは

⁽¹³⁾

「直」という字を墨書きしてある埴部土器の盤が数点、同一地点から出土している。

註

- (1) 昭和八年十月、同邸敷地均しに探し出土。藤森第一「蓼科山盤」
の尖底罐雜土器」(考古学七十九)
- 宮坂英式「先史遺跡高臨の調查」(中部考古学研究報告第一)
- (2) 昭和十九年十一月新遺跡として発見。二十年四月再発見。住居
址一と縦横式土器片と打石斧二点を得、日下調査にて未報告。
- (3) 北山村片ヶ沢尾根筋山松原荷先場。昭和二十二年六月発見。
露出した住居址断面の堆土中から縦横式土器残片と回石・打石斧・
石器等を発見した。
- (4) 北山村湯川上之段遺跡。昭和十年十一月第一次発掘により、闇
文書手式の遺跡地であることを知り、昭和十一年六月の第二次の発
掘により、同一地点の深き地層に簡単な單手式刀身など、浅い地層に
複雑な雙手式刀身などを発見し、これが重複した遺跡であることを知
る。更に昭和十三年五月の第三次発掘により、単手式土器包含層に
昭和十一年の土器を発見し、縦横式・弧形式両文化に関する資料
を得た。同十六年九月第四次発掘により単手式に属する平地住居址
を発見し、昭和十七年九月二十四日文部省史跡保存地として指定さ
れた。
- (5) 上野庄一・宮坂英式「土器焼成に関する考察」(ミネルゲアーノ
八)
- 宮坂英式「宋鐵器鑄記」(ミネルゲアーノ七)
- 宮坂英式「北山村上ノ段遺跡発掘による縦文監生両文化發見に関する
一考察」(歷史地理七三ノ五)
- 宮坂英式「北山村上ノ段遺跡発掘報告」(史前學雜誌十四ノ一)
- (5) 畠平村弓跡尾根遺跡。矣石遺跡の北古地に在り、昭和十年新た
に発見し、試掘の結果、石組みの一大伊址と遺物多數を得、尖石と
共に磨製式と加曾利E式に属することを知り、昭和二十一年十月、

第一次発掘翌次住居址二ヶ所、同二十二年四月第二次発掘住居址二
ヶ所、同九月第三次発掘に平地住居址を得た。

(6) 畠平村御作田裏上ノ平遺跡。大泉山西麓に所在し、遺物の散布
により既に遺跡地として知られていたが、昭和二十二年十一月阿玉
台式に属する堅穴住居址一ヶ所を発掘した。

(7) 畠平村信濃境堀越遺跡、八ヶ岳四山麓最南端、信濃境より餘無
川義谷の急斜面に位し、昭和十七年十二月新たに発見し、翌十八
年六月縦文文化河合玉台期に属する堅穴住居址一ヶ所を発掘した。

(8) 畠平村下古田製之木遺跡。同村下古田部落の裏台地に所在し、土
器破片多数を地下二尺から発見した。その資料により縦文文化阿玉
台期の堅穴住居址と推定される。なお遺物中には、幼髪を表現した
珍しい土偶の首部一点があつた。

(9) 潟東村山口裏中段遺跡。風に石室を出土し遺跡として知られて
いるが、昭和十一年十月、作道改修工事による切取断面に、堅穴
址、柱穴址、炉址を発見し、遺物により縦文文化腰板期から後期危
ケ岡期に亘る重複遺跡であることがわかつた。

(10) 畠平村上堀沢上新石器遺跡。昭和十二年六月、新遺跡として発
見、土偶三体を発見し、遺物により縦文文化腰板期より後期之内
期に亘ることは明らかである。

八経一郎「信濃國御訪郡上高沢の遺跡」中部考古学会叢書第二年第
六報

宮坂英式「八ヶ岳山麓の土偶報告」ひだびと六ノ十一

宮坂英式「八ヶ岳山麓の土偶報告」ひだびと七ノ一

(11) 畠平村中道日高寺は遺跡。昭和十七年九月、縦文文化腰板期の
堅穴住居址一ヶ所を発掘した。

- (12) 山梨県日野春村上条坂上余遺跡
大山祐・竹下次作・井出佐重「山梨県日野春村上条坂上余遺跡調査報告」史前学報
史前学報十三ノ三
- (13) 山梨県南アルプス市坂上余遺跡
竹下次作・井出佐重「山梨県南アルプス市坂上余遺跡調査報告」史前学報
史前学報十三ノ六
- (14) 岩手県南大塙尻遺跡
昭和十年発見、石器と共に、
縄文文化加賀利E型の土器を発見した。

- (15) 岩手県南大塙尻遺跡
昭和十三年十月試掘、完形土器多
数発見。同年四月、八幡、酒井吉氏とともに当地域最初の発掘
住居址一ヵ所発見。縄文文化勝坂式より加賀利E式に至る。なお祝
部壇土器とともに同地方唯一の内耳鏡を出土した。

- (16) 岩手県下吉田宮原向う合地土ノ平遺跡
先年蛇形を発見した。昭和十
年夏、岡部常長田信人氏が桑枝振り抜きの際多数の勝坂式土器と共に
内耳鏡を頭更把手を発見している。

- (17) 北山村湯川矢口遺跡
昭和十三年五月、田舎者に探し切取り
たる様に、住居址の断面が露出し、下層に勝坂式土器が上層に壇部
土器が出土した。
- (18) 宮城英次「岩手県南大塙尻遺跡出土の壇部土器につき」(勝
坂七二ノ一)
- (19) 宮城英次「信濃郡山中大河原崎発見の勝坂式土器」(考古學
十ノ二)

尖石遺跡が世に出るまで

さて尖石遺跡のある一帯の地域は元来南大塙区有の原野で、冬水を掛け流し、夏はその草を刈るいわゆる共同採草地であった。ところが養蚕業の普及に伴い、明治二十五、六年頃からこれを区民に分割して逐次桑園地として開墾した。開墾の際頻りに古代遺物が掘出されるので、堀りをおそれで畚で運び出し、悉く溪流に捨てたと伝えられる。この事実を小平小平治氏が知り、明治二十七年の東京人類学会雑誌に遺跡地として報告したのが、世に知られる端緒となつた。後に小平雪人・宮坂春三などの諸氏が、出土の遺物を蒐集した。

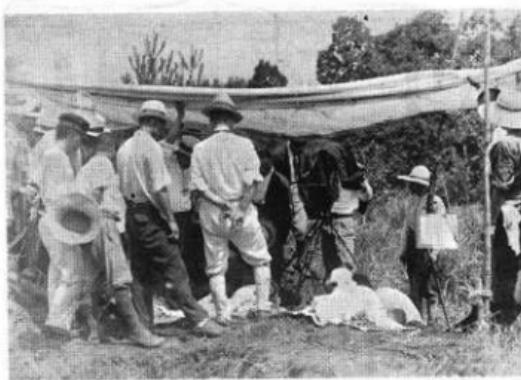
大正十一年「諏訪史」第一巻の編纂に際して、鳥居龍藏博士の実地踏査があり、これに関連して、当時東京帝大人類学教室にあった八幡一郎氏が諏訪史編纂委員の人々とともに、唯一の未墾地であった南斜面の芝地、両角米男氏所有一二五番を発掘したが、何ら得るところがなかつたといふ。そのころ、宮坂春三氏は所有地(二六四番)を掘つて完全な土偶を得た。これについて八幡氏は人類学雑誌に記載している。^{註(2)}

その後昭和四年四月上羽貞幸氏が小平雪人氏の案内で踏査し、これによつて、同年七月學院在学中の伏見博英氏の入誠となり、その二十四日に一部を発掘して多数の遺物を得られた。次いで同五年六月第二九〇六号の柔畑を改植中の小平幸衛氏とともに、私はそこから多数の遺物を発見した。また同年今井広龟氏が林道を発掘して石闘炉二基を発見している。

かくて私は殿下の発掘と、この改植によつて、なお多数の遺物がここの中深く、数千年の夢を貪り続けていることを知つた。そこで私は遺跡の発掘調査を志し、同年夏小平幸衛氏とともに林道を掘つて始めて土器を包藏した石闘炉址を発見した。またその十一月には南傾斜面から顔面把手を発見したので遺物の他に造構も存在し、なおその区域が想像以上に広大であることを知つた。その後年々暇を得るにつけ、

発掘調査を続けて来た。特に昭和八年、林道の拡張工事に先立ち、その北側の芝生地を発掘して、石闘炉址と完形土器を得た。同年九月には第二九〇三号の烟で石闘炉址が群在するのを発見した。
なお八年八月には長野県保存史跡として指定された。^(註3)

昭和十年五月には本遺跡の北、与助尾根の台地を開墾して一大石闘炉址と多数の遺物を発掘し、遺跡は尖石台地から更にこの台地にまで及んでいることを知つた。その他、昭和十二年には第三四三〇号原野を開墾して、石闘炉址を発見したし、昭和十四年には小平喜代士氏が南溪谷に所有する柔畑を田地に変換する工事を行つて多数の遺物を発掘した。従つて遺跡が傾斜面から南の溪谷



伏見氏の発掘

豊平村尖石遺跡発掘見取図

昭和五年七月八日 今井 生

の底まで延びてることが判明した。

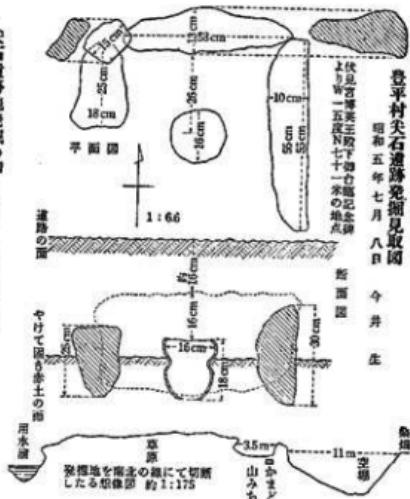


図 4 尖石林道で発見の石圓伊(今井氏原図)

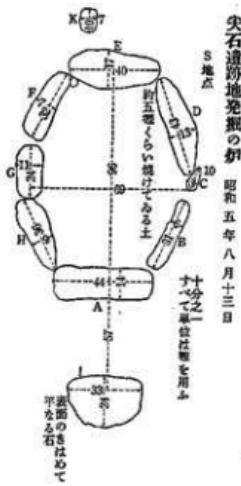


図 5 尖石林道で発見の石圓伊(今井氏原図)

以上は、遺物埋址等の発見を目的とする單なる試掘に過ぎなかつたが、たまたま地主矢島正人、宮坂栄次郎両氏の好意に恵まれ、その所有地が提供されたので、三カ年に亘る大発掘を行うことが出来た。即ち昭和十五年に、住居址を第一址から第一六址まで、十六年には、住居址を四カ所と次年度に発掘すべき地域の調査を行い、十七年には住居址十カ所と竪穴群・列石群等の遺構を発掘した。そして同年十月文部省の史跡保存地として指定されたので、翌十八年四月発掘地をそのまま埋没して旧態に復し、ここに多年に亘る尖石の発掘に終止符を打つた。

昭和十七年九月二十三日、文部省史跡名勝天然記念物調査会総会に於て、尖石遺跡が次の如く指定されたのである。

史跡尖石石器時代遺跡

所在地

諫訪郡豊平村字東嶽

指定地積

民有五十六筆内実測四町二段六畝一六

歩各地域内に介在する道路敷および水路敷を含む。

説明 八ヶ岳の西山麓海拔約一千米の丘陵上にあり、広汎なる地域に亘りて石鎌・石斧・石錐・石匙・石皿等の石器並に繩文土器及び土偶・滑車形土製耳飾等の土製品等出土す、本遺跡には住居址存在し從来調査せられしもの約三〇余基を数う、是等の多くは径一三尺乃至二〇尺の円形又は開丸の方形の竪穴をなし表土下約二尺乃至三尺に床あり、その中央に扁平石の組合せによる方形又は略々円形の炉址を有し周間に柱址あり、高原地における石器時代の聚落地を示すものとして著名なり、なお区域内に古くより尖石と称せられ信仰の対象となるる三角錐状の巨石あり、この地一帯における尖石の地名もこれに由来せり。

所在 本遺跡は、この北山浦地域中、其の中央台地標高千五十米の地点に存在し、行政上、長野県飯訪郡茅野

町豊平に属す。

今、中央線茅野駅から信越線へ連絡する県道茅野丸子線に依れば、其の始発から四軒で南に一支線が分岐する。この支線は直ちに向いの台地上に上り南大塙部落に至り、更にこれを縦貫し林道として東に延びる。八ヶ岳山脈の一峯天狗嶽を仰ぎ桑園地中を東すると視野は次第に潤け、二軒で北山浦地方とこれを囲繞する四面の重疊たる山脈を展望し得る一景勝点に達す。

即ち南遠く西嶽編笠嶽に横現・赤岳・天狗等の諸峯を貫き北端立科の秀嶺に留まる迄二〇軒に亘る八ヶ岳山脈を東近くに仰ぎ、北には、霧ヶ峯火山脈がこの脚下に起り北山浦地域を抱擁しつつ西走し展開する扇状山麓の尽くる所に立科山に続く大門峠の鞍部を隔てて緩傾の台地をなして繰ぐり永明寺山に終る。亦、南は八ヶ岳山脈が遠く山脚をひく所僅かに甲斐の空が開け、こ



捕 四 6

尖石遺跡説明標札

れに相対し笠無山脈が甲斐の駒ヶ岳を背にし浅い起伏を現わし、西方守屋山に聳え霧ヶ峯山脈と襟を合わす。諏訪湖は永明寺山に過ぎられ望見し得られないも、日本北アルプスの重疊たる山脈は、霧ヶ峯火山脈の彼方遠く乗鞍より聴高・槍・蓮華に至る迄相應うて天を摩するの偉觀を呈す。

この景勝地点の南傾斜面の中段に三角錐形の巨石尖石が石器時代以来其の體の姿に屹立し、これを中心にこの地域が尖石遺跡である。

地形 この台地は遺跡の東方高原中僅かな距離に其の端を発し、南北の両側は何れも幅約百米V字の渓谷に作られ、従つて幅三〇〇米の丘陵状をなして西に緩走する。約三糠でこの台地は盡き、両渓谷はここに融合して長倉の渓谷となる。南大塙部落はこの台地の最西端に立地し、それより遺跡へかけ台上は畑に、渓谷は水田の耕地帶に、更に東方山腹に向つて未開墾の第一林草地帯となる。従つて、本遺跡は、東に曠野の林草地帯と、西に高地と渓谷とから成る耕作地帯との接觸地帯に在る。



特別史跡尖石塚界標

7 図

区域 本遺跡は、略々この尖石を基点とし、東へ五百米それを南北一〇〇〇米に亘る広範囲を其の区域とす。その南は二二度の急勾配で水田の渓谷に臨み、北は台地の盡くるところ断崖となり、水田の渓谷を隔てて、再び本台地と水平をなす与助尾根の台地となる。本区域の中央を幅員四米の林道が東西に貫通し、亦幅二米の支道が作場道として南端を傾斜面に沿う。次にこの東端をこの地方の灌漑として遠く立科山中より引用せる横堰が北から南へ通じ、これより分水せる堂自久保堰が林道の北側に添い、同じく南大塙堰が台地の南の裾を洗つて共に西する。尚往時の用水堰が空塹を

なして林道の南側に従う。一帯は東北隅の一部に僅かの小松林と、巨石尖石を囲んだ唐松の一群を残し全部桑畠と岡物畠とに開拓されている。

其の地積は、昭和十七年十月文部省の史跡保存地として豊平村字東嶽四七三四番の内五十五筆が指定編入され、それにより一万二千余坪を占める。

尚遺跡は、小平高代士氏が南溪谷に所有する桑畠を田地に変換するために地堀をして其處に多数の遺物を発掘されし、亦、東横堀を越えた扇地から石器炉址を発掘したので、其の区域は、これより東方にも南溪谷へも延長される。更に、遺跡は本台地のみならず、南に北に相接する両台地の助尾根・新水掛から鴨田金堀場へと相次ぎ存在するから、本遺跡は本台地に単独に存在するばかりではなく、これ等の遺跡群と共に南北四軒に亘る一大聚落址を構成しつつ、実に其の中心をなすものである。

尖石遺跡指定区域一筆調書
(昭和十七年九月現在)

				村名	字	地番	地目	地積(畝歩)	所有者氏名
				豊平村	東 嶺				
						1011			
						1012			
						1013			
						1014			
						1015			
						1016			
						1017			
						1018			
						1019			
						1020			
						1021			
						1022			
						1023			
						1024			
						1025			
						1026			
						1027			
						1028			
						1029			
						1030			
						1031			
						1032			
						1033			
						1034			
						1035			
						1036			
						1037			
						1038			
						1039			
						1040			
						1041			
						1042			
						1043			
						1044			
						1045			
						1046			
						1047			
						1048			
						1049			
						1050			
						1051			
						1052			
						1053			
						1054			
						1055			
						1056			
						1057			
						1058			
						1059			
						1060			
						1061			
						1062			
						1063			
						1064			
						1065			
						1066			
						1067			
						1068			
						1069			
						1070			
						1071			
						1072			
						1073			
						1074			
						1075			
						1076			
						1077			
						1078			
						1079			
						1080			
						1081			
						1082			
						1083			
						1084			
						1085			
						1086			
						1087			
						1088			
						1089			
						1090			
						1091			
						1092			
						1093			
						1094			
						1095			
						1096			
						1097			
						1098			
						1099			
						1100			
						1101			
						1102			
						1103			
						1104			
						1105			
						1106			
						1107			
						1108			
						1109			
						1110			
						1111			
						1112			
						1113			
						1114			
						1115			
						1116			
						1117			
						1118			
						1119			
						1120			
						1121			
						1122			
						1123			
						1124			
						1125			
						1126			
						1127			
						1128			
						1129			
						1130			
						1131			
						1132			
						1133			
						1134			
						1135			
						1136			
						1137			
						1138			
						1139			
						1140			
						1141			
						1142			
						1143			
						1144			
						1145			
						1146			
						1147			
						1148			
						1149			
						1150			
						1151			
						1152			
						1153			
						1154			
						1155			
						1156			
						1157			
						1158			
						1159			
						1160			
						1161			
						1162			
						1163			
						1164			
						1165			
						1166			
						1167			
						1168			
						1169			
						1170			
						1171			
						1172			
						1173			
						1174			
						1175			
						1176			
						1177			
						1178			
						1179			
						1180			
						1181			
						1182			
						1183			
						1184			
						1185			
						1186			
						1187			
						1188			
						1189			
						1190			
						1191			
						1192			
						1193			
						1194			
						1195			
						1196			
						1197			
						1198			
						1199			
						1200			
						1201			
						1202			
						1203			
						1204			
						1205			
						1206			
						1207			
						1208			
						1209			
						1210			
						1211			
						1212			
						1213			
						1214			
						1215			
						1216			
						1217			
						1218			
						1219			
						1220			
						1221			
						1222			
						1223			
						1224			
						1225			
						1226			
						1227			
						1228			
						1229			
						1230			
						1231			
						1232			
						1233			
						1234			
						1235			
						1236			
						1237			
						1238			
						1239			
						1240			
						1241			
						1242			
						1243			
						1244			
						1245			
						1246			
						1247			
						1248			
						1249			
						1250			
						1251			
						1252			
						1253			
						1254			
		</td							

巨石尖石 石質は安山岩であろうか。形状三角錐をなして直立する。地表高さ一・二〇米、底辺南最も長く一・五米他の二底辺は七〇厘米である。石の根は地中深く没し何程あるか未だ発掘調査されない。この石の南側面最も広く他の二面の表が平滑なるに対し、この面は凹凸が甚しく、それは人工によるものか自然的のものであるか不明である。或は、石器時代の象形文字を刻したものでもあろうかと研究されたが確定に至らない。然しこの尖端の東肩の一部が窪く磨滅しあって、これが磨石砥として共用されたことは明瞭である。尖石の地名は、この石の形状に由来する。現在石の東側の根元に石祠一基を祀り、これに西年小平氏と刻むが其の建立の由来を曉にしない。古来この地を長者屋敷と称し、部落民はここに集積してあった巨石を運んで珍重したとのことで、現在かかる石を庭石にしている家が四戸あり尙其の一個が前の堰に埋もれている。

かつて物好きな人がこの石の根元に宝を探すと称して掘り始めたところ神罰は忽ち覗面に其の人は忽ち瘡にかかつて死に至ったとか今に恐れられてこの石の根元を掘る人がない。然し七年毎の御柱祭には、区より御柱を寄進し、其の周囲に建立し、現在部落民の信仰の対象となっている。従つてこの石の所在地一筆三四二三番は区有地として未墾の儘に残され雑草茂り巨石の傍に唐松の巨樹が聳えている。

註

(1) 小平小平治「信濃古墳及び石器時代遺跡」(東京人類学会雑誌
九十九)

(2) 八幡一郎「豊平村広見尖石鳥居土偶」(東京人類学会雑誌三七ノ八)

(3) 今井真樹「豊平村尖石遺跡」(長野県史跡名勝天然記念物調査
報告第十四號)

尖石遺跡の発掘調査

初期の調査

伏見博英氏の発掘

明治、大正から昭和の初めにかけては、開墾・道路開鑿などによって、各種の遺物が偶然に発掘されるか、然らざればこのようにして地表に散乱するに至った遺物を表面採集するにとどまつた。計画的な発掘はあるいは伏見博英氏が昭和四年七月に行われたのをもつて始めとしてよいかも知れぬ。もっとも既記のように大正年間八幡氏等の発掘があつたが、無為に終つている。



特別史跡尖石遺跡標柱碑

押 四 8

昭和四年四月、伏見氏の内意を受けた上羽貞幸氏は諏訪の小平雪人・小平定太郎氏に案内されて尖石遺跡を踏査し、同年七月には上羽氏東道のもとに、伏見氏が諏訪郡内の石器時代遺跡を巡回し、二十四日には本遺跡を発掘して多数の遺物を採集された。私ものこの発掘に加わつた。当時の模様を豊平小学校で作った次の記録によつて凡そ知ることができる。

まず豊平小学校に、村内出土の遺物を陳列して、参考に供した。その目録を掲げておく。

一、陳列目録

(陳列の村内出土遺物は上表の通り)

										遺跡地名
										遺物名
九二	一一一	一一二	一一三	一一四	二八	一七	二	一	一	点数
学校	吉江時治	学校	吉江時治	学校	学校	学校	学校	学校	学校	所有者
牛山乙平										
二、発掘 今回底下ノ発掘サレタ場所ハ、尖石ト称ス ル地籍ノ北端ニシテ、大正十年頃、偶然ニモ小学校兒童ニヨリ、遺物埋藏地ナルコト発見セラレ、以来不思議ニモ児童ノミニヨリ、発掘シ、完全ナル壺瓶等數個ヲ出セリ。										

該品ニシテ現存セルモノ、柳平仁蔵氏所藏完全ナル
ニ、完全ナル益一、牛尼留雄氏所藏完全ナル壺三、学校
所藏稍完全ナル口刃二。埋藏地域ト曰セラルル個所ハ、
(十カ所)巾四米、長サ百米程ニシテ、川ト道路に夾マ
レタル細長キ土地ナリ。現在ハ南大塙区ノ区有地タル関
係上、長ク原野ノ儘ニ放置セラレ、未ダ一回モ歟ヲ入レ
タルコトナシ。実ニ遺物包含地トシテ完全ナル処女相ヲ
保テリ。案ズルニ広見尖石ト称スル地籍内ニハ、此ノ外
遺跡処女地ト曰セラルル場所、尙オ一カ所アリテ、以前
ヨリ世人ニ注目セラレ、屢々発掘ヲ試ミラレシガ、今回
ノ個所ハ寧ロ世人ニ騒擾サレ来レル観アリシナリ。

為メニ天幕ヲ用イテ陽ノ直射ヲ阻ク。殿下ハ半身土ニマミレ、熱心ニ作業アリ。十時半ニハ、早クモ二個ノ稅完全ナル壺ヲ発掘ス。一時間ヲ経テ更ニ大ナル一個ノ瓶及破碎セルモ原形ヲ保テル瓶ノ如キモノヲ発掘ス。又殿下ハ屢々作業ヲ中止シ、自ラ器械ヲ立テテ遺物ノ埋没状況及発掘状態ヲ写真ニ撮影シ、午前十時半暫ラク休憩サレ、コノ間宮坂村長ノ差シ上ゲル「サイダー」ヲ召サレ、再び作業ニカカリ、終始発掘ノ人々ト諮詢ヲ交ユ。撮影ノ際ハ後日ノ研究ニ資スル必要上、半身ヲ土中ニ現ワセル土器ノ位置、光線具合、地表トノ関係等、一々學術

村長校長関係区長ハ、実地踏査トシテ広見尖石ニ至リ、予メニカ所ノ発掘補地ヲ指定シ置ケリ。翌二十三日ハ人夫四名ヲモッテ前日指定セル個所ヲ試掘セリ。南側ノ個所ハ午後ニ至ルモ破片スラ発見シ得ズ。故ニ、午後ハ三時頃ヨリ専ラ力ヲ北側ノ地ニ致セシニ、約三十分ニシテ、稍完全ニ近キ瓶一個ヲ掘り出セリ（破碎セルモ組ミ立チレバ充分原形ニ復シ得ル見込ミアリ）。引き続キ隣接セル地シ、殿下ノ來着ヲ待ツ。翌二十四日ハ早朝ヨリ、前日ニ

的ノ配慮アリ。十一時二十分一ト先ズ作業ヲ中止ス。発掘品ハ夫々整理シ名札ヲ付シ木綿袋（袋數十個位）ニ納メ十一時三十分帰還サル。

当日ノ発掘品ノ主ナルモノ

- 一、稍完全ニ原形ヲ保テル壺 二点
- 二、破碎セルモ原形ニ復シ得ベキ瓶 二点
- 三、原形ノ半分以上ヲ占ムベキ土器ノ破片 一点
- 四、其ノ他各種ノ土器破片（土偶ノ一部ト認メラルモノ一ツアリ）
- 五、試掘ノ際ニ発見セシ瓶 一点

備考

○当日発掘セル地域ハ深サ六十厘米位広サ三平方米位。

○当日ノ天候 晴、無風ニテ暑氣強シ。室内温度華氏八十四度（正午）

なお郡内巡回、尖石発掘の状況は、隨從者の一人両角守一氏が史前学雑誌（会誌二ノ一）に「伏見宮博英殿下に御伴して諏訪郡遺跡を尋ねる」と題して詳記している。

小平幸衛氏の発掘

昭和五年六月区民小平幸衛氏が、林道南空掘に沿う牛山初一氏所有の桑畠、第二九〇六番（面積三八〇坪）の南半分を改植していると、たまたま遺物の出土を見たので、それに興味を唆られ、必要以上に基盤の赤土層に達するまで深く掘り下げて調査された。遺跡地内の地層は一般に上層三〇厘米の耕土層から中層三〇厘米の赤黒土層を経

て、赤土層の基盤に達するが、最初は比較的浅く開墾し、単に芝生をまくる程度に止まり、その後の耕耘もそれ以上の深さに及ぶ必要がなかった。それで今日までに出土したものは、すべて石器時代の生活地表面であったと推定される中層の地上面に遺存されておったので、今日鍬先にかかるものは、それより深い所に遺るものである。かくて遺物は既に発掘し尽されたとしていたが、なお地層深く埋没している事実が認められた。

これを知つて私も、発掘とともにし、十数日を費して多くの資料を得た。これを見取図につき解説する。

地点 I

地床炉址 地下一米に基盤赤土層の表面が二米と四米とに亘り焼けて赤変し、長期間の焚火が推測された。竪穴赤土層に口径一米、深さ三〇厘米、円形直壁、平底に穿たれる。黒土が充満す。住居址内の竪穴か。土器は高さ二六厘米、口径一八厘米、口縁部が内彎する筒形、器底を床に即け西に傾斜する。石棒は安山岩の無頭円錐形で、高さ五厘米、根周り六厘米。花崗岩の残塊は土器製造に使用されたものか。凹石は三点いずれも石鎚形を出土する。

地点 II

土器三点 (2)は肩部以上で、現高一六厘米、口径一九厘米、内彎せる口縁部と肩部の張った壺形。(3)は底部を欠く。現高二二厘米、口径一九厘米の土器。(1)と同形態。(4)は朝顔形の深鉢で、底部を欠く。砥石一点と盤石二点が出土した。

地点 III

土器一点 (5)は、把手付の香炉形土器で、底部を欠くが優秀品。把手の幅一九厘米、高さ一二厘米で、器体は現高一二厘米、口径二九厘米のもの。その他、鳥形や雪帽子形の把手類多數を黒土層中二〇厘米から三〇厘米の深さで採掘した。

地点 IV

土器二点 (6)は口縁の半分と底部を欠く。口径一七厘米、底径五厘米、現高二五厘米で、朱彩されたか鮮紅色を呈する。その器面に紐を結びたらしたように粘土紐で写実的な隆起線の文様を施したもの。(7)は現高一一厘米、径一五厘米に隆起線文を施したもの。石匙二点と石五点を出土する。

地点Ⅴ

地床炉址なか赤土面が赤変している。打石斧一点・遠州式磨石斧一点・石皿破片三点・黒曜石塊一点・無柄石鎌一点(黒曜石製)が出土した。

地点Ⅵ

地床炉址らしく赤土面赤変す。

地点Ⅶ

獸形把手一点が出土する。

地点Ⅷ

地床炉址らしくこゝも赤土面赤変す。把手一点を出土する。

地点Ⅸ

同様地床炉址らしく赤土面赤変す。

地点Ⅹ

赤土面に扁平石が三個並列し、なおこれは南に続くものと推定されるが、その以南は道路敷の下にかかるので発掘を止める。

地点Ⅺ

地床炉址らしく赤土面赤変する。

この桑株の掘りこぎに伴う調査で、このように地床炉址らしい箇所を九ヶ所と、完形土器七点、その他異形把手類に石器多数の資料を得、且つ遺跡内には一段と黒土層の深い箇所があり、そこには概して遺物が包含され、また基盤の赤土面に赤変せる箇所があることが発見された。この発掘は、改植の際、遺物発見を目的としたのであつたが、偶然にも炉址の存在を知り、これにより住居址発掘への端緒となつたのであった。

因みに、この畑のやや北下りの北半分を翌六年改植しつつ調査したが、石英製豊形石匙一点を得たのみで遺物は皆無であった。

小平幸衛氏との発掘

伏見氏の発掘と、第二九〇六号桑畠南半の調査とに於いて遺物の出土が極めて多量であったのに刺激された私は、続いて同年夏小平幸衛氏とともに、林道とその北に沿う堂自久保堰の両側を調査した。

この林道は、その後、昭和八年に農村救済事業として、国庫の補助金を受け、幅員四米、垣々たるものに改修されたが、当時は全地域を分割し、残された幅一〇米の小松原に、僅かに手車が通行し得る幅一米の山道であつて、路面は長い間雨水に洗われ、次第に基盤の赤土層に喰い込んで低下し、両側はこここの地層を露出した高さ一米の崖となっていた。

また堂自久保堰は、この遺跡の東を北から南へ通過する横堰から分水した幅二米の引堰で、かつての川床は浅かつたが、これもまた年々の水勢に掘り下げられ、現在ではその両側が高さ四米に近いローム層の断崖を作る。そして、この断面に深い黒土層の喰い込みが露出している。

ここは住居址の埋没している所であろう。地盤が軟弱なため水流に浸蝕されやすく、最初直線に設けられた堰筋も、現在では屈曲を描いている。

即ち昭和五年六、七月の休日を利用して、要々この林道の両側と、環筋の北崖とを探査し、次々に次のような資料を得た。

堂自久保塚の北側

イ地点（第三〇〇七号の北側）

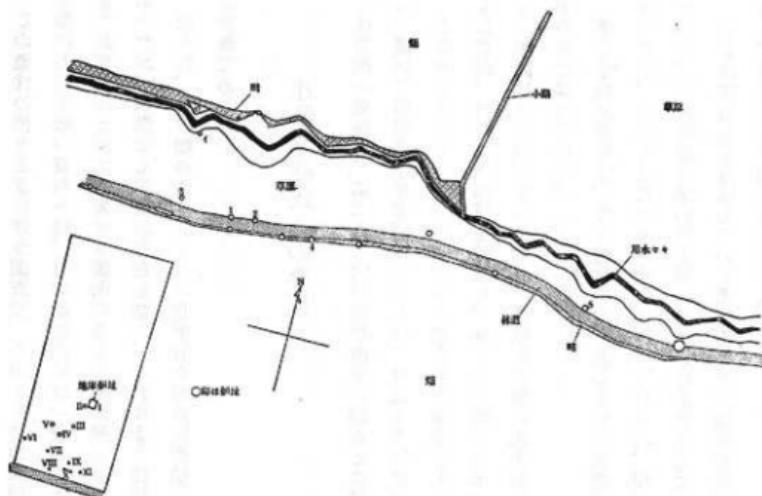
黒土深く、これに夥しい炭屑・黒曜石屑・土器破片が交じる。範囲もなかなか広い。

ロ地点（第三〇一八号の南側）（六月八日、二十八日調査）

南側のイ地点と続く遺跡であろう。畑地よりやや低く、約一坪を占める三角形の畠をなす。遺物が堆積し、その出土が極めて豊富に塵埃場の感があった。

主要な出土品として、横型石匙二点・定角式小磨石斧一点・黒曜石無柄石鏃三点・土偶の胸部一点・鉢形土器一点。

昭和5年発掘地点図



地図 9 昭和5年発掘地点図

土偶は、頭部、両脚部及び右腕を欠き、その痕跡を遺す胴体部のみのものである。現高六厘米、背幅最長八厘米、姿態は上部極めて細く、下底部に近づくに従つて急に拡がり、全体が三角形を呈し、腹部よく張り、背部はえぐれて臀部を誇張的に張る。これに腹

部に突刺文による正中線を、画面下に同じく三角形を施す。

この土偶につき特に注意せらるべきは、左腕を欠き、これに代り蠶物状の突出物を作った点である。

石囲炉の相

次ぐ発見

その後も常に遺跡



図 11 昭和五年発掘土器の一部



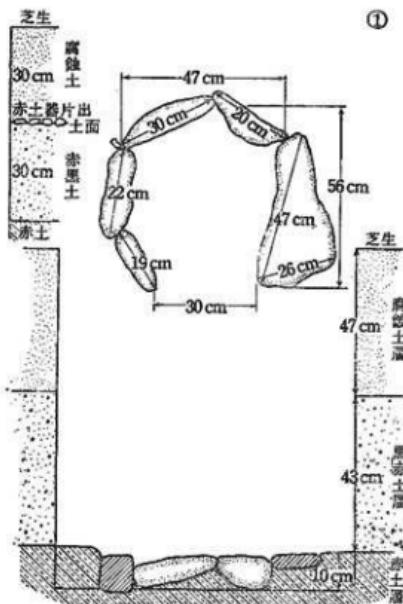
図 10 □地点等出土土偶及石器類

には、完形土器二点・釣手土器一点・炭化した栗及び稻の実と道の拡張改修工事に先立つて、その北側の芝生地を発掘した際

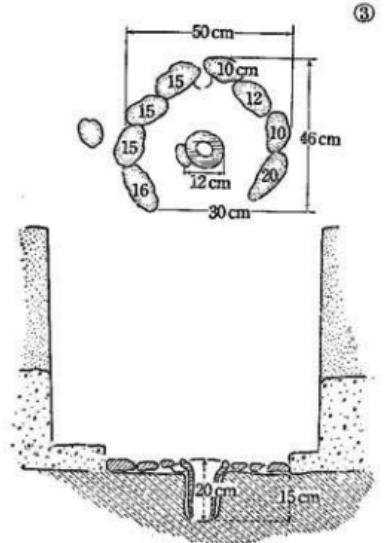
に昭和八年八月、林石囲炉二基を見出した。更に九月に入つて烟第二九〇三号に於て、石囲炉址八個が一米間隔で群在するのを発見することができた。

昭和十年五月に、本遺跡の北に隣る与助尾根が開墾されたので、ここを注目したところ、多数の遺物とともに大石囲炉を見出した。なおその年の十月、大山史前学研究所の諸氏が尖石を発掘された。

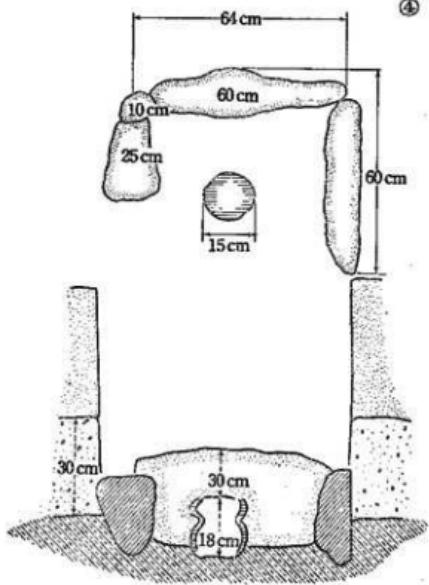
①



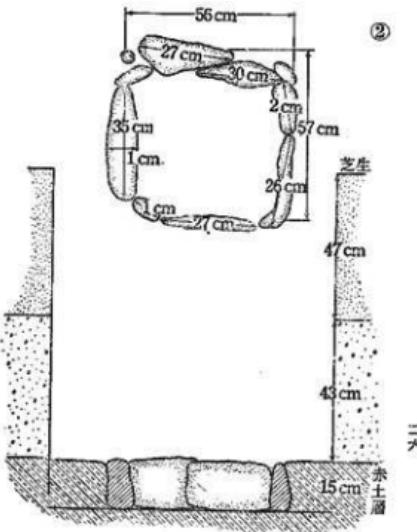
③



④



②



二六

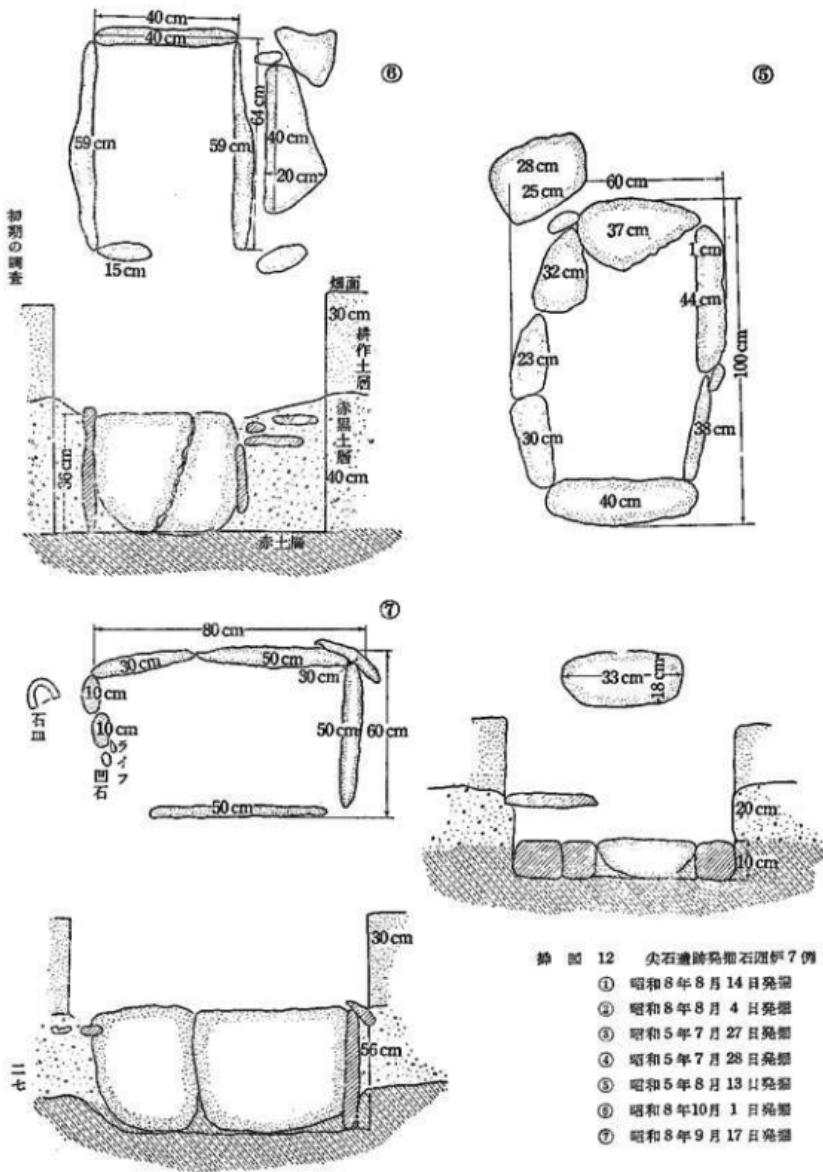


図 12 尖石造跡発掘石垣7例

- ① 昭和8年8月14日発掘
- ② 昭和8年8月4日発掘
- ③ 昭和5年7月27日発掘
- ④ 昭和5年7月28日発掘
- ⑤ 昭和5年8月13日発掘
- ⑥ 昭和8年10月1日発掘
- ⑦ 昭和8年9月17日発掘

翌昭和十一年七月に第二九〇三号烟に隣る作場道で、大小二個の石圍炉址を六米離れて発見した。その十月には東伏見氏がこれら石围炉址の東で住居址を一ヵ所発掘された。

以上のようにそれまでの発掘は専ら石围炉址や各種遺物の発見に終始したのであるが、昭和十五年以後は住居址発掘に規模を拡大した。

これより先、昭和十年四月に疊平村日向字家上を発掘した際、東京大学理学部人類学教室の八幡一郎、酒詰仲男女氏の指導を得て、竪穴住居址一ヵ所のほぼ全貌を明らかにすることができた。この発掘の経験が昭和十五年以後の本格的発掘を遂行する原動力となつたのである。

昭和十五年度の発掘

一 発掘の概況

従来の発掘は殆ど機に臨んだ試掘的のものであったが、幸いにして矢島正人氏の好意により、その所有空烟第290一号と第二九〇五号の二枚が提供されたので、ここに、本格的発掘を試みることにした。

今回の発掘地点は、巨石尖石から東北一〇米、東西に通ずる南作場道の南添いの烟で、水田の溪谷に臨む南斜面に存在する。ここは、既に、數次に亘って試掘したことがある。即ち昭和八年には、今回発掘した二枚の烟の中間にある第二九〇三号の烟地で、その上段から殆んど一米の等間隔で三個乃至四個の扁平石で囲繞した方形の炉址を計八ヶ所発見し、十一年七月この烟の北に接する作場道で大小二個の石围炉址を六米の間隔で発掘したことは前記の通りである。これによつて見ても、この地点が当遺跡内に於て炉址の分布は極めて濃厚であり、埋蔵

遺物も最も豊富であることが知られる。

昭和十五年一月十六日、今回発掘したその東畠の第二住居址の上層新土層中に、三個の土器を発見したので、これを端緒としてこの畠二枚を借り受け、発掘することにした。そして同年四月十六日から十一月十八日の間、延三八日間発掘し、東畠七〇坪から四ヶ所西畠二百坪から一二ヶ所合計一六ヶ所の住居址を発見、併せて土器二五点、石器一三七点を得ることが出来た。

二 発掘の日録

正月十六日 今年（昭和十五年）の正月は近年稀な旱りで、八ヶ岳山麓の北山浦地方も寒中に入つて雪が少しもない。殊に本日は、寒中とも思われない暖かさである。尖石に行く。畠地は硬て乾いて土埃が立つ。南作場道の南沿い東詰の畠の表土を搔くと偶然にもそこが遺物の包含層であった。厚さ一〇畳の凍土を剥ぐと土器が三個折り重なっていた。實に思いも寄らぬ収穫であった。

四月十六日 一月十六日の試掘によって本発掘を計画し、土器出土の空畠とその西の桑畠を隔てた空畠との二枚を、地主矢島正人氏から借り受け、今日同氏と検分に上の打合せであったが、同氏は、急用で中止されたので自分だけ上る。計測すると東の畠が七〇坪、西が二〇〇坪である。正月に土器が出土した地点を繞掘して再び壺形完形土器と大土器の口縁部大破片を得た。終日薄曇だが暖かで、雉子の鋭い啼声が峠間に響く。



図四 13 石蓋した大甕の発見

四月二十一日（日）晴。今日からよいよ本発掘に着手する。然し、人夫が得られなかつたので自分一人だけだ。さきに土器を発掘した地点から東に一〇米のところに黒土層中炭屑の散在するを認めてこれを掘る。深さ四〇厘米に土器片を數き並べた箇所に当り、掘り抜げると赤土層上に住居址の床らしい。約二坪掘り抜げたが拂却した黒土が山と盛り上つて余りに疲れた。氣分の転換にと、また東一〇米の地点に移り発掘する。炭屑や土器破片が出て、ここも住居址らしいが、黒土層が深く容易に赤土に達しない。酷く疲労したため午後一時帰宅する。途中で小平幸術氏の上つて來るのに出会う。氏はこれまで始終発掘を手伝つてくれた。今日も、私の発掘を聞きつけ応援に來たとの話、これに勢を得て直ちに戻る。そこで両人力を合せ、土器破片が數き並べてあつた所を掘る。床が既に現われたからには、ここが住居址であることは確かである。

炉址の發見に努める。山のようによじ上げた土を今度は外側に搔き下して床を改める。床は堅く焼き固めであり、その上に堆積した土は容易に剥ぎ取ることができる。その床面を四方に掘り拵めると、土器を數き詰めた部分は、円形をなして床面より一段深いことが判明した。土器破片を取り上げ黒土を掘り除くと底の赤土が赤く焼けている。炉址であることが確かめられた。円形の竪坑に土器片を數き並べたものである。床面を四方に追つて行くと壁が、その裾には溝も穿たれている。遂に最初の住居址——尖石第一住居址——が完掘された。喜び語りながら日没を帰る。

四月二十六日（木）晴。今日は、靖國神社の臨時大祭なので午前中は、小学校の遙拜式に参列し、午後から遺跡の近くに働いている小平幸術氏を頼んで続掘する。

まず土器片の出土した第二地点に住居址を發見すべく、炭屑を辿つて四坪近くも続掘したが、床も壁も炉も発見するに至らず中止した。次に、第一住居址へ移つてこれを精査する。その東北隅に石積みがあるので、頂上の扁平石を除去すると、大土器の口縁部が露出する。次いで周囲の石を崩すと膚が出て、底は、赤土深く掘り込ま

れている。こういう状態での土器出土は新資料であつて撮影しておく必要があると感じ、それまで土で埋めておく。午後五時、この収穫に疲労も忘れて戻る。

四月二十八日（日）深夜の豪雨の音に時々目覚め、明日こそはと待つた。その日曜日が雨ではと氣を悩ませていたが、夜明頃から西風が強く吹きつけて、その中に雨は止み、四月の末とも思われない寒さに晴れた。

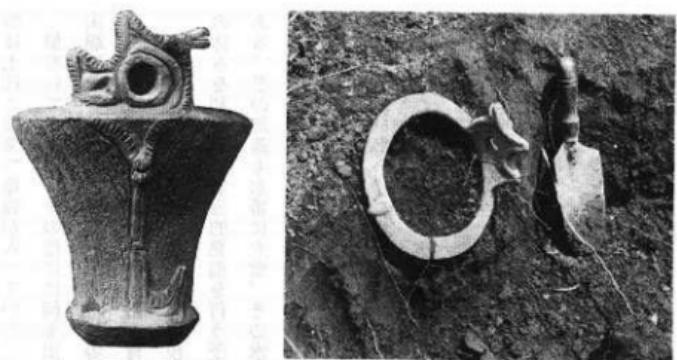


図 14 完全土器とその発見状況（昭和8年）

待つ間もなく、矢島数由氏が約束通り朝八時半のバスで着く。人夫、小平幸衛氏を促し、発掘や測量道具の類を荷車に積んで出発。九時半現場着。直ちに第一住居址を清掃する。炉底の土器片を剝ぐと、下から珪岩製無柄石鎌一点が出土する。すると炉に土器片を敷いて火を焚いたとは思われない。床を清掃し壁際の溝を掘るとほぼ床の周囲をめぐっている。壁は南北の隅を僅かに欠き、主柱穴が四隅に配置されている。即ち、この住居址は、地下六〇㌢の基盤赤土層を更に二〇㌢掘り下げて、平面形を円とした竪穴である。その四米平方に亘る平坦な地床の中央からやや東に偏して坑炉址があり、中心を過ぎる四米の対角線の四隅に主柱穴を配し、その周囲に壁と溝とがめぐっている。

それから炉の東側に敷石があり、それが東北隅の積石まで続いている。時に西風がますます烈しい。雲が剥げると東に近い八ヶ岳の連峰は、裾近くまで新雪を被つて真白だ。寒気に

震えながら焚火を囲んで昼飯を摂る。午後は矢島氏が寒さに凍えた両手を焚火に温めながら専ら実測する。午後四時牛尼政一氏が来て撮影し、後から地主矢島正人氏が見物に来る。ここで東北隅の積石を解体すると中央の土器は土圧と湿氣で亀裂が入っていた。破片を除くと器内には黒土が埋まり、その黒土の中に青色の小形磨石斧が一個容れてあった。その他には何も出なかつた。積石の背後から更に磨石斧・凹石・石皿の断片、遠州式石斧の尖端破片と花崗岩の残塊、土器破片等が出た。ここは住居の物置棚の址であろうか。

午後五時雪を着て真白い八ヶ岳を背に、寒い西風に吹き晒されながら帰宅した。

六月七日 晴。今日から一週間学校は田植の休業である。毎年この休暇を発掘にあてていたが、今年は殊にこの休みを利用して計画的発掘を行う予定で楽しみにしていたが、春からの旱りで、田植をひかえて非常な渴水である。どの部落も水番に大童、その水番の順番が廻って來たので、当番の人達と出掛ける。自分は他の四人と一组になって、遺跡の東近くの横堰でその水門の番をすることになった。早朝水門に着いて見ると、眞実に堰には水一滴も流れていない。これでは全く番をする必要がないと言うので、皆時候ものの藤折に出掛けた。自分は遺跡が近いのを幸い、これも水番に来た青年一人と一緒に立って遺跡に行く。

実は、この十六日に、東京考古学会第一七例会を尖石遺跡の実地踏査に當てるからとの藤森栄一氏からの通信があったので、当日の発掘地点を選定して置かなければならぬ。東の畠では既発掘の住居址を見学するとし、西の畠で発掘することとして、その予定地点を検討する。まず、西の畠でその東北隅を調査すると、黒土層に炭屑が混在する。そこを二坪程掘り抜げると一大土器片が砾石を抱いて埋もれている。層位も丁度住居址が予想される位置にあったので、ここを第一候補地点として水番に戻る。

丘には、一面鬼羅藤が燃え、渓には藤が咲き、郭公が高木に来て頻りに啼く。時々ちぎれ雲が太陽を掠めて東に急ぐが降りそうにもなくて、なかなか暑い。昼飯は済んだが午後の時間は夕方まで相当に長い。退屈の余り、

自分は再び遺跡に出掛けた。

第一地点から南にやや離れた所を試掘する。ここも黒土層が深く炭屑が含まれている。やがて青い棒状石器が出る。長さ一五釐、先端が笠状に円く、そこから一寸下がった両側縁に指のかかる程の抉込みが設けられている。普通の打石斧と異った用途が考えられる新資料である。ここを第二候補地として水番に戻る。

六月八日 晴。午前家居。午後尖石に行き第二地点を続掘し遂に床を発見した。床には一個の土器を埋め、その口縁を床面と水平にしてあり、またその周囲に円い小孔があつてある。少し離れて小形磨石斧が出土する。確かにここが住居址だと予想される。

この出土土器は、口径一〇釐、高さ六釐、厚手式としては、極めて小形の手捏ね造りで至極簡単な籠描文がある。稚拙実に愛すべく、鑑賞して面白い。その遺存状態にも、周囲の小孔にも何らかの意味があるらしいが、本発掘の日までそのまま埋めて置く。

六月十日 晴。今日は東の畑へ何か蒔き付けておこうと妻と四人の子供を連れて出掛けた。西から東へ畝を作つて進む。前回どうしても住居址が発見されなかつた第一地点のやや東から石窯炉址が出土した。炉址は扁平石一個を堅に掘り込んだ長軸南北一米、短軸東西六〇釐の深いものであった。これを中心とする住居址を完掘するのは十六日の例会当日として、そのままにしておく。次に第一号住居址の西三米追添の所にかかると、地下一米基盤の赤土層が真赤に焼けていて堅い。凹石一点と同一個体に属する土器破片が片身ずつ伏せてある。ここは床で、ここにも住居址の伏在が予想される。同じく十六日に完掘することとする。住居址の予想地が大体決定したので、必要のない空地に、小豆や蜀黍の種子を蒔き付けて、夕方帰る。鬼脚藪が夕陽に映え、野は燃えるよう美しい。

六月十六日 今日は東京考古学会第一七回例会当日である。一行は前夜既に上諏訪町に来泊した。長い間の早

りが崩れかけて来て雲脚が陥しい。が今日一日位は大丈夫だらう。早朝から同好の小平定太医博や俳壇牧馬会の同人達が発掘の応援のため、自分の家へ詰めかけて一行の来着を待つ。一行は後藤守一氏をはじめ杉原莊介・藤森栄一・和島誠一・神林淳雄の諸氏、それに関根忠邦・島田曉・岡本健児・佐野大和の学生諸君、これに遠く更級から宮本邦基氏が、近くの上諏訪から細川隼人・小平雪人・今井広龟・矢島数由の諸氏が参加されて中々の眼かさだ。暫く蒐集遺物を見学されてから現場に向う。現場にも発掘手伝いにと泉野小学校職員諸君が多数の児童とともに既に待っていられる。一先ず東隣の松林で小休止し、野天に青い煙を立てて湯茶を沸し、咽喉を潤す。いよいよ発掘だが、作業は石畠炉址を中心とする藤森、杉原両氏の一隊と道添いの床を探る和島氏と自分との二手に分かれる。

炉址組は、既に採土され、ほぼ住居址の範囲も決定しているので仕事は割合に楽である。それから東に掘進むと、炉址から一米の床上に横倒しになつて円筒形の土器が完全で一個出土し歎声が湧く。(第四回版)次いで東六〇釐に溝と壁がある。これを北に追うと円形をなして西にめぐる。住居址の東と北との範囲が決定した。

南は赤土の基盤が南に向つて傾斜し、壁も溝もない。そこで床を西に追跡すると、炉から六〇釐距つて一条の溝があり、その溝が西を中心として弧を描く。これに壁を外伴してこの西から北にめぐる。この溝と壁は今までの住居址に関係するものではなく、更に西方にこれらが構成する他の住居址が予想される。依つて西に向つて採土を進めるが、果して二メートルに土深く埋もれ僅かに四個の石



第一回 東京考古学会の発掘(昭和15年)

が頭だけ露出した。これは石圓炉址でこれを中心とする他の住居址がこれに喰い込んで発見された。

一方道添いでは、焼けた床を中心て採土しつつ東・西・南の三方面に拡げる。果してどの方面でも溝を伴う壁が発見され、その範囲が決定された。次は、北側であるが、道沿いの切り崩しの断面は、黒土層の厚さが一米もあつて、採土はなかなか容易な業ではない。入れ代り立ち代り採土する。その採土が路面に山と盛り上げられたが、北の壁へはまだ到着しない。再びこの土を撒きのけては北に掘進する。幅二間の道路は、既に半ば以上掘つた。この住居址が円形、焼けた床が炉址で住居址の中心に当るとすれば、距離から判断して、この辺が北壁の筈である。だが床は垣々として北に走る。そこで北壁を追求して作業の見通しを決める必要から道を横断してトレンチを作る。北側の畑に達してようやく壁を発見した。南壁からこの北壁まで実に六米の距離がある。これでは

今日中には完掘に至らない。一方西の住居址も今日完掘は不可能となつた。よつて一行中の有志者が居残り、明日にかけて続掘することにして、午後五時引き上げる。

本日までの発掘で、この東の畑に住居址が四基発見された。四月に発掘されたものを第一址、石圓炉を中心とするものを第二址、これに重複するものを第三址、道筋にかかったものを第四址とする。これらはすべて壁を接して存在する。この事実だけでも、尖石遺跡が大聚落地であり、家屋が櫛比し繁榮したのが容易に窺われる。後藤守一氏



国 16 尖石第四住居址発見土器片 (昭和15年)

はこの遺跡で日本石器時代聚落につき最初の研究を徹底させたいとの意見を述べられた。

農民の懇意を開かせて幕方から天気が崩れ雲脚が迅い。果して翌日は、車軸を流す豪雨に、せつかく上って来た藤森君ほか二名は止むを得ず私の遺物を実測して帰京された。

六月二十二日（土）晴。村社祭で休業であるのを幸い、小平幸衛氏外一名を補つて第四址を完掘する。泉野小学校新井・金森両訓導も高等



鉢 四 17 尖石第4住居址発見の石器
(昭和15年)

科児童四名とともに来援される。

まず東西の両側壁を追つて床全面の堆土を剥ぎながら平押しに北に進む。竪穴の平面形は円形であろうと判断して掘るが、容易に北の周壁に達しない。作場道も住居址の東西の幅に掘進し、道北の柔烟の畦に至つてようやく北壁を連ねた。平面形は推定に反し、方形でしかもその径六メートルの大なるものであったから、容易に北壁に達し得なかつた訳である。この竪穴の黒土層は北程深く最北端で一・一五メートルとなつた。これは南傾斜の台地へ床を水平にして竪穴を掘つたからである。次いで床を清掃する。炉址は最初発見した地床炉址の外になお二ヵ所あつた。即ち中心から北に焼けて赤い地床炉と重複して三個の扁平石で囲んだ石畳炉があつた。そして四主柱の穴が四隅に配され、これに広い周溝が壁裾に沿つて掘られた。その規模実に整然として広大な竪穴住居址であつた。

遺物としては、東南隅の柱穴の黒土の中に珪岩石匙一点、北壁の裾に黒曜石石匙一点があり、輝岩礫塊を利用した砾石二点、剝片未製石器二点、凹石二点等がいずれも床の周辺や溝から出土した。夥しい黒曜石細破片が、

その製品たる無柄石鎌とともに散乱し、なお完形土器一点が石匂炉址の南側に横に倒れて出土した。土器破片は大概壁間に遺存していた。

午後四時ようやく床の整理が完了し、これを矢島敷由氏が実測し、牛尼政一氏が撮影した。

ここは作場道で、このままで通行に支障を来たす。直ちに埋めにかかったが日没に至るも埋め切れない。明日に残して午後七時切り上げる。日が最も水い時ではあったが既に薄暗くなつて来た。

六月二十三日（日）晴。午前四時起床し朝飯もそそことに子供の虎次・昭久の兩人を伴つて上る。十時までかかるて昨日の残りを埋め、荷車の通り得るまでにして帰る。

七月二十四日 晴。いよいよ明日から七月七日まで暑中休暇である。西の畑を発掘することとして、その下準備のため午後二時小平幸衛氏と上の。

この畑は、南作場道の南に沿つて東西三〇メートル南北二〇メートル、約二〇二坪の広さであるが、斜面をなす南半分は、既に地主によつて稗が蒔きつけられている。発掘は主として平坦な北半分であるが、場合によつては稗の部分まで喰い込む。

さて発掘は東から西へ進め、その採土はトロッコによつて南の傾斜面へ運搬することと計画し、今日はまずレール敷設路のため畑の東辺に幅一メートル深さ五〇厘米南北に亘る溝を設ける。この地層は深さ三〇厘米が黒土層、その下が赤黒土層で、この赤黒土層の表面が石器時代の生活地表面に当り、ここに遺物を包含する。この作業中に、凹石一点・黒曜石石鎌一点・打石斧一点を土器破片とともに採集する。午後五時作業を中止し、帰途部落の事務所に立ち寄り、トロッコ一台とレール一六本の借用を申し込む。

七月二十五日 晴。払暁三時起床。矢島信之青年が、トロッコ一台とレール六本を牛車に積んで運搬してくれた。共に上る。人夫が上つて来るのを待ちながら発掘する。レール敷設路の下から石匂が址を発見する。人夫が

上って来ないので、待ち切れずに一里下の塙之目まで迎いに行く。留守なのでまた上る。後片付をして今日は打ち切り正午帰る。

七月二十六日 晴。午前三時起床。同六時現場着。人夫の来るのを待ちながら発掘。八時ようやく人夫二人到着。早速窓の東側にレールを南北に敷き探土をトロッコで運搬し、南傾斜面に棄てる。午後東西の側壁を発見し、ほぼここに住居址をつきとめた。午後五時終了。

出土品は打石斧一点・石鎌一点の僅かに二点のみ。

七月二十七日 晴。日下夏蚕の最盛期に入り、人夫の傭入れは不可能だ。よって中学生の三男虎次を連れて上る。

この住居址を第五址とし、今日はこの完掘にかかる。炎暑で汗にまみれながら、慣れない仕事を恐る恐るトロッコで探土を運搬する。そのうちにトロッコの走る弾みを喰って虎次がトロッコから跳ね落される。幸い怪我はなかつたが、手首が痛むというので、一時トロッコの運行を中止し床上を探土する。

東南隅の溝から側壁にかけて、遠州式石斧一点と凹石一点が在る。続いて土器一点が床上に倒されている。その土器の底部は黒土層が浅かつたので耕耘の際削り取られて欠けている。この土器に打石斧一点を寄せかけて置く。

午前十一時子供たちが弁当をもつて来る。弁当を済ます頃暴雨が迫る。子供たちを連れて戻る。家へ着くと晴れる。再び小平幸術氏を頼んで上る。午後四時から床の清掃にかかり、周壁を連結し、主柱址もそれぞれ四隅に発見された。午後七時帰宅。

七月二十八日 晴。暑氣殊に烈し。虎次は、昨日トロッコから転落して手首が痛むと言う。ひとり上って第五址を清掃する。

まず周溝を整理すると、その溝底の所々に円い小孔がある。それから溝と十字形に交叉した短い溝が床と壁とに掘り込んである。これらは特別の目的で造作されたもの。この周溝は或は排水を目的とするほかに、これに木本科の茎を樹て、それに土を寄せて壁を作ったものとも思われる。所々の穴には、この中心となる柱を立て、交切する短溝には、短い木を入れて、この草壁の移動を防止する装置の址でもあろうか。

午前九時、矢島致由氏と葉山の上野広一画伯とが見える。画伯は、毎夏下飯訪町富ヶ丘別邸へ避暑され、その都度当遺跡を訪れるのが常である。今年は今日がその最初の日である。

床は水平だが柔らかい。整然たる遺構の割合に床が余りに柔らかい。この堅穴が構築されてから居住の日が浅くはなかつたかと想像される。西北隅の外壁にこの主柱に対し支柱をなしたかと思われる斜穴がある。炉址は四枚の大扁平石を堅に深く規模の整然たるものである。他に一つ中心より南に床が焼けて赤く地床炉址らしい。この周囲に小孔が所々穿たれて特別な工作の址らしい。

午後一時清掃終了。余り暑さがきびしいので、松林に休憩する。その間矢島氏が実測し、午後三時牛尼政一氏が撮影に来る。午後四時小平幸衛氏が薬束を背負って来て、それを住居址の床に拡げ、床の亀裂を防ぐ。時に矢島信之青年もレール二本を運搬して来てくれる。午後五時、一同下山。

七月二十九日 晴。暑さは強烈だが、時々微風が通つて汗が乾く。早晩人夫を頼みに行つたが、目下養蚕の上巣期で、来月二日からでなくては来られないとのことだ。それで本格的発掘はその後として、毎日作業を継続することとする。今日は四男昭久を連れて行く。

第五址に南接して、地中深く土器大破片と打石斧を出土した地点を発掘する。一四才の小学生を相手だからなかなか骨が折れる。機嫌を取りつつトロッコで採土を運搬する。やっと床に達した。住居址らしい。そこは、丁度北壁らしい。床面はここから東南に延びて行く。これを第六址とする。この壁を東に掘進する。壁側の床に、

扁平石二点と青色石塊があつた。扁平石の一点は、方形石皿の断片を打ち伏せたもの、青石は輝岩自然礫塊を敲石に利用したものであつた。

こここの地層は一寸注意をひく。黒土層と黒土層の間に赤土層が介在する。自然の層序でない。そこに何か作為があつたように思われる。

下層の黒土の下は床で、床面から一段黒土の深い所がある。黒土を掘り出すと円形坑炉址となる。この北壁に壘石一個を貼り付けてある。次いで西の側壁に沿つて南進する。壁は続くが珍しく周溝を欠く。

午後四時作業を切り上げて、上の壠で出土土器破片を洗滌する。勝坂式の文様が多い。

七月三十日 晴。暑い。午前七時四男昭久と現場着。第六址

の統掘で、昨日南側に盛り上げた拂土を再び南遠く移して南壁を探る。その壁も現われた。この時壁際から磨石斧の尖端が出土する。

午前九時半上野画伯来着。今度は、西壁と南壁とを連絡させるために、西南隅の堆土を掘る。

午前十一時屋敷。午後零時半から東壁を掘り出す。この畑を掘り盡し、東接する桑畑に掘り込むが、壁にはなかなか達しない。床はよいよ固く東に発展する。暑さも暑し、随分疲れたので、遂に東壁に達しないまま作業を切り上げ、埃道を帰る。今日の出土品は、土器破片が僅か。至つて遺物に乏しい住居址であった。



插圖 18 尖石第亜・第六住居址発見の石器（昭和15年）

八月一日 晴。暑い。昨日長野師範学校から帰省した長男吉久雄と昭久とを伴う。

今日は第五址の北西隅から西一・五〇米の地点、即ち、六月七日試掘の際表土浅く土器破片が出土した地点を中心に発掘する。忽ち打石斧一点・石匙一点・球形凹石一点・土器大破片等を採集する。この東北に沿い、土器包含層がなお発達している。この包含層から北へ六〇厘米の地点で、地下三〇厘米に床を発見する。住居址の存在が予想され、これを第七址とする。この所は、丁度住居址の東壁に当り、これを北に追つて採土しつつ南作場道まで掘進したが北壁に達しない。

猛烈に暑い日光に堪えられない。午後二時引き上げる。

八月二日 晴。午前七時半着。ただ一人、前日の作業を継続し採土する。十時吉久雄来着。兩人で作場道に沿い西に掘進。地下五〇厘米に石がある。それと土器一個が横に倒れ、土庄でひしゃげている。その傍に他の土器類部が珪岩破片を共伴してある。それからなお西に掘進し、東壁から既に六米も離れたがら未だに西壁に達しない。兩人とも重労働に慣れない。作業はなかなか捗らず、全く疲れ切った。午後三時作業を切り上げ、上塙で発掘土器を洗滌してから帰宅する。

八月三日 早朝吉久雄と上る。今日は、六月八日試掘の際小形橢形土器を発見した地点を発掘する。忽ち床に達して、ここにも住居址の埋在が確かになった。これを第八址とする。

ここはトロッコ線路の西側だから、これから西に採土する。黒土がなかなか深い。やがて八時人夫袈裟一君が漸く来る。これに力を得、協力発掘する。然し午後一時から豪雨が襲つて忽ち土が重くなる。せつかく人夫は來たがこれでは仕事が出来ぬ。残念だが切り上げて戻る。本日の出土品皆無。

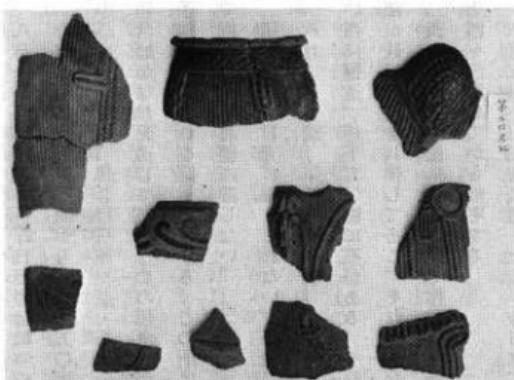
八月四日 晴。早朝虎次と行く。中学生工藤武君が手伝いに来る。大いに助かる。上野画伯も児童二人を伴つて見える。午前十時吉久雄来る。一同ひたすら第八址の採土に励む。午後から時々降雨。せつかく手は捕つたが

生憎の天候に午後一時引き上げる。

八月五日 晴。早朝吉久雄と上る。工藤君また来援され、第八号の排土に協力する。午前十一時小平幸衛氏が夏蚕がようやく上簾し切ったと申して手伝いに来てくれる。大いに力を得、共に励んだので、住居址の輪郭が判明をした。一般的に土器破片が夥しく出土し、東南隅から見事な磨石斧一点が現われた。午後一同で、第七号の床面南から北の道側まで清掃する。午後六時終業。今日は時々豪雨があつた。

八月六日 晴。夏休みも余すところ二日となつた。二週間に亘つて発掘した第六・第七・第八の三つの住居址につき実測し撮影しておかなければならぬ。早朝、吉久雄と小平幸衛氏と上る。後から工藤君も来てくれる。

19 図 尖石第七性住居址出土の土器破片（昭和15年）



まず第六号で掘り残しの東北隅を発掘し、その採土を順送し、南斜面に棄てる。午前十一時までかかる。次に床を清掃し、炉や柱の穴を掘る。炉の北側に方形の直穴があつて、そこから黒土に交じって黒曜石破片が夥しく出る。これに交じって無頭横型小石匙二点・石鎌一点・小形磨石斧一点と白い石英残片がある。坑は深くて底は平である。単なる柱穴ではなく、貯蔵の穴かと思われる。やがて矢島數由氏が見えて、ここを実測する。

午後は第八号の清掃。東北南の三方面は、既に壁も溝も発見され、住居址のこの方面的限界は決定したが、西は床が上り勾配で、壁が判然しない。既發掘の住居址に比較して柱穴が頻る多く、これが主住址か一寸決定が困難である。

かかる複雑さは、この住居が改築され抜張された結果であろうか。

続いて第七址を清掃する。東西の両壁とそれに沿う溝は既に発見され、その限界は決っているが、西は床も混乱し、壁もまだ出現しない。北もまた作場道に止ったきり壁は出ない。まず北の路面を掘進して壁を探る。東北隅に直径一米にも亘る円形直壁の大穴がある。中に黒土が充満し、これに木炭屑が夥しく混在する。床面から深さ四〇㌢、底は平だ。貯蔵庫か、或は周溝に連絡しているから、水溜の穴かも知れない。ともかくも珍しい大穴である。この穴の南に沿って、方形の大天然盤石をそのまま使用した石皿があたかも柱に立てかけたままの状態に遺存されてあつた。

午後六時帰宅。

八月七日 朝曇後快晴。吉久雄に虎次、それに点呼のため帰省した甥の久衛も上る。後から工藤君が来てくれる。続いて牛尼政一氏が上つて来て、第六・第八の両址を撮影して帰る。

今日の作業は第七址の整理である。まだ北壁が決定しない。道側の芝生を切つて北進する。約一時間猛烈に作業。幅一米も掘進したが壁に達しない。そのうちに久衛、吉久雄は魚釣に行ってしまつた。残留の三人で東側から清掃しながら整理する。九時半矢島数由氏来着する。

北側の円形竪穴の周囲とそれから南へかけて小孔が点列する。何か造作した址かと思われる。東側は周溝も周壁もあって、それは南に折れてめぐる。然し西側は床が柔らかく、壁も判然しない。仮に柱址を連ねてその範囲を決める。これで北側が未決定のまま床の清掃は了つた。

昼飯を済ませてから北壁の発掘に全力を注ぐ。ようやく北西隅の主柱址を発見し、北壁の端緒も得た。それを東に追求、遂にこの第七址を完掘した。矢島氏もこれを測図したので、午後二時切り上げて戻る。

八月八日 今日から始業につき、自分は登校する。吉久雄が上つて片付ける。牛尼政一氏が第七址を撮影した

が、今朝は霧が深く画面がやや鮮明を失く。

これで手不足ながら子供を相手に、夏休二週間に亘り、一日も欠かさず出勤し、真黒に日にやけながら、住居址第五址から第八址まで合計四ヶ所を発掘した。

八月十四日 快晴。暑氣強し。田舎の盂蘭盆会で学校も三日間休業となる。それに昨夜静岡市の安木博氏が学生二人と来泊された。その案内かたがたが発掘する。

青い朝空を仰ぎ草の露に濡れ八時着。第七址の西を発掘する。炭屑が包含され土器破片が出土するのでここも住居址らしい。基盤の赤土層上には所々盤石が布置されて床らしい。この床を四方に追跡して掘り抜けるが壁も溝も発見されない。然し柱址らしい穴は所々にある。その穴を連ねると規模は至って小さいが四形が連れて遺構らしい。炉址はないが、細工に使用したと思われる大盤石や、他の住居址からは、そう発見されなかつた、打石斧が七点あり、刃部の鋭い半磨石斧一点とそれに夥しい黒曜石破片が、中には大裂片も交じつて出土した。

これらの石器の存在からみて、これは住居址ではないにしても、第七址に付属する倉庫とか作業場の遺構かも想像される。ともかくも第九址として独立させる。

今日も上野画伯が朝のバスで見え、午後三時に帰る。昼から小平幸衛氏も来たが、盆休みのこととて酒臭くて手伝は出来かねた。午後五時引き上げる。

八月十五日 晴。安木氏は、今日一日滞在される予定であったが、急に早朝帰宅されたので、小平幸衛氏と二人で発掘。

第八址の西側を発掘する。耕土層三〇cm、赤黒土層五〇cmで、基盤の赤土層に達す。丁度床で壁も溝もある。住居址はここから西に拡がっているらしい。南は直ちに神畑でこの壁を北に迫る。ややあって壁も溝も西に折れる。北の側壁と共に溝が伴う。これに従つて西に掘る。これが南に廻る。これでこの住居址の東西北の三方の

限界が決定した。ほば中央から坑炉址が発見され、炉内から盛んに土器破片が出る。これを第一〇址とする。

正午永明村の矢崎源藏氏が見学されたので、午後二時仕事を切り上げて、共に下る。

八月十六日 晴。朝七時半小平幸衛氏と三間梯子を担ぎ上げる。人は何事かと不審と思う。これを北の桑畑に立てて牛尼政一氏が軽業師のようにその頂上に登つて第五址から第八址までを鳥瞰的に撮影する。次いで第九址を撮影し、盆の十六日だから、そのまま帰宅。

八月二十一日 晴。午前八時半東大文学部長今井登志喜教授、諏訪郡史編纂主任今井真樹先生、四賀小学校牛山秀樹氏等の三氏が、貸切自動車で来着発掘地を踏査され、午後一時半下山された。

八月二十五日（日）颶風襲來、暴風警戒にて雲脚験し。午前八時半、上野爾伯大里氏と來訪。牛尼政一氏先行して尖石を撮影し、小平幸衛氏は現場に待つ。

第一〇址を統括する。炉址の南側を拂土する。なかなかの大仕事だ。西壁を南に追つて碑畠に掘り込み、ようやく南の周溝を掘り当てた。この溝を東に迫つて住居址の全貌を明らかにする。東西、南北ともに径四米である。出土品は、土器破片とそれに南の溝から磨石斧断片が二点出土する。磨石斧は、極めて大形。一個は輝岩、一個は石質不明で白色の柔らかいもの。これと珍しく掌大の粘土塊が磨石斧の出土した床から共伴する。土器材料の残塊であろうか。これを諏訪中学校教諭牛山伝藏先生に鑑定をお願いすると赤土層中に介在する安山岩質の粘土とのことであった。

午後二時、共に下る。

九月一日（二百十日） 晴。今日から十一日まで秋収休業で、この間に、西畑の西半分を発掘し尽す予定であるが、農繁期で人夫がない。家の子供達は皆学校へ行つてしまつた。全くの一人である。そこへ上野爾伯が二、三日中に帰葉するので今日は今年の最終だと言つて矢島氏と午前八時半のバスで訪われる。三人で上る。九時着。

上野画伯も今日が最後だと言つて画筆をシャベルに替えて頑張る。二人で第一〇址を整理する。この間矢島氏は第九址の実測。

炉穴に西接して炉と同大の深い坑がある。これを掘る。黒土のほか何も出ない。これは倉庫としての豊穴か、それとも炊事場の水溜か。また床の西南隅に接続して広い浅い穴が二ヵ所ある。それから四方へ斜に穴が張る。人工ではない。大樹の根張りの跡らしい。或はこの住居は、その上家をこの二本の大樹に保たせて構築したかと想像される。

南東の隅柱の穴から雲母片岩打石斧一点が出土した。土器破片も多少出土したが、遺存品は割合に乏しい。

この住居址も実測して、午後四時共に下山。

九月二日 降りそうで暑い。やっと人夫堀義一君が約束通り来てくれる。共に午前八時現場着。これから西の部分は、平掘する予定であったが人夫はそう幾日も来られないというので試掘的に作業することにした。

まずこの畠の西南隅の地点で第一〇址に西接して発掘する。幸い木炭屑が混在しているので、これを中心に掘り抜ける。地下は炉址らしく床が焼けて赤い。これに力を得て作業が活潑になる。統いて東に窪みの深い大石皿破片が現われた。疑いもなく住居址である。北に掘ると床に土器破片が重なっている。どれも大破片で勝坂式系のごく手のこんだ彫刻文様である。次に、南側から、打石斧・凹石・凹石を利用した小石皿等が続いて出る。

北側はようやく壁に達し、これに溝も伴う。次に、この壁を西に追う。柱址らしい黒土の深い穴がある。そこから雄大な把手付き勝坂式系の大破片が出る。これを第一一址とし、午後五時帰宅する。牛尼政一氏が来て第一〇址を撮影する。

九月三日 風涼し。人夫が来て共に上る。午前八時着。第一一址の拡張発掘にかかる。西の側壁と周溝を南に追跡する。壁も溝も続く。溝際から打石斧二点出る。東側も壁と溝が続く。これで炉址を中心として、北半分の

輪郭が整つた。こここの地層は、耕土層三五釐、赤黒土層一五釐から基盤の赤土層へ一五釐の豊穴を掘つてこれが側壁となる。

午後は、この第一一址の続掘を一先ず中止して、この畠地の西側全部に亘つて試掘して調査する。どこも黒土層が浅く炭屑は散在するが住居址が存在する地層ではない。ただ西北隅の一角所黒土が深く、それを掘り込むと平面形橢円形深さ一米にも及ぶ、直壁平底の大坑であった。何かの遺構であろう。

午後は暑氣の烈しいのと、所々の試掘に疲れたので、この方面には、これ以外には遺址なしとして午後五時切り上げる。午後三時豊平小学校職員三十余名見学。

九月四日 数日来心配していた颶風は逸走して、天候は全く安定した。限なく晴れ亘つて四方の樹々は澄みかかる。人夫袈裟一君と二人で作業。第一一址の整理。自分は、北の床上に集積した拂土を住居址外に運搬し、人夫は専ら南の外壁を探索する。東方から南の側壁を辿つて西に掘る。稗畑に既に一米も掘り込んだ。大騒ぎの仕事で、地熱に蒸されて満身汗となり働く。やがて炉址から南一米床上三〇釐の地層中に、彫刻施文の勝坂式系土器破片が盤石を共伴して出土する。壁に近い。午後に至つてようやく南の側壁と共に伴う溝を発見し、これで第一一址が完掘された。暫く床を清掃し、柱穴を掘つて、午後五時帰宅。

九月九日 晴。暑い。二、三日家事に逐われ発掘を怠つた。休暇はまだあるが、十日、十一日は職員研究会で登校しなければならない。従つて当休暇中に発掘するのも本日限りである。

午前八時半バスで矢島氏着、共に上る。自分は第一一址を清掃・整理し、矢島氏はこれを実測する。柱穴が全く多い。中心柱の址らしい穴もある。西南隅の溝は二重だ。この住居は、改築されたものらしい。午後二時終了、下山。

九月十五日 早朝牛尾政一氏が今回発掘の遺物を住居址別に撮影する。

十月六日 晴。来る十七日、大山柏氏が大山史前学研究所員の一行と踏査されることとなつたので、今日は、当日の発掘予定地を準備する。

小平幸衛・牛尼勝実・宮坂清登・朝倉和文の四君を人夫に頼んで調査する。午前八時一同着。畠の南部の碑は既に刈り取つたので、この方面を試掘する。畠の南端にある馬入道に近い所は、黒土層下が堅い火山礫層で竪穴を掘るには容易の業ではない。従つてこの方面に住居址を発見する可能性は乏しい。よつてここに拂土を運棄することにし、レールを西に移動して第八址に南接した地点を発掘する。直ちに土器包含層を発見したから、これを第一候補地とする。次にこれに西接して発掘し、その拂土をトロッコで運搬する。と、容易に地下三五畳の深さに一大石圓炉を発見する。これを第二の候補地とする。

更にレールを越えて西を調査する。ここにも土器破片と末を発見し、住居址の存在が予定される。第三の候補地とする。次に第一址に南接して発掘する。耕土層浅くして、小土器を中心にして、周囲に扁平石を並列した遺構が在る。住居址とも思われない。他の何らかの遺構であろう。当日の研究資料としてそのまま埋没しておぐ。第四の候補地である。全く準備は整つた。ただ当日の晴天を祈るのみだ。午後三時帰宅。

十月十七日 神嘗祭(休業)。二、三日来引き続き天候悪戦、いつ暴れ出すか分らない雲行きであったが、いずれへか逸れ去つて、早晩起きてみると、曇り空の西に青空が覗いている。

大山氏は昨日既に上野画伯と入諏の上、上諏訪へ一泊されたので、早朝自動車を駆つて迎え、共に茅野駅へ。ここで後続された研究所員井出・竹下西氏と落ち合い、一路南大塙に至り、ここで朝飯を済まし、現場へ向う。発掘地には、既に当地俳壇牧馬会同人小平吉一・牛尼浅治・牛尼勝実・牛尼馬吉・小平幸衛の五君と小平定太医博、それから区長官坂杉吉氏外役員区会議員と共に山議員多數、泉野小学校新井佐市郎訓導が応援され、これに地元小学校の先生方が十数名見学されたので山は時ならぬ賑いとなつた。

発掘は大山氏指導の下に開始。上野画伯と竹下・井出西君とは第四地点を、ここには一個の土器がその口縁部をその時の地表面と水平に直立させて埋め、周囲に二個の扁平石を布置する。土器の傍には焼灰が堆積する。炉址ではない。他の遺構らしい。自分は区民の助力を俟つて石廻炉址を中心とする第二地区の住居址の発掘に努める。多勢の人が入れ代り立ち代り手伝つて、採土をトロッコで運搬してくれるので忽ち北と東の両壁が現われる。第四地点の調査を果した井出・竹下兩君は、第一地点の包含層を発掘し、上野画伯は第二地点の西壁を探られる。大山氏は終始莞爾として両地点の発掘を指導される。

正午東の松林で野飼を済まし、午後一時から再び作業にかかる。この頃から八ヶ岳山脈を覆い疊まっていた朝来からの密雲が剝げ、連峯は深く澄んだ青空にその秀麗を競い、裾野一帯は折からの照射に紅葉が燃える。遠く西の碧空には、日本アルプス一帯が雪に輝く偉容を現わしており、実に恵まれた発掘日和となつた。

まだ何れの地点も完掘に至らないが、秋の午後は僅かな時間であるから、全員を挙げて第二地点を発掘する。やがてその中央の炉址が完掘され清掃される。それは、長さ一メートル、幅三五楓の巨大な扁平石四枚を堅に底狭く掘り込んだ、稀に見る規模広大に整然たる典型的炉址であった。炉内には黒土が充満し、それに焼灰と木炭屑が交じつて、熾烈なる焚火をしたことが思われる。

この炉址から北壁まで一・四〇メートル、この間の床は奇麗に掃かれ、また北東と北西の両隅には、巨大な柱址が発掘された。南は二メートルまで培土したが、その限界を示す壁も溝もまだ姿を現わさない。床上の黒土から、頻りに土器細破片は出るが、まとまつた遺品はない。この住居址の北側から西側へかけて、側壁を懸命に追求された上野画伯は遂に見事な土器を床上に発掘された。本日第一の手柄で、その土器は胴体以上で床上に直立する。これに続いて、小形磨石斧二点がその西から出る。

この炉址から西南一・八〇メートル、更に他の巨大な石廻炉址を発見する。この炉址は、この住居址に於ける第二の

炉址であろうか。或は、また、この炉址を中心とする他の住居址があつたのであらうか。これを決定するには、なおこれから南西へかけて床を追求しなければならない。然し時刻は既に四時近くなつた。ここで発掘を中止し、第一炉址の炉石に囲んだ大山氏を囲んで一同本日の発掘を記念して撮影する。

大山氏は南大塙区長官坂杉吉氏の案内で一行とともに八ヶ岳山脈の懐深き渓の湯に一泊、翌十八日北山村上ノ段遺跡を踏査し、午後一時から上諏訪町高島小学校で郡教育会のため講演、午後二時四十分の汽車で帰京された。

十月二十一日（日）快晴。小平幸衡氏を雇う。矢島數由氏八時半のバスで来られる。

今日は、過日発掘した第二石闇炉址を中心に作業。レールを西に移動し、そこを採土しつつ第二炉址を整理する。これも第一炉址と等しく、深く広く豊形の石闇で、ただ第一は炉石が底狭く斜に掘り込んだものだが、これは口径も底径も等しく垂直に掘り込んでいた。この炉の北側に一条の溝がある。この溝から考察すると、この炉を中心に第二の住居址が第一の炉を中心とした住居址と重複している。溝からは、珍しく黒曜石石鎌が二点まで続出する。

この第二炉址から西南方へ採土して行く。二メートル第三の石闇炉址が存在する。これで雄大な石闇炉址が三個までほぼ一・八〇メートルの間に相並列して発掘された。第三炉址は、東・北・西の三側を石で囲み、南側だけ開いた底狭き豊形のものであった。



插圖 20 尖石第一六住居址火炉を中心に大山氏の一行

上の松林で昼飯を摂る。日影は既に冷ややかで蟲に虫が啼く。

午後は区用で登山された小平吉一氏が暫く発掘を手伝ってくれる。第三炉址から南へ床を追求しつつ採土。二・七〇米で側壁に達した。その壁面に土器が一個直立する。これは口径一八厘米、高さ三二厘米、底部と脚部の一部を欠く。その欠けた所を壁面に保たせ基盤に掘り込む。この土器の北側を掃くと、第三の炉址との中間に柱址らしい円形の穴がある。この穴から縦形石匙が一点出る。周囲の床面に黒曜石破片が散乱し、無柄石鐵一点と棒状黒曜石小刀一点が、これに交じって出土する。次いでこの柱址に北接して他の柱址がある。それは上層は赤土で埋めてあつたが、掘り込むとその内壁に、一個の大土器の片身を逆さにして器内を内側にむけ貼り付けてある。穴は、この土器の丈より更に深い。この土器に西接して他の土器の器壁が見える。これは、脚部以下を欠いているが、以上は完全なもので、それと同じ大きさの穴を掘り、これに土器を逆さまに、底面を地床面よりや低目に掘り込んである。廃物の土器をこんな所に、こんな状態に埋没して何に利用したのであらうか。この土器を埋めた地床面には三種程赤土を敷き均してあつた。これらの遺存状態から、土器を埋めた第一次生活の後、その上に赤土を敷いてつくった第二次の住居が営まれたろうことが想像される。

第三の炉址に西接して石塊の露頭が見える。小平幸衛君がこれを盛んに掘るとこれも竪坑で、石の南に無底の土器が一個横倒れに遺存していた。これは、石の上に置いたのが廃屋になつた後、この穴に墜落したといった状態である。この竪穴の底も赤く焼けて焚火をしたらしいから、これも炉址であろう。

今日は非常な収穫だ。これらの遺構とともに土器三點・大破片一点、それに石器類も多かつた。自然、発掘に時間を要し、どの住居址も完掘されなかつた。秋の日は短く、既に西山に傾いたので午後四時半引き上げる。これららの遺存状態は一々牛尾政一氏が撮影し、矢島教由氏が実測した。

十一月二日 学校は昨日から稽留休みとなつたので、今日は昭久と朝から発掘する。

よく晴れた太陽は、枯れ果てた畠野を寂々と照らす。静寂そのものだ。子供を相手では、大袈裟な作業は至難だ。排土に最も築いた東側の第一地点を発掘する。床を北に追うと間もなく壁が出た。この壁を東に西に追ってそれぞれ壁に行当った。この壁を南に追つて東・西・北の三方面の限界を確かめた。これを北から南へ採土し清掃する。中央にやや深んだ所があつてその周囲の床が焼けて赤い。炉址だ。この炉址から北側には柱址が一ヵ所もない。溝もまたない。珍しい遺構だ。次に炉址の南側を清掃する。南西隅に口径二五釐の小さい円形の穴があった。南側には壁と溝がない。壁・床・炉の存在から、これも住居址となすべきであろうが、柱址が僅か一ヵ所とは、如何なる上家が架けられたのであろうか。遺存品は、ただ竹下氏等発掘の土器一点分だけで、その他には、石器は勿論、配石一つさえ見当らなかつた。実に貧しい遺址である。それとも未完成のままの住居址でもあるうか。ともかく、壁一重で第一四址に東接し、方一米の小規模なものであった。

午後は第一六址の西を掘る。地下三〇釐にして、大体復原し得る立体把手付土器の胴部以上が小盤石の上に横たわって出土する。これから南方へかけて黒土が深い。住居址が予想される。

午後二時半帰宅。

十一月八日 朝曇後快晴。自分は登校。その間矢島數由氏一人上つて実測する。午後房州より福省中の宮坂春三画伯と小平雅衛氏を発掘地へ案内する。画伯は発掘地点から八ヶ岳を写生し、夕頃下山。本日は発掘を行わず。

十一月十日 本日は、皇紀二千六百年の祝賀式典が挙行される。快晴。午前六時登校。式典に参列し、八時帰宅。丁度来合せた矢島數由氏と遺跡に上る。自分は重複住居址の北側から発掘して西の側壁を探る。過日上野画伯が土器を発掘した地点から、その壁を南に追う。円形の柱址があり、その北側は壁が切れて床が舌状に出張る。その出張った床の中央に円形の小さい柱址らしい穴がある。更に壁と溝を南へ追う。この溝を挟んで一对の柱穴が相対す。この辺から黒曜石無柄石鎌と小形定角式磨石斧が出土する。西の限界が壁と溝の存在で確定した

から、次に南に移り溝を東に追跡する。一条の溝は、東に続くが壁が発見されない。この溝を南の限界とする。

溝の所々から凹石三点が出土する。

午後は、この重複住居址の東にある第一四址の東壁を南へ追い、更に南に折れて南の限界を求める。溝はあつたが壁がない。この溝を南の境界と仮定して西に行く。やがて柱址らしい穴があつて、掘ると扁平石があり、その下に土器が一個穴深く埋めてある。即ち地床に土器の丈だけの深さの穴を穿つてこれを埋め、扁平石で蓋してあつた。初め土器は完全であつたろうが、廃屋後土が崩れてこの口縁部が折れ損じ胴部に重なつたらしい。土器は土圧と湿氣で亀裂を生じたが、僅か一小破片を欠くのみで完全に復原された。これは、口径三三厘米、高さ四二厘米、朝顔形の大きなものであつた。住居址に遺存するいずれの土器も、大概、器の口縁部の内外の両壁に食料の残滓らしいものが炭化して黒くこびりついているが、これは内外とも清潔である。飲用水か何かの容器として据えてあつたのであらうか。とにかく珍しい状態に遺存されていた。

更に西に掘進して柱穴があり、それから堅形石匙一点が出土し、なお溝に沿つて西し、第一六址の南を発掘し、遠州式石斧一点と打石斧の尖端を溝から得た。

今日の発掘は、至つて豊富な収穫であった。炉址第一を第一四址、第二を第一五址、第三を第一六址として、今日ようやくその境界を限定し得た。矢島氏により、これらは全く実測され、午後三時下山する。

十一月十八日 晴。今日は昨日の日曜日と練習休業日となつたから、ただ一人遺跡地に行く。第一六址に西接しての住居址予想地を第一七址として発掘する。土器破片や石片が頻りに出土し、黒土も至つて深いが、この冬を前に完掘は望めない。来春を待つこととし現状のままにしておく。

午後は、東の畠の西境を発掘し土器包含層を得、ここにも住居址が存在するらしいが、これも来春のこととし午後一時帰宅する。

昭和十六年度の発掘

一、発掘の概況

昭和十六年三月八日、今井登志喜教授の斡旋により国文学術協会から壱千円を、恩友高橋巳喜之助氏からも発掘調査費を補助されたので、いよいよ多年の発掘調査を本格的に続行し、宿望を貫徹するの域に到達した。

即ち多数の遺址を埋蔵しているのであると推定される桑畠二枚、第二九六三号及び第二九六四号計九五四坪を、地主官坂榮次郎氏の好意で借り受ける。

年々三月下旬の雪解を待ち受けて直ちに発掘に着手していたが、今年は昨年末から諏訪市片倉館に郷土館が併設され、その陳列に關係して、四月二十九日天長節当日開館式の運びに至つたので、ようやく五月に入つて発掘にかかる。

即ち、五月に前年発掘し残した第二九〇五号の畠の西端に第一七号を、六月に第二九〇一号と第二九〇三号との境界に第一九号を第二九〇一号の東端に第二〇号を発掘し、また一方、第二九五八号の桑畠南半分一〇〇坪を小平初人氏から借りて発掘し、僅か第一八号一ヵ所と他に推定住居址一ヵ所を得たのみであったが、これによつてこの遺跡の西の限界を確定し得た。

次いで、七月から第二九六三号と第二九六四号の調査に全力を傾倒する。最初第二九六三号の南西隅から逐次発掘し、住居址を調査する予定であったが、調査して見ると、ここにも多数の住居址が、しかも密接しているらしいので、これを前年のように個々に発掘するとすれば、掘り返した土を再び移動することとなり、作業は重複

し、その時代の地表面にも混乱をもたらし、研究の価値を減するので、この当初の計画は放棄し、全体を平面的に発掘することとした。よって七月から八月に亘り、全部の桑樹を掘り抜き、九月これに東端部の一部分を残し、南作場道に平行に、東西に亘る幅七〇畳の試掘壕一〇条を四米の間隔に掘鑿し、調査の結果これに黒土層の深い地点合計四五ヶ所を得た。これらは堅穴の埋没地点であつて、中には同一住居址に属する箇所もあるが、これらを控除しても、少なくもこの二枚の畝に三九ヶ所の住居址の存在が推定された。

この調査はようやく十月十七日完了し、次はこの調査に従い、発掘するのであるが、時期も既に降雪期に入り、到底短時日には完掘し得られない見通しなつたので、この作業は次年度に譲った。

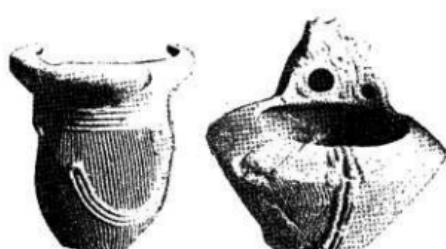
かくて本年度は、住居址四ヶ所と、多数の遺物とを発掘し得、これに併せて埋没住居址三九ヶ所を調査し、これを次年度の事業に残し、ここにこの調査は一步前進した。

二、発掘日録

一月六日 厳寒、稀に見る穏やかな日和。

今年始めての発掘に、午後一人尖石に上る。日向の壁には、もう早い落の蕊が円い芽を盛りて日光を愉しんでいる。

第一址に北接して石積がある。ことを探ると、各種に打痕のある長さ五〇畳の角棒状鉄平石が打石斧・黒曜石



図四 21 尖石発見土器 片立甕土器

未完成石籬等とともに出土する。これから、北へ作場道の路敷面の下へと掘り込む。木炭層の散乱する黒土層深く扁平石が在り、その下に底部を欠いた大甕形土器が、逆さまに赤土層深く掘り込んである。ここに住居址が予想され、北の方に発展するらしい。

昭和十六年最初の良き収穫としてこの土器を発掘し、夕方帰宅する。

五月一日（木）晴。昨年十一月から半年に亘って休日毎に上諏訪に下り、片倉館に新設の郷土館の仕事に関係し、考古品の陳列に従事していたが、それもようやく片付き、四月二十九日佳節をトし開館式が挙行され、自由の身となつたので、今度は予定通り本年計画の発掘事業に専念する。今日は、その着手の第一日である。

今年は、いつまでも寒氣が残り、殊に今朝は酷い霜、四時から学校で晴天動員が行われ、式最中指先が堪えきれないほど寒氣で痛かったが、日中は稀な好天気、殊に高原では紫外線が強く、忽ち日に焼ける。

人夫小平幸衛・大和製陶一の両氏、片倉館主事土橋長太郎・館員内田利男両氏、それに矢崎源蔵・矢島数由両氏も参加される。

まず本年借り受けた小平初人氏所有の桑畠第二九五号の南側三分の一に、東から幅一米に桑株を掘りこぎながら、北から南へと発掘する。桑株を掘りこいで僅か一〇畳の耕土層下は、一様に厚手土器破片の濃厚な包含層で、これに多数の打石斧が混在する。これに木炭屑も、黒曜石細片もとんでいるが、住居址らしい黒土層の深い箇所には行き当らない。いずれも耕土層三〇畳から厚さ三〇畳の赤黒土層となり、その下は基盤の赤土層となる。

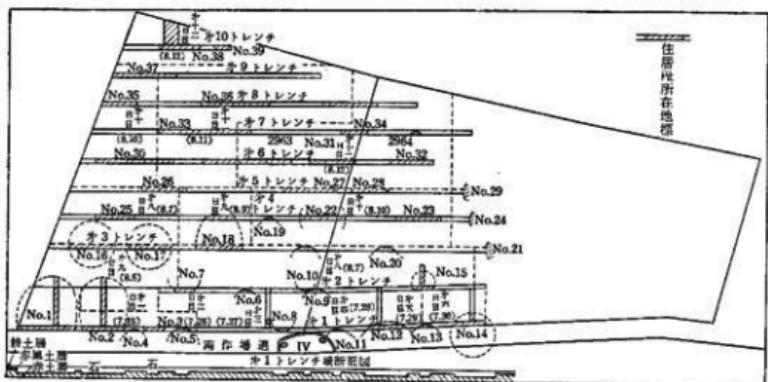
午後はこの作業に飽き、黒土層の深い箇所を選んで探る。この場所は畑の南側の作場道に接して発見した。木炭屑や黒曜石細片が頻りに出る。今度はこの地点を発掘する。土器破片が折り重なつていて、遺物包含層らしい。統いて土器破片を円形に成形したメンコが二点と磨石斧が一点出る。それから地表下一メートルの黒土層の底は床らしい。そこに盤状石を數き傍に土器を埋めた炉がある。この炉址を中心に炉から三〇畳の上部地層に土器が四

方から雪崩れ込んでいる。凡てが土圧でひしがれている。これらを總がかりで丹念に発掘し、午後四時引き上げる。土器破片は洗滌ののち八個体に分類された。珍しい豊かな収穫である。このほか黒曜石の小刀一点、同石鐵三点が伴出した。

六月一日（日）曇。五月一日から日曜日といえば乾度降雨で、長い間発掘が出来なかつた。今日の日曜日も昨日からかけて南から吹き込む。ラジオの天氣予報も至つて悪い。それにせつかく約束しておきながら、人夫はみな都合が悪いと言う。少々氣を嘯らしていると、思いも掛けず午前六時大和製鐵一氏が来てくれる。勇みたつて早速発掘に上る。途中小平幸衛氏も呼ぶと、これも都合が出来たから上つてくれると言う。大いに元気づき、午前七時半現場着。天氣も今日一日くらいは保つだろう。

五月一日に掘りかけた第二九五一号の掘り口から南に進む。黒土層四〇厘米の下に、一様に土器破片が散布し、これに打石斧も多數出土するが、依然住居址らしい黒土層の深い箇所には行き当らない。これを午前中南へ向つて一〇米掘進した。少々疲れたので昼飯にする。

この頃から天気は良い方へ向い、郭公が頻りに啼き、向うの丘には露頭が今を盛りと燃え立つてゐる。午後は方向を転換し、前年発掘しかけてあつた第二九〇五号の残部即ち第一六号の西端を続掘する。ここは、前年の調査で住居址が予想されていて、石窯炉址が直ちに発見された。これを中心に東と北に掘進して壁を得、この間を耕土して東から北への限界が決まつた。次いで一方は南へ、他は北から西へと耕土して進む。西を掘つていた製鐵一氏が床から見事な垂鎗石と磨石斧を収穫すると、南の幸衛氏がまた完形石鎗一点と破片二点を発見する。どれも黒曜石の無柄形のものである。西の壁が、やがて東へ廻り、南の限界が決まる。これを東に進むと穴があつて、そこには小形土器が埋めてあって、それを除くと下から凹石が一点出土する。こうして東西の両方から連絡して南の限界が決定し、ここに住居址が完掘された。第一七号とする。東西、南北とも四・三〇米を軸とする円



国 22 昭和 16 年 調査 経過

形である。一先ず小休止してから床の清掃に移る。床は柔らかく凹凸が烈しい。従つて堆土の剥がれが至極悪い。この床の状況では、この住居は余り長く住んだものではなかつたらしい。炉は方形の大きな堅形で、東と南を扁平石で閉む。柱址は西南隅を残して他の三隅は発見された。どれも凹形である。それから炉址の南に小穴があつて、そこに小形土器一個分の破片が埋まつていた。

午後六時帰宅。

六月七日（土）晴。昨日から向う七日間田植休業である。これを充分發掘を利用してようと予定し、人夫も二、三人約束しておいたが、昨日は生憎の降雨で、終日土器を接合し、今日こそは、天候も回復したから出掛けたつもりで、その人夫の来るのを待つていたが一人も来ない。仕方なく独り出掛けた。

五月一日発掘しかけた第二九五八号の住居址を続掘する。まず炉から南へ床を追つて堆土し、南の壁を探る。床は堅く、従つて堆土が気持よく剝げる。床から五〇㌢の高位處、黒土層中に土器破片が重なつている。同個体のものらしい。これを発掘してようやく南の壁に達する。丁度、南作場道の北側に接し、床からこの道路面まで一米の高さがある。実に深い竪穴住居址である。壁は高さ五〇㌢、この壁を東と西との両方面に追つて掘り上げよう

するが堅穴がかく深く、それに雨上りのため土が重く、ただ一人の作業はすぐ疲れる。僅かに炉址から南の壁までの床を清掃したのみで終った。この炉址は、遺跡としては珍しい形式のもので、地床に土器を埋め、その東と北の西側に炉石を掘えたものであった。

午後一時帰宅する。家には、片倉郷土館の内田氏と朝日新聞諏訪支局の江橋八郎氏とが来訪されていた。

六月八日（日）晴。早朝、中学生の三男虎次を連れて現場着。前日発掘した住居址を続掘する。南の壁を東に追うと円味を作つて北に転廻し東の壁となる。これを北に追い、午前十時一休みしていると、一人の若者がこの上の溜池工事へ働きに行くと言つて通りかかる。話すと発掘を手伝つてもよいと答える。早速手伝つて貰う。今度は、子供相手よりも仕事が気持よく渉る。瞬く間に東の壁が現われ、北の壁に移る。これを西に追う。壁が極めて高いから、住居址の境界が少しも紛らわしくない。円味をもつて西に移り南に進み、やがて南の壁と連絡して、住居址が一ヵ所ここに完掘された。これを第一八址とする。次に床を清掃する。床は水平に堅く気持よく整理される。四隅に柱址の穴がある。凡て内柱である。周溝は掘られていない。柱穴を掘ると、東側の北隅と南隅のものの中に黒曜石の大破片が包蔵されている。この他には遺物が床面には見当らなかつた。このことは、この遺跡としては稀な住居址状態である。この平面形は、北に広く南に狭い橢円形で、南北の軸四メートル、東西の軸は北の広い所で三・六〇メートルあつた。少し小形の住居址と思われ



插図 23 昭和17年発掘予定地に設けた試掘溝（昭和16年）

る。不意に来た若者は続いて手伝ってくれることで、共に午後六時引上げ、私の家に泊る。

六月九日 快晴。早朝若者は荷物を取りに行って来ると称して、待てど暮らせど戻って来ない。この若者には私たちほどにこの仕事に興味が湧かないもので嫌になったのである。無理もないことである。今頃は他所へ行って楽な新しい仕事を探してでもいるであろう。

長友高橋巳喜之助氏が岡谷市から現場視察のため、午前八時半のバスで来られたので共に上る。折からこの遺跡の近くで田植最中の小平幸衛氏を呼んで来て発掘を手伝つて貰う。

今日は、小平染太郎氏耕作中の空畑第二九〇三号の東北隅即ち第三址に西接して発掘する。

ここは前年末調査して住居址のあるのは判明したが、丁度耕作物があつたので、そのままにしておいた所である。位置は南傾斜面に接する地点で、黒土層が極めて浅く簡単に床が発見される。そして、この床は焼けていて赤い。地床炉址らしい。これから床を北に追うと三メートルで壁に達した。ここは作場道の南道側に当り、路面から床面まで七〇釐、この断面を説明すると、上層一五釐の黒土層、中層二五釐の赤黒土層、下層が三五釐の赤土層、これは基盤の赤土層に掘り込んだ壁の高さで、この三層から成立している。この壁を西に追うが、まだ西の壁には達しない。ここから黒曜石完形無柄石鎌一点と珍しくも軽石の石器が一点出土した。

午後は、炉址の周囲を整理する。炉址は、随分広く、南北の長軸一メートルに及び、焼土の厚さ二〇釐で、その下に石を敷き、その下が焼けている。これは橢円形に掘りこんだ大型竪穴坑炉で、これは木炭屑の散布する黒土で埋まっていた。土器破片も頻りに混在している。高橋氏の都合で午後三時切り上げる。高橋氏は、それから四時半のバスで帰宅された。

六月十日 曇天。今日は、村を挙げての田植に、全くの農繁期に入ったので、ただ一人で発掘する。午前七時現場着。第一九址の炉址から南へ床を追う。床は、よく踏み固められて堅く、堆土が気持よく剝がれる。二メートル

南の壁となる。壁は低く高さ一五釐、その上層が僅か一五釐の黒土層で地表面となる。ここから小形磨石斧が一点出土した。この壁を西に追うと、地床に土器の口縁部が輪を描く。土器を埋めてあるらしい。これは最後に発掘することとして、そのままに遺す。ようやく西の壁は北に折れる。次に炉の北側に移る。排土すると上層には土器破片・木炭屑・黒曜石細片等が盛んに混在する。打石斧が一点ここから出土する。こうして北の壁を東に追うと、壁は南に折れ、これで東の限界が決定し、北東隅から南西隅への直径が五・三〇メートルとなる。次に東壁に沿って排土しつつ南に進む。一人の作業に随分疲労を覚え、午後四時重い体を曳きずつて帰宅する。

六月十五日（日）晩。この間まで向うの丘が鬼瓢彌で燃えていたが、僅か五、六日で盛りは過ぎた。然し、郭公に時鳥に、それに夏鶯が交じつて盛んに交響曲を奏す。殊に雉子の叫声が一段と高く渓に響く。終日東南の風強く、雲脚低く晦淡の天候であった。

前日東京帝国大学人類学教室の八幡一郎講師が実地踏査のため入院され、上諏訪に一泊されている。自分も同宿してそれを迎え、早朝片倉館の陳列を閲て、午前八時の汽車で上る。上諏訪駅から朝日新聞社諏訪支局の江橋八郎氏と写真師五味保氏が行を共にされ、また茅野駅から矢島數由氏が合流して、午前十時現場に着く。現場には、人夫として大和製錠一・宮坂清登の両氏が待っている。

ただちに第一九址の残りの発掘にかかる。まず南東隅の堆土を排除する。多勢のこととて、作業はぐんぐん捲る。別に変った遺物も遺構も発見されない。次に西北隅に移ると、土器の脣部が石を載いて壁に貼り付いている。雄渾な渦巻文に装飾され赤色の勝つたものである。露出したその姿は、實に見事なものである。撮影して、掘ると、一同雀躍りした甲斐もなく、片面だけの破片で力抜けがした。ここから完形石鑑一点が出土する。最後のこの堆土もようやく排除されて、第一九址は完掘された。それは、直徑五メートルを超える大なる円形である。

昼飯後、午後一時から床を清掃する。床は平に四隅に柱足があり、周溝もめぐっている。最後に西南隅に埋め

てある土器を掘る。これは噴火凝塊層の堅い床に、土器大に穴を穿つて逆さまに埋めてある。小一時間も費して、ようやく掘り出すのは容易な仕事でなかったが、充分な道具もなかつた石器時代にあっては、これだけの穴を掘るにも随分骨折つたことだろう。土器は底部を欠くだけで完形である。その底部を床面と水平に埋めてあつた。こういう土器の遺存状態は、この遺跡で既に四例を得ている。どんな目的でこう設備したのであらうか。

ここは作物畑だったが、発掘のために耕作者の好意で一時借りておいたので、撮影と実測を終えて埋没し復旧した。なお、第一七・第一八の両址も撮影し、午後四時引き上げる。

八 脊講師は即夜帰京された。

六月二十二日（日）晴。片倉館主事土橋長太郎氏が早朝来訪されたので、出発をおくらせ、要談を済ませてから後、午前十時に現場到着。小平幸衛氏が手伝ってくれる。

今日は、今年一月六日に土器を発掘した第四址の東、第一址に北接する地点を調査する。黒土層深く、黒土には木炭屑が見られる。なお赤土層の面は住居址の床らしい。極めて堅い。ここにも住居址が予想されるが、それは北路敷の下へ發展するらしい。従つて道路を発掘しなければならないので、この発掘は他日に譲る。更に幅一米の試掘壕を作場道に沿つて作り、東に進む。二米で黒土層の深い地点に達した。住居址らしいので、ここを発掘し調査することとする。

この深い黒土層は、この路際が北の果で南に發展するらしい。発掘すると果して北の壁が現われた。これから壁を追つて西に採土すると、土中から石鎌二点、統いて土器破片がやや体をなして出土する。この土器は、小さい楕形で、内面を朱彩し、そのため中に埋まっていた土が赤く染んで離れた。かくて二米で西の壁に達する。今度はこの西の壁に沿つて、幅二米を南へ南へと排土する。西の壁は直線で、北から五米で尽きたが、床はまだ南へ走る。南には壁がないらしい。ここにまた、石鎌二点と打石斧一点を発見する。排土した範囲の床を清掃する。

北西隅に円形の大堅坑がある。坑内を排土すること直径一米、深さ七〇厘米

に及んだが、まだ底に達しない。直壁である。この坑へ北の壁裾からも、西の壁裾からも溝が連絡している。水溜の堅坑でもあろうか。これを第

二〇址として午後五時帰宅。

六月二十三日（月）晴。今日は臨時休業であつたから、発掘に行く。小

平幸衛氏と長野師範学校から帰省した長男吉久雄の両人が手伝う。朝七時

着。天気は上々。

24 土器
欠石第二号（内側より）
（内側より）
発見した小手こ
ね居がある



前日の作業を続行する。北の壁を西の壁から東に迫って四メートルに及ぶが、壁はなお東に統いて南に向う様子が見えない。東側は既に排土を積み上げて山のようだ。そのまま南に向って掘進すると、二メートルの距離に床から一五楕の高さの黒土層中に土器破片が包含されている。そして、ここは西北隅の堅坑から東南二メートルで、ここにも堅坑がある。東側に一大局平石を堅に掘り込んで、中から盛んに焼灰が出る。これは炉址らしい。ここから手頃の塊状に切り取ったらしい花崗岩材五個が出る。すべて風化してボロボロに崩壊する。中には黒く焦げているものもある。この炉址は、一辺八〇楕の方形、深さ六〇楕に達するもので、底は一様に焼けている。こんな巨大な深い炉址は、この遺跡では初例である。単に暖房とか炊事のためとかなら、こんなに大規模の必要はあるまい。何か他の目的が想像される。こんな大炉址であったため、発掘採土に随分手間取つた。まだ東の壁は決定されないが、今日は村の農休なので、午後三時引き上げて帰宅し、土器を洗滌する。

七月六日（日）午前快晴。午後時々曇雨が襲う。

去る六月二十九日は日曜日であつたが、今日は、幸い前日から

快晴なので、早朝に出発する。大和製鉄一・小平幸衛の両氏が伝う。矢島數由氏また測図に上る。

今日は、第二〇址を完掘する。まず東の壁を搜索する。北と南の両方から拂土しつつこの壁を求める。暫くして両方とも東二メートルに達する。次にこの壁に沿って南北の両方から拂土しつつ連絡させる。午前中これに掛って漸く完了した。東西の径が六メートルある。午後は南の限界を求める。前発掘から南へ一メートル進んで一条の周溝を発見する。これが南の限界らしい。これで第二〇址が完掘された。平面方形で、一边六メートルを超える既發掘住居址中最大の規模のものである。

一休みして午後から址内を清掃する。炉の東側の配石を埋める黒土から、見事な黒曜石大形石槍が発見された。本遺跡出土の石槍としては第二例である。続いて北の壁裾の床から小平幸衛氏が、これも大きな磨石斧を発見する。端尾に磨かれた大石斧が、赤土中に青光りを放つ。完形品らしいが、掘り出して見ると惜しいかな僅かに刃部が折損している。それでも長さ一八厘米の稀に見る逸品である。

続いて南の溝から凹石二点、東の溝からも凹石二点が発見される。柱址の穴はまだ一つも発見されない。それを探る。西北隅には、径一メートル、深さ五〇センチ以上の円形直壁の大なる竪穴が掘られていたが、これには北から南から溝が流れ込んでいるから水溜用として設けられたものであろうか。東北隅を探ると、黒土の深い所があつて、順次拡大して遂に北西隅の竪穴と同様な、径一メートル、深さ五〇センチ、平面円形、直壁、平底の一大竪穴となつた。更に

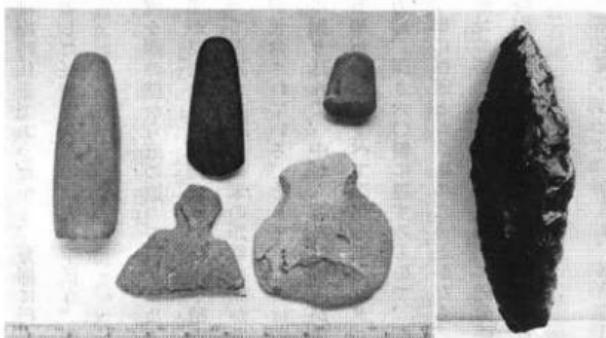


插圖 25 尖石第二〇住居址発見の石槍と磨石斧

南側の東の隅にも、西の隅にも、同一規模の大豎穴が掘られていた。他に柱址らしい穴は一つもない。これが四主柱の穴であろうか。こういう大きな柱穴は実に珍しく、新資料である。

これらの採土に随分手間取った。最後に床の南側を清掃すると丁度東西両主柱址の中程に、一大土器の口縁部が描く輪を発見した。それは床と土器の口縁部とを水平に、器体は基盤の凝塊層に、器体大に穴を穿つて直立させて埋めてあつた。周囲が堅いので、やつと掘り出した。土器は底部を欠くのみで、口径二七釐、高さ三五釐、雄大な渦旋文で装飾した豪華なものであつた。土器を床に埋めた遺存状態は、これで計五例となる。

時々驟雨に襲われ、傭に攻められながら、炉と西北隅の豎穴からの採土作業を残して午後五時終了。矢島氏は本址と第一七・一八両址を測図する。

本日の出土品は、撥形打石斧一点・石槍一点・大形磨石斧一点・凹石四点・花崗岩角材三点・黒曜石破片多数・土器一点。

七月十五日 ここ四、五日悪天候が続いた。幸い昨日から晴れたと思ったが、今日もまた雲行きが怪しい。今日は臨時休業なので、降るまでやろうと小平幸衛氏と出かける。午前八時現場着。

桑畠第二九五八号で発掘した第一〇号址から東に向か、幅一米のトレンチを作る。深さ四〇釐で基盤の赤土層となる。ここは、この畠の北側と異なり、土器破片が散布していかつたが、掘進東九米で黒土が俄然深くなり、上層には炭屑がとぶ。住居址らしい。一段深く掘り下げる、一米の深さが床らしい。そして、ここが北の壁際で住居址は東南に展開するらしい。この床上に短冊形打石斧一点と横形石匙一点を発見する。午後この床を南に追い、一米で路敷下に達したので、掘進を中止した。この時床を探っていた小平幸衛氏が、突如歎声を挙げる。完形土製滑車型耳飾を床から得たのだ。この遺跡としては、全くの新出土品である。中期の単純遺跡地であるから、耳飾の出土は初めていたのである。然し、今正しく地下一米の黒土層下、住居址の床上にこの完形品を発見

し得た。これで飾った耳朶が、今齧してゐる聲や杜鵑や郭公の驛音を何千年か前に聴き惚れたことであろう。発掘もまた詩である。

この床に一段と黒土の深い所がある。柱址の穴らしい。なお東に進むと、床から六〇厘米の高さの黒土層中に、いわゆる中期厚手式の特徴を示す豪華な立体的把手で装飾した分厚い破片がある。この豪華な土器を製作した尖石人が、また、あの精巧な耳朶をも併せ作り、愛用した。更に東一米に、床に盤石を組合させてある。石畳炉址らしいが、既に東隣りの他の畠地となつたし、それに怪しかつた雲行が遂に驟雨となつたので、作業も中止し帰宅する。時に午後二時。

本日の出土品は、土製耳朶一点・打石斧一点・横型石匙一点・中鉗厚手式土器破片等である。

七月二十五日 今日から八月八日まで向う一五日間、国民学校の農繁休業となつた。それでこの一五日間の休暇を、発掘に充分利用する予定で、それれ人夫を約束しておいたが、今日になると、急に皆都合が悪くなつたと言つて、ただ大和妻婆一氏一人が来てくれたのみである。午前七時現場着。

颶風一過の後とて、昨日までは素晴らしい好天氣であったが、今日はまた、第二の颶風が発生したとかで、そ
の先駆らしい陰惡な雲が雨をこぼして急ぐ。

今日はいよいよ今年度発掘予定地である第二九六三号及び第二九六四号、計九五四坪の二枚の桑畠の調査に着手する。まず西端から南路添いに幅七米を区切り、東に向けて八米の間の桑株を掘り抜く。つぎに、南作場道に平行し、それに添つて幅七〇厘米の試掘壕を作る。ここは、上部が三〇厘米の耕土層で、次はこれも三〇厘米の赤黒土層、下は、基盤の赤土層となる。しかし、もう西の端から黒土が深くて一米に達し住居址らしい。この深さで東五米まで進むと、深さ五〇厘米に土器破片が含まれ、木炭が散在する。そして再び黒土が浅くなる。住居址の東の壁らしい。壁は弧を描いて北に伸び、従つて住居址は北に予想される。よつて、このトレンチの中間にこれに

直角に幅一米のトレンチを北に向けて作り、深さ一米に床を発見した。この床を北に迫って五米、北壁に達し、円形の土器破片を発見し、再び黒土が浅くなる。住居址が完全に存在する。

午後再び東へ桑株を掘り抜きながら、このトレンチを延長すること五米、ここらは深さ五〇釐で赤土層となるが、北に向け黒土が深い。再び、このトレンチから北へトレンチを作る。俄然、黒土が深くなつて、深さ八〇釐において地床を発見し、他の住居址が確認された。

午後五時終業、明日も良い天候に晴天らしい。

七月二十六日 今日は、昨日とかわつて荒れ模様となつた。用件のため午前中登校し、午後一時現場に着く。大和妻婆一氏が一人で朝から桑株を掘り抜いていた。

午後これに第三基本トレンチを作つて探つたが、東に向つては黒土が浅いらしい。

七月二十七日 曜。今日は小平幸衛・大和妻婆一の両氏が手伝う。矢島数由氏測図にまた来山する。

午前七時作業開始、前日に北接し幅六米を東に向け桑株を掘る。一〇米進んで昼飯、次に路に沿うこの基本トレンチを延長し調査したが、黒土が割合に浅く住居址が認められない。

更にこの北に第二基本トレンチを作り、調査した住居址二ヵ所を近接して確認した。

午後三時から、前年完掘に至らなかつた第三址を、西へ拡張してこれを完結した。その西壁に鉢形土器を得たが、これには、内面に朱で螺旋文が描いてあつた。實に見事なものである。

七月二十八日 終日曇天。小平幸衛・大和妻婆一の両氏来る。朝七時現場着。

最初本地域も、その西端から桑株を掘り抜き次第、逐次これを調査し、住居址を発見しては、完掘する予定をたてたが、この二、三日の様子では住居址が密接するらしい。これを個々に発掘すると、排土を堆積した箇所を再び掘り返すこととなり、その結果作業も重複し、また石器時代の生活地表面にも混乱を來す虞があるので、こ

の計画は放棄し、今度は、全地域の桑株をまず掘り抜き、これにトレンチを作り住居址の位置を確定してから、あと一度にこれの発掘を行うこととした。よって、第一に全面に亘って桑株を掘り抜くこととした。今日は、前日引き続き幅六米の間を東へ一二米まで掘り抜いた。

今日次男長久が、作業応援のため、茨城から到着した。

七月二十九日 晴時々驟雨あり。自分は疲労のため休養、長久もまた休養する。小平幸衛氏は蕎麦時きのため休む。大和製糸一氏一人で前日の続きを、東の端まで桑株を掘り抜く。

七月三十日 晴。長久と小平幸衛・大和製糸一の両氏とともに、午前八時現場着。次の幅六米を東へ七米桑株を掘り抜く。午後は第三址を清掃する。

七月三十一日 朝から豪雨のため一同一日休養する。午後晴れたので下諏訪町窓ヶ丘に上野広一画伯を訪い、共に諏訪市片倉郷土館を見る。今夕、長男吉久雄が長野師範学校から帰省する。これでようやく人手が揃った。

八月一日 快晴。人夫は両人とも来ない。自分は上野画伯とともに、日下大山史前学研究所が発掘している山梨県總坂村遺跡の見学に出掛ける。それで、吉久雄・長久・虎次の三人兄弟のみで桑株を掘り抜く。

八月二日 快晴。養蚕はようやく上籠に入つて忙しい。人夫は誰も来ない。自分は吉久雄と葬式の手伝いに隣家へ行く。長久・虎次の両人だけ作業に上る。午前九時矢島數由氏が測図のため来られたので、自分も共に上り、第三址を実測して午後一時帰宅。

八月三日 晴。今日も人夫は来ない。吉久雄・長久・虎次と上り、午前八時現場着。小平初人氏第二九五八号の桑株を掘りこいで発掘し調査する。

前回の発掘に南接し、北から幅六米の広さに桑株を掘りこぎ、南の端に達し、午後はこれにトレンチを設け、調査して見たが、地下三〇厘米に全面的に亘って土器破片を包含するのみで、遂に住居址は発見されなかつた。こ

れで、この遺跡はここが西の端で、住居址も疎らであることが判明した。

それから第一九址を埋め立て、あとかたづけをしていると、突然大夕立が襲来して腹まで濡れ、午後三時帰宅する。第二九五八号の畠地から打石斧多数を得る。

八月五日 昨日の夕立に遇つて、着物は全部濡れてしまった。生憎着換がないので乾くまで待つ。

午前九時諏訪中学校の科学部員が遺跡の実地調査に来たので案内する。吉久雄・長久・虎次の三人も行く。第二〇址を清掃する。午後三時、矢島奏氏が東の松林の梢に上つてこれを撮影する。午後四時帰宅。

八月六日 薄曇 微風あり。

今日も人夫は来ない。吉久雄・長久・虎次・昭久の四人兄弟を連れて上り、午前七時現場へ着く。

今日から東の烟にかかる。前回に北接して、西の端から六米の幅で、東へ二〇米の間の柔株を掘りこいで、午前十一時昼飯をとる。

午後この掘りこいだ所に、北の境に幅一米のトレンチを作ると、西から三米で黒土が深い。この深い黒土層は東へ六米続く。これは深さ八八釐で、住居址の床となり、その中央に炉址らしい石囲みがある。その傍に土器の口縁部が伏せてある。住居址である。

このトレンチを東に延長すること一〇メートルで、再び黒土が深く、木炭屑がとび八八釐の深さに配石を見る。ここにも住居址が予想された。午後五時帰宅する。

八月七日 ようやく天候も定まり暑気が強い。

養蚕が上築したので小平幸衛・大和製糸場の両氏が来る。それに吉久雄・長久・昭久を加えて現場は急に賑わう。お蔭で作業が大に進歩する。

午後は総掘りで第二九六三号の東南隅の住居址を発掘する。黒土深く、それに、南道路面の下にかかり、路面

の発掘は区の許可を要するので、この発掘は許可のあるまで一時中止する。

八月八日 快晴。下諏訪宮ヶ丘から上野画伯が来山された。第二〇住居址に東接する小平重氏所有の松林中、道沿いの地点に住居址を発見し、これを北方の道路に向か発掘して、多数の土器破片と大きな蜂の巣石一個を得る。小平幸衛・大和製陶一両氏と長久が手伝う。

八月九日 快晴。今日から学校が始まった。自分は登校し、午後、泉野学校職員一〇名を現地へ案内する。

吉久雄、長久の両名が東へ一〇米桑株を掘りこぐ。

八月十日（日）午前七時、吉久雄・長久・虎次の三人を連れて現場着。大和製陶一氏また遅れ午前八時来る。人夫多勢のため、桑株の掘りこぎが大いに進捗する。製陶一氏の掘りこいた所に大盤石がある。午後五時帰宅。八月十一日（月）曇。自分は、授業のため登校する。吉久雄・長久・虎次と大和製陶一氏の四名で終日掘りこぐ。作業ようやく進捗し、あと一日で完了するとのこと。

八月十二日 自分は登校、吉久雄・長久・虎次とそれに、小平幸衛・大和製陶一の両氏を加えて五名で、終日掘りこぎ、準備作業はようやく本日を以て完了した。

八月十四日 今日から三日間、この地方の孟蘭盆会で学校は休業となつたが、引続きの驟雨で発掘は出来なかつた。殊に十五日には、上野画伯が同夫人とともに上られたが、驟雨のため空しく戻られた。

八月十七日（日）ようやく快晴。上野画伯が朝八時半のバスで来られた。人夫は繩搔きで誰も見えない。長久と昭久に手伝わせて、第二〇址に東接する住居址を続掘する。多孔石と完形筒形土器一点を得た。本住居址は、やはり北路面の下にかかるので、その完掘は翌年に残し、埋没しておく。

八月二十日 今日から二十七日まで、吉久雄・長久・虎次の兄弟で掘りこんだ桑株を全部片付ける。

九月三日 発掘の手伝いに來ていた長久が、今日茨城へ戻る。

十月五日 今日から十三日まで九日間を費して、小平幸衛・牛尼省三の両氏で、全区域に亘り、幅七〇畳のトレンチ一〇本を四米の間隔に設ける。

十月十七日 神嘗祭。休日の上快晴に恵まれ、小平幸衛・牛尼省三の両氏とともに、これらのトレンチを調査し、黒土層の深い箇所を四二ヶ所得た。これらは、住居址の所在箇所であろうが、同一の住居址に属するものと思われるものを控除しても、約三八ヶ所の住居址が推定し得られる。最後に、最北のトレンチの住居址推定地点から北に向か、中間トレンチを設け、これが住居址の完全なる存在地点であることを確認した。なおこの床上から珪岩無柄石鐵の大形のもの一点を得た。

十月二十一日 快晴。午後、矢島奏氏とともに現場に行き、同氏により発掘地域と尖石全景が撮影される。今年はこれまで作業を終る。

昭和十七年度の発掘

発掘の日録

四月五日（日）昨日までは梅が咲くかと思われた暖かな日和も、今日は朝からの薄曇り、午後からは強烈な南風となる。

今日から今年の発掘調査に着手。小平幸衛氏と時局柄魚行商を廃止した師岡義一氏の兩人を常備とし、これに目下学年末休業中の三人兄弟吉久雄・虎次・昭久に手伝わせる。

まず前年発掘のためトレーナーを設けておいた畠地第二九六三号の南西隅の推定住居址につき、第一基本トレーナーから北へ中間トレーナーを作り、北壁を探す。黒土層深さ一米で床となり、北六米で壁となる。更にこの中間トレーナーから、中央を東に向けトレーナーを作り、壁を探るが六米を過ぎても壁に達しない。黒土の所々に浮石があり、また床に鉄平石の小さな盤石がある。その傍に土器が横に倒れてある。これを第二一址とする。

あまり南風が烈しいので発掘した穴の底で昼飯を摂る。風に吹き上げられた土埃が飯に振りかかり、飯はたちまち胡麻塙をかけたようになつた。午後三時終了とする。

四月十二日（日）小平幸衛氏は都合が悪くて見えない。師岡義一氏とともに上る。八時着。第二一址の堆土を除去し、東北の一隅を残してほぼ完掘した。作業は至って單調、まだ寒氣が強い。雨後とて土も重い。

四月二十二日 今日は村社祭にて休業につき発掘。人夫は小平幸衛・師岡義一の両氏。岡谷から高橋巳喜之助氏が午前八時半のバスで来る。共にすぐ現地に向う。

今日は、この畠の最北端にある唯一の推定住居址を発掘する。ここは昨年発掘し、遺物も出土し、床も発見されている。まず東北の基本トレンチから北に向けてトレンチを作る。黒土層深く一・一〇メートルで床に達し、床は堅く、手持よく堆土が剥がれる。北二メートルで石畳炉址を発見する。炉址は扁平石八個で囲み、直徑一メートルに及ぶ方形の大なるものであった。この住居址の西側の半分を排土し、午後三時に引き上げる。矢島泰氏が来て、現況を撮影する。

野木瓜は美しく咲いていたが、強烈な西風で雲脚が迅く、それに時々粉雪をとばして寒気きびしく、一同震え上る。

四月二十五日 快晴。靖國神社の御親拝で学校は休業。小平幸衛、師岡義一両氏と午前八時現場着。昨日発掘しかけた北側住居址（第三一址）につき東半分を排土する。ここは黒土が最も深く一・一〇メートルに及ぶ（これはこの地点がこの台地の北の傾斜面に位置するからである）。従つてその排土作業にはなかなか骨が折れる。住居址外に排除された土は小山のように積る。まず排土しつつ南の壁を東に追う。それはややあって北に廻る。それは直壁で壁縫に一条の溝を伴う。これを北に追うと畠の畦際まで来る。畠の北は空堀に臨む。この空堀を掘る時に住居址の北側は既に崩されたのである。よって畦際で発掘を止める。即ち北三分の一は残して、これを完掘した。

次に床を清掃すると、東側の周溝深くから立派な完形磨石斧一点が出土した。定めし貴重品としてここに隠匿され、それが今日発掘されたのである。床上にはこれ以外何も遺存しなかつた。午後四時帰宅。
帰途、南作場道南側の小平喜代士氏所有桑畠でやや完形に近い滑石块状耳飾一点を表面採集した。珍しい収穫である。

四月二十六日（日）快晴の日和に誘われてか、鳶が頻りに高音を張る。

文部省宗教局史跡保存課斎藤忠氏は当遺跡調査のため昨二十五日入諏、上諏訪市に一泊され、今朝八時半のバ

スで来山された。これを迎えて共に現場に至る。人夫は小平幸衛・師岡義一の両氏。

第二一址の東北方に接して試掘すると、黒土が深く直ちに床に達し、住居址の存在が予想されたので、この地点を四方に掘り拡げる。東壁が容易に発見され、これを北に追うと中央に炉址がある。これを第二二址とする。炉址は、その東のみに縁石を据えた竪穴炉である。この縁石の傍から抉れのある打石斧一点が出る。午後三時切り上げる。

斎藤氏は同夜当区に一泊される。

四月二十七日 快晴。斎藤氏の臨地を待つて続掘する。人夫は小平幸衛・師岡義一の両氏。

前日発掘した炉址の北側に、木葉状にまくれた一大自然石がある。内面に研磨の痕が認められるから、多分砥石として使用されたものであろう。それに西接して土器の半個体のものが横に倒れている。次に炉の南を床に従つて追跡すると、床上三〇畳の黒土層中に土器が包含されており、忽ち石油箱を半分ほど満たす。中に僅かに底部を欠く完形品もあつた。これらを採集しつつ拂土し、床を清掃する。この住居址に対し、他の住居址が南から喰い込んでいるらしい。そして、この土器層の下が焼けていて、これが南から喰い込んで来た住居址の地床と見られた。

次に、この床を西に追つて拂土すると西接する第二一址との間に壁がなく、両住居址が連続した。そして、西住居址の方が東住居址よりも床が一段低く一五畳ほど差がある。しかも、東住居址の西の一部分は西住居址の東部を埋立てて拡張したものらしく、赤土と黒土とが混交して、西の床に



図 26 尖石第二二住居址免見の大砥石

張り出してあつた。東住居址を第二三址とする。余り住居址が重複し、錯雜を極めていたので、完掘するに至らず、午後四時引き上げる。斎藤氏重ねて一泊せらる。

四月二十八日 雨。村社祭にて休業。雨を衝いて斎藤氏を案内して北山村上之段遺跡へ行く。調査の上、午後一時のバスで諏訪市に至り片倉郷土館を検分し、同氏の帰京を送る。

五月一日 村社祭にて休業。

小平幸衛・師岡義一の両氏とともに、朝から前日来の住居址を完掘すべく努める。

南はまだ壁に至らないので、路際までの芝生を切り取って排土し拡張する。意外の難作業で労力と時間を要した。西の住居址の南側には土器破片が堆積している。これを除去すると、西の住居址にも他の住居址が南から喰い込んでいる。後者を第二四址とする。

昼頃から俄雨になつたので、急ぎ切り上げて戻る。まだ完掘には至らない。

五月十日（日）快晴。昨日、東京帝國大学理学部八幡一郎講師、東亞考古學會島村孝三郎主事の両氏が入顔され、共に立科山小齊温泉へ一泊し、今早朝尖石遺跡を見学の上、夕頃退去される。

矢島敷由氏この連接住居址を実測する。

五月十七日（日）人夫師岡義一氏と発掘。薄曇りで少々寒いくらいだ。後には晴れるかと思われたが、だんだん雲が垂れて午後二時頃から、遂に大粒の雨をこぼす。それでも盛りの野木瓜に郭公が頻りと呼びかける。

今日は前日來発掘して来たこれらの連続した住居址のうち、第二二址につき、その北側を整理する。南側は既に実測されたので、東の住居址の北側の土を採つて、この床の中央に積む。こうして容易に北壁が発見された。壁は一条の溝を内周するが、壁も溝も北側の中央で終り、それから西は、この住居址の堅い床がなお北に延長する。この住居址に重複し、北にもまた住居址があるらしい。この溝から凹石一点出土する。

次に西の住居址の北壁を追いながら発掘し、その排土を住居址の中央に積む。壁裾にこの住居址に属する北西隅の主柱址らしい穴がある。穴から粘土紐文の土器破片が出る。ようやく北壁は完掘されたが溝はない。

十時小寒い雲行きを眺め、花野木瓜の燃える芝生で、水筒の水に震えながら昼飯を摂る。食後の休みも寒くてジッとしていられない。直ちに作業を続ける。

東西両住居址の境目をなす溝を浚いながら北に進むと、東の床は西の床から一五釐ほど高い。

この壁のはば中央から棒状鉄平石が出る。次いで黒土の中に小形碗形土器完形品一点が横に倒れている。ここに東西に連続する両住居址は一応清掃された。西の住居址を第二一址、東を第三二址とする。

午後は第二二址の東へ試掘する。三米で地下三〇釐に灰層がある。灰層は厚さ一〇釐、この下に盤石が二個ある。なお土器破片も黒曜石破片も頻りに出土し、中に完形石鏡が一点ある。ここは、焚火した址であろうか。それとも細工所であろうか。この下は木炭屑や黒曜石の残屑を含んだ黒土層で、それがどこまでも深く広く続く。この土をようやく出すと直径一・六〇米、深さ一米の直壁平底的一大穴となる。底に下つてやや狭く段を作る。何の遺址であろうか。この坑に対し柱の穴があるであろうか。一応この周囲を調査する必要を認めた。が、午後二時に二度目の昼飯を摂っていると、危かつた天候が遂に雨となつたので、急ぎ道具をまとめて引き上げる。

五月二十四日（日）薄曇。野木瓜は終りを告げ、鬼躑躅が咲み初め、尖石の高い柏に郭公が来て頻りに啼く。今日は師岡義一氏とともに第二一址、第二二址、第二三址、第二四址の連続する四住居址を整理しつつ、矢島數由氏の実測の手伝いをする。実測完了。

五月二十九日 快晴。早朝五時、台灣から帰省された小平長重氏を案内する。

六月六日（土）天候爽快。今日から向う一週間、田植休業となつた。充分発掘できる。師岡義一氏も焼いて手伝ってくれると言う。午前七時現場着。

藤は既に散り際、鬼郎彌が咲き初めて、新緑の唐松林を点綴する。鶯は老いたが、なお囁音が高い。これに郭公が和し、また時鳥が時々哀調を絞る。いつもながら、この時期はこの山麓の樂天地となる。

第二四址の北側の床、西半部分がそのまま北へ延長するから、この住居址はなお北に發展するのであろうか。それとも他の住居址がこれに北接するのであろうか。ともかくもこの床を北に追跡する。床の上の黒土層實に一米、それにこの住居址の排土をその上に積んであるので、黒土の高さは床から一・五〇米に及んでいる。この層に幅二米の掘割りを作り北に進む。一人が掘れば、他の一人がこの排土を畚に運び込み南の住居址の床へ曳く。こうして床を追求する。床は垣々と果しなく行く。ようやく北壁に達した。壁に近く炉址もある。ここも他の住居址である。この南北に作った掘割は、この住居址(第三五址)の中央らしい。

午後この掘割の東側を排土し、東二米で壁を得た。これに溝が内周する。この住居址の床は、その東の部分が南接する第二一址の床から一五釐高いが、西の部分はそのまま水平に連接する。午後五時作業を打ち切る。

今日の出土品は、大形粗製石匙一点が床の南から、土器破片の中に木葉の押型文のある底部破片が炉の東側から黒曜石残屑が所々から、中に石鏃一点と石小刀一点が交じっていた。

六月七日 晴。朝から雲行きが怪しい、時々雨粒をこぼし午後二時頃から遂に小雨となる。

師岡氏と七時着。小寒いので直ちに作業に着手。前日掘りかけた第二五址の西半分に亘る高さ一・五〇米の堆土を昨日と同じく一人が畚に入れ他の一人が南の住居址に曳く。実に骨が折れて、單調で、面白味がない。それでもようやく午後二時に至つて完了した。清掃すると、床の南に細長い配石があり、この辺から石鏃一点・石小刀一点とともに、黒曜石細屑が頻りに出る。凹石一点・打石斧二点、それに疊に打痕のある長さ五〇釐の角形鉄平石も出た。この配石の所は細工場であろうか、床も堅く踏み固められてあつた。西側には壁も溝もない。遂に雨となつたので帰宅する。

六月八日 昨日の雨に続き今朝は小雨だ。然し霧雨模様で、今に晴れるだろうと待つ。午前八時ようやく止んだので師岡氏を促し出掛ける。午前九時現場到着。

第二五址から北へ幅二米、深さ赤土層まで六〇釐の掘割りを設けて進む。黒土に木炭層が散在する。三米で右折し、東に掘る。木炭層はあるが、赤土の面が自然のままで、ここには住居址がないらしい。中止して昼飯とする。

午後は南作場道に沿う第一トレンチを東に探る。第二六址から東一〇米に来ると、黒土が深く六五釐、床らしい赤土層に達す。この赤土面は從來の住居址の床面に比較して地表面から浅いが、面が堅く滑らかに、堆土の剥げ具合から住居址の床らしいので、この面を追って路側から北へ幅二米に掘り削る。床に直径二〇釐位の円形な柱址らしい穴がある。北二メートルで、その方向を東に転進する。配石がある。僅かで黒土層中に赤い焼灰の層を認められる。これは、厚さ三〇釐が一メートル平方の広範囲に亘る。しかもこの下に炉址があるらしい。この灰層をそのままに残し、周囲を掘り下げる。赤土の面となり、それに横円形の豎穴が掘り込んであるらしい。こういう灰の堆積層は珍しい。土器焼成址であろうか。この灰層の東側に盤石二個が豎に掘り込んである。この地点から更に南へ拡げると、道芝の下にかけ盤石を敷き並べてある。炉址らしい。石畳の中には深く黒土が喰い込んでいる。

午後五時引き上げる。空はよく晴れて、明日も上天氣らしい。

六月九日 早晩起床して見ると空は晴れているが、西守屋山頂の空に筋雲が集中して低気圧が発生している。天気が変化するかも知れないと心配したが、その通り、終日薄曇の天候となり、午後は風さえ出て寒い。

午前七時師岡義一氏と現場着。前日発見した住居址を続掘する。灰層の両側の黒土を排しつつ東へ進む。一・五〇メートルで東壁となる。これを北に追って排土し北の範囲がきまる。次に南方の石畳から道芝を切って発掘する。完全な箱形石畳の炉址となり炉底は焼けて赤い。この炉底に円形の直穴がある。これは第一次の炉址を利用し柱

を立て、この上に第二次の住居を構成したものであろう。灰層の地点は撮影して発掘調査することとして、ここにこの住居址が完掘された。第二六址とする。

今日は少々早いが、味噌豆を煮るので手伝いのため、午後四時引き上げる。

六月十日 快晴。午後暴雨が立科山を包んだが、忽ちにして晴れた。前の狭間田で水を輝やかしながら田植の最中で忙しい。師岡義一氏と七時十五分現場着。

第二五址の東から第二基本トレンチにつき調査したが、住居址が発見されない。五米で止む。次に、第二〇址の北を作場道に沿つて調査する。黒土が深く、住居址が予想される(第二九址)。二米の幅を耕土しつつ進む。深さ六〇厘米で床となり、六米で東の壁となり、壁面に溝がめぐっている。この壁を北に追うと僅かで壁は西に廻るらしい。北側を耕土して北壁を探るがまだ発見されない。昼飯を摂る。

午後第二六址を清掃しつつ矢島奏氏の来着を待つ。午後三時同氏に第二六址を撮影して貰う。次にこの灰層を除くと、下に土器がある。その下に盤石があり、盤石の下に再び同一容器の土器破片が石の上にある。石は立つたのが二個と敷いたのが三個ある。すべてこれらの遺存状態を写真三枚に納める。これら同一容器の破片の他、何もない。

今日も味噌豆を煮るので、午後四時帰宅。

六月十一日 快晴。午前七時半、師岡義一氏と着く。

今日は、第二〇址の北側住居址を発掘する。前日に続き、この住居址の東壁を北に折れて、北壁を探りながら耕土しつつ西する。ようやく北側の耕土を終了する。床は堅い。その中央に矩形竪穴の大炉址がある。北側に二連の柱穴がある。これによるとこの住居址は北に拡張されたらしい。土器破片が出土したのみで、床には何も遺存されなかつた。この住居址の南半分は路敷下にかかるので、ここは次の発掘に譲り、一応北半分を清掃し、午



前十時屋敷にする
午後は第一址に北接する作場道の南側を発掘する。ここは昭和十六年に
東伏見氏の発見者より

調査して、地中深く赤土層の基盤から土器を掘ったので、既に住居址が予想される。烟に沿って路の芝生を一米切り取る。六〇畳下に小石が並列する。順次清掃すると、一大鉄平石一枚を中心平に敷き、その周間に小石を並列してこれを固む。祭祀の址でもあるか。敷石の上に黒曜石無柄石鏡一点、東側即ち背後の黒土層から小形石匙一点が出る。

これに西接して他の敷石遺構がある。ここは嘗て昭和十一年東伏見氏が発見された所である。更に、この南側に切斷した土台石大の石が乱雑に重ねてある。この積石を除くと床は焼け赤い。炉址らしい。これらの積石は炉縁石らしいが、或はこの炉のものかもしれない。そうとすると、この炉は、いつ取り壊されたものであろうか。この炉址の南に接して前年土器を発掘した穴がある。更に、南に小形土器を埋没してある。次いで南東隅と南西隅の兩主柱の穴が発見された。この間隔僅かに三米、規模の小さいこの住居址が第一址に北接していた。

作業を続けたので全く疲れた。整理は明日に譲り、午後四時帰宅する。

六月十二日 田植休みもあと一日だけになった。一応発掘地を整理して置かなければならぬ。幸い今日も空は晴れに快晴である。午前七時師岡氏と現場着。

今日は第一址に北接する住居址の整理をする。まず床の南側を清掃すると、厚さ僅かに五種の壁一重で第一址に隣接する。この壁を越せば第一址の構があり第一址の床は本址の床より一段低い。次に東側を調べると敷石遺構の東側の床は、その西側の凹凸のある床と違って平に堅い。それから僅かの間隔で東の壁となり、その側には

溝がめぐる。ここから小形半磨石斧一点が出土し、また黒曜石の小残屑が頻出する。北側はまだ壁に達しない。更に七〇畳の幅に道芝を切り取って排土し、ようやく東北隅の主柱址の穴を発見した。これから北壁を追って西側へ一段高い敷石遺構がある。即ち中央に土器を発掘した穴があり、これを廻って十数個の小形扁平石を座席のように敷き詰めてある。北西隅には主柱址の穴がない。ここから床が一段高くなる。清掃をする。

矢島教由氏午前九時着。午前に第四址に北接する第二六址を測図し、午後本住居址を測図する。時に、黒雲が凄じい勢で東八ヶ岳を巻き、すぐにも雷雨となる様子を示したので、家の遠い矢島氏は急ぎ帰去された。午後二時。然し天候はそのまま落ちていたので作業を続ける。第二六址がかかる道路敷地面だけを埋没し復旧する。午後四時半矢島奏氏来着して本住居址を撮影する。これを第二八址とする。これも道路敷地の部分だけ埋立てる、時に午後六時。道具をリヤカーに乗せ、疲労しきつて重い土まみれの体を曳きずつて帰宅。

この一週間の田植休業中に人夫一人を相手に第二六・二七・二八の三住居址を発掘し、相当な成績を挙げた。これも快晴続々の天候のお蔭である。

六月二十八日 梅雨期に拾った快晴の日曜日。師岡義一氏を促し、喜び勇んで発掘に上る。午前七時着。雨後の土いきれで、体が重く暑い。

今日は第二四址の東に接する大豎穴を清掃する。この豎穴は、地下五五畳の赤土層に口径一・六〇米、深さ一米、平面円形、直壁平底に掘り込んだ巨大のものである。その目的はなんであろうか、これがもし貯藏庫なら上家を架けて、この周囲に柱の穴がある筈である。

そこでその周囲二米に亘り黒土を拂して調査する。果して東北隅二米に、口径四九畳、深さ二五畳の円形直穴を発見する。柱址の穴であろう。次に南西隅にもこれを得た。これも口径四九畳深さ二五畳のものである。西北隅にも一つあったが、これは赤土に僅か掘り込んだ浅いものであった。南東隅一ヵ所は不明であった。

午後は第二五址の床を清掃する。この住居址の西壁がまだ予想の位置に発見されない。西へ一米掘り拡げたが壁がない。赤土面も柔らかで床とは思われない。この辺が西の境界ではあるまいか、その範囲が確定しない。

次に炉址に西接して竪穴がある。直徑八五厘米、深さ六〇厘米、直壁平底の大なるものである。炭屑のとんだ黒土で埋まっている。東北隅にも竪穴がある。口徑七五厘米の直壁で、深さは一・二〇メートルに至るも底にならない。今まで深い穴である。この狭く深い直穴は、どんな方法で掘り込まれたのであろうか。我らの手は、この底まで届かない。従つて、直立したままスコップを押し込んで儘かずつ黒土を出すより仕方がなかった。この土中で屈んで作業するには少なくとも直径一メートルの空間を要する。で、この大きさの竪穴をこの深さに掘るには、我々より体格が矮小でなければならぬ。石器時代人の体軀は我らより矮小であったのであろうか。

また今日では発掘のため便利な鉄用具が準備されているが、それでも、これだけの穴を掘るには相当の労力とかなりの根気が必要である。まして道具の充分でない未開の石器時代人は、どんな方法で作業したか知らないがその根気の強さは想像される。

諫訪市郷土主幹今井默天氏、現場視察のため来山される。

七月五日（日）快晴。発掘の予定であったが、人夫が都合出来なかつたので中止、矢島數由氏一人で上り、第二五址・第二大址を実測して、午後二時下山する。

七月二十四日 次男長久、茨城から発掘手伝いのため到着。

七月二十五日 快晴。暑氣強く、夕立模様であったが、遂に降らなかつた。今日から八月九日まで十五日間、蚕休みとなり、連日発掘に専念し得られる。

長久と午前八時現場着。朝曇が次第に剥げて暑さが強くなる。

第六号トレチを西の端から幅一・五〇メートルに拡張し、調査しながら東に進む。二メートルで黒土が深く、炭屑がと

び、土器破片も二、三片出土する。深さ五〇釐に配石があるが、赤土面は柔らかくて床ちしくない。これを四方に拡張したが、遂に住居址にはならなかつた。

午前十時昼飯の後、午後一時まで作業を続けたが、初日とて休が労働に慣れない。疲労が激しいので引き上げる。第六トレンチの拡張作業延長一〇米。

本年発掘予定地のこの畑は、僅かの間に雑草が繁茂し荒野となつた。これを今夏中に猪掘し、調査の上、畑地に復して地主に返却しなければならない、実に身に余る大仕事である。

七月二十六日（日）快晴。早晩の大気は澄んで、この高原へは既に、徐ろに、秋の迫る気配が感じられる。三男の中学生虎次が休日なので長久と三人で午前八時半現場着。

前日に続いて第六トレンチを調査する。配石の東一米に円形の穴があり、住居址が予想されたが、依然赤土の面が床とも思われないし、溝も発見されない。出土品も皆無でいさきか徒労の形で、午後三時引き上げる。

七月二十八日 天候は快晴であつたが、親戚に不幸があつたため発掘は取り止める。

七月二十九日 快晴。朝から照りつけ暑い。連日の旱天で、道路は全く乾き上がり、土埃がひどい。これを八ヶ嶽の山腹から王子製紙株式会社のトラックが材木を運搬して疾走する。それに追い越されるたびに、土煙を頭からかぶる。

四男の中学生昭久が今日から夏休になつたので、長久とともに手伝わせる。午前七時着、第三トレンチを幅二米に掘り下げ、その底を浚え、調査しつつ東に進む。西の境界から東三米で黒土層がやや深く、住居址かと思つて掘り下げる。それは長軸東西一・二〇米、短軸南北七〇釐、深さ三〇釐、直壁平底に平面橢円形の浅い竪穴となる。これから東二米に、再び同形・同大・同深の竪穴がある。

ことのほか暑さ強く耐えかねる。午後三時切り上げ、横堰で水浴して土埃の体を洗う。爽快を極め蘇生の思い

がある。

今日も出土品皆無、午前陸軍士官学校教授秋岡武次郎氏が家族とともに現場を視察される。

七月三十日 晴 炎暑。午前八時現場着。長久・昭久と灼熱せる太陽に照らされて作業、連日の晴天で大地は乾き切っている。そしてこれが夏の太陽に灼け、裸足で踏めば裸足裏が焼けて痛い。静かに歩むことも出来ない。従つて炎天下の作業は長く続けられない。一時間働いては、灼けた体軀を松林に休ませ、また働くという有様である。

第三トレンチを前日に引き東に渡る。前日の楕円形の浅い豎穴から東九・五〇米再び黒土が深くなる。発掘するところも同形の即ち長軸東西一・五〇米、短軸南北六五頃、深さ二〇頃の浅い楕円形の豎穴であった。なお、これより東二・五〇米再び黒土の深い所がある。今度こそ住居址であろうと喜び疲労も忘れて発掘したが、これも豎穴で口径八五頃、深さ三五頃の直壁平底、円形のものであった。この豎穴内の上層は黒土に赤土塊が交じつていたが下層は全くの黒土であった。これから南へ向けトレンチを設け調査した。赤土層面は柔らかく床らしくないので、僅かにして止む。午後四時切り上げて横堀で水浴する。極めて爽快、帰途立が少しくあつたが明日も天気らしい。

七月三十一日 快晴。午前四時起床、朝霧が濃く四辺は墨絵のようである。が、その切れ間、切れ間から紺碧の空が覗いて、やがての快晴を思わせる。七時現場着、霧は全く晴れて、夏鶯が美しく啼く、杜鵑がまたこれに和す。長久と午後には、昨日長野から帰省した長男吉久雄と昭久とが手伝う。



插圖 28 災害中発掘の宮原一家

第三基本トレンチを統いて浚う。前発掘の円形竪穴の東北隅に、口径三八釐、深さ二二釐の円形の小穴がある。柱址の穴であろうか、更に、東五米に口径一米の大竪穴があり、統いて東三米に、口径五四釐、深さ二一釐の穴がある。このトレンチの北側の辺は黒土が深く、これに、木炭屑や黒曜石の残屑が非常に交じる。土器破片一二、三片も出土する。住居址であろうか。

午後五時作業を中止し、連日の早天で乏しくなった堰の水で土埃を洗い落す。それでも爽快を覚える。そして赤い夕陽に照らされて、土埃の深い道を帰る。

今日は、トレンチの延長一〇米を浚つたが、これらの竪穴のほかには、めぼしい出土品はなかった。

八月一日 快晴。午前七時着 今日から、吉久雄・長久・虎次・昭久の四人兄弟が出揃って手伝う。引き続き第三トレンチを東に浚う。前日から東三米に竪穴がある。次いでその東五米にも再び直径一米の円形竪穴があつた。実に竪穴の連続である。

快晴の天候は午後から夕立模様となり、忽ち黒雲が八ヶ岳に湧き、紫電が閃き、今にも豪雨となりそうな物凄い天候となつたが、遂に夕立にはならなかつた。降り足らずに暑さ一層強烈となる。

第二九址の東の広い場所は未調査である。これに南北に亘るトレンチを作る。作場道に沿い黒土が深く、住居址が予想される。果してこの路面下六〇釐に口径一米、巨大な方形竪穴石臼炉址を発見した。土器破片や打石斧二点を伴出する。この炉址を中心にして東西三・五〇メートル、南北二・五〇メートルを発掘し、第二九址に東接する住居址を確認したが、この整理は後日に譲る。次に第三トレンチを更に東に浚い、七メートルで黒土が非常に深い。柱址らしい穴がある。

午後四時大粒の雨が落ちて來たので、忽に埃の体を堰水で洗い、帰途に着く。

八月二日 快晴。兄第四人を連れて出動する。午後から小平幸衛氏も手伝いに来る。また下諏訪富ヶ丘から避

暑中の上野画伯が今夏初めて上る。

前日に続き第三トレンチを東一七メートルで終点となる。この東端は黒土の深さ一メートルに及び、土器破片も多少包含されていたが、住居址は遂に発見されなかつた。

午後から第四基本トレンチの調査に移る。その西端は既に発掘してある。これから東一〇メートル、またまた黒土が深くなり、これも竪穴となる。午後をこの穴を浚うのに費した。黒曜石石錐一点出土、午後四時帰宅。

八月三日 快晴 暑氣強し。兄弟四人と小平幸衛氏とともに午前七時現場着。

第四基本トレンチを掘る。前日の竪穴から東二〇メートル、ようやく三個の盤石を疊んだ箇所に突き当る。この付近黒土深くこれに黒曜石残屑や木炭屑がとんでも住居址らしい。これを北に追つて第五トレンチと連絡させる。再び盤石が土器破片と出土したので、この両トレンチの間を西に掘進する。五個の盤石がほぼ二・五〇メートルの等間隔に弧を描いている。環状列石らしい、珍しい遺構である。この調査は明日に譲つて午後五時切り上げる。

帰途、夕立が北から横なぐりに急襲して、忽ち瞬まで漏れる。このため庭にある梅の古木が途中から裂けて屋根廻に乗りかかっていた。帰宅した時は、再び快晴となる。

八月四日 終日薄曇り。薄曇のため作業が至極楽であつた。

兄弟四人と小平幸衛氏とともに午前七時着。前日発掘した環状列石らしい遺址の周囲を調査したが、これら四個の扁平石よりほかには何もなかつた。これに北接する竪穴を浚つて、直径一メートル、深さまた一メートルの円形竪穴となる。次に第四トレンチを東に進み、六メートル再び穴がある。この周囲を整理して竪穴五個連接する。

午後五時終業帰宅。

八月五日 快晴。大山柏氏、明日、再度当遺跡発掘のため今日入譲の予定につき、発掘は中止し、早朝、小平幸衛氏と譲訪市に迎える。

八月六日 朝霧る、少しく雨降る。せつかくの今日をと恨む、やがて雲はなお重いが雨は止む。

昨夜、諏訪市片倉別館に一泊された大山氏、及び大山史前学研究所員の池下啓介・竹下次作・服部氏等一行、それに郷土館員内田利男氏・上野画伯等の六氏、午前九時自動車で現場到着。現地には、既に兄弟四人と小平幸衛・矢島數由・矢島奏等の諸氏が待っている。

大山氏を中心に一同第二八・第二九両址を発掘し、池上氏は小平幸衛氏と竪穴群を調査する。

第二九址の方は、まず東壁を探り当て、それを北に追い北壁を伝って西する。この北壁の途中に完形土器が横倒れになつていて、西は第二八址に連接して壁がない。そして、この住居址の床は、西接第二八址の床より二〇釐高い。一方池上氏等が発掘する竪穴は、それが連接し重複していく、容易にその全貌を明らかにするに至らない。

一同南の松林に昼飯を摂る。この頃から一時小康を保つた天候は、再び陥悪となり、雨さえ催して来たので急に作業を中止し、大山氏一行は待たせてあった自動車で諏訪市へ下り、片倉別館に宿泊された。

八月七日 大山氏一行は午前十時発の列車で帰京される。発掘を中止し、諏訪市に下り、見送る。

八月八日 時々雨。文部省宗教局斎藤忠・長野県属石井進の両氏、尖石・上ノ段両遺跡調査のため、登山される。本日は、上ノ段遺跡へ案内する。

八月九日 今日も悪天候で昨日からの雨に草叢は露深い。

今日は、尖石遺跡を調査される。地元豊平村吏員宮坂俊行・南大塩区長小平武雄・豊平国民学校長五味元喜氏等これに協力する。斎藤氏等は、午前中にこの遺跡の調査を終了し、午後は次の調査地徳高に向う。

夏休みは本日にて終了し、明日から登校しなければならないので、発掘は日曜日その他の休日のみとする。

八月十三日 蘭塙きにて臨時休業。小平幸衛氏と第二八址の床の周囲を整理し清掃する。出土品なし、午後三

時帰宅、高原は真夏の風既に澄みて涼しい。

八月十四日 快晴。当地は今日から三日間孟蘭盆会にて学校は臨時休業となる。

小平幸衛氏と長久・虎次とともに環状列石遺構を北に拡張する。
午後三時帰宅。

八月十五日 晴。午前九時、吉久雄・昭久とともに現地着。泉野学校訓導菅沢一二三氏も手伝いに来てくる。第二八址を発掘整理する。矢島数由氏は環状列石遺構と第二八址を実測し、孟蘭盆会につき早々仕事を切り上げ、午後三時、共に帰宅する。

八月十六日 快晴。暑さきびしい。東京帝大理学部八幡一郎講師踏査のため午前五時来着する。小平幸衛氏兄弟四人と共々午前八時現場着。



29 図 環状列石

翌穴群址を発掘し調査する。既に竪穴八カ所が発見されているが、これを北に拡張し、北接してなお二ヵ所を発掘する。
八月十七日 雨模様となつたが遂に降らなかつた。

自分は今日から始業となつたので登校する。然し、妻は、未発掘地に雑草が忽ち丈と生い茂り、実がこぼれては耕作にさし障るというのを聞いて、これを心配し、兄弟三人と小平幸衛氏とともに草取りをする。

八月十八日 自分は登校、兄弟三人と小平幸衛氏とて発掘住居址を清掃する。夕立にて午後二時帰宅。

八月十九日 引続き雨模様であったが遂に降らなかつた。日本銀行副総裁渋沢敬三子爵一行が、今日発掘地を

踏査されるとのことで、自分は一時間授業してから矢島數由・小平幸衛氏及び兄弟四人と現地にて待つ。

午前十一時、一行一〇名、貴族院議員片倉兼太郎氏の案内にて自動車により到着。次いで東京帝國大学文学部長今井登志喜氏も駆けつけられたが、共に、一時間に亘り全遺跡を踏査される。これより一行は諫訪湖に至り、湖中の曾根遺跡を調査された。自分もこれに参加する。

八月二十日 快晴。吉久雄・長久、虎次と小平幸衛氏にて第二八・二九両址を埋めて南作場道を復旧する。自分は、放課後午後三時現地に至り、共に環状列石址中、その中央にある配石を除去して、その下を発掘し調査する。すると、配石の下には、一大豊穴のあることを確かめた。完掘は後日のこととし、午後五時帰宅。

八月二十一日 快晴。吉久雄・長久と小平幸衛氏にて作業、第九基本トレンチを調査し、黒土層中に土器破片と石片との組合わせ炉址を発見する。

八月二十二日 吉久雄・長久・小平幸衛氏と、前に焼き組合わせ炉址の周囲を発掘調査して、これから南三米に他の石開炉址を同じく黒土層中に発掘する。自分は、放課して午後三時現場に至り、これらの遺構を調査し、午後五時帰宅。

八月二十三日（日）晴。小平幸衛氏・兄弟四人ともに、黒土層中の炉址につき、その周囲を排土し調査する。炉の周囲に打石斧二点・黒曜石無柄石鎌一点・凹石三点が黒曜石残屑多數とともに遺存していた。これらの資料からこの炉址を中心に住居が営



図 30 烧窯群の発掘

まれたことが推定される。この存在面は当時地表面と推定されるから、既に堅穴住居と平地住居が併存したものと推定される。新資料であり、且つ極めて重要な資料である。

岡谷市から高橋巳喜之助氏が、遠く南徳高町矢原から白井保喜代・鐵坂藤七両氏が見学される。

八月二十四日 快晴。遠く茨城から来て夏中発掘を応援していた次男長久が今日帰った。

八月二十五日 快晴。今日から小平源治氏を新たに雇う。吉久雄・小平幸衛氏の三人にて、トレンチ第八号の調査にかかる。資料なし。

八月二十六日 快晴。小平幸衛・小平源治両氏にて、前日に統合トレンチ第八号を調査する。資料なし。

八月二十七日 風雲襲来し、暴風雨のため一同休む。

八月二十八日 晴。小平幸衛・小平源治両氏にて、前日に統合トレンチ第八号を調査する。資料なし。

八月二十九日 晴。小平幸衛・小平源治両氏にて、調査続行する。資料なし。

八月三十日 雨。一同休む、帰省して発掘を手伝っていた長男吉久雄が、暑中休暇が終ったので、長野師範学校に帰校する。

九月一日 (二百十日) 雨。今日から向う十日間秋蚕休業となつたが、生憎二百十日の雨模様で、発掘はやらなかつた。

九月二日 快晴。小平幸衛・小平源治両氏とともに午前七時半現地着。

トレンチ第二号を西から調査し東一〇メートルの大堅穴を発見し、それを浚つて朱片と思われるもの一片と黒曜石石鏃一点を得る。

次に第二五号に西接する地点が遺跡の空間となつてゐるので、改めてここを調査し、盤石一個と多少の木炭片を認めたが、住居址は遂に発見されなかつた。

午後は、環状列石遺構中の配石一個を除き、その下に一大竪穴を発掘し、午後五時帰宅。

九月三日 快晴。午前七時着、文部省の史跡保存指定総会が間近に迫り、それまでに予定地を発掘してしまわなければならなくなつたので、師岡義一氏をも雇い、小平幸衛・小平源治の両氏とともに四名で発掘する。

竪穴群遺構とトレンチ第五号との間を埴土して調査したが、住居址は発見されなかつた。

次にトレンチ第六号・第七号の西端から順次調査すると、黒土深く炭屑も散乱していたから、両トレンチ中間の黒土を排して調査したが、この地点にも住居址は発見されなかつた。

九月四日 晴れたが天候やや崩れ模様となる。

小平幸衛・小平源治・師岡義一の三氏とともに調査する。

第一に平地住居址の周囲を拡張し、その範囲を確定し得る資料を求めていたが、これに関する何物も得られなかつたので、ここ調査は中止する。

次に昼飯後、南作場道に沿つて第二九号址から東にトレンチを設けて調査すると、二メートルで黒土深く炭屑や黒曜石破片も含み住居址が予想された。果して床を発見し、これを東に追い直壁を得、更に北に追い北壁も存在するので住居址が確定された。午後五時帰宅。

九月五日 朝から夕立模様の天候も遂に夕立となつた。それまで小平幸衛・小平源治・師岡義一の三氏とともに前日の住居址を続掘し多数の資料を得、僅か南側を残して完掘する。これは前年



図 31 異石を除いた下の竪穴群



石蓋された大甕（堅穴住居址外に発見）

九月二十四日（秋季皇室祭）晴天。祭日で休日、しかも上

32 捕 図 トレンチ第五号を西から東へ調査したが、遺構も遺物も発見されない。午前十時矢島奏氏第三〇号を撮影する。この住居址は殆ど南作場道の路敷を占めているので、直ちに埋め立て、復旧する。
午後環状列石造構を北に追う。配石はなお続いて第六号トレンチを越え第七号トレンチに統き列石総数二五個となる。次いでこの地点の堅穴群に堅穴二個を発掘する。堅穴から凹石一点出土。午後四時帰宅。

九月十三日 晴。矢島奏氏一人、堅穴群遺構を実測する。
九月二十三日 講習会にて休業。講習会は欠席して発掘に急ぐ。小平幸衛・小平源治の両氏と午前七時、現地着。
トレンチ第八号を西から調査し、一八メートルに至ると長方形の巨大な自然石が露出している。これは既に前年トレンチを開設した当時注意に上っていた。石の下を調べると土器の一大口縁部が輪を描いている。これを掘り下げるに、赤土層まで深く喰い込んでいる。これが完掘は明日に譲り、このトレンチをなお東に進む。土器破片は多少散在していたが住居址は遂に発見されなかつた。午後五時帰宅。

上野西伯と松林に北接して発掘しかけた住居址に關係するもので、その規模最も宏大である。第三〇号とする。今日は、一時も惜しみ働いた。矢島奏氏これを実測する。

九月六日 朝晩晴。夕立後にて土湿り重く、作業困難を極む。小平幸衛、小平源治、師岡義一の三氏とともに発掘調査する。

天気であったので、小平幸衛・小平源治両氏とともに上る。

前日発掘し始めた大土器を三人掛りで掘る。掘りながら各出土状態を矢島奏氏が撮影し、ようやく正午に至り掘り上げる。

午後はトレンチの残り全部に亘り調査したが、住居址は遂に発見されなかつた。発掘した大土器を夏蜜柑の籠に納め、差し組ぎにして帰宅。

今日の新聞を見ると、当遺跡及び上ノ段遺跡が共に、昨日文部省で開かれた史跡保存審議会で保育地として指定されたと報じてゐる。これで私のこの遺跡への調査も一応終止符をうつことになる。實に感慨深いものがある。

九月二十六日 晴後雨。小平幸衛・小平源治の両氏にて竪穴群の周囲を整理する。

九月二十七日（日）晴。小平幸衛・小平源治両氏とともに調査、地上住居址の周囲と環状列石遺構の周囲を整理し、これを矢島奏氏が実測する。

多年に亘つてこの遺跡を発掘して來たが、今日を以つてその終りとする。道具を取りまとめて車に載せて帰宅。因みに発掘地域は、昭和十八年四月末日までに現状のまま埋没して地均した上、地主に返還した。

昭和二十九年度の発掘

尖石遺跡で、今まで発掘した竪穴住居址三二ヶ所は、その地が私有の耕作地であるため、調査したのちは、直ちに埋没して旧に復した。

文化財保護委員会から、見学者のため、竪穴住居址一ヶ所を、その代表として、発掘したまま保存しておくようとの指示があつたので、区域の一部解除の許可を得、新たに発掘の準備をしていた。

たまたま、三笠宮殿下には、昭和二十九年七月二十六日、当遺跡に成られたので、それを機に竪穴住居址一ヶ

所を発掘した。

これを第三三址とする。その後、管理者茅野町では、これに木造被覆家屋を構築し、遺址を雨雪から防衛するとともに、常に見学し得られるように施設した。

七月二十五日（日）快晴。早天なお続き一片の雲もなく暑気きびし。岡谷東高校小林正人教諭ほか生徒七名、青陵高校生徒五名、増沢賢・小口清志・田川幸生・宮坂昭久の諸氏と午前九時現場着。

遺跡台地の平坦部南作場道に沿う地域は、住居址の分布が濃厚であつて畑第二九六三番の西南端では、相連接する第一一・第一二・第一三・第一四・第一五の五址を発掘した。よつて、これに西接する畑第二九六二番の東南隅の一部を、地主の諒解を得てその候補地に選定してあつた。



33 遺跡をボーリングされる三笠宮（右端）

直ちに、その南東隅から幅一米のトレンチを南作場道に沿い西に向つて設ける。ここは、黒土が深くそれに炭屑が散見されたので、そのまま西し、起点から六米で黒土が浅く通常の地層に達した。次に、このトレンチの中央から北に向つて第二のトレンチを設ける。ここも北五米までは黒土が深くあつたが次第に、平常の地層に達した。従つて、この黒土の深い範囲を竪穴の区画内として発掘する。その堆土の五〇厘米下まで排除し、ここに竪穴住居址の存在を確認した。炎暑きびしいので午後三時作業を打ち切り帰宅する。

七月二十六日 晴天。朝から暑氣烈し。

午前八時前日の人員（岡谷東高校生七名、青陵高校生五名と小林正人・増沢賛・小口清志・田川幸生・宮坂昭久の諸氏）にて発掘開始、それに矢島敷由氏は実測。

堆土現地表下五〇㌢の所々に石塊がある。やがて中央の北寄りに炉縁の石が発見され、それをたどると大きな石闕いとなる。また一方、側壁に達し、これをたどって忽ち径五米をこえる大きな凹形の区画となる。

やがて午前十一時、昨二十五日、伊勢市よりの帰途中央西線で入譲され、諏訪湖畔に旅の一夜をすごされた三笠官殿下には、東京大学講師八幡一郎氏とともに、地元南大塩にて村民の歓迎を受けられ、なお、尖石考古館に

立ち寄り、詳に出土品を観覧された後、現地着。

遺跡の東端に茂る松林の下に藪を敷いて昼飯をとらせられる。

午後一時、炎天の中を、発掘者とともに蒸し暑い豊穴の中に下り立たれ、移植ごと竹籠で、土にまみれながら丹念に遺物を掘り出される。やがて、ネクタイはほどきのぞかれ、パナマ帽は絹木帽子に代えられ、全く学徒として発掘を続けられて遂に完形土器一点を土揚げされた。

やがて、堆土は全部除かれ床面の清掃に移る。側壁の裾には、幅広い溝がめぐり、四隅には、大きな柱穴が掏出された。第三三址は完掘され、その炉址に殿下を囲んで記念の撮影をする。

午後三時、再び蝶時雨の松林に休憩されてから、ハイヤーで茅野に下られ、午後四時三〇分発の準急列車で八幡講師共々帰京された。



図 34 尖石第三三住居址を保存する覆屋

尖石住居址記述

昭和十五年発掘

第一址 竪穴住居址（國版三上・攝圖三五）

第二九〇一番烟の東北隅、台地南斜面の頂上線にあって現地表下八〇釐（耕土層二〇釐、次の赤褐色土層四〇釐を経て基盤の赤土層となる。この赤土層を二〇釐の深さに掘り下げて床面とする）の深さにあり、平面径四米の円形である。床面は平で堅いが、炉址の東側から壁裾にかけてやや上り勾配になる。床の中心から東よりに竪穴の炉址がある。東西の径一米、南北の径八〇釐の方形、深さ三〇釐の底をまるく掘りこんだ竪穴で、底には同一容器の土器片を數きつめる。底の赤土面は焼けていたが土器片との間に黒土がある。高さ二〇釐の側壁が床をかこむ。南側だけこれを欠き、その裾には幅一〇釐の溝がめぐり南西隅を僅かに欠く。

柱穴は七ヵ所にある。床の中心をよぎる長さ四米の対角線上の四分点にある $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ を四主柱の穴とする。口徑三〇釐、深さ六〇釐、円形垂直のもので、また $P_1 \cdot P_4$ はそれぞれ同形の $P'_1 \cdot P'_4$ を伴う副柱の穴である。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ は壁裾に、 P_4 は内床にある。他に P_5 が東側の $P_1 \cdot P_2$ の中央にある。

積石遺構 炉址の東側からの扁平の敷石が東北隅の積石に続く。積石は P_2 の南に接し高さ四〇釐、頂上にのせてあつた扁平の石を除くと、大きな土器の下部を赤土二〇釐の深さに埋め、粘土でかため直立させ、周囲に石塊を積み重ねてあつた。土器には、亀裂が入り内部に黒土がつまり底から七分目の所に小形磨石斧一点が藏められ

てあった。この積石から北にかけ側壁の上に高さ四〇釐くらいに石が積んでいた。

出土品は、積石内の土器、炉底に敷いてあった土器片と石器として石鏃二点・同破片二点・打石斧片一点・小形磨石斧二点・棒状磨石斧片一点・石皿断片一点・凹石二点・蜂ノ巣石一点・黒曜石片・花崗岩残塊等が主として積石から、また蛋白石猪牙形飾玉の中央に孔を穿けかけたもの一点もあった。

尖石第一住居址実測図

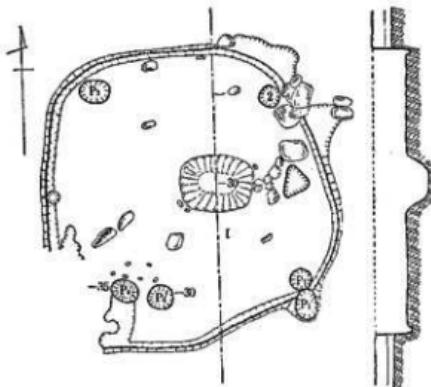


図 35 畑第二九〇一一番の西端、第一址から六米の西、現地表下八

○欄の深さにある。その西側に第三址が重複して食いこむ。

第二址 壓穴住居址（図版三下・攝圖三六）

畠第二九〇一一番の西端、第一址から六米の西、現地表下八
○欄の深さにある。その西側に第三址が重複して食いこむ。

床は水平で、その北縁に備か六欄の幅狭い溝があつて東北

隅で終る。高さ二五釐の側壁がある。一一個の小さな扁平石で南北の径六〇釐、東西の径一米の長方形に囲む。
深さは二三釐の浅いものである。

床の中央に石で囲った炉址がある。一一個の小さな扁平石で南北の径六〇釐、東西の径一米の長方形に囲む。
深さは二三釐の浅いものである。

○彌の楕円形で深さ四〇釐、P₃は口徑四五釐、深さ四五釐の円形で、これにP'が西接する。P₄は徑五〇釐、深さ三三釐の円形である。

出土品は、P₂の西側にそい完形円筒形土器一点が横倒しに、また東壁の裾に凹石一点と打石斧一点とがあつた。

第三址 壁穴住居址（國版三下・攝國三六）

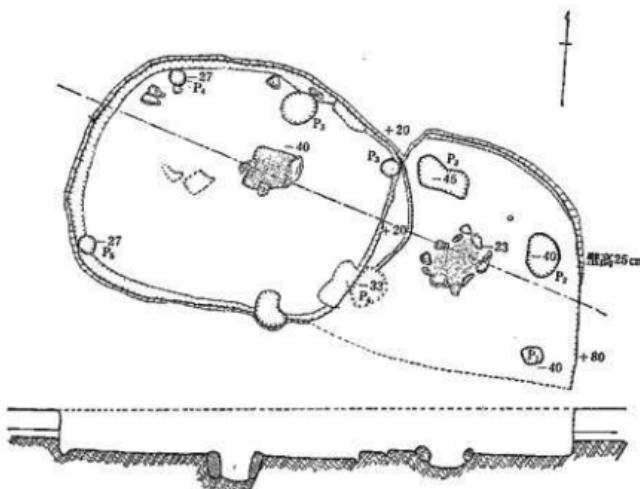
本址は、その東側が第二址の西側と重複する。

平面は東西の徑五米、南北徑四・一〇米の楕円形で、床は水平で固い。この中央に、東側に炉綠石をもつ徑六〇釐方形の壁穴炉が、深さ四〇釐で底が焼けている。その西五〇釐の地床に焚火の跡がある。

柱穴は五ヶ所でP₁（徑三六釐）、P₂（徑三〇釐）、P₃（徑五四釐）、P₄（徑三〇釐）、P₅（徑三〇釐）のうち、壁際にあるP₂・P₄・P₅・P₁を四主柱とする。深さ二七釐。

床の周囲に高さ二〇釐の側壁がめぐり、これに幅八釐の溝が内周する。

出土品は、東の溝際から遠州式石斧一点が、またかつてこの住居址の堆土上層、即ち、現地表下三〇釐から完



第三址 壁穴住居址実測図

形に復原し得た土器四点と口縁部の大破片が
発掘された。

第四址 墓穴住居址

(図版五上・插圖三七)

この第四址は、台地南斜面の頂上線にあって、畠第二九〇一番の北側の中央から南作場道の敷地にかけ、現地表下北端で一米、南側で五〇厘米の深さにあつた。

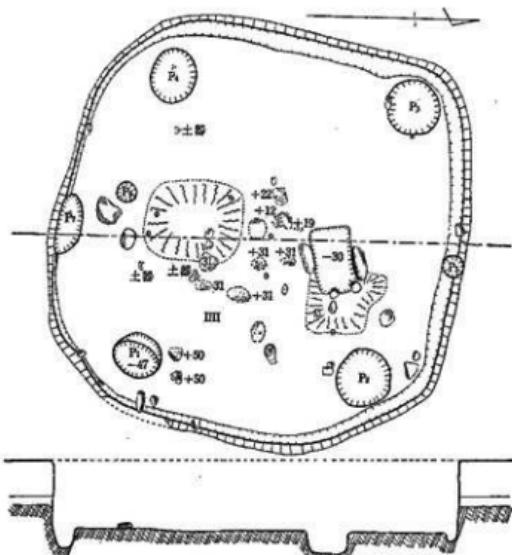


図 37 尖石第四住居址実測図

平面は、長さ六米を径とする圓の丸い方形で、規模雄大にして、そこに少しも改増築されたことなく、最初から整然たる姿に構えられた、縄文文化中期末に属する代表的の住居址である。

床は水平でよく鍛きためられてあつた。この床の周囲は北側で高さ七〇厘米、南側は二〇厘米、東西両側はこれにより傾斜して全周し、これに幅三〇厘米の溝が画然と内周する。また、この中央に畠址が三ヵ所あつた。

畠址第一は、中心から南よりにあって、南北一・三〇米、東西一米の隅丸方形に、床面からやや低く掘りさげてあつて、底は赤く焼けて焼土層の厚さは七厘米に及ぶ。畠端の南北両側に畠内に對しての小斜孔がある。畠址第二・第三両址は相重複して、中心から北にかけてある。第三の畠址が、東北隅の主柱穴の近くにあつて床面が赤く焼けている。これに重複して第二の畠址が、南北の両側を長い石で縁どり、東側は小塊石二

個で囲った石壠炉址で東西の長さ九〇釐、南北の長さ五〇釐、深さ三〇釐の長方形のものである。底は焼けて赤い。

柱穴は四ヵ所にある。床の中心をよぎる長さ五米の対角線上の四分点に、口径七五釐、深さ五〇釐の平面円形に垂直に掘られたP₁・P₂・P₃・P₄がある。主柱の穴であろう。

また北側の中央に口径二七釐、深さ三〇釐のP₅と、これに対応して南側兩主柱穴の中間に同形のP₆があつて共に棟木の支柱穴とすれば、この上家は六主柱によつて架せられたものである。或はP₇がその位置からP₅に対応する様にも思われる。

出土品は、土器片が上層の黒土に包含され、ただ一個完形土器が第二炉址の南側の床面に横倒れになつていた。石器は床面の殊に堅櫛や溝に、凹石六点・磨石一点・打石斧片一点・敲石・石匙二点・石錐二点・磨石斧一点等があつた。

第五址 墓穴住居址（図版五下・七上・插圖三八）

畠第二九〇五番の東北隅の道に沿い、現堆表下、北側で九〇釐の深さにある。

平面は、南北の徑四・二〇米、東西の徑四米で円形というよりも隅の丸い不整の方形をなす。床は水平でよく固められ、これに高さ北側で六〇釐、南側で三〇釐の便壁がめぐり、幅一〇釐、深さ一五釐の溝が整然と掘られてこれに内廻する。溝の底面の所々に、徑四釐の直穴があり、これを中心にこの溝に対し十文字に短い溝が掘られていた。これは溝に防壁の設備を、即ち溝に草を詰みこれを固定せしめるため小孔に心棒をたて、横溝に横木を入れてこの心棒の移動を防いたものであろう。炉址は二ヵ所あった。第一炉址は、北によつて大きな扁平の石四枚を堅に据え底狭く掘りこみ、徑六五釐、深さ四五釐方形のもので底の赤土は焼けて赤い。他の第二炉址は

南側にあって、不整形で床面からやや低くした地床炉で、赤土面が赤く焼けていた。

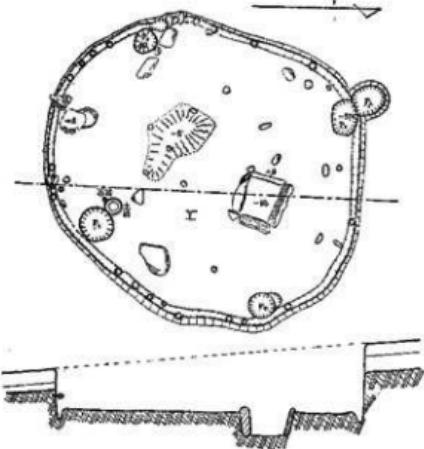
柱址の穴は、四ヵ所即ち床の中心をよぎる長さ四メートル対角線上の四分点にあって、口径六〇厘米、深さ六〇厘米で円形の垂直のものが壁際にある。四主柱によって上家を架したものであろう。

この他に、P₃の側壁に口径四〇厘米、深さ四五厘米の斜孔があつた。この隅の主柱に対し特別に設けた支柱の穴であろうか。

出土品は、土器一点が東南隅P₁の内側に倒置され、それに打石斧一点がたてかけてあつた。土器の底部は切り地の斜面に段々に築構された状態を示すものである。

現地表下、北側で一・一〇メートルの深さにあって、平面は南側が弓形にやや張るも、径四・二〇メートルの方形である。水平の床を囲む直壁は北に高く七五厘米、南に低く一五厘米である。周溝はなかつた。

第六址 竪穴住居址（國版五下・插圖三九）



第三圖 38 尖石第五住居址実測図

この住居址は、第五址の南一・二〇メートルにあって、床面は第五址より六〇厘米低い。これは、これらの住居址が台

地の斜面に段々に築構された状態を示すものである。

現地表下、北側で一・一〇メートルの深さにあって、平面は南側が弓形にやや張るも、径四・二〇メートルの方形である。水平の床を囲む直壁は北に高く七五厘米、南に低く一五厘米である。周溝はなかつた。

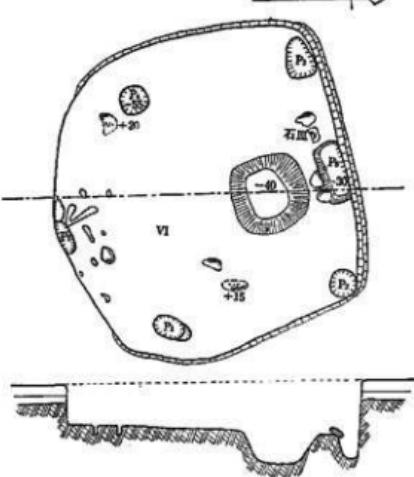
の扁平石が貼りつけてあつた。坑内には黒土があつて共に土器片を包含していた。

柱穴の中P₁・P₂・P₃・P₄は、床の中心からやや北に偏って交わる長さ四米の対角線上の四分点にある。北側のものは壁際に、南側のものは内床にある。そしてその形状は、P₃は三角形、他は口徑三〇厘米、深さ五五厘米の円形直穴である。この四柱を主として上家が架せられたのであろう。

この他、南側中央の出張ったところに砾柱の穴を伴うP₅がある。これに対し北側の中央にP₆がある。このP₆は、東西の径七〇厘米、南北の径四〇厘米で、平面矩形に、深さ三〇厘米に掘られ、坑内は赤黒い土で埋まりそれに夥しい黒曜石片とそれに石英破片一片をまじえてあつた。これに、なお完形石匙と小形磨石斧との各一点を共伴した。

またこの坑の西に輝岩塊の礫石一点、方形の石皿断片（この窪みには弁柄が付着していた）一点が、南側には盤石二点があつた。この状態から炉に接して細工をした場所で、この坑はその貯藏庫であろうか。或はP₅に対応して棟木支柱の穴とも想像される。

この住居址の堆土は、床上に黒土層がありその上に薄い赤土塊の層があつて、そして再び赤褐土層となる。この中間にある赤土塊の層は、この第六址が廃居となり、その上段に第五址が構築された時、採掘したものをこの住居址内に放棄したものであろう。



尖石第六大住居址実測図
图 39

と推定される。従つて第六址は第五址に先行したものであろう。このことは両者に遺存した土器形式に見られる。第五址床上の完形土器は尖石第三形式に相当し、第六址床上の土器片は尖石第二形式のものであった。

出土品は石器類が多く、黒曜石石匙三点・敲石一点・石皿断片一点・磨石斧完形一点・同破片一点・打石斧三点・石鎌一点・棒状石錐一点・黒曜石円形石器一点・黒曜石小刀一点、その他各石材破片であった。

第七址 竪穴住居址（西版六下・捕闕四〇）

この住居址は、第五址北西隅から北西二米の地点で、現地表下九〇厘の深さにある。

平面は、東西の径五・四〇米、南北の径四・五〇米の隅の丸い不整五角形である。床は、西側がやや軟弱だが全面よく礎き固めて平坦である。床の周囲に高さ二〇厘の側壁がめぐり西側がやや明瞭を欠く。これに溝が、幅の狭い部分は二〇厘、広いところは四〇厘もあるものが内周し、そして東北隅の竪穴に連結する。

床の中心からやや北に偏つて径七〇厘の竪穴炉が三五厘の深さにある。その北側は扁平の石二個をもつて縁をしている。底は焼けて赤い。この炉址は、最初南西に広くあつたが、後現状に狭く掘り深められたものである。また、その西側舌状の虚線は床面から一段低く、その面で焚火をした痕跡がある。

柱穴は合計一ヵ所ある。このうち、床の中心をよぎる長さ四・五〇米の対角線上の四分点にある $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ 。
 P_5 を四主柱穴と想定しよう。その形状 P_1 は口徑六〇×四〇厘、深さ五〇厘、 P_2 は口徑四五厘、深さ四〇厘、 P_3 は口徑三〇厘、深さ四〇厘、 P_5 は口徑三〇厘、深さ五〇厘の大体円形直穴であるが、 $P_6 \cdot P_{10} \cdot P_9$ は径四五厘の方形で、 P_{10} は中心柱の穴とするも、 $P_6 \cdot P_9$ はどんな意義をもつ穴であろうか。一度は、 $P_4 \cdot P_8$ に西側の主柱をたてたが、後 $P_3 \cdot P_5$ にそれを移してこの方面に拡張したのではないだろうか。これは、柱穴の配置とともに、この方面的床面の軟弱なことと側壁の不明瞭からも併せ考えられるところである。

この住居址の柱穴の位置が北側は壁際、南側は内床にあるのは、家屋の構造に基づくものと考えられ、南側が入口となり、P₇・P₆の間隔は一メートルで、その間は壁と溝とを欠き、出入口として適当な部分である。P₁₅は径三〇厘米と四五厘米の矩形で、三五厘米の深さの直穴であって、周溝に連なる水溜か或は貯蔵庫であろうか。またP₁₄は奇形のものでその底から一筋の孔が床下の地面をくぐってP₄の竪穴に続いている。このP₁₄の西側と南側へとかけて小さい孔が並列している。棚でも作つてその竪棒を立てた穴であろうか。

この住居址の東北隅に内包される竪穴P₄は、径

一・四〇メートルの平面円形の四〇厘米の深さで直壁平底に掘られた大きなものである。これは、周溝に繞くところから水溜とも、或は、室内の貯蔵庫とも考えられる。

この竪穴の側壁の中、東南隅から東側にかけ、その上面現地表下三〇厘米、床上六〇厘米の所に多数の土器片とともに打石斧一点と円形細工石一点が包含されていた。この地層は当時の地表面に當り、また竪穴住居の棚として使われた面であろう。

出土品は、この他炉址の南側に平盤な石一個が敷かれ、その傍に朝顔形完形土器一点とやや小さい同様の口縁部があった。また完形石皿一点が東北隅の竪穴の傍にたてたままの状態に遺存していた。その他、石鎌完形一点、

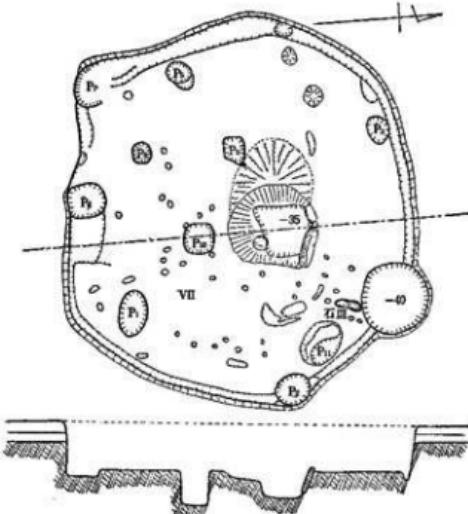


図 40 尖石第七住居址実測図

石錐棒状のもの一点、掘みあるもの一点、蜂ノ巣石一点、珪岩剝片一点等である。

第八址 竪穴住居址（図版七下・插圖四一）

この住居址は、第七址の南西六米、現地表下九〇厘米にある。

その平面、南北は五・一〇米を、東西は四・五〇米を徑とするほぼ円形であるが、その徑の差六〇厘米は、最初は四・五米の同じ長さであったが、後、改築して南に六〇厘米程度拡張されたものであろう。南側の柱穴の位置からこのように考察される。

床面は中央から周囲に向って上り勾配に作られ、その面も柔軟であった。この周囲を高さ北側で三五厘米、南側で一五厘米の側壁がめぐり、これに西側で幅三〇厘米、北から東は狭い三厘米の溝が内周し、南側はこれを欠く。

床の中央から西に偏して、平面の径一米の方形の竪穴炉址がある。深さ二七厘米に底狭く掘られ、底面は焼けて赤い。度々改構されたものであろうか、南北に舌状の窪んだ出張りがある。また炉の四隅には拳大の塊石が貼りつけてあった。

柱址の穴は、一七ヶ所の多きを数え、そのいずれを主柱の穴とすべきか判定に苦しむ。

まず一・六〇米の等間隔を以て $P_1 \cdot P_2$ 、 $P_3 \cdot P_4$ 、 $P_5 \cdot P_6$ の三対が得られる。何れも口徑三〇厘米、深さ五〇厘米のやや小作りの円形直穴であつて、 $P_1 \cdot P_2$ 、 P_3 はその穴口の傍に塊石を伴う。これは柱の根元の石であつてここに建てられた柱が最終なものであったことを語る資料である。

炉址の西に接し主柱の穴と同大の $P_9 \cdot P_8 \cdot P_{10}$ の三つが P_7 を中心にある。この P_7 の穴から小さい瓶形土器が口縁を床面と水平にして埋めてあった。 P_7 の周囲には、小孔が点在し、土器の内外両面共まことに清浄であった。

一体、住居址にある土器の内面は食料の残滓でよごれているものである。従つて P_7 にあつた土器は、その例に

もれるから或は食器以外の目的に使用されたもので
ある。

この近くの（う）地点から長形打石斧、（は）地
点から小形磨石斧が出土した。これらの遺物の出土
状態と周囲の複雑な遺構から、炉の西側はこの住居
の重要な部分であった。

また床面の南北洞には浅い大きな穴があり、その
周囲の面は凹凸がはげしい。或は、これは大きな樹
の根によって作られた穴であつて、その樹を柱とし
てこの上家が構築されたものであろう。

出土品は、P₁にあつた完形土器一点と、棒状打石
斧一点とその破片・大形磨石斧一点・小形磨石斧一
点等であった。

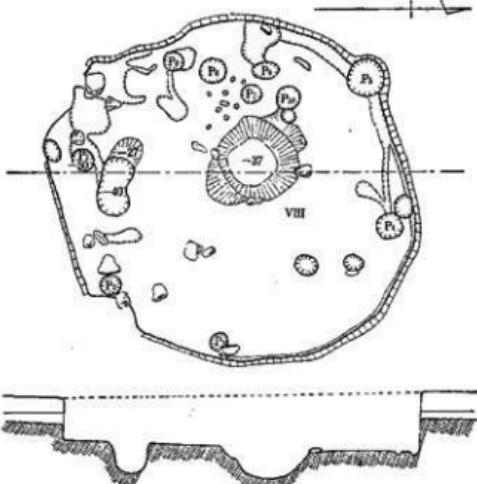


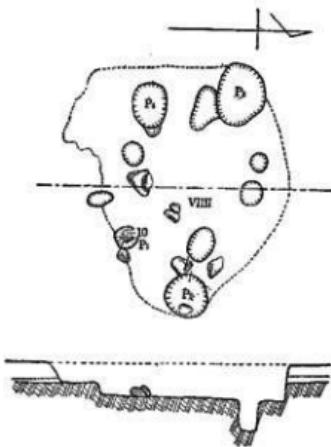
図 41 尖石第八住居址実測図

第九址 作業場址

(圖版八上・捕圖四二)

第七址の西三米の地点、現地表下五〇釐の深さにある。住居址の範囲を示す周壁も周溝も存しない。また住居として必要条件である炉址もなく、ただ数個の直穴と盤石とが遺存し、これに石器類が出土したから、これによつて僅かに家屋の址と認められるに過ぎない。

柱穴は一〇ヵ所にあって、大なるものは口径一・六〇米、小なるものは口径三〇釐の平面円形の直穴である。



尖石第九住居址実測図

このうちP₁・P₂・P₃・P₄をとつて四主柱の穴とし、小規

模ながらこれを一戸の家屋と想像する。

出土品は、土器片五、六片と、石器は、他住居址よりも多數であつて、打石斧七点、遠州式石斧一点と、黒曜石大小の破片が多數と、細工台と認められる多孔の一大盤石が一点とであった。

これら多數の遺物の種類とその構造とから、これは住居よりも倉庫または工作場となすべきであろう。

第一〇址 壊穴住居址（国版八下・攝図四三）

この第一〇址は、第八址の西五メートル地の比較的平坦な地形の現地表下六六畳の深さにある。

床面は水平にかたく、これを高さ一六畳の側壁が整然とめぐり、これに一条の周溝が、西が幅広く二一畳、他は一〇畳の幅で内廻する。従つて、その平面は、長さ四メートルを徑とする隅の丸い方形である。床の中央よりやや北に偏在して炉址がある。これは口徑九〇畳の圓形の平面、円形であつて、深さ二〇畳の壊穴である。この東北隅には扁平石一個を、南縁には扁平石三個を敷き並べてある。この炉址の南の床面には細工台と思われる扁平石が積み重ねてあり、また西に接して壊穴がある。これは東西の径一メートル、南北の径九〇畳、平面円形であつて深さ三五畳に底狭く掘つてある。底が焼けていないから炉として使用されたものではない。柱穴は八個ある。どれも口径三〇畳、深さ六〇畳及至三五畳の平面円形の直穴で、床の中心をよぎる長さ三・

三〇米の対角線上の四分点にある P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 を主柱の穴とし、これに P'_1 ・ P'_2 ・ P'_3 の副柱の穴が伴い、北側は壁柱で南側は内柱である。他に両側の東西両端に P_5 ・ P_6 の穴があるが、これは廻柱の穴であろうか。

この家屋の特別構造が考えられる。

また西北隅に、第八址と同一状態に、浅い雑然たる穴が二ヵ所ある。樹根の跡であろうか。この屋宇も立木によせて構築されたものか。

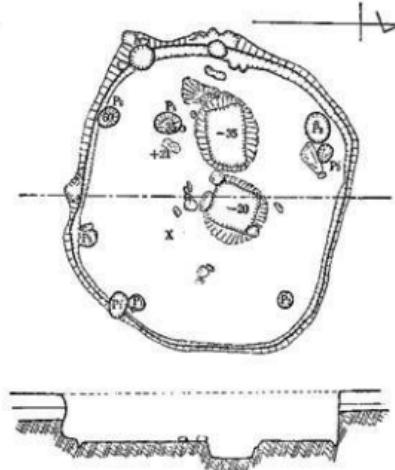
出土品は乏しく、南側の溝から磨石斧二点と、他に打石斧一点、同破片一点、敲石一点等であった。

第一一址 積穴住居址（挿図四四）

烟第二九〇五番の最西端、第一〇址の西三米、現地表下六五粁の深さにある。

床面は水平に堅くため、これを高き一五粁の隔壁がめぐり、この間に幅一二粁の溝が内周し南側二米だけれど欠く。ここが出入口であろう。平面は五・五〇米を直径とする円形である。
床の中央に深さ一〇粁の浅い窪みで不整形の地床炉址があり、窪みの周囲は焼けて赤い。ここに同一容器の土器破片を上向きにして敷いてあった。

柱穴は、二七ヵ所の数多いもので、口径は三〇粁内外の円形直穴で、西側にあるものは壁側に、他は内床にある。その序列は不整であり、どれを主柱のものとするか定め難いが、ほぼ一・五〇米の等間隔にある P_1 乃至 P_8 の



尖石第一〇住居址実測図
挿図 43

八ヶ所を周縁の柱穴とし、P₉を中心のものとして考えたい。

北西隅の主柱穴P₅から発する一条の溝は、西側をめぐり南側では絶つも、ほぼ東側中央にあるP₁₀の豊穴に達する。この溝の所々には等間隔で小孔がある。この溝は、第一次住居の時の周縁で、それが後に改構され現在の周縁となつた痕跡の溝であろうか。或は、この溝により草類の囲みをもつて境を作り、住居内を内房と、外房とに仕切つて使用したものであろうか。

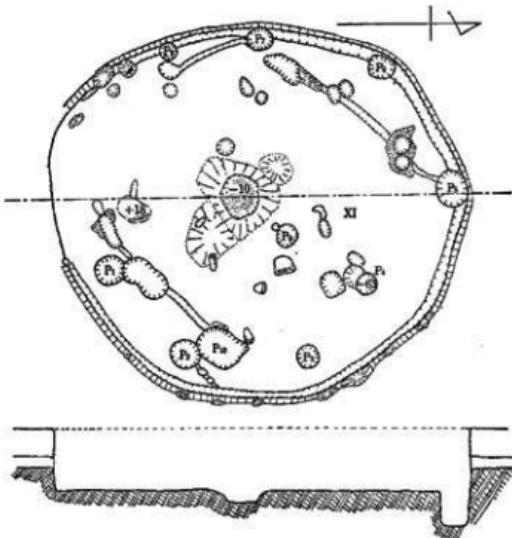


図44 尖石第一一住居址実測図

なお東の側壁の裡には所々に浅い穴が横にほられた。主柱を支える柱をなした穴であろうか。

出土品は、土器は僅かの破片のみで、石器は、石皿断片一点・完形小形石皿一点・黒曜石完形石鏡一点・同破片一点・黒曜石円盤石器一点・玉石大一点・小一点・完形半磨石斧一点・遠州式石斧破片二点・打石斧は断然その数多く九点・大型横型石匙一点・敲石一点・凹石二点等であった。

第一二址 壁穴住居址（插図四五）

烟第二九〇五番の西北隅は平坦で、ここには住居址が埋没してあるものと予想して一帯を発掘調査したが、黒土層三〇畳下赤褐色土層二〇畳を経て基盤の赤土層となり、僅かに第一二址の壁穴が第九址の西九米にあった。

これは東西の径一米、南北の径五〇畳を経て平面長方形であつて、三〇畳の深さに直壁と平底とに掘られたものである。この穴は黒土で埋まり、僅かに炭屑が認められたのみで遺物は何物もなかつた。表土浅く土器の注口部があつたが、これはこの壁穴の関係資料ではない。

さてこの遺構の意義は容易に断定し得られない。この遺跡の一つの資料としてかかげる。

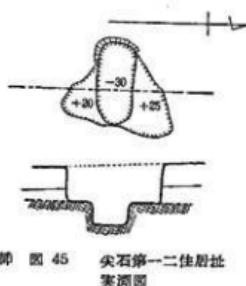
第一三址 壁穴住居址（插図四六）

これは、この煙地第二九〇五番の最南端、傾斜する地形に北端で深さ五〇畳にある。

水平の床をめぐって高さ三〇畳の側壁があり東・西・北の三方を囲んで南方に開く。溝はない。従つて平面は、北壁のみ円弧を描き他の三側壁は直線をなす矩形であつて、径東西一・三〇米、南北最長で一米に過ぎない小規模のものである。

床の中央に約三〇畳平方の浅い窪みがあり、その周囲が赤く焼けているから、これが炉址であろう。柱穴は僅か一ヵ所、南北隅にあって口径二五畳円形の直穴である。他に炉址の東側に小孔三ヵ所が不秩序にある。石塊一個が南側の東によつてあつた。

出土品は一個分の土器片のみで他に何もなかつた。



第 四 45 尖石第一二住居址
実測図

この第一三址は炉の焚火あとからここに生活したものと
しても、構造極めて簡単であつて、その出土品も乏しいこと
から本格的に上家を構えて住居したものかうたがわしい。

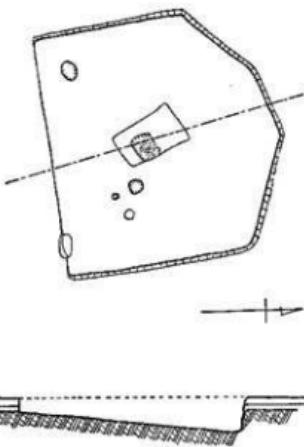


図 46 尖石第一三住居址実測図

この三住居址は相連続し重複し一群の遺構となつて畠第
二九〇五番の南西隅、現地表下七〇釐の深さにある。そし
て、どの住居址も径一米をこえる平面方形で石で囲つた炉
址を有す。これら三個の炉址は、三米の間隔を以て南北か
ら東北の一線に並んでいる。

これらは、最初第一四・第一六の両址が一米の間隔で築構された後、その中間に第一五址が築構されたもので
あるうか。

しかし、第一六址の遺存品が、他の二つの住居址よりも極めて豊富であり、且つ、その遺存の状態から見て、
或は、第一次に第一四址が、第二次に第一五址が、第三次に第一六址がと、次々に西に向って移動しつつ改構さ
れたものかとも考えられる。

第一四址 窓穴住居址（図版一〇上・插図四七）

本址は、その西辺を第一五址に喰いこまれたため、その範囲を限るべき西南隅の側壁と溝とを喪失したが、他
は高さ二〇釐の側壁とこれに幅一五釐の溝が内周してめぐり、西側は主柱穴と推定されるものの位置によつて、

径四・八〇米の隅丸方形よりも円形に近い平面形が復原される。

床は一様に堅く平坦に踏みかためてある。この床の中央からずつと北によつて竪形の石で囲つた炉址がある。横幅一米、縦幅三〇畳の大きな扁平石四枚を堅に底狭く掘りこんだ平面、正方形の規模雄大にしかも極めて簡潔に築構されたものである。

柱穴は四ヵ所にあって、それは床の中心をよぎる長さ四・八〇米の対角線上の四分点に位置し、口径七五畳、深さ五〇畳の平面方形の直穴のP₁・P₂・P₃・P₄が主柱の穴とする。どれも壁際にある。

他に柱穴P₅・P₆が西側にあるが、これは南側の西において第一五址の溝と交錯するところにある土器を包蔵する穴P₆とともに、第一五址に属すべきものであろう。

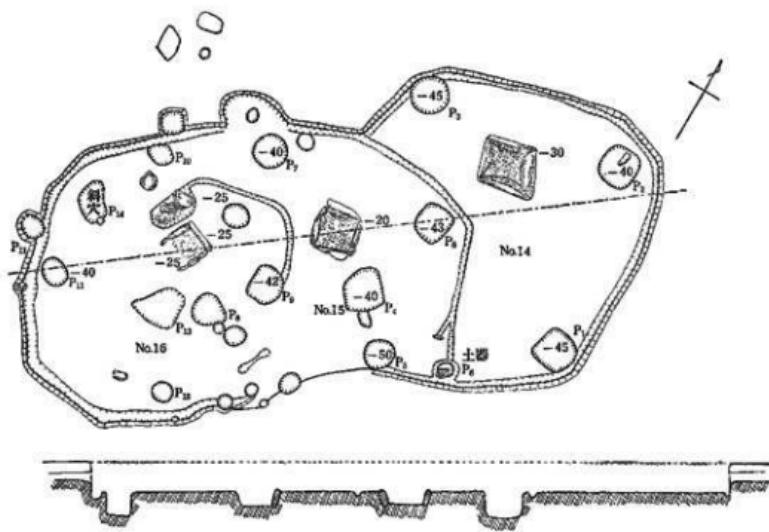
出土品は、僅かに土器片が堆土中から検出されたのみで床面には何もなかつた。

第一五址 竪穴住居址（國版一〇上・插圖四七）

本址は、第一四・第一六の兩址の中間にあって、これと重複し東側は第一四址に、西側は第一六址に喰いこまれている。

北側と東側は幅一二畳の溝により、また西側と南側とは柱穴P₇・P₈の位置（東側主柱穴P₆・P₅に対応する西側の主柱穴と想定して）により、その範囲を想定して、平面は、長さ四・五〇米を徑とする不整の円形であろう。なお、この住居址には北西隅に舌状の出張りがあつて、その床面の中央に一小穴がある。側壁は北側のみ高さ二〇畳のものが第一四址と第一六址と一つづきになつてめぐる。

床は堅く踏みかためて平坦であつて、その中心から北に大きな石圓の竪穴炉址がある。それは、横幅七五畳、縦幅二〇畳の大きな盤状石四枚を垂直に掘りすえて囲つたもので、その底は赤く焼けている。



第図 47 尖石第一四・第一五・第一六住居址実測図

四主柱穴は、床の中心をよぎる長さ三・九〇米の対角線上の四分点にあるP₅・P₆・P₇・P₈がそれである。いずれも口径五〇厘米、深さ四三厘米、円形直穴の大なるものである。この他柱穴は西側の中間に一ヶ所と南側に二ヶ所あるがその用途は判明しない。

出土品は、土器が完形のものを南側の壁際に掘りこみ直立させてあり、また口縁部を北西隅P₉の内側に小形定角式磨石斧と共に安置してあった。黒曜石無柄石鎌四点が原石片と炉址の西側床面にあった。

第一六址 墓穴住居址

(図版一〇上・插図四七)

第一六址は第一五址に在つて相互に相重なる。その北西隅から東南隅にかけての区画は、高さ二〇厘米の側壁とこれに内側する幅一八厘米の溝により定められるが、第一五址と相重なる東側は、主柱穴の位置と、溝の想定連絡線により、ほぼ四・二〇米を直径とする平面円形の住居址として

復原する。

床は、平坦であつて、その中央からやや北によつて石壁の炉址が設けられる。

炉址は、北側を一枚の扁平石で、東西の両側は短い扁平石一枚に小形の扁平石を補足して相互に組み、底狭く掘りこんだ口径六〇糀、深さ二五糀の方形四形のもので、南側は炉縁石を欠く。

またこの炉址の西に接し、南北の長さ七五糀、東西の長さ四五糀で二五糀の深さに掘られた竪穴がある。その北側に一枚の扁平石を据え、その南に底部を欠いた土器が横倒しになつてゐた。これも炉址と思われる。穴の底が焼けて赤い。この竪穴から一条の溝が東南隅にあるP₉に続く。

床の中心をよざる長さ三・六〇米の対角線上の四分点にあるP₉・P₁₀・P₁₁・P₁₂を主柱穴とする。P₉は口径六〇糀の方形で、他は口径三六糀の円形直穴である。北西のP₁₀と西南のP₁₁の両主柱穴は、溝の外側に、共に柱穴P₁₀・P₁₁を伴う添柱の穴であろうか。

この他、柱穴は、地床の中心にP₁₃が、西側の中心にP₁₄がある。P₁₃は、一边七五糀の不整三角形の大なる直穴で中心柱の穴であろうか。P₁₄は、長径六〇糀、短径三〇糀の不整形で、西四二度に傾く斜穴であるから中心柱に対する支柱の穴であろうか。

今、この柱穴の配置から上家は、よほど強固に構造されたものであろうか。まず、四主柱P₉・P₁₀・P₁₁・P₁₂と中心柱P₁₃で、その骨格を構成し、これに斜めの支柱P₁₄と、北西と南西の二主柱P₁₀・P₁₁に対し、副柱P₁₀・P₁₁をもつて補強した。これは、東南からの圧力に対し備えるためのものであろう。この地方では、今日でも、東南方向からの風を巽風と称して怖れている。

中心柱の穴の東に接しP₈があり、この内壁に接し土器の大破片が逆さに埋めてあつた。更に、東の地床に脚部以上の土器を逆さに埋め、その上に厚さ一〇糀の赤土で地床と平に敲き固めてあつた。土器の中には黒土がつま

つていた。

一六

この遺存の状態から、この穴と土器とは、第二次の住居第一五址に附屬させるべきものである。即ち、第三次の住居第一六址が營まれる時に、この土器と穴とを赤土で埋めて、その床面を造営したものであろう。出土品は、土器が、第二炉址内からと埋藏したものがあった。石器類は次の一九点でどれも床面の周縁に遺存していた。

石匙三点・石鎌七点・小玉一点・円形石器一点・遼州式石斧断片一点・小形定角式磨石斧三点・同断片一点・石小刀一点・剝片二個・塊状敲石四点・打石斧四点・凹石五点。

昭和十六年発掘

第一七址 竪穴住居址（補圖四八）

この住居址は畠第二九〇五番の西端、第一四・第一五・第一六の重複する住居址と壁一重に接して、その南西隅の現地表下、北側で八〇畳の深さにある。

平面は、径四・三〇米の不整円形で、床は平坦であるが、その面は、軟弱で凹凸している。この中心から西北隅によつて竪穴炉址がある。これは、径六〇畳の方形で深さ三五畳の竪穴である。かつては、石で囲つただろう

が、東、南の両側に横幅六〇畳、縦幅三五畳の扁平石が一枚ずつ遺存していた。また床の周囲を高さ北側で三〇畳、南一五畳の直壁で囲む。溝はない。

柱穴は七ヵ所にあって、口徑三〇畳の円形直穴である。そして、床の中心をよざる長さ三・三〇米の対角線上の四分点にある $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_7$ を四主柱のものとし、他の $P_3 \cdot P_5 \cdot P_6$ は、特にこの西側に補強を要し、そのための柱の穴であろう。

本遺跡の住居址は、地形に従い南向きであるが、この住居址に限り、炉の焚口と床面の空間とにより南東に向つている。これはこの地形が南東に向つて開いて

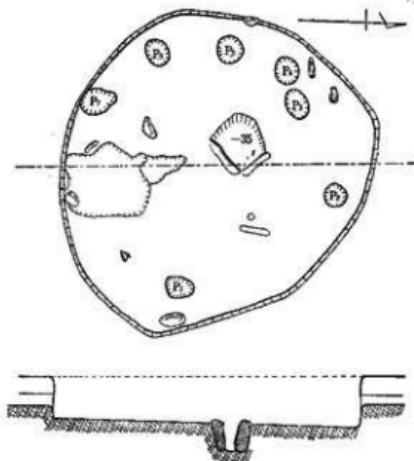


図48 尖石第一七住居址実測図

いるためであろう。これは家屋が暴風を振る東南の異風と正面することとなり、これに対して家屋の補強として特に西側に柱三本をたてた、その穴が $P_3 \cdot P_5 \cdot P_6$ としてこの方面に集中しているのである。

出土品は、土器一点と石器七点とであつてそれは床面からである。

土器は口縁と体の三分の一を欠き南の地床の穴から出土し、石器は垂飾石一点・原石塊の敲石一点・石錐完形三点・同破片三点・凹石二点・定角式小形磨石斧一点等であつた。

第一八址 壊穴住居址（図版一一下・捕図四九）

この遺跡の最西端にある畠第二九五一番の南側の一〇〇坪を発掘して得たただ一ヵ所の住居址であつて、この畠の南側の中央、南作場道に接して現地表下、一・一〇米（黒土層三〇釐、褐色土層三〇釐を経て基盤の赤土層を五〇釐掘りさげる）の深さにある。現在、当遺跡における最西端の住居址である。

平面は、径南北四・二〇米、東西三・三〇米の椭円形で、非常に堅い平坦な床面の中央に土器を埋めた炉址がある。口径三〇釐、高さ一三釐、土器の頸部を埋め、これに他の土器の基脚の破片を地床と水平に埋め、その炉縁を補足した炉址である。その東側と北側とに各々細長い自然石を置く。炉縁としたものであろう。この土器は火熱のため焼瓦のように赤変してあつた。高さ五〇釐の側壁が床を囲むが、溝はなかつた。

柱穴は八ヵ所にあり、床の中心をよぎる長さ二・七〇米の対角線上の四分点にある $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ が四主柱のものであろう。口径 $P'_1 \cdot P'_2 \cdot P'_3$ は四五釐、 P_2 は二〇釐、深さはどれも五〇釐の平面円形の直穴である。壁際から三〇釐離れた内床にある。 $P'_1 \cdot P'_2 \cdot P'_3$ はそれぞれ $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ の副柱のものであろうが、 P_5 はその意義を明らかにしない。

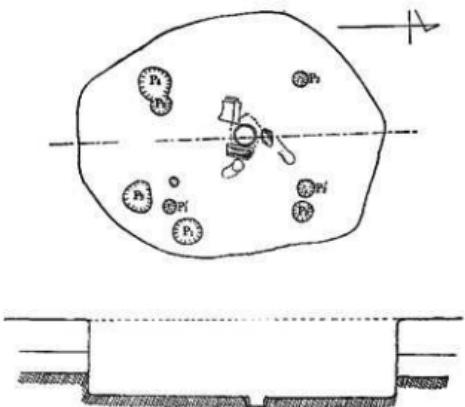
出土品は地床からは炉に使用した土器と、柱穴から黒曜石塊五点のみであった。そして堆土からは、復原し得た土器一〇個分の破片と石器類八点・石錐五点・石錐一点・石小刀二点と他に土器片を利用した盤状のもの二点

とその破片一点とであった。これは炉址上を中心として四方からなだれこんだ状態に遺存していた。

未完掘住居址

第一八号の東一〇米、現地表下一・一〇米の深さに住居址の床面を発見したが、その位置が、東側は他の地主の畠に、南側は道路敷にあるので発掘するに至らなかった。

その床面から、中央に直孔のある滑車型土製耳飾一点と堅形石匙一点とが尖石第二形式土器片とともに出土した。



挿図49 尖石第一八住居址実測図

第一九号 竪穴住居址（図版一三上下・挿図五〇）

この住居址は、畠第二九〇三番の東端、南作場道の南に接

し、第三址に西接して発見された。

ここは南の渓谷に臨む傾斜面であつて、その地層は黒土層一五釐から二〇釐の褐色土層を経て基盤の赤土層となる。これを三〇釐掘り下げる床面としたから、この住居址は現地表下六五釐の深さにある。

平面は、径東西五・四〇米、南北五米のほぼ円形である。この床面は、平坦で堅く、そして高さ北側で三〇釐、南側で一五釐の側壁がこれを囲み、幅六釐、一〇釐の深さの溝がこれに内周する。

中央からやや北によって径七五釐の平面方形の竪穴炉址がある。底の赤土は深さ七釐に焼けこんでいた。またこの南側の床面は東西の幅九〇釐で、南北一・五〇米に亘って焼けて赤い。ここでも焚火をしたものであろう。

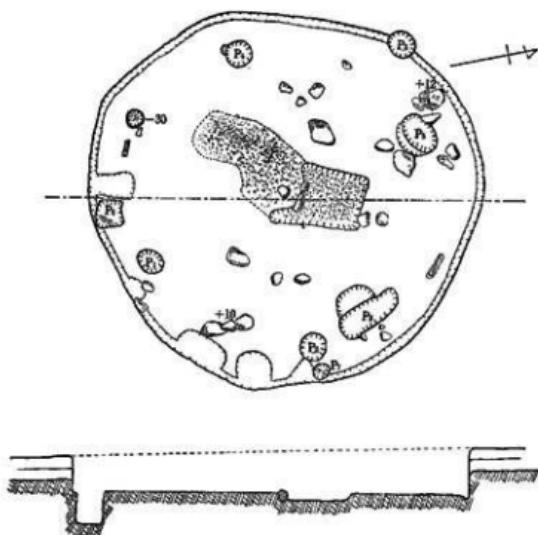


図 50 尖石第一九住居址実測図

柱穴は八ヶ所にある。床の中心をよぎる長さ四・二〇米の対角線上の四分点にあるP₁・P₂・P₃・P₄を四主柱の穴とする。これらは内床にあって、徑四〇厘の円形、五〇厘の深さに掘られた直穴である。P₂はやや小さいP₇が、P₃はその西の側壁にP₅がある。添柱の穴であろう。P₂の北側に大きいP₈があるが、その存在の意義を明らかにしない。

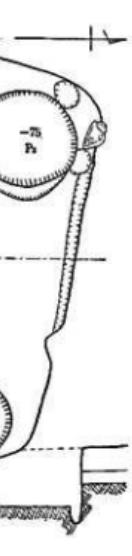
埋壺 床面の南側、東西両主柱P₁・P₄の中央から外側に向って一・五〇米の地点（これらが描く二等辺三角形の頂点）に底部を欠く土器をさかさにして床面と平に埋めてあつた。口徑三一厘、底径一八厘、高さ三〇厘の土器である。

出土品は壁面の土器破片と、床に埋めてあった土器と石器は、石鏃一点・同破片一点・小形磨石斧一点・打石斧一点・凹石二点・窪みある軽石等であつて、他に黒曜石屑多数と、焼け焦げた痕跡のある花崗岩の残塊があつた。

この住居址の床面には、殊に炉址の北西隅にかけ盤石一八個が遺存していた。それは扁平の石で表面は滑らかであった。炉址の他、これらの塊石の数と広い焚火跡からここは何かの細工場ではなかつたかと想像される。

第二〇址 竪穴住居址（図版一四下・挿圖五一）

この住居址は、畠第二九〇一番にある第一址の東二米の地点にあって、北側は南作場道に沿い、東側は松林に続く。台地の南斜面、現地表下八〇釐の深さにある。



第二〇址 竪穴住居址実測図

床の中から北によって竪穴の炉址がある。径一・二〇メートルの平面方形で、六〇釐の深き底狭く掘られてある。そして、東側に扁平な大きな石が炉縁石として竪に深く掘りこんである。また炉縁には、角形に作つた花崗岩が一三個積み並べてあって、その一個が完全であったが、多くは風蝕のため崩れかけていた。

柱穴は大なるもの四ヵ所、小なるもの三ヵ所にあった。

床の中心をよきる長さ五・四〇米の対角線上の四分点にある大きなものP₁・P₂・P₃・P₄をその主柱の穴とする。その口径P₁・P₂・P₄は一米、P₃は一・二〇米、深さP₁は三七厘米、P₂は四七厘米、P₃は七五厘米、P₄は五六厘米あって、P₁とP₂は添石がある。P₃の北西隅に沿うP₅・P₆は主柱の副柱のものでP₇はP₃またはP₄の支柱の穴であろう。

埋甕 南側両主柱穴P₁・P₄の線、長さ五米の中心から外側一・五〇米の地点（両主柱穴を結ぶ線を底辺とした二等辺三角形の頂点）に、口径三六厘米、高さ三七厘米の底部を欠いた變形土器の口縁を地床と平にして埋める。

出土品は埋甕土器と他に西南隅に立体的把手づきの土器の半分、それに堆土中から出土した深鉢形土器、（これは復原の結果完形土器となつた）と、小さい鉢形土器（口径五・五厘米、高さ四・五厘米、丸底）で、これは素文のもので器の内外を丹彩してあつたから、器内に充填してあつた黒土は丹色に染まっていた。或は丹彩に使つた土器かもしれない。

石器は、身長一七厘米、幅六厘米の秩父石の大きな磨石斧一点、これは東北隅から出土し、黒曜石の石槍一点、身長八・五厘米のもの、石鎌一〇点・円盤状細石器一点・打石斧二点・同破片一点・凹石二点等であった。他に花崗岩の石材で、長さ一八厘米、一辺七・五厘米の角材として整形したもの一五個が炉址の周囲から出土し、床上には黒曜石屑が沢山遺存していた。

昭和十七年発掘

第二一址乃至第二五址の一群は、相重複して、台地の平坦部の畠第二九六三番の西南端の隅、即ち南作場道の北に沿う地点で、現地表下一米の深さにある。

第二一址 竪穴住居址（拵図五二）

東側の第三三址、北側の第二五址、南側の第二四址とは相重複し、東側から北側へかけては直壁と周溝とによりその区画が確定される。他の側は、この延長線により区画を推定し、平面は、東西の径五・四〇米、南北の径四・五〇米の橢円形とする。

床は平坦で堅く、第三三址の床面から一五釐低く、第二四址よりは一〇釐高く、第二五址とは同一水平面にある。

床の中央に地床炉址があり東西八五釐、南北九〇釐に亘り床面が赤く焼けている。この南側に東西九〇釐、南北四〇釐の窓地が続く。東側に高さ一五釐の直壁がめぐり、東接する第三三址の床面はこの高さにある。北側はこれを欠き西北隅は床面が上り勾配となる。幅一五釐の溝が歴然と東側から北側にめぐり西・南の両側はこれを欠く。

柱穴は $P_1 \cdot P_2$ の小さきものと $P_3 \cdot P_4 \cdot P_5$ の大なるものとの五ヶ所にある。床の中心をよぎる長さ四米の対角線上の四分点にある $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ 及び第二四址の東北隅にあるものをこの住居址に属するものとして P_4 を四主柱の穴となすべきであろう。 P_4 は第一次の第二一址の主柱穴とされたが、第二次の第二四址にも利用されたものである。

$P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ はいずれも側壁から三二糸の内床にあって、 P_1 は径三九糸、五四糸の平面矩形、 P_3 は径五四糸の不整円形、 P_2 はこの西北隅に径七五糸の小整穴と続くが、その径四三糸の平面円形と推定される。

他に床の南東隅に径三六糸の同一形態の $P_5 \cdot P_6$ があるが、これらは第二三址に属するものであろう。出土品は、手捏作りの完形小土器が周溝から出土し、石器は凹石二点のうち一個は弁柄をすりつぶしたため、その痕跡が石膚に認められる。打石斧一点・棒状の鉄平石一点等であった。

この床面は、東接する第二三址の床面よりも一五糸低く、その東側では床面に堆土があり、且つ第二三址の床面と水平に赤土でたたんであったから、ここに張床して第二三址の床面を拡張したものである。またその南側は、この床面より一〇糸低い第二四址に喰いこまれているから、第一址を第一次のものとすれば、第二三・第二四の兩址は共に第二次に構築されたものであろう。

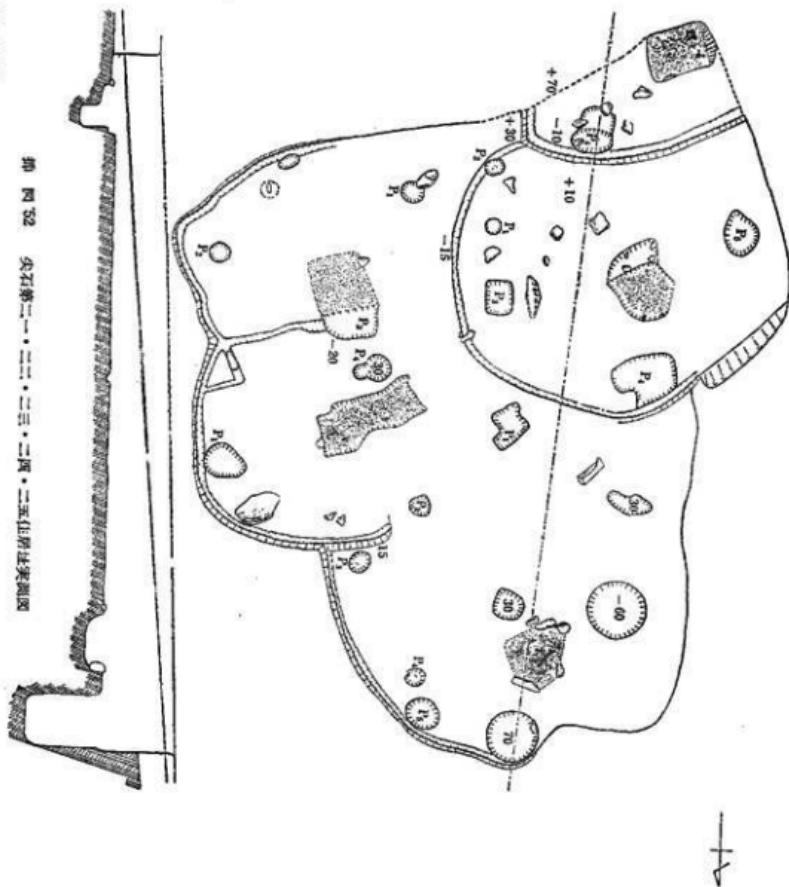
第二二址 穹穴住居址（圖版五二）

第二一址の東北隅に東接し、北側と東側とは、直壁とこれに内周する溝により、南側はその半ばまで周溝の延長線により区画が確定され、西北隅はこの床面と相接する第二五址の床面と同一水平面にあるから、推定によりその平面を南北の径三・六〇米に、またそれを東西の径とする円形である。

床面は、南接の第二三址及び北西に接する第二五址の床面と平坦をなして堅い。この床の北側の中央から高さ一五糸の側壁がめぐり、東側は二〇糸となり、南接の第二三址の東壁に続く。溝は、側壁の裡に内周し、南側に延長してその半ばで終る。

床の中央に径八〇糸の方形地床炉址があり、この西側に長さ九〇糸、幅六五糸の不整形の竪穴が二〇糸の深さに掘られている。

拂岡52 尖石第二・三・二三・二四・二五住居社実測圖



柱穴は P_1 乃至 P_4 で四ヵ所にある。

P_1 は東側の中央にあって径五〇厘米と三〇厘米の円形の直穴が二つ相続して三〇厘米の深さにある。 P_2 は、西北隅第二五址との接触線上にあって径三〇厘米、深さ三〇厘米の平面円形の直穴である。 P_4 は炉址の南近くにあって、径三六厘米、深さ三〇厘米の円形直穴で、その東側に小穴が連接する。 P_3 は、南側の中央脇溝上にあって南接する第二三址の地床炉址に北接する坑穴をもつて柱穴と推定する。

今、これらによつて主柱穴となるべきものを検討するに、 P_4 は余り炉址に近接するから主柱穴としては不適格である。 P_1 ・ P_2 ・ P_3 はほぼ三米の等間隔で相対応するから、これらを三主柱穴として選定すべきであろう。或はこの住居址外にあって、近接する第二五址の P_1 ・ P_2 を本址に属するものとすれば、本址内の P_1 ・ P_3 とともに四主柱穴となり、ほぼ径四・五〇米の対角線上の四分点にあって、 P_1 ・ P_2 と第二五址の P_1 ・ P_3 とは三米の等間隔にある。

出土品は底部を欠く筒形土器一点が、北側にある木葉状大形砥石の前に横倒れになつてゐた。石器はこの大砥石と右匙一点・凹石一点等で、他に輕石塊・角岩片と配石二個があつた。

第二三址 積穴住居址（図版五二）

第二二址に南接し、東側から南側にかけて高さ二〇厘米の側壁とこれに内層する溝とにより、この方面的区画は確認し得られるが、北側は、この床面と北接する第二二址の床面と相通じて平坦で、そこに境界となるべき遺構がなく、また西側は第二一址が一段低い床面で喰いこみその上にこの床面を赤土で張床して拡張したため、その限界が認定し得られない。それで地床炉址を中心とし、それから東壁と南壁とまでの同一距離の二・四〇米を基準とし、平面径四・八〇米の不整形を想定する。床面は平坦で堅く、西接する第二一址の床面から二〇厘米、同第二四址から一〇厘米高い。この床の中央に径九〇厘米の方形の地床炉址があり、これに北方に五〇厘米、梯形の積穴深

さ一〇畳のものと連続する。

柱穴は床面南側の東西両端に口径三三畳、深さ三〇畳のP₁・P₂がある。このP₁・P₂を結ぶ長さ三・三〇米を底辺として正三角形を作ると、その頂点に当る北側の地点に同一の大きさのP₄がある。これを主柱穴の一つとすれば三主柱穴となる。高さ二〇畳の側壁が東側から南側にめぐり、その西端は未発掘の黒土層中に没入し、この方面にも近接して住居址が埋蔵されるものと認められる。この側壁に溝が内周し、東側にては第二二址の床に延長し僅か六〇畳で断絶した。

出土品は床上になく炉址の南西隅上の堆土に土器片、石器、石片等が集積していた。

第二四址 未完掘の竪穴住居址（國版一五上下・攝圖五二）

第二四址は、第二一址の南側に喰い込み、その床面より一〇畳、また東に接する床面よりは三〇畳低い。

住居址の大半は、南作場道の道路敷地下に埋没していたから、発掘することができなかつた。僅かに北側の床面に到達したのみで、それは現地表下七〇畳の深さにあつた。北側は第二一址の床面から一〇畳深く掘りこみ、これが側壁となり東にめぐって三〇畳の高さの側壁となり、これに溝が内周する。

この床面の西南の地点に竪穴炉址がある。東西の径一・一五米、南北の径七五畳、深さ二九畳の大なるものである。また床の東北隅に主柱穴と推定される東西の径六五畳、南北の径四五畳のP₁がある。

これらの遺構から径五・四〇米の住居址が推定される。

出土品は、炉址上の堆土に集積し、それから土器破片の他に石器として石鐵一点・同破片二点・凹石三点・打石斧二点・同破片一点が出土した。

第二五址 穫穴住居址（攝図五二）

第二五址は、現地表下東端で七〇畳、西端は六〇畳の深さにあって、第二一址の北方に接し一部分は第二二址に重複し、東側は高さ一〇畳の側壁とこれに内周する溝とが、北側の中央まで弧を描いてめぐるから、その区画が判定されるが、西端は壁も溝もなく、また南側は第二二址の床面がそのまま本址に延長して境界がなく、壁も溝もない所以、柱穴の位置と遺物の存在地点から、平面、径東西五・八〇米、南北六米の円形の住居址が推定される。

床は平坦で堅く、この東側には高さ一〇畳の側壁がめぐっているが、西側は、地形が西に傾くので壁はない。そして、南東隅では、この床面は第二二址の床面よりも一五畳高いが、それから西では同一の水平面となる。

床の中心から北に偏して竪穴炉址がある。東西の径一米、南北の径九〇畳の浅い不整六辺形であつて、その東北隅に扁平の石一点、西南隅に小塊石三点と、西北に小塊石一点の圍った石を遺す。底は赤く焼けている。

柱穴は、床の周囲に八ヵ所、中央に一ヵ所の計一〇ヵ所がある。

これらうち、床の中心をよざる長さ四・八〇米の対角線上の四分点にある $P_2 \cdot P_5 \cdot P_6 \cdot P_8$ を組合わせて四主柱の穴とし、南側の中央にある P_1 及び中心にある P_9 と北側にある竪穴とで棟木の支柱穴とすべきであるうか。

竪穴 床の北側が張り出してそこに径七八畳、深さ七〇畳、また炉の西側に径九〇畳、深さ六〇畳のともに平面凹形で直壁平底の竪穴がある。柱の穴としてよりは貯蔵庫としての用途が考えられる。

出土品は、炉址の東側から石鏃一点・石小刀一点と黒曜石屑等が散在し、床の南側から大形粗製石匙一点が、また南西隅 P_8 の南東から長方形の角柱石とともに石鏃一点・石小刀一点・凹石一点・打石斧一点、黒曜石屑等であった。

第二六址 貯蔵庫か（未完掘）（圖版一六上下・捕圖五三）

第二三址の東四米、南作場道の北に沿い、その南半分はこの道路敷にかかり、現地表下四五畳の深さにあって、南側は発掘するに至らなかつた。径東西四・一〇米で南北は四米と推定される。

中央は径一・九〇米と一・七〇米との平面やや楕円形で一米の深さに掘った竪穴となり、この竪穴の底面を、また東西の径一米、南北の径一・四五米の平面は瓢形に二〇畳の深さに掘り下げてある。

高さ三四畳の側壁が東、北、西の三側を囲み、なお南側にも及ぶものと推定される。これには周溝がない。

柱穴が二ヶ所にあって、東北隅のP₁は、径九〇畳と五〇畳との楕円形で底面には、なお径四〇畳、深さ五〇畳の円孔がある。P₂は、西南隅にあって径四〇畳、深さ三五畳の方形である。

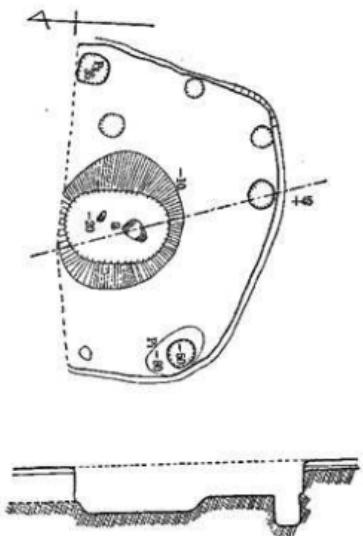
この遺址は、床面の所々に窓みがあり、また生活の中心である炉址の設備がないから、住居址以外のものと推定されるが、その意義を明らかにすることができない。

第二七址 竪穴住居址

（圖版一七上下・一八上・捕圖五四）

この住居址は、南作場道の北に沿い第二六址の東一〇米、現地表下五〇畳の深さにある。南側の一部は道路敷の下にかかり、その南に第四址が接す。

床は平坦で堅い。床面と竪穴外の赤土面との



捕圖 53 尖石第二六住居址実測図

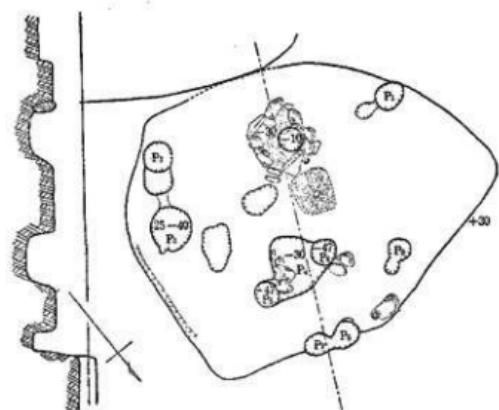


図 54 尖石第二七住居社実測図

差は三〇畳で、これが址内へ傾斜して壁が判然としない。それに、周溝は僅か東側にそれらしきものが認められるだけである。従って竪穴の平面はこの赤土の傾斜する区画により、東西の径五米、南北の径四米の不整形と推定される。

炉址は三ヵ所にある。第一の炉址は、床の南に偏在して石で囲う。即ち、北側は三個、東・南・北の三方面は各二個完計九個の同じ大きさの自然塊石を堅に掘りこんで、東西の径八〇畳、南北の径九〇畳の矩形、三〇畳の深さのもので、その底は焼けて赤い。なお底面の南側に接し径三〇畳、深さ一〇畳の円形直穴一個がある。これは土器が埋没してあつたものか或は柱穴かその意義がわからない。

この北に接し第二の地床炉址があり、径東西八〇畳、南北九〇畳に亘って床面が焼けて赤い。

この北に接し第三炉址がある。焼灰の層があつて、その下に石塊の断折したもの五個を集め、その上に疊形土器の口縁破片を遺存する。これらの塊石や土器片を取りあげてその下の堆土を除去すると、赤土の地床に径七〇畳、深さ四〇畳の円形直壁平底の竪穴となる。その東側に五個の石を集積する。そして竪穴内の西側と東北の隅に径三五畳、深さ四七畳の円形直穴がある。この竪穴の底で火を焚いた形跡はない。即ち、この竪穴の上に自然塊石五個を集積し、その上に土器片をおいて焚火したものである。その焼灰層は厚さ二〇畳で、この竪穴の上一體に堆積していた。竪穴の中には、黒土のみで焚火の形跡はなかつた。

柱穴はP₁からP₉の多数で、P₄は径五〇釐、他のものは、大概径三〇釐、深さ四〇釐の円形の直穴であつて、その位置は極めて順序なく主柱としての組合せは難かしい。

出土品は堅穴の上焼灰層の下にあつた土器片のみであった。

第二八址 堅穴住居址？（圖版一八下・插圖五五）

これは、南作場道の南側に沿い、現地表下二五釐の深さにあり、その南側は第一址の北側と重複し、北側は南北の道路敷下にあつて完掘には至らなかつた。

現在、東西六米、南北三・四〇米に亘り現出しているが、全区画は、南方または北方に拡がるものらしい。

東側は、高さ一五釐の側壁とこれに内周する溝とから、西側は低い側壁によりその区画となり、北側は道跡敷地にて南側は第一址と重複してその区画を明らかにしない。

区内には、敷石遺構二ヶ所、焼土箇所三ヶ所

所等それに埋甕が二ヶ所にあつて、その時代による生活面も重複するものと思われ、その意義の解明に苦しむ。ここには、單にこれらの遺構の状態のみについて記述する。

焼土箇所 三ヶ所

(一) 住居址内西側に、東西一・五〇米、南北一・三〇米に亘り床面が焼土となる。この北側に沿い、東西の長さ一・五〇米、南北の幅四

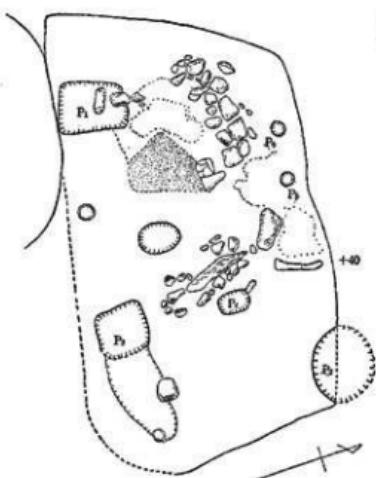


插圖 55 尖石第二八住居址実測図

五軒に亘り、最大三〇軒で、それより以下の円盤状安山岩の自然塊石一七個を細長く敷き並べる。

(二) 焼土箇所(一)の東北方に接し径六〇軒の範囲にある。

(三) 焼土箇所(二)の東北方側壁に近く焼土があつて、東南の両側に長い石一個ずつをおく、石で囲つた炉址であろう。

敷石遺構 二ヶ所

- (1) 焼土(一)の北側にあり、焚火のための座席であろうか。
- (2) この床面の中央に長さ一米、幅二〇軒の幅のせまい鉄平石の一枚を地床よりやや高目に南北に長く水平に敷き、その後側と左右両側に拳大の自然石塊数個を敷き詰めて、この鉄平石を囲んで、あたかも祭壇の状態にする。この鉄平石の壇上には石鎚一点が遺存し、背後から石匙、小形磨石斧各二点が出土した。

埋甕 二ヶ所

(イ)は、敷石遺構(2)の前方四五軒の地点に、口径四五軒、高さ三〇軒、底部の欠けた土器を床面と平に埋める。

(ロ)は、埋甕(イ)の南方六〇軒の地点に口径一五軒底部の欠けた土器を地床と平に埋める。

柱穴は六ヶ所にあり、形状は同じくない。位置もまた秩序がないから主柱穴としての組合せは至難であった。
P₁ 西南方に南北九〇軒、東西六五軒、平面方形で中に石塊があり、また底面に径二五軒の半月形の小穴があった。

P₂ 東北方にあって北壁に沿い、径東西一米、南北六〇軒の平面橢円形のもの。

P₃ 東南方向で東壁から一・五〇米の内床にあって径東西六〇軒、南北七〇軒の平面方形でこれから東方へ長さ一・三〇米、幅七〇軒の浅い溝みが焼く。

P₄ 敷石遺構(2)の背後にあって径東西三〇軒、南北五〇軒の平面長方形のもの。

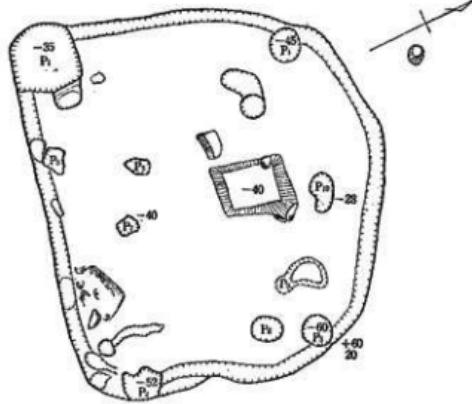
P₅ · P₆

西側に口径一五釐のものが四五個の間隔で東西に並ぶ。

出土品は埋蔵してあった土器二点と敷石遺構からの石鏃一点・石匙一点・小形磨石斧一点等の石器類であった。

第二九址 竪穴住居址（図版一八下・採図五六）

この住居址は烟第二九六四番の西南隅、南作場道の北に接し、現地表下四〇釐の深さにあって、第二七址の東九米にあり南にある第二〇址と相対す。



P ₉	P ₈	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	順位
方 不 整 方 形	円 円 形	円 形	不 整 方 形	方 形	方 形	平面形
二 一	二 四	四 五	四 五	三 〇	一 〇	口徑(輪)
四 五	六	五	〇	二	三 五	(深さ) (輪)
南 壁 柱	西 側 柱	東 側 柱	南 側 柱	南 側 柱	南 側 柱	深さ
P ₁₁	P ₁₀	P ₉	P ₈	P ₇	P ₆	順位
円 形	円 形	円 形	円 形	円 形	方 形	平面形
二 二	二 二	二 九	三	二	二	口徑(輪)
四 〇				四 〇		(深さ) (輪)

主柱の穴とし、床の中心の南北線上に
ある P_7 ・ P_{10} を櫟木の支柱穴とし、 P_{10} を
頂点とし、これに対し P_9 ・ P_{11} を結ぶ線
がなす三角形の両端にある同形の穴と
ともに、屋内に設備したものの柱立の
穴と推定される。

西南隅にある径一米平面方形で三五楕の深さの竪穴P₁は、立柱以外の目的のものと想像される。竪穴外北一・八〇米に口径一八楕で斜めの深さ三〇楕のP₁₂がある。主柱に対する支柱の穴であろう。

第三〇址 竪穴住居址（國版一九・補國五七）

南作場道の北に沿い、第二九址の東に続き現地表下六〇畳の深さにある。

床は水平で堅く、これを高さ三〇厘の側壁がめぐるからその区画は歴然とし、西側は、ほぼ一直線をなし、南北四・三と東とは弧を描き、北側は二ヵ所に張り出しがあって弧を作る。従つて平面は、径東西四・一〇米、南北四・三〇米の不整円形をなす。側壁に内周する溝はないが、床の北側に東西に続く僅かな溝がある。

床の中央に竪穴炉址がある。径東西一・一〇米、南北一米の平面矩形で深さは四〇厘米、北側に縁石三個を遺存する。

P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
凹形 円形	凹形 円形	田形	田形	二七	口浅 深者 (幅)	頸位 平面形
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	同形の 側もの連 続の二の	口淺 深者 (幅)
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	同形の 側もの連 続の二の	口淺 深者 (幅)
り連穴あ						頸位 平面形
P ₃	P ₄	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁	P ₂
横門形	横門形	東西南北六六〇〇	東西南北六六〇〇	一八	口徑(幅)	口徑(幅)
南北四五	南北四五	南北四五	南北四五	七〇	深者 (幅)	深者 (幅)
り外半北あ				く二個続		

このうち口径、深さ共に等しく、床の南よりにおいて相交わる長さ三・三〇米の対角線上の四分点にあるP₁・P₂・P₄・P₅をもって四主柱穴と仮定し、のち東北隅にある溝より北側だけ拡張されたものと思われる。

出土品は完形深鉢形土器一点が北側の床面に横に倒れていた。口径一八釐、高さ三三釐の尖石式第三形式に属するものである。

第三一址 堅穴住居址 (圖二〇上・下・插圖五八)

第二九址の東二米、南作場道路敷を中心北は畠第二九六四番に、南は原野第三〇六四番にまたがり、現地表下八七釐の深さにあり、南側の原野にかかる部分は前年試掘しこれを埋没したので、今回の発掘には、その全区画を現出するに至らなかった。

平面は、径東西六・九〇米、南北は現在五・三〇米現出しているから、側壁と周溝の延長線から六・二〇米の円形、または、隅丸の方形と推定される。

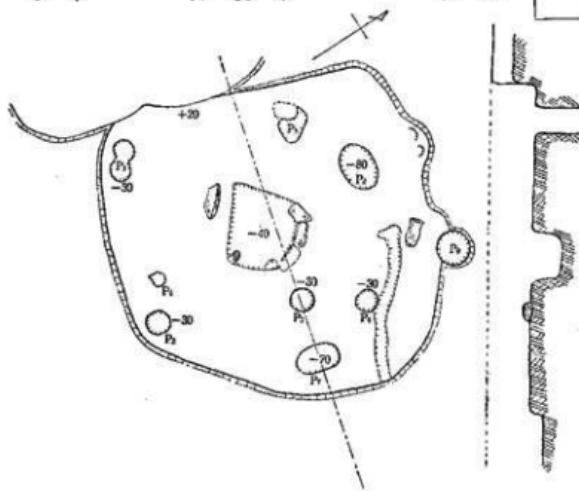


圖 57 尖石第三〇住居址実測図

床は平坦で堅く、これを高さ二〇釐の側壁が全周し、この間に一条の溝があげぐる。

炉址は三ヵ所にあって、第一址は、床の中央から北に偏在した竪穴炉址である。その径東西南北共に一・二五米の方形で、四七釐の深さに底狭く掘り下げる大きなもので、南側にある立石を境とし、幅三〇釐、長さ三〇釐の炉址よりは浅い溝がある。

北側は石を積みあげる。炉の底と側壁と南側に突き出た溝の突き当たりの壁面とは焼けて赤い。また、炉縁の隅々からは花崗岩塊の焼燃したもののが、そして、北側の炉縁石の下は空洞になつてその下側の平石の上には酸化鉄の残塊が粉末状を呈して遺存していた。この炉の北側の床面には、鐵平石数枚が敷き並べてあつた。

炉址第二は炉址第一の南西一米にある。堅形の石圈炉址であつて、平面は東西八五釐、南北七〇釐の矩形で、四〇釐の深さで西側のみ扁平石二枚、他の側は一枚で竪形に囲む。この炉縁は、床面から三五釐の高さにあって黒土層中にあるから、第二の炉縁と水平に南側の黒土層上六〇釐に亘り焼土が堆積していた。

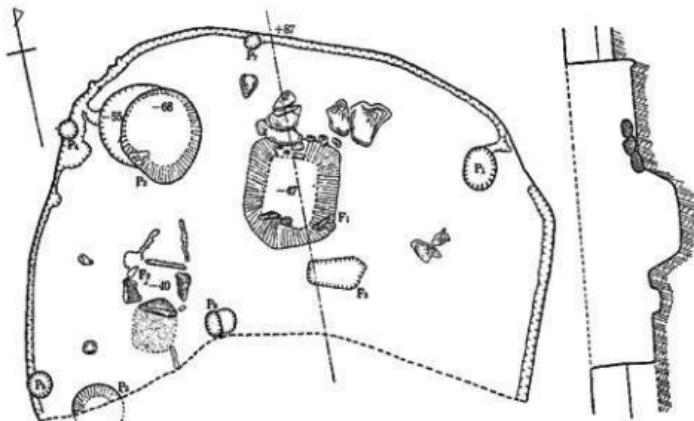


図 58 尖石第三一住居址実測図

第三の炉址は、第一址の南東隅にあって、東西八〇畳、南北四〇畳に亘り溝地となる。これを赤土で埋めて床面となっていた。

柱穴は次の八ヶ所にある。

P ₈	P ₇	P ₆	P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	順位	平面形	口径(畠)	深さ(畠)	説明
円形	精円形	円形	円形	円形	円形	六六	一〇〇	南北四〇二	精円形	六〇	五五	上層は砂土、下に赤土塊が埋め てある。西側に張り出している。
一八	三三	二四	五〇	六五	五〇	五〇	一一八	西北六〇二	六六	六〇	西北隅の溝にあり。	
二六	二六	二六	二六	二六	二穴連結 北側の溝の中にある。							

このうち床の中心をよぎる長さ六米の対角線上の四分点にあるP₁・P₂及び推定P₈を四主柱穴とする。溝にあるP₅・P₄・P₇・P₃はそれぞれ支柱穴であろう。

出土品は、床上一〇畳から完形土器二点、また床上からは磨石斧一点と凹石一点とがあった。

第三三一址 半掘の竪穴住居址 (攝図五九)

第二九六三番の畠にあって、第二四址の北の方三一・

五〇米、林道の南空塚に沿い、現地表下一・一〇米の深さにある。その北半分は空塹により既に欠失し、その南側の半分だけを発掘した。これを基準として全区画を想定する。

その区画は、高さ二〇畠の側壁と、これに内周する溝により、東西の径五・四〇米、南北の径は、炉の中心から南の側壁までの距離三・一五米を基準とし炉を床の中心とし、六・三〇米が推定され、この平面は不整円形とする。床は、平坦で堅く、北側に石團の炉址がある。扁平石八個(北側二個、東西両側各一個、南側小さきもの四個)を据えて丹念に囲む。その平面は東西の径一米、南北の径九〇畠の矩形である。

柱穴は、現在南側に三ヶ所、東側に一ヶ所、また炉の東側一・四五米に一ヶ所の五ヶ所にあって、径三六畠、平面円形の直穴である。

出土品は、東側の溝深く完形磨石斧一点が安置さ
れてあった。

昭和二十九年発掘

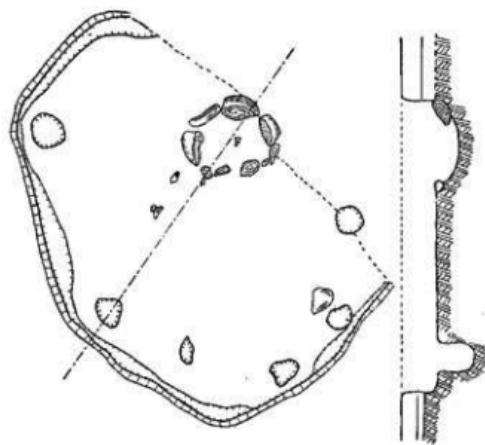


図 59 尖石第三三号住居址実測図

第三三号 積穴住居址 (圖版二・攝圖六〇)

第二九六一番の桑畠、東南隅の地点、現地表下八五釐（東端）と六〇釐（西端）の深さにある。そして南は、南作場道を隔てて、第五号に相対し、東には、第二一・第二二両号がある。

側壁は北端で高さ三五釐、これが東西の両側を囲み、南側で高さ一〇釐となつてめぐる。これに幅一五釐の溝が歴然とめぐり、これにより、その平面は、径五・一〇米の円形である。

床は、平坦であるが軟弱でその面が凹凸している。この床の中央から北に偏って石畳みの積形炉址がある。炉石は北側で一個、西側で三個、南側で二個、東側で二個の計八個で、堅に掘りこんで深さ四四釐で底を狭くかこむ。その平面は東西の径一・〇五米、南北八五釐の矩形である。

柱穴は、次の九ヵ所にある。

床の中心をよぎる長さ四米の対角線上の四分点にある $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ を四隅主柱穴とし、南北の両側の中央に

P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	部位
矩形	方形	円形	円形	橢円形	平面形
五四一	三九五	六〇四	六四二	〇一二	口唇(脣)
一五四	二五三	六六三	五〇三	一五五	内窓(窓)
		石石石 あゆみ ありに 四打り	結石		(包)
P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	部位	順位
円形	橢円形	円形	円形	平面形	平面形
三〇一	一一五	二七	六〇四	三四	口唇(脣)
二五					脣(脣)

相対応してある P_3 ・ P_6 を棟木の支柱穴とすれば、この上家は、六主柱によつて構架されたものであらう。

出土品は、炉址の東側に堆土とともに八個の高さに土器石器が堆積し、内土器二点が完形に復原され、石器は、石錐一点・石小刀二点・石鏃四点・打石斧二点・同破片二点・磨石斧定角式一点・同棒状破片三点・凹石三点等に輕石塊・黒曜石小塊・同剝片等であった。

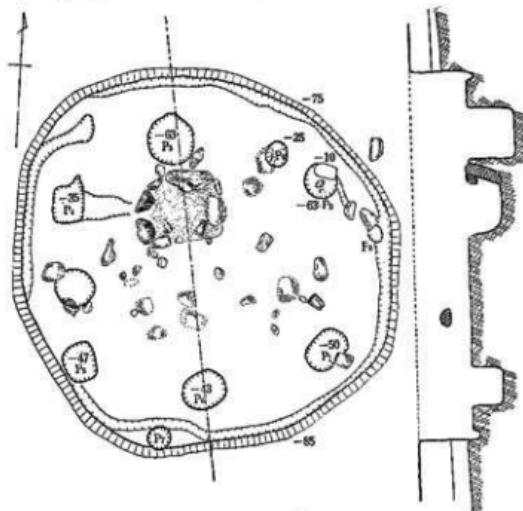
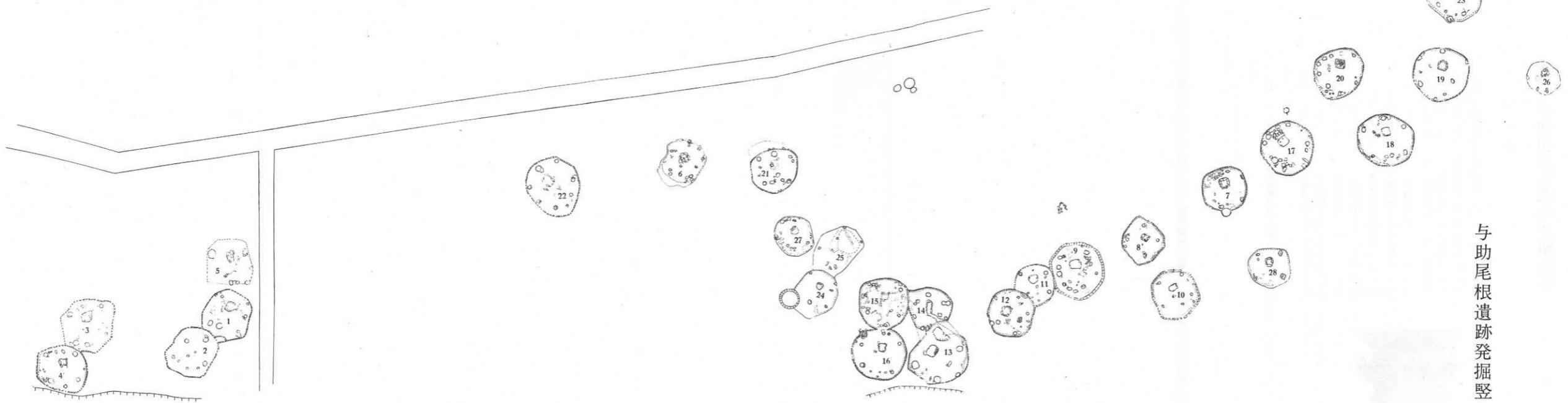


图 60 尖石第三三住居址实测图

与助尾根遺跡発掘豎穴住居址分布図



与助尾根遺跡の発掘調査

(一) 遺跡

位置　長野県飯訪郡茅野町豊平、即ち八ヶ岳西山麓、茅野駅の東北八軒にある。特別史跡尖石遺跡と水田の一小溪谷を隔てて、北方これと同一の地形をなす与助尾根台地の末端、尖石遺跡と同一線上（標高一〇七〇米）で、これに北接する。

地形　この台地は、東、天狗嶽の爆裂による泥流が形成した、八ヶ岳西山麓の西北方に緩傾斜する高原地帯が、その後の浸蝕から、尖石台地と分離し派生した東西二〇〇米、幅五〇米の地域を占め、南側は、比高三米を示して浸蝕谷に傾斜し、北側は、次第に一帯の高原地帯に移行する。この浸蝕谷

は、水田の開拓から現在の地形に変更され、南北の幅三〇米、東西四〇〇米に亘り西端から延長一五〇米までが棚田で、以東は湿地のまま澆水し、これが下部の水源となる。溪は、東で直ちに終り、本台地は、尖石台地に合体して一帯の高原地に続く。

区域　住居址群は、台地を東西に貫く中央作場道の南斜面にある。次の耕作地七筆が、ほぼその範囲と推定される。

与助尾根遺跡の発掘調査



第一圖 61 与助尾根遺跡発見の土器

地層 厚さ約三〇厘米の耕土層を上層とし、黒色の浸透した約三〇厘米の褐色赤土層を経て基盤の赤土層となる。

(二) 発掘

字名	東蘇	地番	地目	坪数	所有者
内三〇八四号	三〇八四号	三〇八六号	烟	一六〇坪	小平龜年
三〇九五号	三〇八七号	三〇八九号	原野	二五三坪	小笠畠太郎
一一四二号			畑	二六三坪	
				二五二坪	
				豈平村	
				豈平村	

発見 昭和十年五月、第三〇八四号原野が所有者の開墾から遺物が出土し、その中央の地表下一メートルに一大石圓炉址を発見し、遺跡として初めて注目を惹くに至った。

発掘の概況

そして次の経過により、昭和二十一年から昭和二十七年まで五次に亘り、相接続する竪穴住居址二

七基、平地住居址二基及び竪穴四カ所とを推定区域内（但し第三〇八四号は、地主の了解を得られなかつたので石圓炉址一ヶ所の出土のみにとどまる）に発掘し、ほぼ本台地上に立地した縄文式の一聚落址を調査することができた。

発掘年次表

順序	年次	地籍	地番	地主
第五次	第四次	東蘇第四七三四番	第三〇八四号	石圓炉址 第一址乃至第五址 (第五址平地住居址)
昭和二七年	昭和二十五年	第三〇八二号	第三〇八六号	第六址 第七址乃至第一〇址平地住居址 第一一址乃至第一六址
昭和二七年	昭和二十三年	第三〇八四号	第三〇八六号	第一七址乃至第二〇址竪穴一 第一七址乃至第二〇址竪穴一 第一七址乃至第二〇址竪穴一
昭和二七年	昭和二十四年	第三〇八五号	第三〇八七号	第一七址乃至第二二址 第一七址乃至第二六址
昭和二七年	昭和二五年	第三〇八九号	第三〇八九号	第一七址乃至第二七址竪穴三

発見の端緒

昭和十年五月下旬牛尼米作氏が、小平増太郎氏所有の原野第三〇八四号二五二坪を南端から開墾したところ、土器片が出土したということを語ったので、私は、六月一日二日の両日、開墾の手伝をしながら調査した。そして原

野のはば中央、東端から七米、南端から一二米の地点で、表面下〇・八〇米において石圓炉址を発見したのである。次いで十日、十一日の両日は北に向て開墾してしまったが、遂に遺物は発見されなかつた。この石圓炉址の発見によりこの台地もまた尖石と同様な遺跡であることが判つた。

さてこの石圓炉は、表面が平滑な扁平の自然塊石一二個を平に赤土面に堅く粘着させ、南北の長軸径〇・九三米、東西の短軸径〇・八〇米、深さ六釐、平面を稍円形に開む。加熱から炉底面は赤色化し、炉石には亀裂を生じたものもある。土器片が、この南側に堆積していた。この炉址を中心とする竪穴住居址がある筈であるが、當時私にその知識がなかったので、石圓炉発掘のみで終つてしまつた。

第一次発掘 発掘日録（昭和二十一年、二十二年）

十月二十日（昭和二十一年） 諏訪史談会で原始文化研究のため、この遺跡を発掘地に選び、細野正夫、矢崎孟伯各委員とともに調査することになった。たまたま小平龜年氏所有第三〇八二号原野の南半分を牛尼梅重氏が開墾して、蕎麦を蒔きつけた部分に土器破片が散乱し、その北端の東、未開墾原野との境は黒土が深く、それに炭屑さえ認められた。そこでここを調べるために、この境目に即し、トレンチを東西に設けた。地表下八〇釐で赤土層となり、それが竪穴住居址の床面と認められたので、この中央からトレンチを南北にのばす。この交叉点は、黒土が殊に深く、掘り下げるに方形状の小竪穴となり、底面は焼けて赤いから炉址として間違いない。午後これを掘りひろげると、炉址の北に円筒形土器が横に倒れていた。これを発掘することとし、開墾者にその承諾を求めた。

十月二十三日 豊平国民学校高等科二年生の助力を得て、この住居址をほぼ完掘する。

十月二十四日 諏訪史談会委員とともに清掃して与助尾根第一址とする。

十月二十七日 諏訪史談会員二百余名は、原田淑人先生を迎えて現地を見学した。午後は豊平国民学校で、同

先生から「東亞における日本古代文化」について講演をきく。

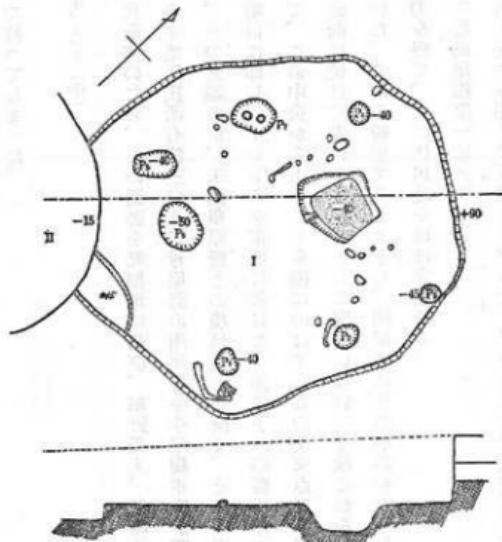
十一月二十一日 第一址の南西隅床下から黒土層が続いて深い。豊平国民学校高等科二年生の助力を得、第一址に接続する竪穴住居址を完掘し、与助尾根第二址とする。以下特別の場合を除き、単に第何址として記載する。

第一址 竪穴住居址（図版二三上・捕図六二）

現地表面六〇畳下の赤土層を、北側で三〇畳掘り下げて床面とし構築したもの。平面形は、掘東西四・五〇米、南北五・一〇米の不整円形。床は水平で堅い。但し、第二址と重複する

南西隅は、長さ一・八〇米、幅六〇畳に亘り、高さ一〇畳の黒土の上に厚き約五畳に赤土を盛つて張床とする。この床の中心から北に寄せて竪穴炉址がある。平面形径九〇畳の方形、底面狭く径七〇畳、深さ四〇畳に掘る。炉石は、南側に扁平石一個が貼りつけてあるのみ。炉底は焼けて赤い。赤土の側壁は垂直、高さ北で三〇畳、南は一五畳、東西両側はこれに傾斜してめぐる。但し第二址に重複する南西隅はこれを欠く。南西隅の一部に溝が円を描いて存するらしいが、周溝は全くなき。（第三三國版上）柱穴は六ヶ所にある。

これらのうち、ほぼ床の中心をよぎる長さ四米の対角線の四分点に位置するP₁・P₃・P₄・P₅をもって、四主柱



捕図 62 与助尾根第一住居址実測図

頭位	平面形	口縁(側)	深さ(側)	位置	説	明
P ₆	P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	
円形	円形	円形	円形	二七	四〇	東北隅主柱址
横円形	二七	二七	一	内床	南北隅主柱址	
円形	二七	四五	内床	内床	北西隅主柱址	
六〇	三〇	四〇	内床	内床	二穴連続するか 南西隅主柱址	
五〇	四〇	内床	内床	内床		

址と推定すべきか。P₆はその大きさから、柱址としてよりも、むしろ、貯蔵所とした方が妥当であろうか。他に炉址をめぐって所々に小孔が穿たれていた。出土品は至って乏しい。堆土から黒曜石無柄石鎌が碎かれているが、辛うじて原形を想像することができる。口縁内部に段階がある。蓋受か。頸部に文様帯をめぐらし、腹部には網状土紐により四個の迴旋文を対称的に描く。内部地肌を斜線で塗める。(3)南側壁から出土。推定高さ二〇釐、口径一三釐、底径八・六釐の有頸壺形土器の平面のもの。この腹部に渦旋文四個を対称的に、やや凸出した線条で描き、更にこの両側を壠塗きで凹めて、この线条を一段高くする。渦旋文の空間は、斜条線で塗め、その表現を一層効果的にする。柱穴が七ヵ所にある。

第二址 積穴住居址（插図六三）

本址の東南隅が第一址の東西南隅と重複し、それより一五釐低い床面に構築される。平面形は、径南北五米、東西四・五〇米の不規則形で床は水平で堅い。この中央と更に南北六〇釐との二ヵ所に埋甃する。その周囲の床面が焼けて赤く、他に炉址がないので、これを炉址とする。高さ北側三五釐、南側一五釐の側壁が床をめぐる。溝はない。柱穴が七ヵ所にある。

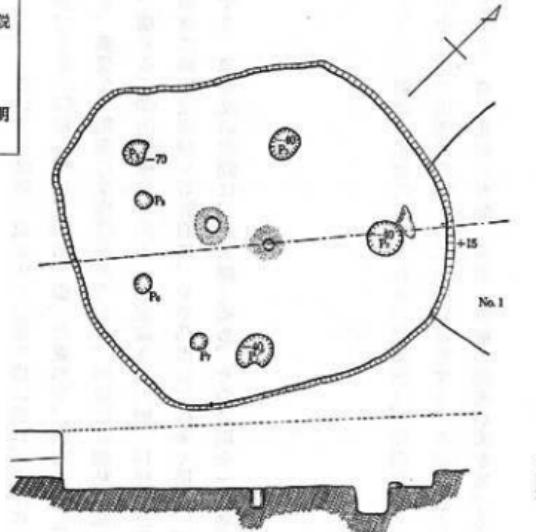
これらのうち、ほぼ等大等深である P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 を四主柱址に推定すると、北側 P_2 ・ P_3 の距離一・八〇米に対し、南側は間隔四・五〇米で、梯形をなす。 P_5 ・ P_6 ・ P_7 は南側床上にあって、 P_6 を中心にして P_5 ・ P_7 は一・〇五米の等間隔にある。入口のための柱址か。

出土品は乏しい。長さ三九厘米、幅一五厘米の安山岩の盤石が一個、 P_2 の北側に添置してあった。土器二個は火壺として埋めた壺である。(1) 地床中央に埋めてあった筒形土器。発掘の時多くの片に碎かれ、原形に復し得なかつた。(2) 火壺として埋めせるもの。口縁外反する甕形土

P_7	P_6	P_5	P_4	P_3	P_2	P_1	類位
円形	円形	円形	円形	円形	円形	田形	平面形
二	二	二	二	三〇	三四	四五	口縁(例) 深さ(例)
七〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	位
倒壁から六六 内床	置(例)						
							説明

穴の外床に配石一個

器、脚部は欠損していたが底は残存してあつた。現高一五厘米、頸径二〇厘米、底径一三厘米。この大なる底径は、この土器が網文式前期に近いことを示す。焼成堅緻、色調赤褐色、一条の細粘土紐文が頸をまき、口縁にのびて区画を作り、肩に延びてこれを綴



插図 63 尾助第二住居址実測図

に画す。この粘土紐文に内添し二条平行沈線文で曲文を描き器体全面に細かい斜綱文を施す。

四月二十六日（土）（昭和二十二年）第一址及び第二址を発掘した畠の西半分に、表土に黒色の濃い箇所があり、そこに住居址が埋没するとの予想のもとに発掘を計画し、豊平中学校第三学年六〇余名の助力を得て、東西にトレンチを設け、黒土の深い所でこれに交叉する南北のトレンチを設定し、竪穴の範囲を推定する。この四分した区域の表土を各班毎に排除し、全形を完掘した。これを第三址とする。

なお、この南に統いて黒土が深い部分があり、ここにも住居址が西接するものと予想された。
今日は、なごやかに晴れて暖かく、落葉松はずんずん崩え、鳶が頻りに鳴く。この生徒は昨年二度も発掘し、その経験があるので、作業は順調に進んだ。

四月三十日（水）豊平中学校第二学年生徒六〇余名の助力を得て統掘。

第三址の南からトレンチをのばす。このトレンチを中心にして、東西に分かれて発掘する。堆土から黒曜石破片三点出土。住居址の北西隅近くに土器と、これに統いて石棒一基が横に倒れている。住居址から石棒を発見したのは、これが最初である。中央から北端にかけ、ほぼ発掘し終る。午後二時引き上げる。

五月四日（日）昨日の雨は止んで今朝は曇り、八ヶ岳は雪で新たに裝う。十一時天候が定まったので、長野師範学校学生三男虎次、その同級生細田咸人君とともに出かける。

前に発掘しかけてあった西の側壁を南に追跡する。石棒に統いて土器が伏せてあり、その下から黒曜石小刀が出て。壁裾には溝が沿い、溝に打石斧二点が重なっており、床面に盤石がある。西の側壁は完掘された。次に、東の側壁を北から南に追う。壁裾に溝を伴う。

この方面には遺物はない。鉄平石一枚が、南北両主柱間に敷かれている。南の側壁を残し、午後四時帰宅。

本日の出土品　凹石三点・石鐵二点・石小刀一点・打石斧三点・石棒一基・土器四点等。

五月五日（月）暖か。鳴の端音につれて落葉松が頻りに崩れる。虎次、細田君とともに発掘。南側の堆土を除去し清掃する。この東西両主柱址の中間にあたって盤石が敷かれてある。時に豊平小学校第五学年児童八〇余名

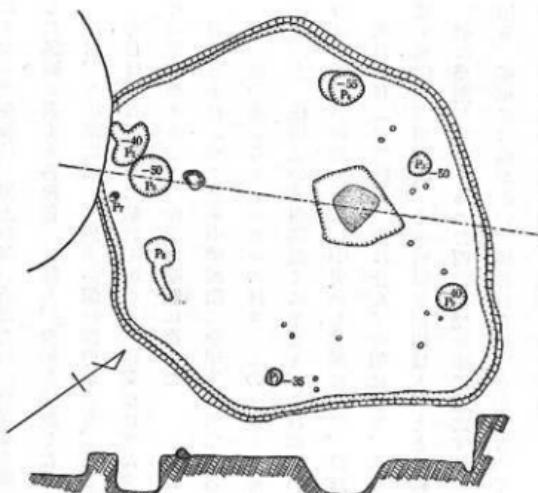
が見学する。一児童がこの盤石を指し、その下に宝物が埋めてあると言張ったので、取り除くと埋藏の口縁が円を描いたので児童たちは喝采して喜ぶ。埋甕に石蓋がしてあったのである。午後二時帰宅。第四

四址完掘。

第三址 竪穴住居址（図版二三下・攝図六四）

第二址の西六米にあって、第四址がこれに南接する。

第三址 竪穴住居址



第三址 竪穴住居址

一・〇五米の不等四辺形、深さ四五畳、底面狭く掘り込む。炉石はないが、底は焼けて赤い。側壁は北高く三五畳、東西は両側とも南に傾斜し、南側はこれを欠く。これに幅一五畳深さ一五畳の溝が内周し南側をもめぐる。柱址は七ヶ所にある。

これらのうち、床の中心をよぎる長さ四・三五米と四・〇五米の対角線上の四分点にあるP₁・P₂・P₄・P₅を四

位 置	説 明
平面形 口径(縦)深さ(縦)	P ₃ から四二楕内床
円形	側壁から二七楕内床
円形	側壁から二一楕内床
三〇	坑内から打石斧一点出土
三六	側壁から四五楕内床
四五	側壁から四五楕内床
五〇	側壁から四五楕内床
五五	側壁から四五楕内床
五七	側壁から四五楕内床
五〇	側壁から四五楕内床
六〇	側壁から四五楕内床
一一	三個連接改築したものか
?	鉢孔

P₃の坑内から打石斧一点出ている。

第四址 壓穴住居址（図版二三下・二四上・攝図六五）

第三址の南西隅に接触して、その南にある。平面形は径南北四米、東西四・四〇米、北側だけやや張り出した隅丸矩形をなす。床は塗壁状に堅く、水平よりやや南に傾斜する感がある。この中心から少しく北に寄って、石臼型炉址がある。口径七五楕のほぼ正方形、深さ五〇楕、底狭く掘り込む。この西壁に、厚さ一一楕、長さ三六楕、横三五楕の一大盤石を堅に据える。これは高度の加熱により、中央を縫に亀裂が通る。南縁には角柱状の石が四個不規則におかれ、東と北との両壁は二段に作られ現在炉石はないが、以前はここにも炉石を据えてあつたものであろう。また東北隅に「コ」の字形自然石を選んで据める。東の壁面には細長い凹石の断折した半分が貼りついていた。炉底は焼けて赤い。壁の側壁は、北に高く四〇楕、但し第三址と接触面だけ三〇楕、南は低く、二〇楕で、東西の面壁はこれに従つて南に傾斜する。これに幅一二楕、深さ一五楕の溝が内周する。五カ

主柱址となすべきか。北側東西主柱址P₂・P₄からほぼ等距離にあるP₃は、棟木柱址か。P₇の小斜孔はP₅に対する支柱址か。他に東側及び北側の床上所々に小孔があるが、これらは棚建の支柱穴とも推定される。出土品は全くなく、黒曜石破片と土器破片の小量が堆土中にあつた。

所に柱穴がある。

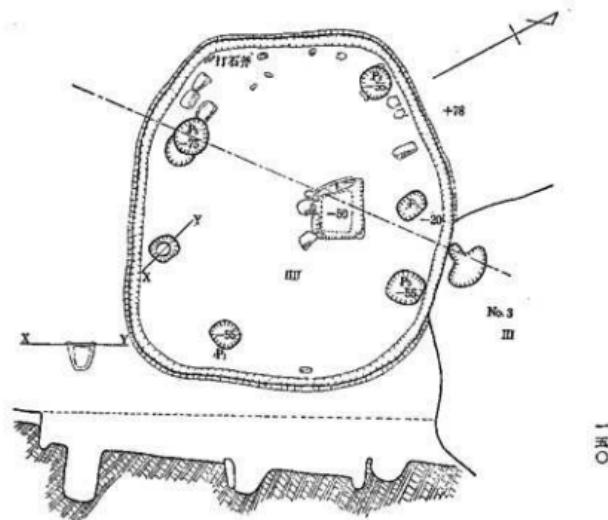
P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	頸位	平面形	口径(厘米)	深さ(厘米)	位	四	説明
円 形	円 形	圓丸 形	圓丸 形	圓丸 形							
四五	四二	四二	三〇	三六							
七五	五五	二〇	五五	五五							
四〇縄内床	圓壁から 側壁に添う 側壁に添う	四〇縄内床	四〇縄内床	四〇縄内床							

これらのうち、床の中心をよぎる長さ四米の対角線の四分点にあるP₁・P₂・P₄・P₅を四主柱址とする。これらは凡て二・七〇米の等間隔にある。

P₃は、北側P₂・P₄の両主柱址からほぼ等距離にあるから、第三址の例とともに棟木柱址となすべきか。

出土品は他の住居址より多く、主に北西隅主柱址の周囲床上からであった。

土器が五点ある。(1)壺形土器の口縁部。口径一二厘米。縦走の細文が見られる。(2)脚底部だけのもの。底径八厘米。太い沈線文が認められる。(3)壺形土器。脛部以下を欠く。現高一九厘米、口径二二厘米、厚さ八厘米。焼成堅緻。褐色。荒い筆書きで渦旋文や区画文を描き、区画内は竹管直線文で填める。(4)口縁部の破片。口唇に波状把手四個を対称的に加飾し、この外面と脣部とに渦旋文を笔書きする。(5)蓋石して埋藏せる完形壺形土器。高さ二十四



幅、口径一八・六厘、底径九・五厘、厚さ四耗。赤褐色。範掻きにより蛇行線条文を下垂し、器面を三区画し、各区画内に細隆起渦旋文を描き、この素地を竹管条線文で填める。この蓋石は、径三二厘×三七厘、厚さ四厘。ほぼ六辺形に成形された盤石である。中を満たしていた黒土は、東京大学理学部人類学教室の渡辺直経氏が分析した結果は、單なる腐植土であったという。

石器も數点発見された。即ち堆土から黒曜石製の無柄石鎌が一点、土器の下から黒曜石製石小刀が一点出土した。この石小刀はやや長い破片の片縁を両面から再打製して刃部としたものである。小形打石斧三点あり。二点は重ねて南西隅の溝から、一点は配石の下から出土した。棒状の大形の凹石一点が中央から割れて一断片は炉壁に、一断片は床上に分かれていたが合接する。木葉状石器一点あり。長さ二・五厘。黒曜石木葉状破片の周囲を両面から再打製して刃部とする。石棒一基。北西隅主柱址の前床に頭を東に横に倒れて出土。高さ二八厘、首部一二厘、軸部一六厘、底径長軸一三厘。安山岩質。表面を平滑に琢磨し、有頭形に成形。首は二段階にし、浅きくびれで頭部を作り、第二は、斜めに巧みにえぐりとつて頸部を作り、以上を顔面とする。頭頂は平滑に成し、軸の底面は原石面のままに凹凸がある。自重量あってよく安定して据わる。打蔽石器が一点。四角柱状の鉄平石の自然石。各稜とも打蔽によって磨滅する。底石一点。現在三個に折断し炉縁として使用されていたが、これを接合すると、長さ三二厘、幅二一厘、厚さ六厘、板状節理の鉄平石一盤石に復元される。その縁辺は加工して面を作り、表面は平滑に研磨されていて砥石として使用されたものらしい。

以上の資料から本址は、平面形隅丸の矩形、四主柱址が壁間に位置し、竪形石圍炉址が丹念に構築され、すべての機構が整然としている。また西南隅主柱址の前に完形石棒が遺存し、この周囲に遺物が集中し、これに対し、南側両主柱址に埋甕をして蓋石がしてあった等、特に注意すべき点があつた。

八月三十一日　岡谷中学校郷土班から遺跡発掘につき現地の指導を求められ、前発掘地の畠北側が未開墾にな

つていたので、これを発掘することにする。同校羽田教諭、豊平中学校岩下教諭、同部員八名参加。

女郎花が黄に、松虫草が淡紫色に咲き乱れているこの野原に、幅一米のトレンチを東西に設ける。東側に近く地表下三〇釐に一個の盤状の石があり、周囲の黒土には炭屑や黒曜石の破片が認められた。これから北にトレンチを追い二米、地表下四五釐に塊石があり、石は二個併列し、これに統いて北はやや深く、底の赤土面は焼けていて赤く炉址らしい。これを中心に住居址が推定された。余り炎暑が酷いので、午後三時作業を中止して帰宅。九月七日 続掘。炉址を中心にして四米に亘り黒土を四方に除去する。赤土面には掘りこんでなく、その面は柔らかい。従って側壁はない。遺物は何もない。柱穴らしい凹みはあるが浅い。ここは炉址があるから居住はしたものであろう。これを第五址とする。

これから北は作場道まで、また西は堀まで縦横にトレンチを設けて調査したが、何も発見しなかった。

第五址 平地住居址（通図六六）

本址は第一址の北二・七〇米にあつた炉址を中心に、地表下三〇釐の赤褐色土層の柔らかい面を床面とした平地住居址を仮定する。

炉址は南側に側石二個を並べ、径六〇釐の方形の浅いもので、その底面は焼けて赤い。この炉址の南二・一〇米に、径三〇釐の小穴三個が、また南東二・八〇米に同様の穴が、これに統いて北一・二〇米に径四五釐の穴が、これと対面に炉の西側一・二〇米に径七五釐の大なる穴がある。これらの穴を柱穴と仮定して、径四・二〇米の平地住居址と推定した。遺物は炉址の近くに石塊が二個あつたのみだった。

第二次発掘（昭和二十三年）

十月二十三日・二十四日 両日とも快晴。岡谷東高等学校郷土部の希望により、地主宮坂正次氏の諒解を得て与助尾根第三〇八六号畑地を発掘する。二十三日岡谷東校に青陵、二葉、岡谷南、東筑、塙尻各高校の郷土部員四十余名が参加した。私が上京したので、代って長男豊平小学校教諭吉久雄が指導に当る。最初この畑の南傾斜中央を西から東に向ってトレンチを設ける。黒土層は一米の深さに至るが遺物も遺構も発見されない。多分急傾斜の地形であったので、開墾の時曳き土をして埋めたためであろう。

今度は畑の北側、この傾斜面の頂上線に沿い、北の作場道に六米の間隔で、これと平行に西端からトレンチを設け、東一六米、ほぼこの畑の中程に達したあたり、地表下三〇厘米に石塊を発見した。よってこれと十文字に南北にトレンチを設け、住居址の埋没を確かめ、これを完掘した。

二十四日 東京から汽車で午前三時十五分茅野駅着。一里半の道

程を徒歩して帰宅。小憩ののち午前八時現地に行く。今日は多くの生徒が昨日限りで帰宅したから、残留者二十余名と住居址内の整理清掃、後永明小学校長細野正夫氏撮影を終り、午後二時散会、帰宅。

第六址 壓穴住居址（國版二六上・攝圖六七）

北の平坦部は南の傾斜面に比し黒土浅く一五厘米、中層三十厘米の赤黒土層を経て基盤の赤土層となる。この基盤を北側で一五厘米、南側で一〇厘米の深さに掘り下げる床とした住居址である。從つて東北南の三側面がめぐってその区画を定めるが、西側はこれを欠くから配石の位置からそれを推定する。



即ち平面形は径南北四・七〇米、東西五米のほぼ

円形を示し、床は大体に水平だが西南隅にかけやや上り勾配となる。床面は一様に柔軟で凹凸があり、

堆土の剥げ具合が悪かった。床の中央に平形石圓炉址がある。自然礫塊石七個を平に地床に並べて五角形に作る。外径南北一・〇六米、東西一・一〇米、

内径共に七五釐を示し、炉底は赤く焼けている。西側の縁石はやや幅広く、表面が平滑である。石器を研磨し、粘土をこねたものであろうか。炉底の所々に小孔を見る。

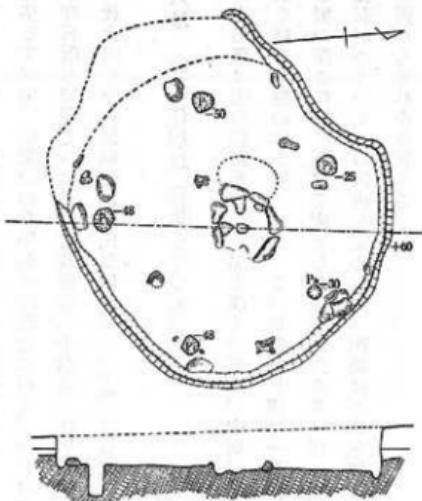
この炉址に西接し、地床が径七〇釐の円形に焼け



第図 68 佐助尼根第六住居址発見土器

て赤い。地床炉址であろう。この上に灰層が介在して黒土層となり、上に土器（脚台付浅鉢形）が遺存し、盤石を載せ、地床から三五釐の高さになっていた。側壁高さ北側一五釐、南側一〇釐、東側はこれに傾斜してめぐり、西南隅はこれを欠く。この側壁に沿い、幅三〇釐、深さ一五釐、比較的広い溝が内周する。壁のない部分は、溝もまたない。

柱穴が五カ所にほぼ一・八〇米の等間隔で五角形をなし、いずれも側壁から三〇釐の内床にあって添石を伴う。



第図 67 佐助尼根第六住居址実測図

出土品に次のような土器・石器があつた。

順位	平面形	口径(側)	深さ(側)	位置	説	明
P ₁	円形	二五	五〇	内床	礫塊石一個を添う。	
P ₂	円形	二五	二五	内床	添石三個側壁にかけて積む。	
P ₃	円形	二〇	三〇	内床	西側に盤石一個あつて下は黒土層が介在し石面は床面から四八楕の高さ。	
P ₄	三五	四五	四八	内床	西側に添石一個。	

地上炉址の上層堆土中、高さ三七楕あり。(4)魚鱗形の器。胴から上の口頸部。炉の東南隅堆土の上高さ三七楕にある。(5)底面破片。北側の壁面に貼りつく。その他破片多数。

石器としては、小石円形のもの一点・打石斧の断片一点と剝片三点・黒曜石小剝片多数・磨石斧剝片一点。主な土器は堆土三五楕の層上にあって、この面は炉石の面と同一平面である。

第三次発掘（昭和二十四年）

今年四月当地南信日々新聞社が「尖石を守る会」を計画されたところ、忽ち同情を得、同地方の学生、生徒及び学校職員一般俸給者などより醵金され、これを資金とし、また各学校の学生生徒等の労力奉仕を受けて、いよいよ計画的発掘となつた。

与助尾根遺跡中央にある久保田義弥氏所有第三〇八七号は、同地域唯一の原野である。この発掘について同氏の許諾を得、多大の期待をかけつつ、四月三十日に発掘を始めた。最初この原野は南側が平坦だから、住居址は南から北に続くものと推定したが、実際発掘するとそれは南傾斜面の頂上に沿い、東西に四カ所（第七址乃至第十一址）が続いていた。この線は、更に西に接する第三九五号の桑畑に伸びるので、地主小平喜久恵氏の諒解を得

得て発掘を続け、この線上に相接する住居址六ヵ所（第一址乃至第一六址）を調査することができた。

四月三十日（土）寒い春がなお続く。昨夕から今朝にかけて強い北風が吹き荒れ、苗代田に厚氷が張り詰め、山道には霜柱が高い。が幸い今日は晴天に恵まれた。

昨日から準備にかかり、今日からよいよ発掘にかかる。三男虎次、四男昭久それに小平幸衛・小平義市の人を雇い、四名とともに午前九時半現場着。朝は寒いが鶯が近くの藪まで近寄って鳴く。野木瓜が芝生に赤い。いつもなら桜が散る頃だが、今年はまだ三分咲き。辛夷がやっと盛りで、白い花片を風に翻し、落葉松だけが緑を刷き、他の樹は冬の沈黙を続いている。台地の南湿地に総立ちの森の林も、静かに春を待っているが、溪流に沿う馬ズイコは、緑に茎立ち新鮮な明るさを放っている。

現地第三〇八七号は、遺跡内ただ一つの雜木の立った原野で、開墾地と違つて、何か新しい資料が発見されるかとの期待をかけていた。

最初全区域に亘つてトレンチを設け、計画的に調査する予定であったが、五月十七日に東京から風景協会員が見学するとの内報があったので、それまでにと思って、同原野東側中央に、住居址の埋没していることを確認しておいた地点を発掘することとする。

この地点は黒土深く、地表下一メートルで堅い赤土面即ち住居址の床面となる。堆土には遺物はないが、炭屑がとんでもいる。ここから芝地を拓き、樹の根を抜き、西に掘る。床はやや勾配で二メートルして西の側壁となる。これを南に追跡する。堆土には遺物がない。中央から南に拡張して二メートルの側壁となる。この裾に壺形土器の口縁部が貼りついている。

この畠の東側は落葉松の苗圃で、住居址はこれに延びる。苗を他に移植しながら、掘り進むが壁にならない。よほどこの方面に延びるらしい。

午後は北に掘り抜ける。芝生を拓いて排土する。中心はこの辺らしいと思ったら、果して盤石がある。これをたどると同じ大きさの扁平石四枚で、竪に底狭く広んだ直径一米もある極めて大きい炉址であった。その北の堆土に石の頭が見える。注意して堆土を除くと、石は一基の角柱状になり、それを中心に石壇を設け、石棒は堅く直立していて搖がない。根元の南側には、黒曜石の細長い破片が斜めに差し込んでいた。新しい資料の出土を喜び、午後五時帰宅する。

五月三日 憲法發布の記念日で休業。穏やかに晴れて暖かい。花は今日が真盛り。

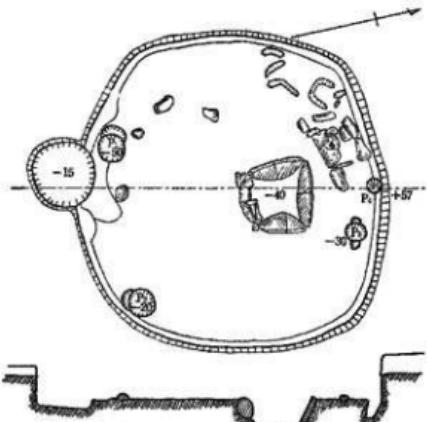
昭久・小平幸衛・小平義市の三名とともに、午前八時現地着、直ちに続掘。

北側はまだ側壁に達していないから、石棒の裏側の芝地を拓き、切り崩すと、直ちに側壁となる。石壇の西際には土器が一個逆さまに、東側には二個横に倒れていた。

北壁を東に向って追跡する。南にめぐって東の側壁となる。この地点に南側から出土した壺形土器の破片と同一器の破片が逆さまに崩れこんでいる。東の側壁が西にめぐる角の堆土床面二〇厘米から穀粒押型文一片が出た。この西山麓として初見の資料である。午後床面の清掃、石壇の周囲から黒曜石塊が頻りに出る。後中沢博氏撮影。これを第七号竪穴住居址とする。

第七址 竪穴住居址（図版二六下・二七・挿図六九）

現地表面下北端で五七厘米、南端で三九厘米、南傾斜の基盤赤



第7圖 69 与助尾根第七住居址実測図

土層に深さ北側で三三種、南側で二八種掘り下げ、水平の床面として構築した住居址である。

平面形は隅丸の方形よりやや円形に近い。径東西、南北、共に四・五〇米、床は水平に堅く堆土がよく剝がれた。床の中央からやや北によって石囲竪形炉址がある。東、北、西の三側面に長さ九〇畳、幅四〇畳の扁平石一枚ずつを底狭く斜めに掘り込み、南側は断折する丸石一個を据えて炉縁とする。どの炉石も中央に縦の亀裂を生じ、南側の炉石は焼けて赤い。平面形径九〇畳の方形、深さ四〇畳の巨大なものである。側壁は垂直で、高さ北側は三三畳、南側は二八畳、東西両側はこれに傾斜して全周する。この幅を幅一〇畳、深さ一二畳の溝が内周する。南壁の中央から径九〇畳、深さ一五畳、平面形円形の竪穴がはみだしてある。柱穴は四カ所にある。

P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	順位
平面形	口絶(縫)	深さ(縫)	位 置	説 明
円形	円形	三〇	五〇	
円形	四五	一五	三一	
三〇	一五	五〇	一三	
				側壁 に偏る
北壁の中央に西に口をあける の傾斜度をもつ窓穴である 13 35				

P₁・P₂・P₃は、床の中心をよぎる対角線径三・四五米の三分点にあって、西北隅のものはないが、この推定する位置の床には樹根の張りこんだと思われる小さな穴があるから、この柱は当時の独立木

を主柱に利用したものであろうか。

石柱を中心には、中心に設けた敷石。炉址と北壁との七五粁の間隔をもつ空地の中央から西に寄せて石を敷き、その中心等大の扁平石二個を敷き並べ、その接続線の北側の少し窪んだ所にこの石柱を密着させ、頭をやや北に傾けて堅く樹立する。この敷石の東西両側には、この敷石を区画するように、それぞれ扁平の石一個を豎に植えこむ。その東側には、長さ三〇粁、幅二〇粁のやや大きい断折した扁平石の断面を北に向けて敷く。西側には小塊石二個をおく。また石柱の北側根元には、小塊石三個を詰め、それから北壁にかけて塊石三個を並べる。

この石柱は、四角形で幅六糸の最も広い正面を選んで南正面とし、東西の側面の幅六糸と五糸、背面は六糸、全長六七糸の高さ五〇糸を地上に出し、一七糸を地中に埋め少しの圧力では動搖しないように固定させてあつた。頂面は不正の四角形で人工を加えない自然の石膚であったが、側面の各棱は、自然の鋭さを打敵して磨滅せしめた痕跡が認められた。この用材は八ヶ岳山中明治温泉附近に産する褐色を帯びた鉄平石であるらしい。石柱の前面根元には長さ九・五糸、幅二糸の黒曜石の細長い一破片が斜めに差しこんでいた。

敷石の周囲からは比較的多くの黒曜石小破片が出土し、またこれを中心に土器三個が供えた状態で出土した。即ち土器(1)は西側の壁近く逆さまに、土器(2)は東北側に横倒しに、また土器(3)はその東に接し逆さまに、そして胴脚部が口縁の中に陥没していた。

石柱の傍らにあった土器三個の内、一つは壺形土器の縦半分、中のその半分は南壁面の堆土中に、他の半分は東北の壁面近く堆土中に崩れこんでいた。両者を接合して器の半ばを得、原形が復原できた。堆土床から二〇糸の高さで得た一片の穀粒押型文土器破片は早期のものであり、住居址とは直接関係ないが貴重である。地表で採集した羽状繩文ある土器片とともに尖石、与助尾根先史集落発生を考える上に無視するわけにはいかない。

五月七日（土）一面に朝靄がかかつてぼんやりしている、花曇りか。昭久と小平幸術氏と三人で、午前八時半現場着。

今日はまずこの原野の南端、溪に臨んだ崖際の地層が黒土深く、土器破片を包含しているので、幅二米に北に向けて三米掘込むが、地表下一〇糸に、時々土器破片が出るだけで、住居址らしくない。十時半一応ここを中止して、第七址西六・三〇米、丁度この原野を南北に通する径の辺が所々もぐらの盛り上げた土があつて、いかにも柔らかそうに見えるので、ここを選んで南北方向に試掘溝を設けて調査する。黒土が深く西に拡がっている。このころ、朝日新聞社小口・南信日々新聞社伊藤の両記者、並びに沖電機会社工場長・同次長が見学に来られた。

これを西に掘り進む。石が一個現われたが、深さからそれは住居址の床にあるものと見た。それから一米北に掘る。床が認められ、土器が一個横倒しになつてある。完形品らしい。雀躍りして掘り上げると、珍しくも完形

釣手土器（図版二九下左）であった。屋敷とする。小口氏は帰つたが伊藤氏はなお残る。

午後発掘継続。釣手土器から北一米に石畳炉址が出る。少し東寄りでいつも勝手がちがう。炉から床を追うて西と南とに掘り抜ける。南は炉から二メートルで壁に達する。

午後五時東北から北辺を通つて、北西の隅に堆土を残して切り上げる。

五月八日（日）統いての上天気に、四辺の落葉松の芽が盛んに萌える。今日も昭久と小平幸衛氏と三人で現場

着。



図 70 春助尾根第八住居址発見土器

最初炉址の北側から西側にかけて芝をめくり、樹株を掘り抜き、掘り進む。なかなかの重労働である。時に中沢氏来つて第七址を撮影する。西側に当つて盤石がある。西の壁際らしい。石の上に土器がひしゃげている。これから北に僅か土器が押しつぶされている。この下にも石がある。

排ほ形をなしているので完形に復原できるかも知れない。

北から西にかけての隅は、土器の棚らしい。同時に撥形打石斧一点も一緒に出た。黒曜石の石屑が多い。

今日は部落の山道作りである。このころ、この作業に出た人たちが、入れ代り立ち代り見物に来て、芝生に腰をおろし、何かと批評してくれる。その応答に忙しく、落着いて発掘できない。壺形土器の内部の土をさらうと思ひもかけず土偶の首が出てきた。日に照し土を乾かして拭うと、团子鼻に可愛らしい眼が沈線で描かれてい

る。見物人は手にしてただただ驚きの眼をみはつた。これらの土器を処置して北西の壁がきまる。

午後幸衛氏が南西隅の芝生を剝ぐと、真赤な土器破片が出た。埴部土器の高杯の破片で、裏には高台のとれた痕がある。この発見は何を示唆するであろうか。この遺跡にとって、否、尖石遺跡の後日についての興味ある問題を提供したことになる。ことを第八住居址とする。

今日も大した収穫だったので、よろこびの心を抱いて、午後五時帰途につく。鶯や閑古鳥が頻りにはやしたてるのを聞きつつ。

五月十六日（月）豊平小学校第四学年児童八十余名、受持教師に引率されて現地を見学する。

五月十七日（火）快晴。さきに神奈川県鎌倉市有賀精氏から連絡があった東京風景協会の一行が、尖石遺跡の見学にくる。午前十時貸切バスで、協会員藤島工学博士・高久蔵之助・中村直次郎・井上万寿蔵・輪座重五郎・同道雄・有賀精氏及び地元諏訪岡谷地方よりこれに参加するものがあつて、総計二十数名到着。出土品を一覽した上現場に至り、発掘地及び尖石を見学して帰つた。

五月二十一日（土）晴。農林省開拓研究所技師池田威及び八ヶ岳農場員仁木巖雄・吉見一也・堀内宗一の四氏が八ヶ岳農場から、諏訪市清陵高校生八名、松本市高校生一名見学に来る。

六月三日（金）晴。清陵高校生八名、発掘のために夕方登り、発掘地北の木立に野営する。

六月四日（土）晴。午前八時、昭久と小平幸衛氏と三人で現場着。昨夜野営した清陵高校生が待機している。労力充分で今日から作業能率があがる。

まず原野の南端に沿つて、幅一米の試掘溝を三米間隔で東西に四条作り、第七址の南近くまで延長したが、ども黒土層が二五釐ほどであつて、堅穴住居址が埋没する形跡は見られない。一時原野の中央でこの作業を中止し、前日昭久がこの原野西端の桑畠第三三九番の境目を試掘して完形土器を得てゐるので、その地点を掘ること

とする。

このころ、岡谷高工及び岡谷南高校の学生二十余名が来たので、一組は発掘作業、一組は排土を畚で運ぶ役を受持つてもらう。

一隊は発掘作業にかかる。土器の発見個所から住居址は西に延びるものと予想したが、黒土層はここを境目に東に深い。よってこれを東に追う。五メートルでようやく東の壁に達着した。この壁を更に南と北に追う。多勢なので挖掘限りないが、作業はどんどん進む。出土品がないので張合がない。忽ち堆土が除去され、竪穴住居址の全貌が現わされた。

午後黒雲が西から迫ると見る間に夕立となつたので午後三時引き上げる。岡谷組は帰宅したが、清陵組は続いて野営する。

本日は茅野観光協会員一五名及び夕刊信州矢島記者が来観した。

六月五日（日）快晴。午前八時、昭久、小平幸衛氏とも三人で現場へ。今日は清陵高校生七名、岡谷高工生六名、これに二葉高校の女生徒六名を加えて計二十名近くの若人で現場は人と人との押合う。また藤森栄一氏が南信日々新聞伊藤記者とともに来観。続いて矢島教由氏が実測に、中沢氏が撮影に来たので、なかなかの暇いである。南の湿地帯の榛木林の下草の中に沢尾草が茎高く黄色い花をつけて、暗い木立を明くし、労働に疲れて湧水に喉をうるおす若人に微笑を送っている。

この竪穴住居址の輪郭は昨日の発掘で、凡そその東、北、西の三方面がきまっているので、今日はこれを南に掘り抜げ、その範囲を決定するのである。竪穴の中に総勢十五、六名が入り込んで作業するのであるから、身動きもできない。拂土を畚で運んで南の崖際に捨てる。多勢なので作業は忽ち片付く。午前中に拂土を終つた。午後はこれを清掃する。竪穴は徑五・五〇メートル、円形で大きい。床は北は堅い。周壁は内に傾斜し、床は外に向

つて上り勾配である。床の中心から北寄りに方形堅穴炉址があり、その南の床がやや小高くなっている。溝は僅か北東隅にあるのみで、柱穴は壁から離れた内床式に穿がつてある。その柱穴中南側の中央と南西隅のものの中に大きな石塊が入っている。遺物は殆ど出土しなかつた。午後二時過ぎ清掃を終ったので、一同住居址内に集つて記念撮影をする。これを第九住居址とする。堆土上層から祝部土器の破片が一片出たことを特記せねばならない。なお西の壁の厚さ四〇釐で、その西は再び黒土が深い。ここにも住居址の存在が予想される。

次に昨日設けた各トレンチを調べると、南から第三のトレンチの西端、丁度第八住居址の南に接して、黒土層の深い部分がある。調べると住居址の東の壁際らしい。西に掘進むと深さ四〇釐が遺物包含層らしく、土器破片の出土が夥しい。石の断片も出る。中に石皿の破片もある。黒曜石屑が盛んに出る。中に三角形石鑿二点が交じつていた。打石斧の破片も出る。そして下は広範囲に亘って焼灰が堆積していた。土器の焼捨場であろうか。午後四時切り上げる。

第八址 堅穴住居址（國原二九上・插圖七一）

第七址の西五・七〇米にある。この兩住居址の間になお一ヵ所住居址があるのではないかと予想される。
地表からの深さは、最北で六〇釐、最南で五六釐を示す。

堅穴の平面形は方形より南北の径がやや延びるので、径四・八〇米の菱形をなす。炉址から西南の床面が最も広く、また炉址の形が南西向きであるから、南西に向いて造られた住居と見られる。従つて西北隅から南西隅への径四米、北西と南東との径もひとしく四米である。床は堅く、水平である。これを北に高く三〇釐、南に低く一二釐の直壁が全周し、これに口徑、深さとともに三釐、横断面三角形の溝が内周する。柱穴P₁・P₂・P₃・P₄が床の中心をよぎる径三米の四分点にあり、いずれも壁から三〇釐内側にある。各柱穴とも平面形円、直穴で、口径

二〇乃至三〇㌢、深さP₁四〇、P₂四六、P₃四〇、P₄最も深く六〇㌢を測る。P₁の穴口には扁平石一個、P₂には同じく二個、P₄には同じく石皿の断片を重ねて添えてあつた。炉址は炉口を南西に置く。從つて床の中心より東北に偏る。炉石を竪に組んで円形とし、その底を狭くしてある。東北壁は扁平石一枚を、その両側は二枚ずつあるいは平面に或は縦に配するが、平面に据えたものの下には石を詰めて固定させてある。西南辺は三個の角張った石を平面に使ってある。その下には台石が使用してある。ここが炉口である。なお炉石の間に石を詰めてあり、余程工夫されたものである。炉の径六〇㌢、深さ三五㌢、底は焼けて赤い。平面形は方形である。

出土土器は五個あり、うち一は床上西北隅の柱穴の背後から出た壺形の土器である。装飾豊かであるが底部欠損するは惜しい。中に土偶の首が容れてあつた。一つは扁平な石の上にあつたもので大きい壺形土器である。一つは西壁に崩れ込んだようになって、口を下にしていた。これも大形の壺である。一つは北隅の柱穴の西の床上に横倒しになって発見された香炉形土器である。

石器は、撥形打石斧一個と黒曜石屑のみであった。

第九址 堅穴住居址 (國版三〇上、三一上・插圖七二)

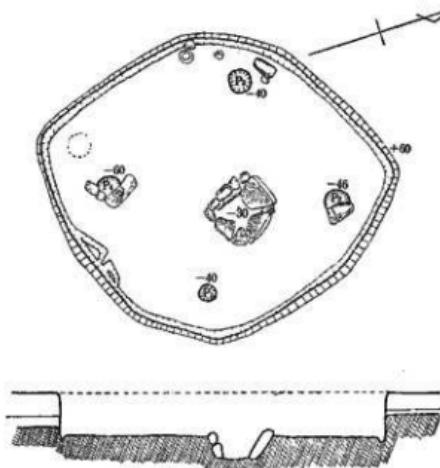


插圖 71 与助尾根第八住居址実測圖

第八址の西三米にある。第三〇八七番の原野の西端がこの住居址の西側壁となる。

地表からの深さ北端七五厘米、南端六〇厘米を示す。

竪穴の平面形は、南北の径五・五〇米、東西の径五・一〇米の円形で大形の方である。床は、固く水平であつて堆土がよく剝がれた。ただ炉址の南に接し約三〇厘米に亘ってやや高くあつた。側壁は、北に高さ三〇厘米、南は一〇厘米で全周し、珍しくも床に対し傾斜する。溝は、東北隅の一部に認められ、床の中心からやや東北に片寄つて方形竪穴の炉址がある。炉壁に小塊石二個が遺存するのみで炉縁石はない。この炉址の径東西一・一〇米、南北は一米、深さ三〇厘米に底狭く摺鉢形に掘る。

柱穴は次の九カ所が検出された。

P ₉	P ₈	P ₇	P ₆	P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	部位	形 状	口 (徑)	深さ (劍)	備 考
四〇	三〇	四〇	五〇	二六	三五	七五	六〇	二〇	四八	矩形	長方形	四八	深さ三〇厘米から の距離 (劍)
六〇	七五	四〇	五〇	六〇	三〇	二三	一一	一一	四二	円形	四六	五〇	口縁に長さ二五厘米、幅一〇厘米 厚さ一二厘米の自然塊石を伴う
偏石あり	長さ四五厘米、幅一五厘米長辺円形 の自然塊石を六底に遺す。								三〇	長方形	三四	四〇	
									三〇	円形	三七	四〇	
									三〇	長方形	三四	四〇	
									三〇	円形	四六	四〇	
									四〇	長方形	四二	四〇	
									四八	矩形	四八	四八	

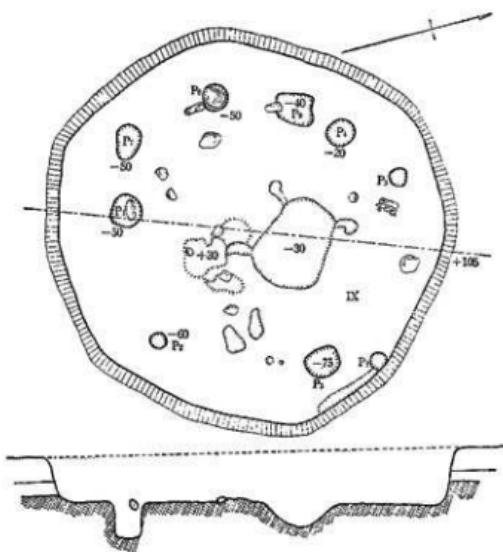
柱穴の数が余り多いから、主柱を推定するに迷う。これを対照的によれば、床の中心をよぎる対角線四米の四分点上のP₃とP₂・P₄、または、P₅・P₆をそれとなすべきであろう。出土品は、表土下から祭祀土器底部破片の一個を得たのみである。

六月六、十一日両日 昭久が雇人永井四郎氏と共に原野内の雑木を伐採して片付ける。

六月十二日（日）昨日の雨は、奇麗に晴れあがつた。目下、田植の最中で雇人が得られない。よって、昭久ただ一人を伴い午前九時

現場着。

図 72 与助尾根第九住居址実測図



去る五日発見した土器包含層を中心に東方に掘り続ける。黒土層深くして地表下深さ六六釐にある基盤の赤土面が床面をなしている。ここに竪穴住居址がある。昭久は、この土を北に撒き崩し、自分は、それを畚で運んで南の渓谷に捨てる。やがて、厚手の変形土器の大破片が黒土浅く敷き並べたような状態にあるが、これは遺棄されたものであろう。

午前十時、清陵高等学校生徒五名が発掘の応援に、また、伊藤南信日々新聞記者が上諏訪中学校生徒二名と共に探訪される。

この清陵高校生の応援に助けられていよいよ

北に掘り進むこと三米にして、北の側壁に接する。この壁の裡には溝がめぐる。地表面から床面までの深さ七五釐を示す。この側壁は東から南に曲折する。この角の壁裡に長方形の凹石が一個、一米にしてまた同形の凹石がある。ここに、北と東との側壁が発見された。西の側壁を追い、その裡に溝を発見する。

床面を北側から南へと清掃する。一段深く黒土がのくる。炉址らしいが炉石がない。また遺物は一点もないからこの住居は退去されたものらしい。最後に南の側壁を掘り出す。第一〇号とする。

西の壁上に躊躇の一つが掘りのこしてある。これが夕陽に映えて咲き誇り誠に美しい。午後四時帰宅。

第一〇址 竪穴住居址（國版三〇下・插圖七三）

第八址の南三米に位置し、現地表下北側で八〇釐、南側で四〇釐の深さにある。その平面は径四・五〇米の隅の丸い方形であつて、やや南に掘りひろげたおそれがある。これに、高さ北側で四〇釐、南で二〇釐の側壁が全周し、西南隅をやや欠く。水平の床面は軟弱であつて凹凸がある。壁裾にそつて一条の溝が全周する。これは口径一三釐、深さ一〇釐を示す。

床の中央から北によつて径東西七五釐、南北六〇釐、深さ二〇釐の竪穴炉址がある。底面は赤く焼けている。東側に三個の炉縁石が並べてある。

柱穴は四ヵ所あつて、床の中心をよぎる長さ三・六〇米の対角線の四分点に位置しているから、これに主柱をたてて上家を架したものであろう。口径二七釐の円形、深さ二五釐乃至四〇釐の直穴である。北側は壁際に、南側は内床に位置する。

出土品は主として、炉址の南側に堆積していた南北一・三〇米、東西六〇釐の焼灰層上に石油箱一箱の土器片と共に黒曜石石鏃三点・打石斧破片三点・石皿破片一点・黒曜石石刀一点等があり、床面からは僅かに凹石二点が東側の溝に遺存していたのみであつた。

六日十三日（月）曇。本日は学校が田植の休業に入

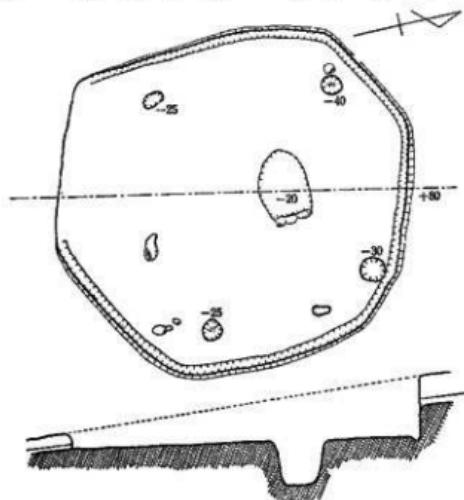


插圖 73 与助尾根第一〇住居址実測図

つたから静養しようと思っていたところ、矢島數由氏が実測のため現地に行かれるとのことで昭久もともに上らせる。

自分は、午後佐喜子とつれだつて行き、佐喜子は溪間の濕原地に生えている野薙の茎を探集し、私は、昭久と共に第一〇址から西にトレンチを設定する。黒土層四〇釐で赤土層となつて床面が認められない。遺物も全く包合されていない。住居址は埋存しないものとして、次に第八址の北に接し東西に亘つてトレンチを設定したが、ここも黒土層浅く遺物が全く出土しなかつた。今日はただ調査にくれて佐喜子が集めた野薙の茎一抱を土産として帰宅した。

六月十五日（水）曇。小平幸衛氏が田植が終つたからといつて手伝に来られた。昭久と三人して上る。午前九時四〇分現地着。

この台地の南側崖際にアカシヤの木立が茂り、それが花盛りでこれにまた蜂が群れてとぶ。野に燃えた躑躅は花盛りが過ぎた。終日、近くの林で雉子が叫び郭公が啼き、鶯が老声を張る。

台地が南の溪に傾斜する頂上線に住居址が分布し、既に第七址・第八址・第九址・第一〇址が相隣接して発掘された。この住居址の分布線は西に向つてのびるらしい。従つて、この原野全面に亘つて住居址が埋没するであろうとの最初の予想は全く裏切られ、この頂上線より北側にあつて平坦をなす広い地域には、住居が存在しなかつたものと判断を改変しなければならない。

さて、次にどの方面にトレンチを設定すればよろしいか。たまたま、第九址の北壁の断面に黒土層の落ちこみを発見した。この北に接し住居址が埋没しているであろうとの判断からこの方面に掘りこむ。

まず第八址の北西隅から西方にトレンチを設定する。黒土層は深く四〇釐に達し、それに炭屑が認められる。しかし、この下の層は赤褐色土層で竪穴住居址の床面とはならない。よつて、この黒土層を北に掘りひろげると扁

平形の河原石が露出する。この河原石は、なお北深く続き、これらの石塊の下は黒土層が一段深くなつていて、それに大きな木炭屑が数多く包含され、明かに焚火をした形跡が認められる。

これらの扁平な石塊が集められた地点を調査すると、それは南北の長さ一・一〇米、東西の幅一米に亘つて等大の河原石計三七個が無難作に集積されていた。これを中心に三米平方の範囲を耕土したら、この石の集積面と同一水平から壺形埴部土器の口縁部破片二個、同胴部小破片二個が出土し、他に縄文式土器に関する資料は発見されなかつた。またこれとともに、全く整形されたが脚を欠損したところの黒曜石無柄石鏃一点・小球石一点・長方形の凹石一点・黒曜石小塊一点等が発見された。

この遺址は、伴出資料から原史時代に属するものと認められる。午後三時帰宅。

六月十八日（土）曇。昭久と小平幸衛氏を伴い三人にて午前九時現場着。統いて清陵高等学校生八名、岡谷高等工業学校生一名、岡谷南高等学校生五名等、大挙して発掘の応援に参加される。

私と小平幸衛氏とは第一〇址の床面を清掃し、高校生徒は、この第一〇址を起点に西に向つてトレンチを設ける。黒土層は割合に深く四〇釐を示すも、遺物がなく居住した形跡が認められない。次に、原野の中央を東西にトレンチを設ける。黒土層は浅く僅かに二〇釐を示して、ここにも住居址が発見されなかつた。

これらの調査から原野の北側平坦部には住居址が埋没していないことが確認されたので、予定の計画はこれで終ることとして、午後二時半帰宅。

六月二十二日（水）諏訪市から、藤森栄一氏、伊藤南信日々新聞記者、矢島貞雄信濃毎日新聞記者の三氏が見学される。

上伊那郡伊那北高等学校から、来る七月二、三日この遺跡にて発掘の演習をしたいとの申込がある。当初計画した原野には既に住居址が存在しないから、この西に接続する畑第三三九五番が住居址の分布線上にある。地主

小平喜久恵氏が諒解してくれたなら、改めて発掘を継続することにする。

六月二十三日（木）矢島數由氏単独にて住居址を実測する。

六月二十四日（金）伊那町から根津芦丈先生を迎える。牧馬会員一同この遺跡に吟行して、野原に行厨を開き一日の歎をつくす。小平吉一・小平幸衛・牛尾勝実の三氏と私。

「炉の石の焼けし見いれば郭公鳴く」 芦丈

六月二十六日（日）快晴。上諏訪中学校のPTAが、主催して、生徒父兄等五百余名発掘地見学。帰途自宅に陳列してある出土品を観覧して午後三時退去。

六月二十八日（火）この朝、発掘地附近の畠地主某々三名が、二十六日見学に来た生徒達が耕地を踏みあらしたから以後発掘を中止しようと肩を怒らして怒鳴りこむ。

昭久、永井とともに伐採した雜木の後片付けに上る。同人等の話によれば、少しも踏みあらしてはないとのことで安心した。

七月一日（土）曇。原野に西接する桑畠第三三九五番につき地主小平喜久恵氏が承諾してくれたので発掘に着手する。

上伊那郡伊那高等学校生徒一四名同校畠美義教諭引率して、発掘演習のため午前十時半到着される。

発掘の予定地第三三九五番の東端で、第九址の西側壁を隔てて、黒土層が深く昭久がここから完形土器一個を発見しているから、ここから西に発掘していく。

まず桑株を切り、それを掘りこぐ。第九址の西の側壁から二〇㌢の深さに赤土層となり、この面は堅く、堆土がよく剥げる。竪穴住居址の床面である。この面を北方に追跡して二米、北の側壁に逢着した。次に、この壁面を東西の両方面に進み各一米位でこの壁面は東西ともに南に曲折する。大勢のため竪穴住居址北側半分の堆土を

排除し終る。この床面を今度は南方に追跡し中心から二メートルの側壁に到達した。この住居址の堆土からも床面からも何一つ遺物が出土しなかつた。

統いて床面を清掃する。北側に柱穴は検出されたが壁裡には溝がない。中央からやや北に寄つて径一メートルの平面円形をした竪穴炉址があつて、その底面は赤く焼けている。この南側の床面が少し壅み、ここでも焚火したものであろう。赤く焼けている。また西の側壁に近い床面に口径二〇厘米で深さ四七厘米の直穴が一ヵ所あつて、その周囲の床面が赤く焼けていた。これを第一一址とする。

この西端に、長さ五〇厘米の三角形河原石が横に倒れ、それから西にかけて黒土が一段と深くなつていて、他の住居址が隣接しているらしい。第一一址は径四メートルの規模が小さく、それに大勢であったので忽ち完掘し得た。まだ午後二時であるから西に掘り進む。第一一址には西の側壁がなく、この床面から一〇厘米の深さに接続する他の住居址の床面があつた。従つて、この床面は現地表からは七〇厘米の深さにある。

この堆積した黒土には焼灰が層をなして介在し、炭屑も多い。殊に、黒曜石の細工屑の細片が多く、状袋一杯に採集された。

住居址の東側は高さ一〇厘米の側壁となり、これが西に向つて彎曲するから第一一址の西側に喰いこんで構築されたものである。

西に向つてなお堆土を除去して進む。現地表下二〇厘米に土器片の包含層が介在し、この四〇厘米の深さに土器が横に倒れて破碎されている。この南六〇厘米の距離にも土器が二個堆積し、統いて西南方一・三六メートルに大甕形土器が横倒しに押しつぶされている。胴部には雄大な渦巻文が描かれている。

伊那北校生徒は、今朝早く出発されたので午後三時半、作業中途のまま切り上げ地元南大塩区の「つちや」旅館に止宿される。

地主との交渉は、豊平村役場を通じてその諒解も得、毎日役場吏員が監督する約定であつて、今日は、助役永田素一郎氏が出張された。清陵高校及岡谷南高校からも数名の生徒が発掘を手伝われた。

七月三日（日）曇。午前八時半、伊那北高等学校生徒十四名と共に現地着。続いて浅川岡谷南高校教諭、清陵高校生五名、岡谷南高校生三名、二葉高校生三名、藤森栄一氏、古畑氏等は発掘援助のため、また豊平村長小平留重氏は監督のため来着される。

直ちに住居址の発掘にかかる。一隊は、桑株を掘りこぎながら東壁を北に追跡する。壁裾に溝があり、溝から凹石が一個出土する。

他の一隊は、東壁に沿い南に追跡する。壁裾に溝があり、床上から突入ある打石斧一点が出土する。壁は西に曲折して南の側壁となる。北の側壁から南の側壁までの距離が四・七〇メートルあるから、東の側壁から西にこの距離を計量して竪穴の範囲と仮定して、この面の堆土を順次手掘しつつ、南の桑畠に堆土を排出する。

床上堆土の地表面から二〇厘米の深さに土器片が多分に遺存しているから、この面を当時の地表面と推定する。さらに、四〇厘米の深さに土器が土圧に押しつぶされて遺る。この面は、第一〇号の床面と水平にある。この状態から、この住居址の床上に黒土が一〇厘米の高さに堆積したのち、これらの土器が遺存したこととなる。

堆土は順次排除されて西壁が検出された。次に、床面を清掃する。床面は固くかためられ、長い期間の住居と考えられるが、また、一方このように工作したものもあるか。床の中央から北に寄って石塊が見出された。これを追跡して黒土を剥ぎ取ると、これは、石で囲った大きな炉跡であった。四隅にはそれぞれ柱穴が検出された。午前中に住居址は清掃された。これを第一二号とする。

土器は出土状態のままにして、遠い伊那谷から来られた生徒諸君のため午後一時半引き上げ夕頃帰校された。
七月十日（日）晴天。矢島数由氏住居址実測。南信日々新聞社主催の遺跡見学会員五十余名がバス二台に分乗

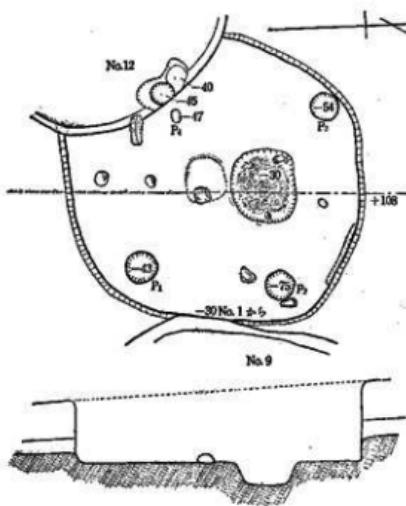
して午後二時来着。のち自宅に立ち寄り出土品を展観され、午後四時退去。

七月十二日（火）曇。月見草が原野に咲き残り、朝靄のはぐれる頃現地に到着し、第一二址の土器を土上げして自宅に運搬する。

第一一址 竪穴住居址（國版三三上・插圖七四①）

第三三九五番の畠地の東端即ち第九址の西壁（幅四〇畳）に西接する。

この畠の耕作面は、東接する原野面から二〇畳低く、床面は耕作面から北側で七五畳、南側で七〇畳の深さにある。これを原野の地表面からすれば一米近い深さに構築されたものである。



捕図 74 (1) 佐助尾根第一一住居址実測図

その平面は、西接する第一二址がその西南隅に弓形に喰いこんでいるが、外周線によれば、円形になる。径三・六〇米の規模の小さい竪穴住居址である。床は水平であつてその面が非常に堅い。殊に P₄ の周辺がかたい。側壁は全周し高さ北端で三三畳、南端で一五畳、東側で三〇畳を示す。第九址が第一址と接触する地点の高さは一〇畳であるから、この住居址の方が深く掘りこまれている。溝は東北隅に僅かあるばかりで、殆どない。床の中央から北によって径九〇畳の方形竪穴炉址があり、これは底狭く三〇畳の深さに掘りこんである。炉縁の石はな

く、ただ小石塊三個壁面にのこる。またこの南に六〇釐平方に亘り床面をやや低くして、その面が赤く焼けている。焚火したものであろう。

柱穴は、大 P_1 ・ P_2 ・ P_3 の三ヵ所と、小 P_4 ・ P_5 の二ヵ所計五ヵ所がある。 P_1 ・ P_2 は内床に P_3 は壁際位に置し、どれも平面円形の直穴だが、床の中心に対し

やや傾く。径

は同様に四五
釐で P_1
は四三

釐、 P_2 は七五釐、 P_3 は五四釐の深さを示し、床の中心をよぎる長さ三・三〇米の対角線上の四分点中、東、北、西の各隅々にあり、これに対し西南隅のものは、第一二号の東北隅にある径三〇釐、深さ四五釐のものがそれであろう。 P_4 は床の西南隅にあって径一五釐、深さ四七釐で、その口縁の床が赤く焼けている。またこれを中心に床面が殊に堅いから、この穴は柱立のためのものより、他の用途のためのものと考えられる。



插圖 75 合助尾根第一二住居址より大窓の出土

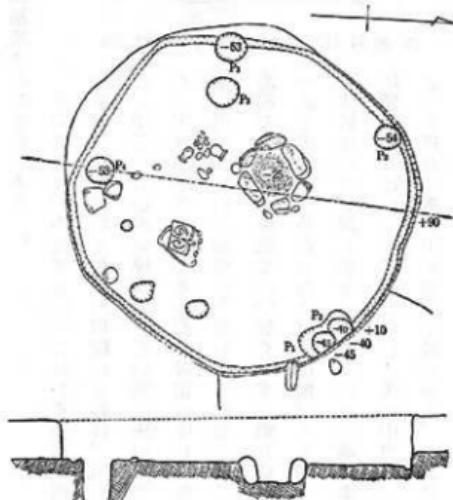


插圖 74 (2) 合助尾根第一二住居址実測図

出土品として完形壺形土器一個がP₂の東際に横倒れになっていた。長さ四五釐、幅一〇釐のやや大形の長方形断石が、その三分の一を第一二址の面にせり出して西の床にあった。この他の遺物は全くなかった。

第一二址 竪穴住居址（図版三二上・插圖七四(2)七六）

第一一址の南西隅と僅かに重なって、第九址・第一址・第一二址と一連をなす三つの住居址の最西端のものである。これは地表面から北端で七〇釐、南端で三〇釐の深さにある。南西隅に側壁がないのでやや掘りひろげた傾きはあるが、平面は隅の丸い方形である。その径は四・五〇米を示す。床は水平で堅い。堆土がよく剝がれた。側壁の高さ北側で二〇釐、東西共一〇釐で、南はこれを欠く。溝は判然と壁裾に添い側壁のない西南隅は、この溝からその区画を推定した。炉址は、石で囲った方形の竪穴で径九〇釐、深さ二五釐で、炉縁は、同じ大きさの扁平な石六個をもつて、北と南側は一個、東西両側とも二個を組合せ竪穴に掘り込み、南縁のみは平に据えて畳み隅々には小塊石を詰める。南の炉石の面は平滑であつて、明らかにここが焚口である。この焚口は南東の方向を指し、この方向の床面が最も広いから、住居は南向きよりやや東によせて構築されたものであろう。

柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄とP_{1'}・P_{3'}の六ヵ所にある。P₁・P₂・P₃・P₄は、床の中心からやや北をよぎる長さ四・二〇米の対角線上の四分点にある。これを四主柱の穴とすべきであろう。そして、北側の両主柱穴P₂・P₃の間隔は二・四〇米に対し、南側両主柱穴P₁・P₄の間隔は三・六〇米であるから、その外屋は北に狭く南に広い梯形に構築されたものであろう。平面はどれも徑四五釐の円形で、深さは比較的深く四五釐乃至六〇釐を示す。

P_{3'}の穴の堆土中上層五釐の厚さに赤土を充填してあった。一度、西北隅の主柱をたてる穴として利用されたが、これを西に移しP₃に掘り直したものであろう。

出土品として、土器が炉址の東南側に四ヵ所に遺存していた。これらは床面上高さ七釐の黒土を介在してあつ

た。

石器は、東側の溝に凹石一点があつた。

七月二十二日（金）暑氣強し。午前十時、東京都東都高等學校生徒五名が東京大學大學院研究生吉田章一郎氏に引率されて遺跡発掘の演習に来られ、また伊那北高等学校生徒五名も発掘の手伝いに来られ、共に「つちや」を旅宿とする。

七月二十三日（土）晴、暑氣強し。昭久は前夜来泊の高校生と共に発掘に上る。

第一二址から西に向ってトレンチを設ける。四米にして住居址が発見されなかつたから、これから南に向てトレンチを設定し僅かな距離で住居址を確かめ得たから、これを発掘しかけて引きあげたと昭久から報告があつた。

七月二十四日 晴、暑さきびし。昭久、東都高校生とともに午前八時現地に上る。

昨日発見した住居址はまだどの方面も、その側壁が発見されていない。然し、床面は検出されているので、この床面を北に向つて追跡し、三米して漸くその側壁に到達する。この高さ二〇釐でその裾に溝がめぐる。この側壁は一直線をなし、西に続くこと三米で、この側壁からすると、この住居址の平面は方形であろうか。更に一米して南に曲折し、この壁際に配石一個があつて、その東の床面に黒土の喰いこみがある。柱穴であろうか。その黒土を除くと、それは径六〇釐平面円形で、六〇釐の深さをなす大きな穴となつた。



図 76 幸助尾根第一二住居址

この辺の床面は現地表下四五種の深さで側壁の高さは一〇畳、この西壁に沿い南に進むと約三メートルで再び大きな穴がある。最初の穴を北西隅の主柱のものとすれば、これは南西隅の主柱の穴となるであろう。東壁から西壁までの距離を計測すると六メートルを示した。これにより北壁から六メートルの距離は崖際までになって、今までその例を見なかつたような極めて規模の大きい住居址となる。

ようやく南の側壁に達した。こうして排除した住居址内の堆土は、その東の畠地に小山のように盛り上げられた。東の側壁はこの盛り上げた土の山の下に深く喰いこんでいるらしい。南北の両方面からこの盛り土を崩しながら東の側壁を追跡するが東北隅は赤土と黒土とが入り交じってその床面も判然しない。埋立てたのであるから暑気が強く午前の重労働ですっかり疲れ、午後はなかなか歩らない。それに夕立が襲うような空模様になつたので、東の側壁の検出と床面の清掃とは、明日の仕事として午後五時引き上げる。東都高校生徒は「つちや」に宿泊。

七月二十五日（月）暑氣なお続く。昭久が自分に代つて東都高校生徒とともに発掘。

本日ようやく完掘したこと。住居址は、その径六メートルの規模大なるもので、東北隅の主柱の穴は、他の穴とともに大きく、その床面は地層が赤土と黒土と入り交じり、そして非常に軟弱であつたから、柱穴は一度掘つたものを埋めてさらに、北に移動したものであろう。他の床面は堅くその中央から北に寄せて竪穴炉址があり、遺物は殆どなかつたことなど、昭久から報告された。これを第一三址とする。

七月二十六日（火）暑氣つよし。連日の炎天下にこの第一三址を完掘された東都高校生の一隊は、吉田章一郎先生とともに早朝帰京。

八月五日（金）快晴。矢島數由氏第一三址実測。

第一三址 竪穴住居址

(図版三四上・插図七七)

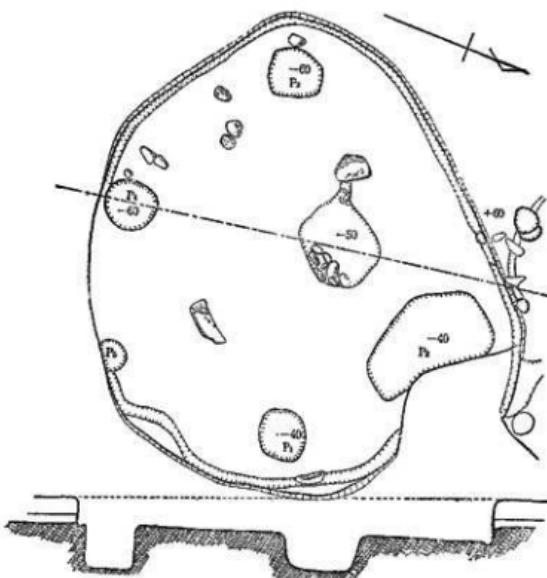


図 77 第一三址 竪穴住居址実測図

一二〇畳の幅広い溝が全周し、壁のない南側は、この溝によってその限界を推定した。柱穴は五ヶ所にあるが、P₂はそれに堆土が積み重ねられたので、充分の調査が行われなかつた。

P₁・P₂・P₃・P₄は、床の中心をよぎる長さ四・八〇メートルの対角線上の四分点に位置するから、これらを四隅の主柱の穴とし、P₅はP₁・P₄の中間の外にあるから、入口のための柱穴であろうか。

炉址は、床の中心から北によつて、径一メートルの方形竪穴で、その炉縁の石はない。僅かに南側の炉壁に自然塊石

第一二址から西南方三メートルの距離にあつて、南側の渓谷に臨んでいる。現地表下北側で六〇畳、東側で七〇畳、西側で四五畳の深さにある。平面は、北西の側壁が一直

線であるから、大体隅の丸い方形と推定される。その径五・八〇メートルあって、このような規模の大きいものは、尖石出土竪穴住居址三二カ所中僅か二例に過ぎない。床は一般に水平で堅く、これを高さ、北及び東は三〇畳、西は低く一〇畳の側壁がめぐり、南側は傾斜の地形からこれを欠く。これに

順位	平面形 (圖)	口縁(斜) (圖)	深さ(概)	そ の 他
P ₅	円形	七五	四〇	
P ₄	不正方形	七五	四〇	この住人は、一度廻ったものを北に移し改めて掘り直したもの。
P ₃	円形	七〇	六〇	西に沿って大きな石一個を置く。
P ₂	四〇	六〇		
P ₁	一			

八個を並べ、炉の縁に土器の口縁部破片を貼りつけ、また東の炉壁に凹石一点が遺存し、その西北隅に盤状の大なる石が敷いてあった。この住居は、炉の焚口と柱穴の位置から、南東向きに構築されたものと推定される。

出土品は、北側東端の堆土から土器破片と凹石

一点、それに花崗岩の断片のみであった。

南側P₁・P₄の両主柱穴の中間に、長さ六〇釐、幅二五釐の鉄平石一枚が敷いてあった。

八月九月（火）晴、酷暑つづく。午前中公用があつたので、午後から現地に行く。連日の旱天で山路は土埃が

深い。

朝から昭久は豊平中学校生徒一〇名とともに調査にかかる。第一三址から北にトレンチを設け、石畠炉址を発見する。これは舟型であつて、炉内には夥しく木炭屑が遺存している。

ここは、地表下二〇釐に土器片が推積し、それ以下三〇釐して炉址面となる。そして炉址面と同一水平である地面が床面であるべき筈であるが、それは赤土でなくしかも非常に柔らかい。

炉の北二三釐に円形の直穴があり、これから西に掘り進むと、南西一米にしてまた直穴がある。この穴の北に一小石塊と、また、西南の側邊に扁平の石がある。柱の根元に据えたものであろう。この第二の穴が柱穴とすれば、これに対し東側にもあるべき筈であると想像したが、第一の穴から東南一・一〇米に、第三の直穴が発見され、その埋めた黒土の上層から打石斧一点・黒曜石大塊一点とが出土した。

次に炉址の西側を南に掘り進めると、一・一〇米に第四の直穴があつた。

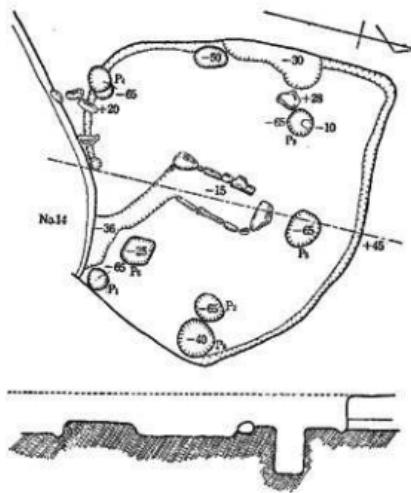
あまり暑さがきびしく、土が焼けてその熱さがはだし足袋の裏を通して足の裏をさす。汗が頻りに流れ、清水を飲んでも飲んでも、すぐ喉が乾く。僅かな木影をたよりに休んでは作業を続けるが、なかなか歩らない。午後四時帰宅。

第一四址 作業址か (図版三四下・插図七八)

第三址の北に直ちに接続する。現地表下四〇畳、当時の地面から二〇畳の深さにある。それで他の住居址のように赤土層による側壁はなかった。それでその範囲は、幅一五畳の浅い周溝により、北西隅に張り出した、南北の径三・六〇米、東西の径四・二〇米の不正形のものと推定した。床面は炉石面と水平である赤褐色土層面と推定したが、非常に軟弱であった。

炉址は、南北に長い舟形に石で囲つたもので、この

遺址の中央にある。即ち、南北の長軸一米、東西の短軸七〇畳、深さ一五畳で、東西北の三方を石で囲み、南はそのままのものである。囲つた石のうち、北側は、長軸三五畳、短軸二二・五畳の盤状石三個を平面に据える。東側は、長さ三〇畳の盤状石三個を一直線に並べ、そして上端は内傾斜二〇度に植えこむ。西側は、これも大なる扁平石二個を一列にして竪に植え、なお南端に大なる一個を平に据え、この炉石の面は平滑であった。この石に接して凹石一点と、東側の炉石に統じて凹石一点があった。炉石の北側のものと西側の北二個とはともに中央に亀裂が入っている。これは焚火の火力によるものである。南側の炉石のない方が焚口で、これから幅三六畳、



插図 78 与助尾根第一四住居址実測図

深さ三六厘米の溝が、東斜めに第一三址に続く。

柱穴は次の九ヶ所にあった。

順位	口径(厘米)	深さ(厘米)	備考
P ₁	三〇	六五	どの柱穴も平面円形で平底の直穴である。柱穴としてはその口径は小さいが、深さは深い方である。P ₁ を中心として東西の両側に一・五〇メートルの等距離に配置されて炉址をめぐり炉址に近い距離にある。
P ₂	三〇	六五	
P ₃	二四	六五	
P ₄	三〇	六五	
P ₅	五〇	二五	
P ₆	三〇	四五	

八月十一日（木）晴、暑し。午前八時半、ひとり先行する。高原は、既に秋の気配を感じられ、林の下草には露が宿ってズボンが濡れる。続いて、昭久、小平幸衛氏が豊平中学校生徒六名とともに来て、ともに、第一四址の清掃を続ける。午前十時中沢博氏撮影。あまり暑気が烈しくて炎天下の労働には堪えられなかつたから、正午限りで引き上げる。

一体、この第一四址は、一大長方形（舟形）の炉を中心とし、溝を範囲とし、六柱により上家を構築したのであろう。然し、これを住居址と推定するには、炉址と柱穴との距離があまり狭くて、人間の座居する余地がない。またその炉址にしても、この遺跡出土に比べると誠に異形である。従つて暖房炊事のためのものよりは、他の目的のために構築されたものとされなければならない。これらの点から、この遺址は住居としてよりは、何らかの作業址として想像される。炉が炊事暖房以外を目的とすれば、土器焼成のためのものかと推察され、従つ

出土品は、土器片が炉址を中心に堆積し、凹石二点が炉の外側の床面に花崗岩とともに遺存していた。黒曜石三角形石

鐵一点、打石斧三点も土器片とともにあった。

なお表土下ただちに埴部土器片小一点があった。

八月十日（水）朝曇り後、晴れて暑い。昭久が、豊平中学校生徒八名とともに行く。第一四址の床面を清掃し、P₁の東側にP₈を、さらに南西方向一メートルにP₅・P₆を、また西側P₃の南一メートルにP₇を検出した。

て第一三址に接続した土器製作の作業場であったであろうか。

八月十四日（日）矢島數由氏遺跡区域の実測。

八月二十一日（日）矢島數由氏遺跡区域の地形実測。

八月二十七日（土）中沢博氏第一四址撮影。

八月二十八日（日）矢島數由氏実測。

九月四日（日）矢島數由氏地形実測。本日にて終了。

九月六日（火）晴。東京大学工学部建築学科講師工学博士堀口捨己氏が來訪されたので、昭久、現地へ案内する。

十月三日（月）晴。東京大学堀口博士から、与助尾根第七址の上家想像復原設計図一葉を郵送された。

十月十五日（土）終日雲。久しぶりの発掘である。午前九時地元豊平中学校生徒一〇名及び昭久とともに現地に上る。あとから清陵高等学校生徒八名、例により手伝いに来る。

今回の発掘は第三三九五番の畠地の一部であるが、ここには小豆が栽培してあったので、その収穫を今日まで待つていて着手した。

まず第一四址の西三米に南北のトレンチを設ける。北に向っても南に向っても黒土が深いから南北の二隊に分れて掘り進める。南側は、直ちに、地表下二〇釐に小石塊一五個が円形に敷き並べたところを発掘、その下は黒土が深い。北の方面は、トレンチの東側が第一四址に西接して第一四址の床面より一段低い床面を発見した。この床面を北に追跡すると、東の側壁の裾には溝がある。遺物の出土は乏しい。約二米北進すると倒立した土器がやや高い位置にある。底部は、耕作の時削りとられたか欠損しているが、脣部以上完形で、これを掘りこむと、この土器は盤石の上に倒置してあった。この盤石は南にやや傾き、そのため土器も自然に南にくずれた状態にあ

つた。

また盤石の東側に接した角柱状石が、中央から断折して、山形状に重なりあつてゐる。ここにも石壇らしい石が敷いてある。この石壇に見事な始刃磨石斧がたてかけてあり、石壇の下から打石斧三点が出土した。石壇の背後は直ちに北の側壁に接し、附近から黒曜石屑が頻りに光る。この石壇の前面六〇㌢に石臼の大きな箱形炉址があり、その底には土器片が崩れこんでいる。

これらの出土に疲労は忘れ、作業は大いに進歩し、たちまち完掘し清掃をする。四隅に柱穴があり、そして、南側の東西の両主柱穴の中間に、一枚の盤石が敷かれてある。この石の南縁から土器口縁部の一部がのぞいていて、この石の下には土器が埋めてある。南の側壁はなく、床面はなお南に統き、住居址が南接するらしい。この発掘作業は明日に譲り、午後三時引き上げた。これを第一五址とする。



図 79 与助尾根遺跡の盤石下にあった素文甕

十月十六日（日）快晴。昭久とともに午前八時現場着。本日も地元豊平中学校生徒八名と清陵高等学校生徒八名が応援して作業を続ける。多勢でしかも作業に慣れたので、その場その場を懸命に努めたため、発掘は進歩し、午前中に完掘した。これを第一六址とする。これにて本年は竪穴住居址一〇基と遺物とを発掘した。中沢博氏撮影。

十月十八日（火）曇後小雨。昭久は宮坂久一とともに復原家屋の用材を区有林から伐採し、荷馬車で与助尾根に運搬する。

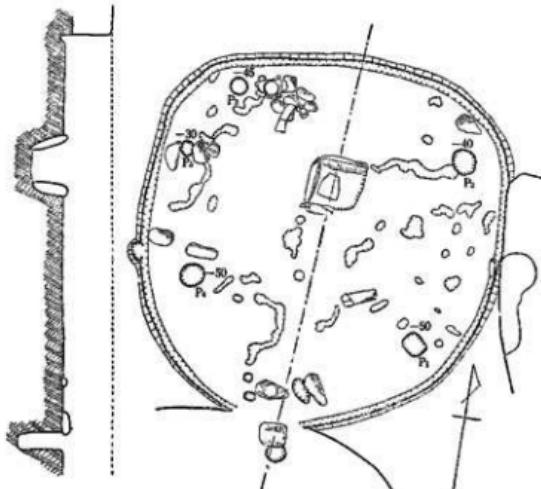
十月二十日（木）矢島數由氏第一五・第一六の兩址を実測。

第一五址 竪穴住居址

（図版三五下、三六上・插圖八〇）

第一四址の北隅の西にあって、現地表面から九〇厘米の深さにある。平面は隅の丸い方形で、その直径は四・九〇米を示す。床面は水平にかたく、堆土は奇麗に剥がれた。高さ三五厘米の側壁がこの床を囲む。但しこの住居址と南に接する第一六址との接触線一米に亘って、これを欠き、この周壁の幅に幅一〇厘米、深さ一六厘米の溝が内周する。床の中央から北に寄つて石圓の方形堅穴炉址があり、北側と西側とにそれ盤状石を豊にはめこんで開み、南側は、角柱状の石を西によせて据え、東側と南側の東半分には炉縁石を欠く。南北の径七〇厘米、東西の径八四厘米の大なるものである。こ

の炉縁石は、北側は、長さ六三厘米、幅四三厘米、厚さ一〇厘米のもので、これらはともにその両面を剥ぎ取った廻をしているが、どのようにして平に剥ぎ取ったものであろうか。長い間の経験から得た知識により、これを目的的ため操作し得られる技能も、身につけていたものであろうか。また炉石の相接する隙々には小塊石を詰め込み、炉石の崩れるのを防ぐ工夫もしてあって、一つ炉の構築に



参 考 尾根第一五住居址実測図

も相当緻密に頭脳を働かせた。

柱穴は五ヵ所にあって、どれも三六楕乃至四〇楕を径とし、深さは四〇楕乃至六〇楕の円形の直穴である。これが、中心から三〇楕、北によつた地点をよぎる長さ四・二〇米（北西から東南へ）、四米（東北から南西へ）の二つの対角線上の四分点にある。これが四主柱の穴であろう。従つて炉址の南側が最も広い空地となる。これらの柱穴は壁際から三〇楕離れた内床にある。添石はない。P₅は、西側の北隅によつてあり、その東西の両側に盤石が敷かれている。何か特殊の目的のものであろうか。

床面に石壇と埋甕との二つの特殊な遺構があった。

石壇は、北西隅の主柱穴の東に接し、盤状の自然石六個を東西の長さ九〇楕、南北の幅三〇楕に敷き並べて設ける。この最西端にあつて縦横ともに三〇楕、厚さ二〇楕の台石があり南に傾く。そしてその下には小塊石が詰めてあるから、最初水平に据えたものが、埋没される以前に厳しい寒気のため、このように、北側が凍み上がり、傾斜したものであろう。この台上に完形朝顔形甕形土器一点が倒置してあつた。この土器も、台石の傾斜とともに、南にずれ下がり、口縁部が台石からみ出し、ようやくその一部分が地面に受けられてとまっていた。この土器は底部を欠いていたが、これは耕作によつて切りとられたものであろう。粘土紐文によつて装飾され、現高二八楕。

この東に、また他の台石があり、それも石塊を小詰めしてあつて南に傾く。この南に、正面の幅一三楕、横幅一〇楕の四角の石柱が、長さ二〇楕と二八楕の二個に断折し、その接触点を山形状に盛り上げて、ともに南に傾いていた。これらは、元来一体のもので、組み合せると一基の角柱石に復元される。かつて、二個を組み重ね一基として、この台石の上に安置してあつたものが、のち台石の傾斜によりこのように倒れたものであろう。この台石の下から、磨石斧三点、打石斧三点とが出土した。

もなかつた。ただし、床面には盤石八個が所々にあつた。

第一六址 穹穴住居址(圖版三九上·插圖八一)

第一五址の南に接し、両住居址の接触する一米の間だけ側壁を欠いて、同一水平の床面が通じてゐる。

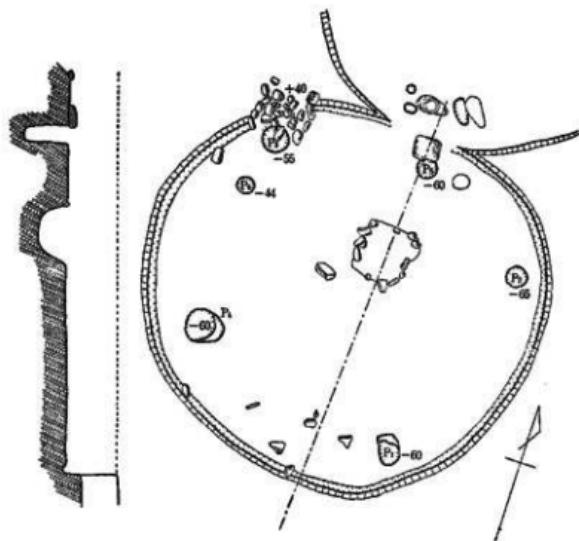


图 81 与肋尾模第一大佳君比赛图

埋甌は、南側の東西両主柱穴の距離三メートル中に直角に、南北一・二〇メートルの地点へ三角盤状で、表面平滑な自然石を數く。東西の長さ四〇厘、南北は頂点への長さ二〇厘、厚さ六厘のものである。この盤石の縁から、土器の口縁部がのぞいていた。それは、現高三五厘、口径三七のぞいていた。それは、現高三五厘、口径三七厘、底径一五厘、口縁部が分化発達した朝顔形甌、底脚部を平に欠いたものを、地床面に配し、口頸部には、四個のX状の把手が対称的に添加してあつたものが欠損してその痕跡が認められる。土器の外面には煤炭がこびりついでいた。

出土品は、これら石壇上以外の床面には、何

現地表面下九〇釐の深さを床面とし、平面径五・四〇米の円形をなす、規模大なる竪穴住居址である。床面は水平で堅い。これを高さ三五釐の側壁がめぐり、幅八釐、深さ三釐の浅い溝がこれに内属する。

炉址は床の中心から少し北により平面方形の竪穴である。口径八七釐、深さ四〇釐、底狭く掘る。この側壁に小塊石が所々に張りついている。一度は石で囲つてあったものであろう。底面は赤く焼けている。

柱穴は六ヶ所にあって、P₁・P₂・P₃・P₄は、床の中心をよぎる長さ四・五〇米の対角線上の四分点にあるから、これが四主柱穴であろう。側壁から一五釐離れた内床にあって、径三〇釐内外、深さ六〇釐の平面円形の直穴である。

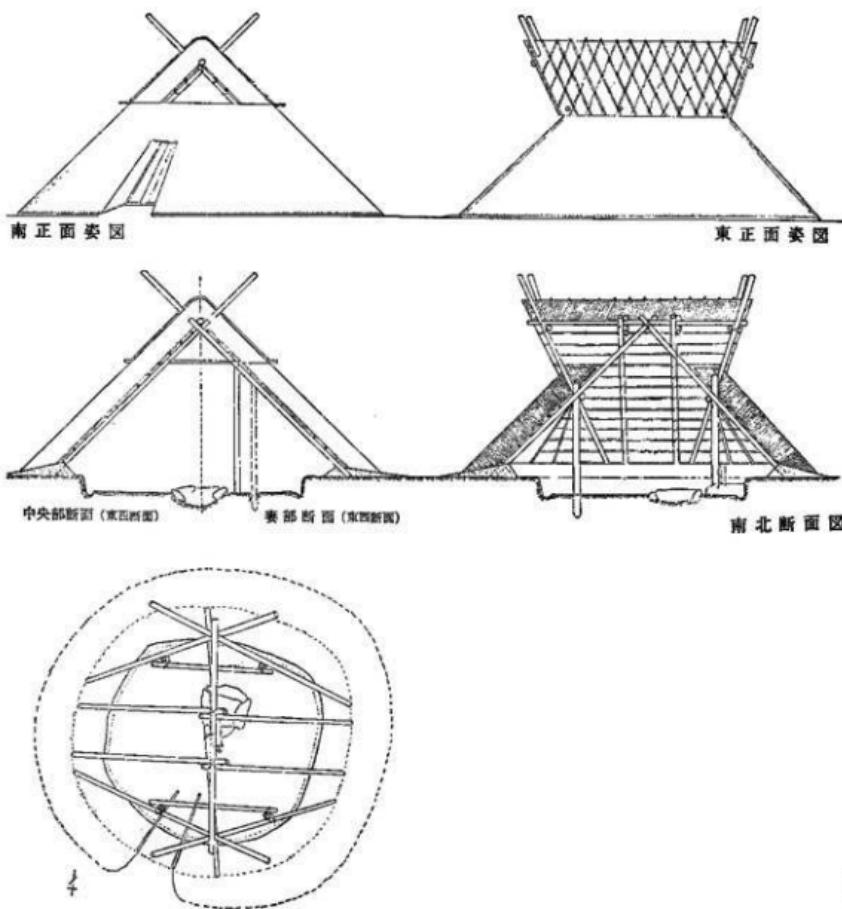
他にP₅が、北側東西兩柱穴の間隔二・一〇米の線上の中心から北に向か六〇釐の所にある。口径二九釐、深さ六九釐の平面円形の直穴で、この北側に添つて盤石を敷く。またP₃の南四五釐に口径二四釐、深さ四四釐のP₆があつて円錐状に掘られてある。

出土品として、土器の口縁部がP₅の東にさかさまに、また土器の脚底部が床の南側にこれもさかさまに遣つていた。石器は凹石が六点、周壁近くに遺り、南側が殊に多くあつた。石塊が南側の床面にいくつもあつた。一点は砥石のような細長いものであつた。

石積炉址 この竪穴住居址の北西隅床面からの堆土三〇釐の上から、住居址外の地面にかけ、小塊石十五、六個を径八〇釐の円形に乱雑に並べて、ここで焚火をしたらしい。この堆土の下には第一六址の床面や溝があり、またP₃もあるから、これはこの住居址が埋没してから構築されたもので、竪穴の生活以降のものである。

十月二十二日（土）曇。堀口博士が設計された古代家屋の復原図に従い、この遺跡の第七址に上家を構架しようと今日から作業する。

地元豊平中学校生徒と清陵高等学校郷土班員等一七名によつてその骨組をつくる。これを結うのには蘿蔓の皮



説 図 82 与助尼根第七住居址の上家復原 (堀口博士設計図)

を剥いで使つた。これは、見学に来られた二葉高校生が手伝ってくれた。

夕頃、堀口博士から二十四日視察に行く旨電報があつた。

十月二十三日（日）快晴。昭久、豊平中学校、清陵高等学校の両生徒とともに家屋の復元を続行する。今日は萱葺まで終了する予定であったが、これは堀口博士から指導して頂くことにして延期する。しかし東京からサン写真社員が撮影に来られたので、一応、西側だけを葺く。

午後、山浦政・吉沢俊一両県教育委員、小西謙教育長、浅川欽一県主事等、諫訪史談会委員、千葉清志・細野正夫・矢崎孟伯氏の案内にて現地を視察される。

十月二十四日（月）快晴。夕頃、堀口博士を迎えるため昭久上諫訪に下り、同夜ともに不二屋に一泊。

十月二十五日（火）終日雨。堀口博士諫訪市滞留、昭久も同伴する。

十月二十六日（水）快晴。堀口博士、諫訪史談会委員細野正夫氏とともに午前十時到着され、直ちに現場にて復原家屋につき詳に指導されたのち夕頃帰京された。

十一月五日 東京大学教授藤島亥治郎博士遺跡を踏査される。細野諫訪史談会委員と昭久が案内する。

第四次発掘（昭和二十五年）

四月十五日（土）晴れて暖か。第七址の東、第三八〇九号の畠は、豊平森林組合の苗圃として落葉松の苗が植えである。これを抜きとつて次の苗を植えつけるまでに一ヶ月の間空地になつてゐる。地主小平重市氏から、この期間を利用して発掘してもよろしいとの承諾を得たので本日から開始する。

午前九時、四男昭久を伴つて現地着。

第七址から東に向かへ、この畠の中央にかけて、幅一米のトレンチを設ける。黒土層三〇cmの下が赤褐色土層とな

り、この面を調査し、延長二メートルから急に黒土が深くなつた。次にこれに南北のトレンチを設けると北に黒土が深く、六メートルにして再び平常の地層となる。竪穴住居址が、東西のこのトレンチから北側に展開するらしい。

よつて北に堆土しつつ進み、やがて、北側の壁面に達した。その裾には石壙があるらしい。これから西に向つて床面を追跡する。堆土には、木炭屑や黒曜石の細片が散見される。ようやく北西隅に達した。その床面は堅く堆土が見事に剥がれる。ここから土器破片、黒曜石屑とともに石匙二点、磨石斧一点、土器片を円盤状に成形したもの的一点、花崗岩塊が出土する。この北西隅の堆土を除去し、午後三時帰宅する。

四月十六日（日）北風が募つて来て晴れる。鶯が啼き、落葉松が一面に芽吹き、芝地に野木瓜が咲き初める。午前九時昭久とともに現地着。今日、三女の佐喜子もつれだつて行き、南の湿地の根岸を採つて原始生活をしのぶ。

第一七址を続掘する。西一メートルで西の側壁に到達した。側壁に沿ひ南に掘進してこの方面の区画をきめる。

午前十時、清陵高校生戸沢充則君が岡谷の自宅から手伝いに来てくれる。これに力を得て東側に移る。堆土に土器片が多い。南側にやや形を保つた土器一点が、これと南に接する石塊の面と同一水平面にあつた。

次に、北側の石壙を調査する。この中央は黒土が深く、そこから完形の磨石斧一点が青く光つて出る。ここは穴らしい。この南に黒土の深いところがある。縁石のない竪穴炉址である。この堆土から打石斧一点出土した。ようやく住居址の三分の二が発掘された。東に一メートルのびるらしい。この住居址を第一七址とする。

次に、この住居址から畑の東端まで延長し、一八メートルのトレンチを設ける。ほぼ一・五〇メートルの等間隔で黒土が深いから東にかけて三ヵ所の住居址が推定される。午後三時帰宅。

四月十七日（月）晴、暖か。梅の花盛り、桜も赤らむ。

昭久、河西清光氏の手伝いを得て、兩人して第一七址を完掘し、清掃した。この時、東北隅の柱穴から土器一

個分の破片と、東側の溝から小形磨石斧一点出土した。

四月十八日（火）晩。落葉松の芽吹きが一段色濃くなる。

本日から豊平青年会員が協力してくれることとなり、まず福沢区の青年会員三名が出動され、これに自分と昭久との五名であるから大いに力強い。午前九時現地着。

第一七址の床面を清掃する。東の側壁の中央の周溝に、完形磨石斧一点直立してある。また東南隅の床面からは黒曜石一点と磨石斧一点とが出土した。十時半全く清掃する。

次に、十六日設定したトレンチ東六米の地点で、これに十文字に南北のトレンチ五メートルを設け、ほぼ住居址の区画が判ったから、これにより堆土を発掘する。現地表下四〇厘米に豊富な土器包含層があつて、以下二〇厘米の黒土を経て、床面に到達する。黒土層中に炭屑多量に包含され、また堅形石匙一点・黒曜石石刀一点・黒曜石石鎌一点が出土した。

中沢博氏第一七址撮影。午後四時帰宅。

第一七址 竪穴住居（國版四〇上・插圖八三）

第七址の東二・二〇メートルで、この台地の南傾斜面に対し、水平の床に構築したから、現地表下から北側は一・〇五メートル、南端は七〇厘米の深さにある。この平面は、やや五角形に近い円形で、東西の径四・八〇メートル、南北の径は五メートルを示す。

床は水平で堅く、これを高さ北端で三五厘米、南端で一五厘米、東西の両側では、これに傾斜する側壁がめぐる。これに深さ一〇厘米、幅一二厘米の溝が内周する。

床の中心から北によって、方形竪穴の炉址がある。径九〇厘米、深さ三四厘米、底狭く掘りこむ。底は焼けて赤い。

南西隅の炉壁に一小塊石がはりついている。

一九二

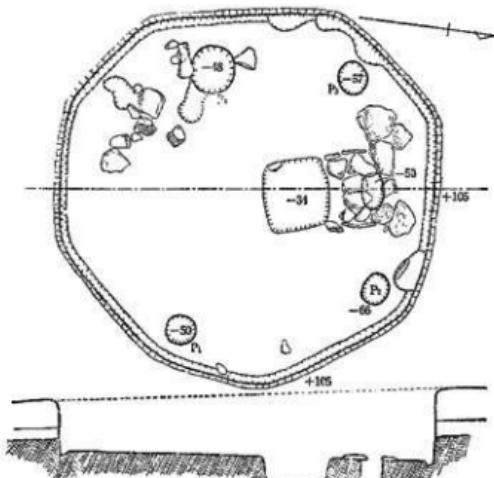
柱穴は四ヵ所にあって、床の中心をよぎる長さ四米の対角線上の四分点に配置されているから、このP₁・P₂・P₃・P₄が主柱の穴であろう。各穴とも、平面円形の垂直で口径は四〇糰、深さは、P₁が五〇糰、P₂が六六糰、P₃が五七糰、P₄は四八糰あって、どの穴も側壁から一五糰の内床にある。

また床面の西側でP₅・P₆間に径六〇糰、深さ四八糰の平面は円形で、直壁平底の豈穴P₅がある。貯蔵庫であろうか。

石壇 炉址の北側、北の側壁との僅かな間に石壇がある。これは二段に設けてある。北側に扁平の石六個を東西の長さ一・五〇米、南北の幅六〇糰に數き並べ、各石の下に詰石をし、そしてこの西端の石は長さ幅とも四五糰で、最大なものである。これに対し、その前面に一段低く縦横六〇糰、やや不正方形に六個の扁平石を数き並べ、次に東西の両端に二個ずつの扁平石を疊に積みこみ、これの境界をつくる。実に念入りの構築である。

そして、この中央に、口径南北二〇糰、東西四五糰で、平面橢円形をした直穴が、五〇糰の深さに掘られていた。この穴の中から、磨石斧一点、石壇の下から同じく三点、また、石壇の南側から凹石二点が出土した。

この床面の西南隅に大なる石塊が積みられてあつた。P₅の周囲に三個、P₄の周囲五個殊に大きなものが重ねて



第 図 83 参助尾根第一七住居址実測図

あつた。

このように出土品は、石壙の周囲から、土器破片・黒曜石屑・花崗岩塊一点・石匙二点・磨石斧四点・円盤状に加工した土器片一点、また、東の溝から磨石斧二点、P₂の穴から土器一点などであつた。

四月十九日（水）晴。天候は順調、桜は咲き急ぐ。

岡谷市から増沢賛氏が、下諏訪町からは河西清光氏が手伝いに来られ、それに、南大塙区青年会員三名と、昭

久と私で同勢七名であつて、丁度手頭の人数のため、今日の作業は大いにはかどつた。



図 84 与助尾根第一七住居址発見土器

昨十八日発掘しかけた住居址内の遺物は、床上二〇畳の高さの堆土の上を、しかも竪穴の中央部を東西に一列にならなつていて。この遺存状態を撮影した後、遺物を土揚げして清掃する。北側中央の柱穴から打石斧一点、南側の堆土から黒曜石の石槍と石鎌とが一点ずつ出土した。これを

第一八址とする。

矢島教由氏実測する。

次に、東北方四米に黒土の深いところを発見して発掘する。住居址らしい。午後四時作業を終る。

第一八址 竪穴住居址（図版四一下・捕図八五）

台地の南斜面の頂上線に第一〇址と四・五〇米の間隔で東に並列する。

現地表面、北端で九四柵、南端で六六柵の深さにあって、傾斜する地形に対し、水平の床をつくる。床は堅く

堆土がよくはがれた。この床を高さ北側で三四
畳、南側で一畳の赤土層の側壁がめぐり、こ
の竪穴の平面は、東西の径五・四〇米、南北の
径四・八〇米のやや東西に広い不正の円形であ
る。これは西側に二条の溝があることから、こ
の方面へ拡張されたものであろう。この側壁に
内周して幅一〇畳、深さ一四畳の溝がある。そ
して、西側には壁裾から一五畳の内床になお一
条の溝がある。

床の中心から北より竪穴の炉址がある。口
径七五畳の方形で深さは五〇畳の底狭く掘りこ
まれており、底面は焚火で焼けて赤い。西南隅
の炉壁に一小塊石がある。

柱の穴は六カ所にある。床の中心をよぎる長さ四・二〇米の対角線にP₂・P₅が、また長さ四・六〇米の両端に
P₁・P₄があり、また南北両側の中央にそれぞれP₃・P₆があつて、上家はこの主柱六本によつて架せられたもので
ある。

P₁・P₂・P₄・P₅の四穴は、どれも、口径四〇畳、平面円形の垂直で、深さP₁は五七畳、P₂は六五畳、P₄は六三
畳、P₅は四五畳の深いものである。また北側のP₃は、口径四五畳、深さ六四畳の不正な円形に掘られ、南側の中
央にあるP₆は、平面方形の口径四五畳、深さ六五畳である。そしてその位置は、P₂は側壁に沿い、P₁・P₄・P₅は

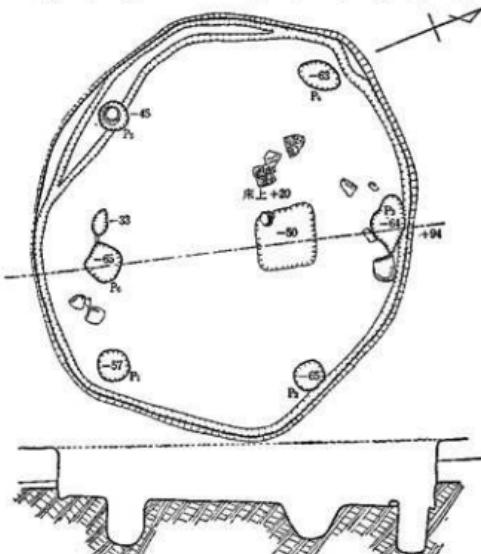


插图 85 与助尾根第一八住居址実測図

側壁から一五釐離れた内床にあり、またP₃も側壁に、P₆は側壁から六〇釐離れて内床にある。P₆の西側に添い三種の深い一小穴がある。

出土品は、P₃の堆土から抉入してある打石斧一点が、P₅の堆土から土器一個体の破片があつたが、床上には遺存しなかつた。

然し、床面からの高さ二〇釐の堆土中、住居址の中央を東西に結ぶ一直線上に、土器が相重なつて遺存し、また高さ三五釐から石器一点が出土した。南側の堆土から黒曜石の石槍と石鏃が一点ずつ出土した。

石塊は、砥石らしいもの一点が、P₃の南に、扁平の自然石三個がP₆とP₃の東側の床上にあつた。

四月二十日（木）細雨。早朝、雨をおかして昭久とともに現地に行き、第一八址出土の土器の土揚げをして、自宅に運搬する。午後、これらを洗滌して整理した。

四月二十二日（土）晴。昨日は雨で発掘し得なかつた。

今日は、昭久とともにに出掛ける。これに下古田区青年会員三名の手伝いを得て、十九日発見した住居址らしい地点を統括する。この西側を除土したが遺物は不思議なほど包含されていなかつた。中沢博氏第一八址撮影。午後四時作業終了。

四月二十三日（日）花曇。遠いブラジル田サンパウロ州に移住された上伊那郡飯島村出身の井口吉三郎氏は、二十数年ぶりで帰郷され、その怠慢の一日前を剃髪され、今日、下諏訪町萩原分校の岩本新一郎先生の案内で遺跡を見学された。

昭久、岡谷市の増沢賢氏と二人で住居址の東側の半分の堆土を除去する。出土品なし。これを第一九址とする。

四月二十四日（月）南風に誘われて桜は頻りに散りいそぐ。

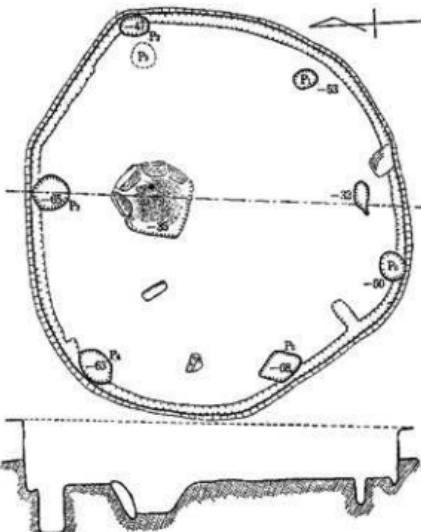
昭久、御作田区の青年会員三名とともに第一九址を完掘する。

米沢中学校から竪穴に復原する家屋の材料の貢東をトラックで届けられる。これは、今一棟構築するため調査

教育会北部支会に属する各中学校（米沢・北山・湖東・豊平）から寄贈されたものである。

第一九址 竪穴住居址

（図版四二上・插図八六）



第一九址 竪穴住居址（助川・美濃）

第一八址の東北方三・六〇メートルで南斜面の頂上の地表下北端で九四楓、南端で四六楓の深さにある。床は水平で、嵌きかためたものか、非常にかたい。この床をめぐって、高さ北端で三四楓、南端で一楓の赤土層の側壁がめぐり、それに幅一〇楓、深さ一五楓の溝が内周する。こ

の側壁により平面は、径東西五・二〇メートル、南北五メートルの不整ながら六辺形である。

床の中心からやや北に寄つて、片側だけ石で囲った竪穴炉址がある。炉址の平面は五角形で、東西の径一メートル、南の側邊から北側の頂点まで一・二〇メートル、深さ三五楓、底狭く掘りこむ。

炉縁石は、北側が、長さ三〇楓、幅七〇楓、厚さ四〇楓の大塊石二個を山形に組み合せて竪に深く掘りこみ、東側は、ほぼ等大の扁平石二個を竪に植えこむ。西と南と両側はこれを欠く。

柱穴は、六カ所にあって中心をよぎる長さ四・八〇メートルの対角線上の四分点にP₁・P₂・P₄・P₅があつて、なお南

北西側の中央に対応して P_3 ・ P_6 がある。どれも壁に沿っている。上家はこれらにより六主柱によつたものであろう。また P_2 の西側に接して P_2' がある。これは、黒土の上に赤土で埋めてあつたから、一度、東北隅の主柱であつたが、 P_2 に移してから後、赤土で埋めたものであろう。

順位	平面形	口徑(単位: 桁さ)				
P_8	P_5	P_4	P_3	P_2	P_1	
円形	菱形	円形	橢円形	橢円形	橢円形	二一
三六	五七	四二	三三	五六	三〇	五三
五〇	六八	六三	六五	四七	二七	

柱穴の大きさは次の通りである。

出土品は、堆土の高さ二〇楓から完形土器二点と石刀一点が、また P_5 の柱穴に石鎌一点があつた。床面には石塊三個の他はなかつた。

四月二十五日(火)雨が降つたりやんだりして天候が定まらない。

昭久は塙之目青年会員三名とともに第一七址の東北方四米に住居址を発見して発掘する。出土品はない。四月二十六日(水)晴。昭久、上古田区青年会員三名と前日発見した住居址を完掘する。これを第二〇址とする。

第二〇址 積穴住居址(國版四二下・插圖八七)

第一七・第一八両址の中間から北方二・一〇米、台地の平坦の地にある。

現地表下九四楓の深さにあつて、床は水平で堅い。これを高さ三四楓の赤土層の側壁がめぐり、これに幅一〇楓、深さ一五楓の溝が内周し、竪穴の平面は、南北の径四・八〇楓、東西の径四・五〇米で不整の円形を呈す。床の中心から北によつて竪穴の炉址がある。東西の径九〇楓、南北の径七五楓、平面矩形で四五楓の深さに底狭くほりこむ。炉底には、同一容器の土器片を一面に敷き、その隙間に小石を詰める。

柱穴は七ヶ所で、床の中心をよぎる長さ四・六〇米の対角線上の四分点にある P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 が主柱のもので

あろう。

柱穴の大きさは次の通りである。

出土品は、北

側の床面に復原

し得られる同一

容器の土器破片

と、P₄の南東に

土器三点で石器

はなかつた。

堆土にも含まれていなかつた。

四月二十八日（金）矢島数由氏第二〇址実測。

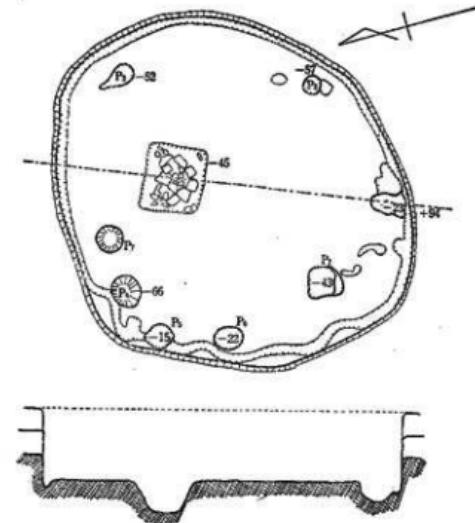


図 87 与助尾根第二〇住居址実測図

P ₇	P ₆	P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	類位	形狀	口徑	深さ
円形	円形	方形	円形	円形	円形	円形	方彌	方彌	二一	三六
三三	三〇	三〇	三九	三九	五二	五七	四三	二一	五二	二一
?	二二	一五	六六	一五	六六	六六	六六	二一	五七	二一

五月五日（金）晴、後驟雨。午前中遺跡清掃のため昭久・小平幸術・小平義市西氏とともに上つたが、たちまち大驟雨が来て中止。帰宅。

五月六日（土）薄曇。長野県知事林虎雄氏他一行遺跡現地及び出土品等視察される。

七月一日 豊平村役場史員一同にて巨石尖石を木桶で囲む。

七月三日 豊平村青年会員一同は、尖石遺跡林道から尖石と与助尾根遺跡に通ずる見学道路を開設する。

七月四日 前日に続き見学道路工事続行中、尖石と与助尾根の中間尾根に石囲の炉址を発見し、炉址はそのまま桶を設けて保存した。

七月五・六・七日 与助尾根遺跡第八址に、古代想像家屋一棟を豊平青年会員の手により復原する。

七月九日 矢島氏により尖石遺跡地形の実測完了する。

十月十四・十五日 両日、岡谷東高等学校郷土班員により、同教諭小林正人氏指導のもとに第三〇八六番の畑地第二一址、第二二址を発掘する。

以下発掘記録は、岡谷東高等学校地歴部員の手記による。

十月十四・十五日 秋晴の下に地歴部員は、岡谷南高等学校及び清陵高等学校の郷土部員とともに与助尾根遺跡を発掘する。

一行二名、十三日午後三時の列車で茅野駅下車。それから、直立すると頭上一五種位の隙間のある小型バスにゆられて三〇分、山寺駅下車。それから大きなりュフクサックを背負って田圃の道を一列になつて歩く。周囲の山々は紅葉にはまだ早いが、それでも漆木だけは、緑の松林の中を紅、黄に彩ついていた。

宿泊所である地元南大塩区に着く。部落の人達が、夜具その他を用意して快く迎えて下さったのは大変嬉しかった。今まであまり関心のなかつたこのよだな史跡に対し、地元民の協力には感謝の念で一杯であった。

翌十四日、朝霧が音をたてて流れる中を、尖石の主と称せられる宮坂先生を先頭に、一同鎌や鋸をかついで与助尾根に向う。遺跡は部落から三秆。発掘地は一昨年本部員が発掘した場所で、霧が晴れて陽がさし始めた頃、この畠地に二米の間隔で東西のトレンチ六条を入れて調査する。

畠の東の端と西の端と相呼応して、黒土層の深い地点を発見した。昨年発掘した第六住居址は、その中間にあら。私達は、東の側の地点を発掘する。これに、南北に亘るトレンチを設ける。四〇種程掘り下げるとき器の包含層にあたる。あまり土器の破片が多く、浅い地層であるから、平地の住居址ではないかと疑問が湧いた。これが平地の住居址だと堅穴住居址とちがつて側壁がなく、炉址でも発見しない限りその区画が判然しない。よつて、

更に二〇厘米の深さに掘り下げる。しかし今もって側壁が判然しない。掘り上げた黒土を再び他に移す。ようやく北の側壁と西側半分の側壁が発見された。

一方、西側の組は、完掘といってよいほど、見事に住居址を発掘してしまった。中央には大きな炉址があり、柱穴が五ヶ所と土器が五、六点発見されている。

日の暮方、龍胆の紫濃い草花を摘みながら宿所に戻った。

十五日も朝靄が濃い。ことによるとの住居址は東隣りの畠までかかるかも知れない。

地主の諒解を得て植えつけてある小豆を曳きぬく。完掘を前にして部員の意氣は高い。それに、今日は理数部から測量班が十時頃までに応援に来てくれる筈だから、それまでと一同馬力をかける。

昨夜から今朝にかけ冷え込みがひどく、そのため畠一面に霜がかかり、妙にしめっぽい空気が足にまつわる。十時、ようやく側壁がめぐる赤土の床に、黒土の深いところが判る。その黒土を掘り上げるが、狭くてしかも深いから小手が自由にならない。苦心の後やっと掘り上げて片脚を入れる。穴は膝の上、一二、三種の深さ（深さ六〇厘米乃至八〇厘米）にある。これが柱穴である。

ようやく完掘し得たこの住居址は、平面隅丸円形で、柱が六ヶ所にある。完形土器二点、及び復原できるものが數点出土した。どれも中期末の型式である。その他黒曜石も頻りに出たが、石器類は僅かに打石斧二点と磨石斧四点だけであった。

東の住居址は第二一址、西の住居址は、第三二址とし、長い間の希望を果して三時山を下った。

第二一址　竪穴住居址（圖版四三上・攝影八八）

畠第三三九五番にて第六址から東四・五〇米の地点、現地表下六〇種の深さにある。

平面は、平坦な床を高さ一五種の側壁がめぐって区画をなし、径四・二〇米の不整円形である。この側壁には北側だけ溝があつて他の三側には溝がない。床の中心から北に偏つて竪穴炉址がある。平面は東西の径八四種、南北九〇種の不整形で、底狭く四〇種の深さに掘りこむ。西北隅の炉壁に扁平の石二枚が遺つてある。炉底は焼けて赤い。

柱穴は次の八ヵ所にある。

順位	平面形	口徑(幅)深さ(高さ)
P ₈	円形	三〇
P ₇	不整形	三三
P ₆	円形	三六
P ₅	円形	三三
P ₄	円形	四〇
P ₃	不整形	四五
P ₂	円形	五五
P ₁	不整形	五一

これらのうち床の中心をよぎる長さ三・七五米の対角線上の四分点にある、同形・等深ある、P₁・P₂・P₃・P₄を四隅の主柱穴とし、北側の中央に

あるP₅に対し、南側のP₆を棟木の南北の支柱穴とすれば、この上家は六王柱により構築されたものであろう。出土品は、土器四点・打石斧二点・磨石斧四点。

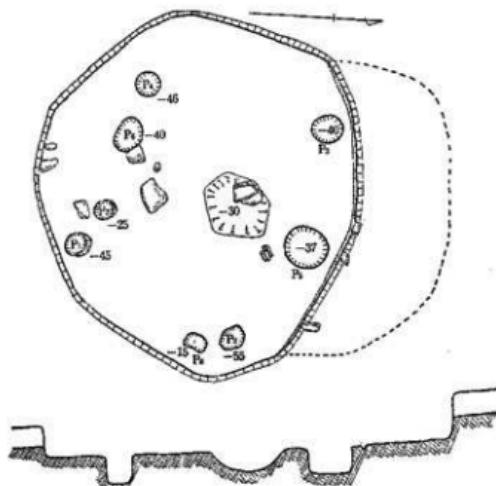


插圖 88 与助尾根第二一住居址実測図

第二二址 竪穴住居址（插圖八九）

第三三九五番の西端、第六址の西、八米の地点にあって、現地表下六〇畳の深さにある。平坦な床をめぐる高さ一五畳の側壁により、その平面は、東西の径五・一〇米、南北の径五・七〇米の橢円形である。側壁に内周するところの溝なく、北側のP₃・P₄・P₅の三柱穴をつらねて一条の溝がある。

個を床面に並べ、径南北一・二〇米、径東西九〇
糧の矩形に並べて畳む（但し西側の中央に一個

柱穴は次の八カ所にある。

柱穴のうち、

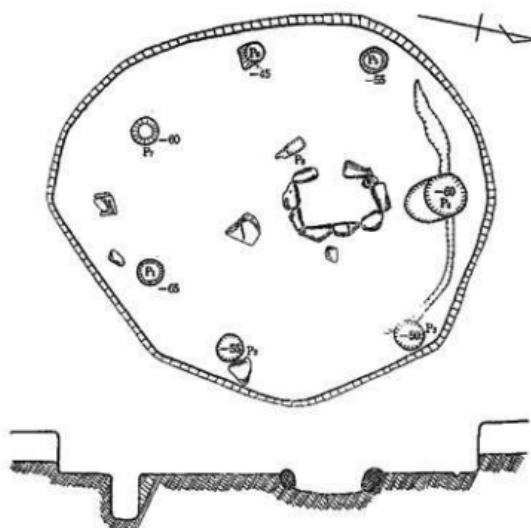


图 89 与助居权第二二住居地寒测区

P ₈	P ₇	P ₆	P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	順位
矩形	圆形	平面形						
一一二	三三七	一二四	三〇	五七	三六	三三	三三	口徑(總)
X								際さ無
六〇	四五	五五	六〇	五〇	五五	六五		

北側の中央にある大きなもの P_4 に対し、南側の中央のもの P_1 をともに棟木の支柱穴とすれば、

この上家は六主柱により棟木によって構架したものであろう。

また、側壁から三〇畳の内床に沿って、ほぼ一・八〇米の等間隔にあり、相対する P_1 と P_7 、 P_2 と P_6 、 P_3 と P_5 の三組によつて、即ち六主柱によつて上家を構架したものであろう。

石函遺構 床上南側の主柱穴 P_1 ・ P_7 の中心から、外に向つて四五畳の地点に、一つの石函の遺構がある。それは東、西、北の三側面を盤石一枚ずつ縱に組んだ徑三〇畳の方形で、底には盤石一枚を敷く。これは、何のためのものか意義を明らかにしないが、この住居址の埋甕の位置にあるから、埋甕と同意義をもつものではなかろうか。

出土品は土器三点。

第五次発掘（昭和二十七年）

五月十七日（土）晴。岡谷市増沢賀氏発掘援助のため九時のバスで来着される。相伴つて現場に行く。

第三三九五番の畠の北半分が、未調査のままになつてゐたからその調査にかかる。

まずこの畠の南端で発掘した第一四・一五・一六址の竪穴群の地点から、西北方にある第二二址にかけて、延長一四米、幅一米の基本トレンチを設定する。これから四米の間隔で(a)(b)(c)の三条のトレンチを南西方に向つくる。

耕土層三〇畳下が赤褐色土層になる現地で、(a)トレンチでは基点から四米の所で、黒土が深く地表下六〇畳に赤土層の床面があり、ここに竪穴住居址が発見された。これから(b)トレンチにむけトレンチを設ける。床面がこの方面にのびる。床面は、かたくてよく剝がれる。やがて東の側壁に達し、西側は黒土層が深くて、他の住居址が埋没しているらしいが、そのまま北に追跡して、遂に北の側壁に到達した。竪穴の約三分の一を発掘し、午後四時終了。

堆土の中に炭屑は夥しかつたが、土器片は稀にしか出土しなかつた。床面に磨石一点、凹石一点が遺存し、また南側柱穴のそばに黒曜石の中塊が十数個一團になつて貯蔵され、これに凹石一点もあつた。これを第二四址とする。

五月十八日（日）曇。増沢賢氏と午前八時現地着。第二四址を完掘し清掃す。午前中で完了。この堆土には抉入ある打石斧一点・短冊形打石斧一点・鉈状石器一点があつた。

午後は、(b)トレンチにつき調査する。この基点の所は黒土の深さ五〇釐で他よりも深く、下は赤土層でその面が堅く床面らしい。或は住居址であるかも知れないが、除去した堆土が盛り上げてあるから、その床面の追跡は後日とし、午後五時帰宅。

第二四址　竪穴住居址（攝図九〇）

この竪穴住居址は、与助尾根住居址の中央にあって、台地の南斜面に接する平坦地にある。現地表下八〇釐にあって、西方の中央に一大竪穴が喰いこんで、四・二〇米を徑とする円形である。床は水平でやや軟弱である。この中央から北に片よって竪穴住居址があり、その平面六〇釐を徑とする方形で、三〇釐の深さに底狭く掘られ、底は焼けて赤い。北の側壁に石塊の小なるもの三個が貼りついている。高さ二〇釐の側壁がめぐり、西側に喰いこんだ竪穴のところはこれを欠き、これに一条の溝が内周する。柱穴は、P₁・P₂・P₃・P₄の四カ所にある。P₁・P₂・P₃は口径二〇釐、深さ三〇釐、P₄は口径三五釐、深さ三〇釐の直穴でP₂・P₃は壁間に、P₁は内床にある。

いま、東北側の主柱としてP₂・P₃をあげれば、それに対して、西南側はP₁と他の西北隅のものは竪穴の中にあるであろう。そしてP₄はその中間の柱穴として、この住居址では、五主柱と推定される。

竪穴は、径二米の平面円形直壁平底深さ八五釐に掘られた大きなもので、第二四址の西側半分以上喰いこんでいる。

この竪穴は、その位置からこの住居に附属するものであろう。

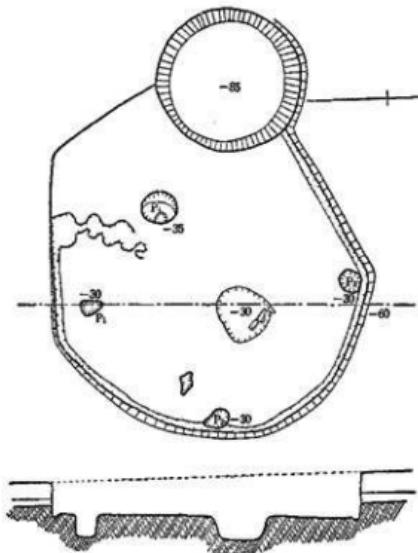
五月二十四日（土）曇。藤の花の盛りで、郭公が頻りに鳴く。

増沢賛氏と午前十時現地着。第三三九五番の東側の平地は桑畠でまだ調査してなかたので、これに桑株のうね一列おきに南北のトレンチを設けて調査したが、黒土が浅くて遂に住居址は発見されなかつた。

次に台地の東、第三〇八八番の北側で平坦の地形に東西に亘るトレンチを設け調査したが、黒土が浅く、この方面にも住居址は発見されなかつた。そこでこの南斜面の東西にトレンチを設けると、第一九

址の東方二米にして黒土が深く、炭屑や土器破片が発見されて、住居址らしい。これから北に向つて掘進し、三米で側壁に突き当り、掘り下げるところ床面になつた。ここは傾斜面であつて、発掘作業は容易に抄り、ほぼ区画内の堆土を除去した。大きな石畳いの炉址があつて、南側の縁石が炉内に崩れこんだままあつた。これを第二六址とする。

午後三時半、驟雨模様になつたので大急ぎで下る。



第二四住居址実測図

五月二十五日（日）昨夜の豪雨は晴れあがつて北風が強く、降霜があつてなかなか寒い。

午前八時半、増沢賢氏と現地着。第二六址を清掃する。床は水平であるが、その面が凹凸して軟弱だ。炉の西側に赤土が堆積し、その下には薄い黒土層がある。有頭石棒一基が東に頭を向け、西の側壁の裾に倒れていた。

堆土の中に土器片が三片あって、床面には何もなかつた。この住居址は径四メートル、小規模のものであつた。

午後、渋中学校の生徒一〇名が、小平学教諭とともに遺跡発掘の演習に来られた。昭和二十五年に、第三〇八九番の東端から第二四二番に亘る地点で、発掘しかけてあつた第二三址を続掘する。

この住居址は一メートルの深さにあつて、規模も特別に大きいが、その西半分は昭和二十五年に発掘してあつて、それにより全区域が推定される。

まず桑株を掘りこいでおいて発掘し、その堆土を竪穴の西の外側に運ぶ。たまに土器片があるのみで遺物は少ない。東の側壁近く五〇厘米下の堆土に、土器の小形のものがつぶれていた。ようやく床面に達し、ただ凹石一点が遺存していた。

午後四時、完掘の上帰宅。

五月三十一日（土）曇。午前九時増沢賢氏と現場着。再び第二四二番にトレンチを設けて調査したが、ついに、遺物も住居址も発見されなかつた。従つて、第二六址がこの聚落の最東端のものであるらしい。

つぎに台地の中央の畠第三三九五番の基本トレンチの(b)地点を調査すると、西南方に黒土層が一段深くなつて、地表下五〇厘米に土器片があり、住居址が埋没しているらしい。午後一時増沢氏用事のため、共に帰宅。

第一三址 竪穴住居址（補図九二）

この住居址は、この台地の聚落の最東端のもので、現地下一メートルの深さにある。

平面は、東西の径五・六〇米、南北の径五・三〇米のはば円形である。床は水平で最もかたかった。この中央に、径六〇畳、深さ三八畳の方形竪穴炉址がある。炉の側壁の所々に小塊石があるから、以前は石囲のものであったであろう。これに西接して径四五畳の床面が焼けて赤いから、焚火をした跡であろう。床の周囲に高さ二〇畳の赤土の側壁があつて、これに幅・深さ共に一二畳の溝が内周する。溝の所々に小さい穴がある。

柱穴はP₁乃至P₅の五ヵ所にあつて、口径四五畳平面円形の直穴で、その深さは、P₁五〇畳、P₂五八畳、P₃六九畳、P₄七一畳、P₅三五畳、P₆一五畳である。その位置は、側壁から一五畳の内床にある。そしてP₆は住居址の南側にあつて、この部分だけ張り出している。

今、炉址の南北の中軸の方向を住居址の中軸と仮定すれば、この一直線上にあるP₃を棟木の北の支柱の穴とし、これに対し南側のP₆が棟木の南の支柱穴となるであろう。従つて床の中心をよぎる長さ三・九〇米の対角線上の四分点にあるP₁・P₂・P₄・P₅が四隅の主柱穴で、この上家は六主柱によって構架されたものである。

出土品は、東の側壁添いの地表下五〇畳の堆土の上に円筒形土器が、また南の側壁近い床上に壺形土器と凹石と打石斧各一点とがあつた。

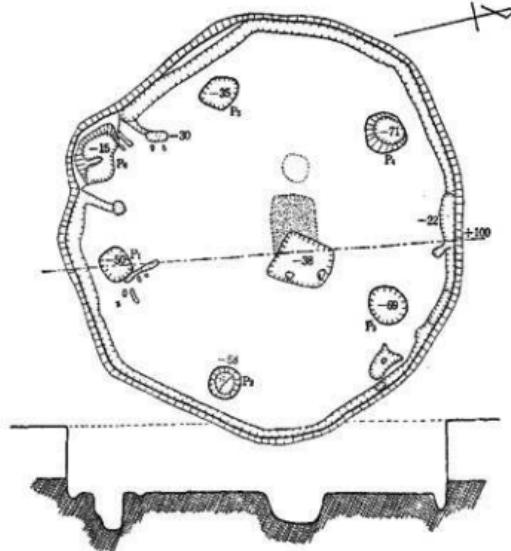


図 91 与助尾根第二三住居址実測図

第二六址 竪穴住居址（鉢図九二）

遺跡の東端の南斜面にあって現地表下六〇厘米の深さにある。

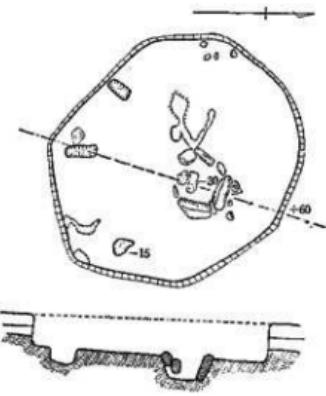
平面は、東西の径三・五〇米、南北の径二・九〇米の不整椭円形であつて、この遺跡の住居址群のうち最小の規模のものであつた。これに対し、炉址は石で囲つた径七五厘米の大きなもので、炉縁石は、北側と東側とは扁平の自然石各一個、西側は二個、南側は一個で囲み、南側は火熱で亀裂し、これが崩壊して炉内に倒れこんでいた。深さ三〇厘米、底狭く堅に掘りこんで作る。なお、その縫目と隙間には詰石をして丹念に構築されており、底は焼けて赤かつた。そしてこれは床の中心から北によせてある。

床の周囲を高さ一〇厘米の側壁がめぐり、床には溝もまた柱穴もなかつた。このように小規模のため、特殊の組立の上家が架せられたものであろうか。炉の西側に赤土塊が広範囲に亘つて堆積されていた。

出土品は西北隅に有頭石棒一基が倒れておつたのみで、他に何もなかつた。

六月一日（日）終日曇つていて、肌寒い。第三三九五番の基本トレンチの中央(b)地点から西南方にかけて、黒

土層の深い範囲を調査する。
地表下四〇厘米は堅い赤土の面で、住居址の床面らしい。この所々から自然塊石や土器片が出土する。この面を西に追跡すると、赤土面は終つて黒土層となり、深さ二二厘米で赤土面となる。この面は基盤の赤土層である。



鉢図92 与助尾根第二六住居址実測図

この上層の赤土面は、薄い黒土層にあるから、人工によるもので、基盤の赤土面は第一次の生活面とすれば、黒土層上の赤土面は第二次の生活面であろう。

この第一次の生活面を調査するため、西・南・北へと掘りひろめる。南側は直ちに高さ一〇畳の側壁がめぐり、やがて西方に消失する。ここに第二四址がこの床面よりも二〇畳低い床面で喰いこんでいる。

第二次の生活面と推定した黒土上の赤土は單なる赤土塊の堆積であつて、その間隙には黒土が混交し、赤土塊層の下には土器一点と土器台脚部が倒立して遺存し、これから下は黒土が深くなり、それに石塊二個で囲んだ中には焼灰や炭屑が多くあり、周囲の赤土面は焼けて赤い。これは炉址らしいから竪穴住居址とするも、壁が低く

その区画が判然しない。未完成の住居址か。これを第二五址とし午後三時半帰宅。

第二五址 未完成の住居址か

(国版四三・插図九三)

この住居址は、第二四址に東接し、その床面より二〇畳高い床面をもつ。この床面の所々に柱穴と推定される穴があり、平面は北で高さ五〇畳、南で二〇畳の周壁により、南北の径三・六〇米、東西の径四・八

〇米の不整梢円形と推定される。中央の炉址らしい箇所から東側にかけ赤土塊が堆積

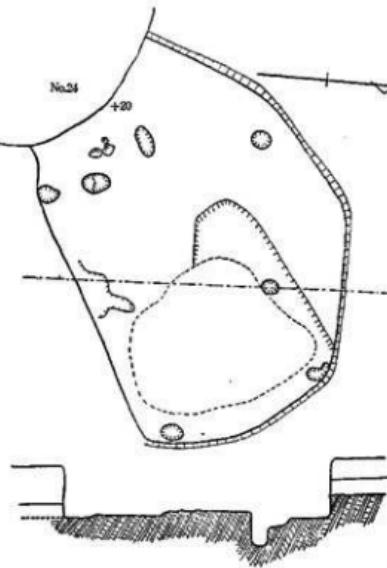


図 93 与助尾根第二五住居址実測図

神

し、その下から土器が出土している。

六月四日（水）時々雨。昭久と増沢賢氏とそれに下伊那郡旦開中学校教諭浜静氏の三人で、第三三九五番の北側を調査し、第二五址の北方九米に黒土層の深い箇所を発見し、その五〇㌢の深さから同一土器の口縁部と脚底部とを発掘し、なお黒土に炭屑を認めたが他に遺物はなかった。午後は雨天となつたので作業を中止して帰宅。

六月七日（土）快晴薄暑。鬼躑躅の花盛り。

午前九時増沢氏と現地着。前日に続き第三三九五番の北側を調査し、第二五址の北方一八米、北の作場道沿いに小窓穴を発掘し、堆土中に炭屑が認められ土器片が散見された。

午後、第七址の南斜面に亘るトレンチを東に追い四米で通常の地層となる。午後四時半帰宅。

六月八日（日）曇。朝から危い雲行きてあって、午後は遂に雨となる。午前八時半増沢賢氏と現地着。

第三〇八六番の北側には、竪穴住居址第二一、第六、第二三の三址が東西に亘り連続していたが、この畠の南斜面に東西のトレンチを設けて調査したが住居址はなかつた。

正午近く雨となつたので帰宅。

六月十四日（土）曇。小平幸衛氏とともに午前八時現地着。

地元豊平中学校二年生八〇余名が、小口・井上両教諭に引率され発掘作業に参加する。

女生徒は、遺跡内を清掃し、男生徒は二組に分かれ一組は第二一址を再発掘し、他の組は第二五址から西北方に向って、黒土の深い所を発掘し北の側壁に到達する。これから西南に向ってトレンチを設けて、その範囲を調査した。この中央は上層の黒色濃く土器片が堆積し、炭屑も頻りに出る。この下層に砾石があるらしい。午後三時半生徒は解散する。出土品は堆土から無柄石鎌（黒曜石）一点と、床面の東側から打石斧一点、西側から磨石

斧と小形磨石斧各一点が出土した。これを第二七址とする。跡の始末をして午後四時帰宅。

第二七址 竪穴住居址（國版四五上・挿図九四）

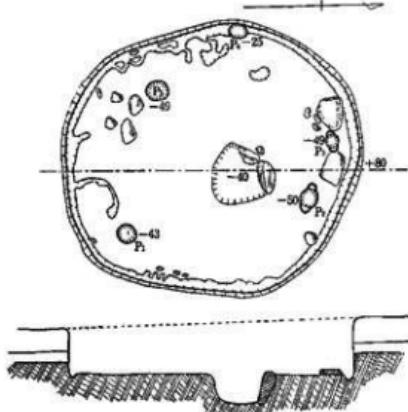
第二五址に殆ど接してその西にある。現地表下八〇釐の深さにあって、平面は、東西の径三・六〇米、南北の径三・八〇米のはば円形である。床面は堅く水平であって、これを高さ北側で三〇釐、南側に低く二〇釐の側壁が囲み、一条の溝が内周する。

床の中心からやや北によって竪穴炉址がある。径七五釐の方形で深さ四〇釐の底狭く掘りこみ、北側とこれに接する西側とにそれぞれ扁平の石一個を据えて炉縁とする。

柱穴は、五ヶ所にあって、口径はいずれも二〇釐内外の小さなものであるが、これに比し深さは五〇釐近い深いものである。

P₁・P₄を南側、東西両端の柱穴とし、その中間に位置するP₅を棟木の支柱穴とすれば、これに対する北側はP₃が北西隅の柱穴、P₂が棟木の支柱穴となり、東北隅のものは、これを欠くが、炉址の位置により、このように推定される。

出土品は、炉址を中心にしてその上に堆積した黒土二〇釐の上面に、土器片が石塊類とともに雜然と積み重なっていた。床面には、北西隅の柱穴P₃をはさんで東西の両側に盤石が敷かれ、またP₅の南東の床面にも塊石があった。



六月十五日（日）曇。危ぶまれた天候は、幸い今日一日保たれた。

増沢賢・小平幸衛両氏とともに午前八時半現地着。午前十時豊平村福沢公民分館小平良江氏が発掘の手伝いに、また村童三名が見学しながら堆土を運搬してくれたから大いに助かる。

今日は、第二三址を清掃する。床面は堅くて水平、柱穴が五ヵ所にあって、口径四五厘米に深さ七〇厘米、炉址は竪穴で底が焼けて赤い。これに接する西側の床面も焼けている。周溝は幅二〇厘米、深さ二二厘米で全周し、床上から打石斧一点と、東南隅に土器一点が破碎されていた。午後三時半帰宅。

六月十七日（土）快晴。豊平中学校三年生八〇余名上条教諭に引率され発掘の手伝いに来てくれる。増沢賢・小林良江両氏もまた参加される。

第七址の南方に発見してあつた住居址を発掘する。

さきに設けてあつたトレンチは、東西四米に亘り、黒土が深くその両端は地表下三〇厘米の深さから赤褐色土層となり、その黒土の深いところには土器片が散布する。

この中央から南北に亘り、トレンチを設けると、この地点が竪穴の北端であつて、その区画は南に展開する。よってトレンチを南方に延長して約四米すると、黒土は再び浅くなつて、その範囲が確定された。次にこの地層を四方に平掘する。範囲の中央が最も黒土が濃く、ここに石塊とともに土器片が積み重なつていて、これらは雑多な土器のもので、完形に復原し得るものは少數であつ



井戸田尾根第二八住居址堆土中の土器包含状態

た。この遺物堆積層の下は石で囲った炉址であった。床の清掃を終り、午後三時解散。堆土中から打石斧三点・凹石一点が出土した。

六月十九日（木）曇。小平幸衛・小林良江・増沢賢の三氏とともに午前九時現地着。豊平中学校一・二年生徒一六〇余名発掘に参加する。

小平幸衛氏はこの畑の北側に発掘してあった小竪穴を清掃する。

一年生は、第一七址から第二〇址までの各住居址内から運び出してあつた土をならして、この堆土から扁平な小形磨石斧（第一七址）・扁平な磨石斧・定角式小磨石斧一点・滑石製飾玉の三点（第一八址）を採集した。二学年の一组は第二一址の再発掘を、他の一组は第二七址を続掘し清掃する。

また、豊平青年会員一同は、遺跡内に標柱・標札・案内図・住居址指示標札等を建てる。

六月二十一日（土）晴。翌二十二日の二日間、長野県教育委員会、豊平村の共催にて豊平中学校講堂に尖石特別史跡指定記念古代文化大学講座が、藤田亮策・斎藤忠・黒板昌夫・小林行雄・八幡一郎の五講師のもとに開かれ、その聽講生千余名現地を見学する。

六月二十五日（水）曇後晴。第二七・二八両址の土器を土揚げして洗滌する。

六月二十八日（土）晴。矢島數由氏と住居址を実測、完了する。

七月六日（日）晴。矢島數由氏と住居址を実測、完了する。

第二八址 竪穴住居址（岡坂四五下・補岡九六）

この住居址は、台地の中央にある第七址の南側面で、現地表下、北端が八〇厘米の深さにある。

平面は、東西の径四・二〇米、南北の径三・九〇米のやや不整の円形で、床面は水平で軟弱である。この床面

の中心から北に偏し、丹念に築構された石で囲った炉址がある。

平面 径七〇釐の方形で、炉縁石は北と東の両側は各一個の扁平石を、また西側は、扁平の石二個を堅に掘りこみ、南側は四角の石一個を平に敷いて囲い、その隙間に小塊石を詰めて丹念に構築し、四〇釐の深さに底狭く囲つたものである。炉底は焼けて赤い。

柱穴は四ヵ所にあって、床の中心をよぎる長さ三・三

〇米の対角線上
の四分点に配置
される。P₃とP₄

とは比較的小さ

く、径二〇釐、深さ四〇釐の円形で垂直にある。また東側の両主柱穴はやや大に、P₁は径三六釐の方形で深さ四三釐、P₂は径四五釐の菱形で深さ四〇釐の垂直のものである。そして、四主柱穴の配置は、北側の間隔二・三〇米に対し、南側は二・七〇米の梯形をなし、P₁を除き他の主柱穴は壁裾にある。赤土の側壁が北に高く三〇釐、南はこれを欠き、東西の両側はこれに傾斜し、この裾を幅九釐の溝が内周し、南側には側壁と同様にない。



図 97 与助尾根第二八號の炉址

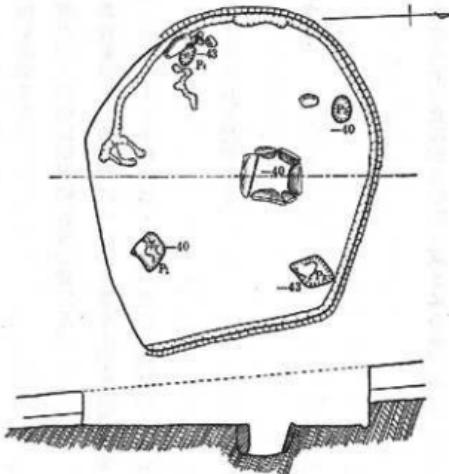


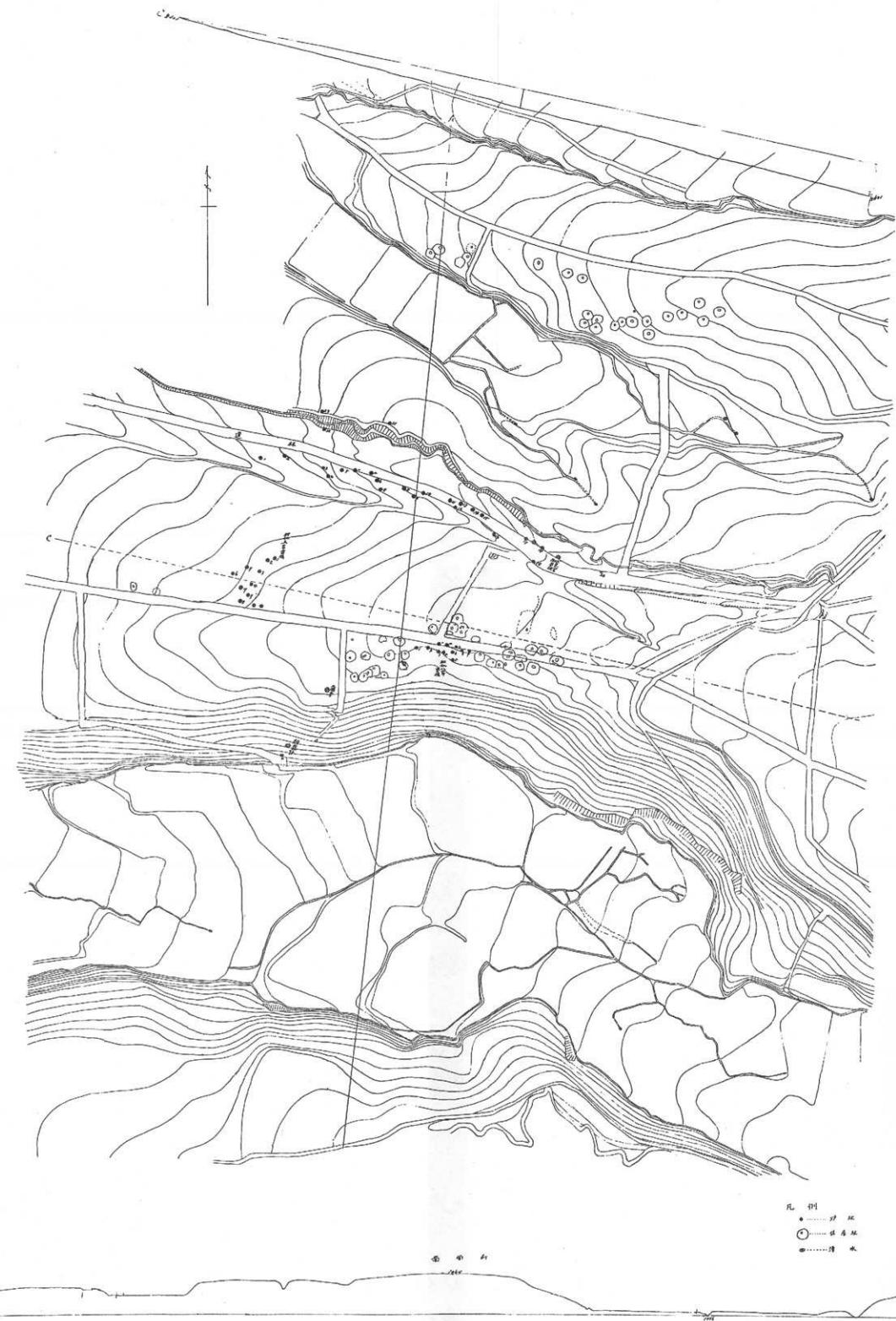
図 96 与助尾根第二八號の実測図

南西隅の主柱穴に接し、数個の磐石が敷かれてあった。出土品は、炉の上に土器・石器とともに石塊を混じて堆積していた。また、一個の完形土器は、炉の東側の台石の上に置いたものが、のち南に倒れた状態に南に口腔をむけて遺存してあった。床上からは何も出土しなかった。

竪穴 第一五址から北へ一八米、北の作場道に沿って竪穴が三ヵ所東西につらなつてあった。
中央の第二址が最大のもので、径一・二〇米、深さ一米で、この堆土上に焼灰が堆積し、同一容器の土器片が混在し、附近の黒土には炭屑が認められ、焚火の跡と推定されたが、底には何も遺存していなかった。

この東に接し第一址があり、これは径四〇厘米、深さ三〇厘米で、また第二址から西四五厘米に第三址があり、その径七〇厘米、深さは五〇厘米であった。どの竪穴も平面は円形、垂直に底は平になつていた。

尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図



住居址の総観

序論

尖石台地の地層は、一般に、上層三〇畳の耕土層、中層三〇畳の褐色土層、即ち寶鈍土が下層の赤土に浸透して、褐色に変色したやや柔らかい地層を経て、基盤の堅い赤土層となる。

このような地層の地域中、たまたま、黒土が七〇畳から一米の深さに達する所がある。この黒土には、炭屑や黒曜石片がとび、遺物の土器・石器等の破片を包含していて、必然的に竪穴住居址の埋没が暗示される。ここに試掘壕を十文字に設けると、それは四米から六米の範囲に亘り、この範囲が竪穴住居址の区画と推定される。その黒土を取り除くと、一般的赤土面よりも堅い赤土面となり、その堆土が見事に剥がれる。これが住居址の床面である。この面を四方に追跡すると、やがて、一段高い赤土層となる。これが住居址の側壁で、この高さだけ赤土層を掘り下げる住居を構築した。床の中央には炉址が、周囲には柱穴が、また壁面には溝が掘られている。

こうした竪穴住居址を、尖石遺跡の全面積一二七九六坪のうち、二二〇〇坪から三三カ所と、この地域にあって北に一つの深い窓を隔て、地形も地層も同一状態にある台地上に立地した与助尾根遺跡の全面積一五〇五坪のうち、一二四三坪から二八カ所を発掘した。これら兩遺跡は、その遺物や遺構、それからその遺存状態により、縄文式中期に属する単純遺跡と推定される。

この竪穴住居址は、（一）形（平面形）、（二）大きさ（深さ・径）、（三）方向（出入口の位置）、（四）構造（床面・炉址・柱穴・溝等）、（五）施設（上家・防壁）、（六）附属施設（特殊遺構）等の諸細目によつて組織され構成されてい

る。これらの細目についても、またその組織から見ても、同一遺跡にありながら住居址によって、多少の相違が認められる。

一体、これらの形態や状態の異同は同時に存在したものであろうか。あるいは、また時間的推移に伴うものであろうか。假りにこの異同が時間的の差によって弁別され得るとすれば、編年学的に住居址形式が基準される。これは、その床面に遺存された土器形式にまたなければならない。

そして住居址が編年的形式に基準されれば、一集落内の各住居址と照合し、その集落の成立過程を明らかにし得るであろう。

さて、尖石遺跡出土の三三ヶ址のうち、第九址と第一二址・第二六址は、生活の中心である炉址が存在しないから、住居址以外の遺址とする。また第二址は第三址に喰いこまれ、第一四址・第一五址・第一六址は相互に喰い合い、第二一址乃至第二五址は重複し、第二八址はその北側半分が近接する道路敷地下に透入していて、完掘に至らなかつたため、また第三二址は北側半分を空塹によつて欠失していたので、ともにその区画を明らかになし得なかつた。また与助尾根遺跡出土の二八ヶ址のうち、第五址が、炉址は存在して住居址としては確認されるが、地層が浅くしてその区画を明らかにし得ず、第二五址は側壁が余り明確でなく、なお、床上に赤土塊が堆積していたため完掘に至らなかつた。以上尖石遺跡ではこれらの一三ヶ址を除いた二〇址と、与助尾根遺跡ではこの兩址を除外した二六ヶ址との合計四六ヶ址の独立住居址を、この考察の資料とする。なお、除外した重複の住居址は、集落形成に対し考察上重要な位置を占むるものとして別に考察する。

(一) 形

竪穴住居址の「形」は、大体、その側壁の状態によつて左右される。その一部を欠失していた場合は、これに内周する溝により、この溝もまたともに、消失していた時は、側壁か溝の延長線により、また、柱穴の位置から

推定する。⁸

これにより、尖石遺跡一八カ址のうち、

- (1) 開丸方形とそれに近いものは五例（第一・第四・第五・第一〇・第三一社）
 (2) 円形とそれに類似のものは六例（第八・第一一・第一七・第一九・第三〇・第三三社）
 (3) 楕円形は一例（第一八社）

これをまた、与助尾根遺跡出土の二六カ址によれば、

- (1) 円丸方形とそれに類似のものは七例 (第三・第四・第七・第一〇・第一二・第一三・第一五址)

•第二四•第二七•第二八址)

- (3) 楊圓形二例 (第二三・第二六號)

- (4) その他不整形のもの三例（第八・第一四・第一九図）

となり、両遺跡出土のものを類似形に従つて通算すると、

- (1) 隅丸方形のもの
一二例

- (2)円形のもの
- 一一〇例

- (3) 橋円形のもの

- (4) その他不整形の巻の

となる。

そして、方形もしくは矩形は一例もなく、当遺跡としては、橢円形・円形・隅丸方形等をその正常形とし、こ

の形体の住居址においては、炉址及び柱穴の位置と数とが同一傾向を示すのに對し、不整形の住居址においては、必然的に二つ以上の炉址、多数の柱穴を伴なう。またその位置も、不等距離に配置され、二、三条の溝がま断続しつつ存在する。これらは当初整形に構築されたものが、その後何らかの必要に迫られて住居を拡張し、そのためこのように不整形となつたものと想像される。

(二) 大きさ(深さ・径)

深さ 尖石遺跡は、南の渓谷と比高一八メートルの台地にあって、この渓谷に向って三〇度の急傾斜をなし、また与助尾根遺跡は、同じく比高五メートルの台地にて、この台地は一〇度の南傾斜をする。

住居址は、両遺跡とも主としてその南斜面の頂上線に沿つて東西に分布し、各住居址とも大体この斜面に対し、水平の床でもつて構築された。従つて、これらは、現地表面下一メートル(黒土層三〇厘米—中層三〇厘米を経て基盤の赤土層を三〇厘米を掘り下げる)の深さにある。

径 平面形の直徑により、次のように分類集計する。尖石遺跡出土のもの。

○四メートル以下のもの 一例 一・三〇メートル(第一三址)

○四メートル以上のもの 七例 四メートル(第一・第一〇址)、四・二〇メートル(第五・第六・第一八址)、四・三〇メートル(第一七・第三〇址)

○五メートル以上のもの 七例 五メートル(第二七・第二九址)、五・一〇メートル(第八址)、五・三〇メートル(第七・第三三址)、五・四〇メートル(第一九址)、五・五〇メートル(第一一址)

○六メートル以上のもの 三例 六メートル(第四・第二〇址)、六・九〇メートル(第三一址)
これを、また与助尾根遺跡出土のものにより分類し通計する。

○四メートル以下のもの 四例 三・五〇メートル(第二六址)、三・六〇メートル(第一一・第二四址)、三・八〇メートル(第二七址)

。四米以上のもの 一〇例 四・二〇米（第一四・第三八址）、四・四〇米（第四址）、四・五〇米（第七・第一〇・第二一址）、四・六〇米（第八址）、四・八〇米（第二〇址）、四・九〇米（第一五址）

。五米以上のもの 一〇例 五米（第二・第六・第一七・第一八址）、五・一〇米（第一址）、五・二〇米（第二九址）、五・三〇米（第三三址）、五・四〇米（第六址）、五・五〇米（第九址）、五・六〇米（第二三址）

。六米以上のもの 二例 六米（第一三址）、六・二〇米（第二三址）

次ぎに兩遺跡出土のものを分類合算すると、四米以下は五例、四米以上と五米以上とは各一七例となり、六米以上は五例となる。そして、最小は尖石第一三址の一・三〇米で、最大は尖石第三一址の六・九〇米である。一般に、径四米乃至五米台がこの地域における住居址の大きさである。

（三） 方向

当時の住居は、気候との相関関係において日受けを求め、それに對し正面となるように構架されたものである。従つて、その立地には、東西にのびる台地の南斜面が選定された。

この遺跡地の地形は、西北方に緩傾斜する高原地帯で、それが、また、浸蝕によりその方向に即するいくつの台地に区分され、その南斜面は、住居を構築するに最も好適の条件を具備していた。

従つて、各住居址とも、その側壁は北側が高く、南側が低く、炉址は、床の中央よりも北に偏って位置し、このため室内の空間は、炉の南側が最も広い。この側壁が低くて、空間の広い南側が、当時の出入口を示し、この出入口の方向が家の方向を示す。これによりその家屋は一般に、正南面よりも西二六度に偏向していた。

尖石にては、遺跡の西端にて地形がやや東に向って彎曲するので、これに制約されたであろうか、ここに立地した第八址は南より東八〇度に、第一七址は東三五度に偏向し、第一址は東より北三〇度に、与助尾根遺跡では、第八址は西四五度、第一七址は三五度、第一二址は六五度、第一三址は五五度、第二二址は五五度にいずれ

も東に偏向していた。その理由は明らかにし得ない。

構造 住居址は、床面・炉址・柱穴・溝等によって構造される。

床面 墓穴住居は基盤の赤土を一段深く掘り下げて構築したため、その赤土面の住居の床面となり、それは、一般に平坦であつて固く踏みかためられてあるから、発掘の時、それに堆積した黒土が心持よく剥がれる。然しながら、尖石遺跡の第一七址・第三三址のようにその面が軟弱で、しかも凸凹の状態にある床面もある。これは住居の日時が比較的浅いめであるかと考えられる。

与助尾根遺跡第一址の西南隅の床面は、第二址と喰い合い、その部分だけ黒土の上に赤土を張つて床面としてあつた。尖石第六址の床面は、その西南隅において側壁に向つて上り勾配に作られてあつた。これらは、異例の床面である。

炉址 生活の中心は炉であり、従つて住居址にも必ず炉址が一ヵ所ある。なかには、設備した炉址のほかに、床面が赤く焼けて、確かに焚火した跡と推定される場所のあるものがある。これを地床炉址として、その一ヵ所あるもの四例（尖石遺跡の第五・第一九両址と、与助尾根遺跡の第一一・第二三両址）、二ヵ所あるもの二例（尖石遺跡第四址と与助尾根第六址）あつた。従つて炉址の数は、住居址に対し設備されたもの一ヵ所を本体とする。

もっとも、与助尾根遺跡の第二址には埋甕設備の炉址が二ヵ所あつた。これらは全くの異例である。

炉の設備にも色々の様式があつた。床に土器破片を敷き詰めたもの、土器を地床に埋めて火壇とした埋甕炉址、地床を掘り下げた墓穴炉址、これに石を嵌めこんで囲つた石廻炉址等で、これを出土炉址について分類して見る。

。土器片を數く 三例（尖石第一・第一二址、与助尾根第二〇址）

。埋甕炉址 二例（尖石第一八址、与助尾根第二一址）

。堅穴炉址 一八例（尖石第六・第八・第一〇・第一七・第一九・第二〇・第二九・第三址、与助尾根第九・第一〇・第一一・第一三・第一六・第一七・第一八・第二一・第二三・第二四址）

。石圓炉址 一七例

。平面方形のもの 九例（尖石第五・第七址、与助尾根第四・第七・第八・第一二・第二六・第二七・第二八址）

。矩形のもの 七例（尖石第四・第三〇・第三三址、与助尾根第六・第一五・第一九・第二二址）

。舟形のもの 一例（与助尾根第一四址）

。大きさ 次に炉址の大きさに類別すると、その径が一米以上のもの計一七例

。尖石遺跡 八例（第一・第六・第八・第一九・第二〇・第三〇・第三一・第三三址）、与助尾根遺跡 九例（第一・第三・第四・第六・第七・第九・第一三・第一四・第二三址）

。九〇釐以上のもの計八例

。尖石遺跡 四例（第四・第一〇・第一一・第二九址）

。与助尾根遺跡 四例（第一一・第一二・第一七・第二〇址）

。八〇釐以上のもの計四例

。尖石遺跡 一例（第二七址）

。与助尾根遺跡 三例（第一五・第一六・第二二址）

。七〇釐以上のもの計七例

。尖石遺跡 二例（第五・第七址）

与助尾根遺跡 五例（第一〇・第一八・第二六・第二七・第二八址）

○煙以上のもの計四例

尖石遺跡 一例（第一七址）

与助尾根遺跡 三例（第八・第二三・第二四址）

○煙のもの 一例（尖石第一八址）

これらのうち、最大は、尖石遺跡第三一址の一・二五米、最小は尖石遺跡第一八址の三〇煙である。大体は八〇煙以上で、實に二九例の多數に及ぶ。

また、その深さについて統計すると、

六〇煙のもの 二例（尖石第二〇址、与助尾根第一〇址）

五〇煙のもの 二例（与助尾根第四・第一八址）

四〇煙以上のもの 一例 尖石遺跡（第五・第六・第二九・第三一・第三三址）

与助尾根遺跡（第三・第一五・第一六・第二〇・第二七・第二八址）

三〇煙以上のもの 一例 尖石遺跡（第一・第四・第七・第一七・第三〇址）

与助尾根遺跡（第七・第八・第九・第一一・第一七・第一九・第二三・第二四・第二六址）

二〇煙以上のもの 三例 尖石遺跡（第八・第一〇址）、与助尾根遺跡（第一二址）

一〇煙以上のもの 二例 与助尾根遺跡址（第六・第一四址）

深さなきものの二例 尖石遺跡（第二一・第二七址）

で、三〇煙乃至五〇煙が二六例あって、これを常煙とする。ただし埋甕炉址尖石第一八址、与助尾根遺跡第二址の両址は、これを除外する。

位置 その位置は、尖石遺跡一例（第五・第六・第七・第一〇・第一七・第一八・第一九・第二〇・第二九・第三一・第三三址）、与助尾根遺跡一六例（第一・第四・第七・第一一・第一三・第一五・第一七・第一八・第一九・第二〇・第二二・第二三・第二四・第二六・第二七・第二八址）計二七例が北に偏在し、この位置が断然首位を占めて常態とする。

その他中央は、尖石遺跡四例（第八・第一・第二七・第三〇址）与助尾根遺跡三例（第二・第六・第一四址）計七例と、東偏のもの一例（尖石遺跡第一址）、西偏のもの二例（与助尾根遺跡第三・第一二址）、東北偏在のもの二例（与助尾根遺跡第八・第九址）あった。これらはその住居の方向に關係するものである。

柱穴 当時の家屋の構造は、その基本となる柱数により推定し得られるであろう。幸い床面の堅い赤土層深く、柱を建立した穴が穿たれていたので、その穴の数によつて柱の数を算出し得られた。

これにより、一住居址の柱穴の总数は、尖石にては、二七カ所一例（第一一址）、一七カ所一例（第八址）、一カ所二例（第七・第二九址）、九カ所三例（第二七・第三〇・第三三址）、八カ所四例（第一〇・第一八・第一九・第三一址）七カ所二例（第一七・第二〇址）、六カ所二例（第三・第四址）、五カ所二例（第五・第六址）、四カ所一例（第一址）、一カ所一例（第二三址）であつて、最も多きは第一一址の二七カ所で、最も小敷は第一三址の一カ所であつて、平均九カ所乃至六カ所がその常態であり、与助尾根にては、总数九カ所二例（第九・第一四址）、八カ所二例（第二二・第二三・第一九・第二〇址）、六カ所四例（第二二・第一六・第一八・第二三址）、五カ所五例（第一・第二・第三・第一九・第二〇址）、四カ所七例（第七・第八・第一〇・第一一・第一七・第二四・第二八址）等で、その柱穴の总数は各住居址とも余り差がなく九カ所乃至四カ所に集中されている。

また、主柱と推定すべき总数は、四主柱の例が最も多く、尖石一三例、与助尾根一四例計二七例でこれが常態であろう。これに六主柱の住居址は尖石にて三例と与助尾根にて九例、計一二例とその他特例として八主柱が尖石にて一例、与助尾根にて五主柱、三主柱と推定すべきものが各々一例ずつあつた。

これらの主柱の位置についても、北側が壁柱であって、南側が内柱のもの、尖石にて六例、与助尾根にて七例計一三例、全部壁柱は尖石にて五例、与助尾根一五例計二〇例が計上されて内柱の住居址が断然多数を示した。

次にこの柱穴の形状は、概ね平面円形の垂直であるが、たまたま矩形のものもある。斜傾穴は僅かに尖石第五、第六両址に各々一ヵ所ずつ発見された。

またその大きさは、口徑三〇釐内外、深さ五〇釐前後を示すが、尖石第二〇址のそれは口徑一米、深さ一・二九米を示し、また与助尾根第一三址は、口徑七五釐、深さ六〇釐であって、これらの大なるものは特例である。柱穴数の多きものは、その住居が重複し、また、改造や増築が考えられ、僅か三ヵ所乃至一ヵ所のものは、立木を利用したか、または、その上家は特殊の構造によつて施設されたものであろうか。

側壁 側壁はほとんど直壁であつて、その高さは、遺跡が台地の南斜面に存在し、この斜面に対し床面を水平に施設した關係上、一般に北に高く七〇釐、南側は低く二〇釐位で東西の両側はこれに傾斜する。これを平地に施設した尖石第一〇址の例に見るに、いずれも三五釐の高さにある。従つて当時の竪穴の深さはこれに中層赤褐色三〇釐を加算して七〇釐内外の深さであったであろう。

溝 住居址には、普通一条の溝が側壁に内周し、それは、幅一五釐に深さも一五釐くらいである。時に二条も三条も断続している例があるが、これは住居の改造や増築に伴うものであろう。一体、溝は排水の施設として穿たれたものとも想像されるが、これにはこの溝から屋外への誘水する方法が講ぜられたと思われる機械が発見されていないし、またひどい降雨の際には、必ず屋外でこれに対する防禦の方法が講ぜられたことであろう。それでこの溝は排水のためよりは、寧ろ壁の保護のために木本科の茎か何か樹立した遺構であろうか。なお、この考察を裏づける施設として、尖石第五址の溝の底に、この茎が動かぬため棒をたてたかと思われる節の直径一釐位の小穴が所々に穿たれていた。

住居址の標準形式 こうして、尖石、与助尾根の両遺跡の住居址に対し、その通有性を求め、その標準形式として次のように想定し得られるであろう。

平面は、円形、または、隅の丸い方形であって、広さは四米乃至五米をその径とする。床は平坦であつて塗壁のようない。その中央よりも北に偏して、方形の堅形に石で囲つた炉址がある。この炉址は、極めて大形で、径は一米近く、これを四〇畳の深さに掘りこみ、扁平に削った盤石で丹念に囲んで構築する。柱穴は五、六ヵ所にあって、そのうち床の中心をよぎる対角線上の四分点にある径四〇畳、深さ五〇畳の平面円形の直穴を四主柱として建立したものとする。これを高さ三五畳の側壁とこれに内層する一条の溝とがめぐる。

(五) 施設

これらの堅穴住居址に対しどんな上家が施設されたであろうか。それらは腐朽しつくし、知る術もない。多分、この山麓の農村で、冬期間に限り、三、四戸が組合つて稲細工のために造作する防寒的の小屋くらいのもので、現在の「穴倉」と称する小屋が、その遺風であろうと想像されていた。

この穴倉は、小さくとも三疊敷よりは広い堅穴を深さ一米乃至一・三〇米くらいに掘る。そしてその堅穴は大抵南北に長く東西に短い。

坂に今三・六〇米（東西）に五・四〇米（南北）の堅穴を掘りさげたとすると、まず南側を入口として堅穴の外地に又首に柱を組合わせ、この頂きから北側の地面にかけ棟木を渡す。これに萱や藁をふきつけ、その上に土をかぶせる。入口を南にとり、そこに二本の柱をたて、枠をはめる仕掛けにする。この枠には障子を二本はめて入口兼明窓とする。然し堅穴住居址の四隅には円形の穴が垂直に穿たれているからには、主柱を垂直に建て、それに上家を施設したことは確かである。

この上家については、専門家の学者がそれぞれ古代建築の資料を基として想像復原されている。

この与助尾根遺跡にては、昭和二十四年九月、東京大学講師堀口捨己博士が発掘中の遺跡を視察されて、第七住居址に対し上家復原図を与えられたので、それにより同年十月、同址に上家を構築した。

- (1) まず、四隅に主柱を建てる。(2) これに南北の両側に「くつわ木」を架す。(3) この「くつわ木」の上に竪穴の外方から千木又を添える。千木又は、南北の両側とも、それぞれ外方に向って四五度から六〇度の傾斜をもつ。それで千木の先端は空中で南と北に向って開き、足はこれと反対に地上で中央近くに集まる。(4) 次に、これに棟木を渡し、(5) さらに、南北の両方から妻木を「くつわ木」に斜めに立てかけ、先端を棟木の中央で出会わす。
- (6) この骨組に対し東西の両側から、二組ずつの中又を斜めにたてかけ、(7) これを足場とし小舞を細く結い上げ、(8) 茅を葺きおろして屋根をつくる。

竪穴住居址の主柱の穴が垂直であるから、その主柱は直立する。が、又は、棟木に「イ」の字形に結い、その足は竪穴の外の地上に、そのまま据えておくので、脚の調節から外形を自由に円形に整えられる。入口は、南側に作り、屋根棟の南北に千木又と「くつわ木」とが作る三角形の空間が、明り窓とも煙出しとなる。

これは、博士が佐味田出土の家屋文鏡の図柄に従い、これに大和國小泉村在慈光院の屋根棟構造が、同地方で最古のものであろうと着眼され、その茅葺上家の構造を取り入れられて、この竪穴住居址に古代家屋を想像設計された。

そして博士には、

「從来、天地根元造を日本最古の建築様式とされていたが、今、その平面図は矩形であつて、これに四隅に主柱穴があり、且つ、中央に棟木の支柱穴が三ヵ所にある。これに対し、この竪穴住居址の平面は円形で四隅に主柱穴がある。然るに、中央には棟木を支える柱穴がない。慈光院の屋根の骨組には、この棟木を支える柱が一本もない。従つて、この構造様式は、天地根元造以前のものであつて、これを日本最古の建築様式とし、これに

「堅穴造り」を名称とすべきである。」

と力説された。

防壁 防壁につき相当の設備が施されたものとのようである。

一体、側壁に添う周溝は、排水のための設備とも想像されていて、雨水が屋内に浸入する以前に相当の考慮が払われ、従って、周溝は防壁のための遺構であろうか。その例として尖石第五址があげられる。この周溝の底面所々に径四厘米の直穴があり、これを中心にこの溝に対し、十文字に短い溝が掘られている。これはこの溝に草を詰み、これを固定させるために小孔に心棒をたて、横溝に横木を入れて、この心棒の移動を防ぎ、そして防壁の装置をなしたものとも想像される。

(六) 附屬施設(特殊遺構)

堅穴住居址内には、たまたま特殊の施設ともいべき、石壇、伏窓、堅穴などの機構が遺存していた。これらはよく当時の生活や習俗を語るものである。

完形土器を包蔵した石圓炉址 これは三例とも尖石遺跡出土の完形土器を包蔵してあつた石圓炉址である。どれも住居址内の炉址であろうが、まだ住居址について経験をもたなかつた時代に発見されたものであるから、炉址についてのみ記述する。

例一、これは、ほぼ等大の玉石(長さ一五厘米・幅五厘米・高さ五厘米)八個を円形(径約四五厘米・深さ五厘米)に並列する。ただし南側は欠く。その中央に完形土器一個を、それは口径一五厘米、高さ一七厘米の円筒形で、それを炉内の赤土層に炉石面と水平に埋める。炉内の赤土は二、三種の深さに焼けて赤く、炭屑もとんでいた。

例二、この炉址は扁平の石の大なるもの三個(長さ六〇厘米・幅一〇厘米・高さ三〇厘米)を堅形深く掘りこみ、南の側はこれを欠く。東西の径八〇厘米・南北の径六〇厘米、深さ三〇厘米の大きなもので、これには、口径一〇厘米、高さ一八

糧の壺形土器を包藏し、炉の周囲には炭屑が多く、炉内の赤土は焼けて赤い。

例三、この炉は等大の扁平石八個（長さ三〇釐・幅五釐・高さ三・〇釐）を横円形に、やや底狭く斜めに掘りこんだ、東西の径八五釐・南北の径一米、深さ三五釐の極めて規模の大なるもので、これに、また、土器一個が直立していた。この土器は、口径二二釐、高さ二〇釐の漏斗形のもので、底部は欠けていた。これを炉内の中央に直立させ四方から支え、なお一枚の扁平石が蓋としておかれてあった。炉の内外ともに炭屑が多く、炉内の底は赤く焼けていた。

以上の三例について、その出土状態を総合して見ると、(1)どれも炉の内外に炭屑や灰が夥しく混在し、且つ炉の床面が焼けて赤いから、長い間この炉が焚かれていた。(2)そして程度の差はあったが、土器の底部は欠けていても、大体完全の姿を保っていた。またどの土器も直立の姿で発掘された。これらの土器は直立するため石片さえ使用されて、直立するよう努めが払われていた。

土器を石で囲った遺址 尖石第一住居址では、炉址に東接して扁平の石を、東北隅にある積石遺構まで敷き並べる。この積石遺構は東北隅の主柱址に南接し、高さ四〇釐、頂きにのせてあつた扁平石を除くと壺形土器が直立し、底部は赤土層中二〇釐の深さに埋めてあつた。器内には黒土から小形定角式の磨石斧の見事なものが一点置してあつた。この積石の背後から北側にかけ側壁の上に石が積まれ、ここから多数の石器類と土器破片とが出土した。

また、与助尾根第八住居址の西北隅柱穴の背後から東に亘り台石があり、その上に土器三点が重なつてあつた。うち一つは裝飾された壺形土器で底部を欠くが、この中に土偶の首部を包藏していた。他に壺形の大土器一点が西壁に崩れこみ頭部を下に出土した。

この土偶の首部を包藏していた土器は、尖石第一堅穴住居址内において、美事な磨石斧を土器内に包藏された

造構とは異なつて、積石で囲まれてはいなかつたが、当時貴重なものと思惟される資料を、各々藏置してあつた点に一致を見、當時何等かの呪術がこのように行われたものであろうか。

土器を圍んで焚火してあつた遺址 尖石第二・六住居址内には整然たる石圍炉址があつたが、その北寄になお焼灰の堆積があつた。これも炉址であろうと調査すると、焼灰の下に土器が石の上に載せてあつた。或は土器焼成の遺構でもあらうかと、この焼灰層を除去すると、土器は腹部から口縁部にかけた壺形土器の一部で、この土器を除くと下は竪穴であつて、それに黒土が填まつていた。

この竪穴は、直径七〇釐、深さ四〇釐の円形直壁平底で、その底面や周壁からは、焚火した痕跡が認められない。即ち、この穴は黒土でふさがれ、それに三個の自然塊石を敷き、これにこの土器をのせて焚火した形跡がある。それは余程燃んた焚火であったであらう。焼灰は厚さ二〇釐の層をなし、竪穴の全面をふさいでいた。仮にこの土器が完形品であれば、ここは土器焼成の遺構とか、または、この土器を容器としての食料を煮沸したままのものと想像されるが、このような不完全な土器であつてみれば、この推定も専外におかれなければならない。

土器を焼成した遺址か

尖石第三・一住居址は、この区域の最東端で発掘し、この遺跡で最も広大な径七米に及ぶ住居址であつた。この住居址内の中心よりやや北に寄つて、これも極めて大きい竪穴の炉址があつた。それは一辺一・二五米の正方形のそれへ、南三〇釐の突出部を設ける。炉は四七釐の深さで底狭く摺鉢形に彫る。底面と側壁面と、それに突出部の突き当りとが焼けて赤く、長い間に亘り燃んに焚火をしたことが思われる。從来この遺跡で発掘された炉址のように、単に炊事のためか暖房が目的であつたなら、このように特殊の機構と他に類のない巨大な炉は必要としないであろう。従つて、この炉は、他に目的のあつたものと考えざるを得ない。

次に、この炉址の西一米にこれも、また巨大な竪穴があつた。この竪穴を埋めてあつた土の上層は、最初砂土質の黒土で、これも從来発見された柱穴か、または屢々発見される貯蔵用の竪穴ででもあらうかと堆土を除去す

ると、黒土は僅かな厚さで下は赤土となつた。この赤土は塊状をなしていいたので発掘を続けると、赤土は容易に竪穴の側壁から剥がれた。この竪穴は、明かに赤土塊を貯蔵してあつたもので、その赤土を全部搬出したら、それは口径一米、深さ六〇釐の円形直壁平底の立派な竪穴となつた。

この状態から、この竪穴はこの赤土塊を貯蔵したものとのみ想像される。それなら何を目的にこの赤土塊を貯蔵したものであろうか。さらにこの赤土を観察すると、それは水漉したものではなかろうかと思われる程、實に生肌の細かなものであった。

また、この炉址の三隅からは焼燃して崩壊しかけた花崗岩が出土した。次に炉縁の北側の炉石の下が空洞につくられ、そこには酸化鉄の一塊がこれも粉末状を呈して出土した。花崗岩は粘土の燃ぎとし、酸化鉄は色彩を与えるため、いずれも粉末にして、粘土に混合して使用した土器製作の材料である。これらの原料は、この遺跡の住居址内で度々発見されている。

元来縄文時代において土器焼成の機構については、まだその資料の報告に接していない。

今、これらの資料から、即ち(1)住居址が遙かに巨大なものであること、(2)その炉址が暖房や炊事に必要以上に巨大で且つ特殊な構造をもち、(3)花崗岩塊、酸化鉄塊等の土器焼成の材料であろう原料を伴出したこと等により、この住居址を土器製造場址と推定してみたい。そして炉は土器を焼成する炉に、竪穴は、土器製作原料の粘土を貯蔵した穴として、しかも、これらの赤土は水漉しにした状態のまま遺存したものとして解したい。なお、この住居址は、土器製造場址として実証するもののように、住居址内の南側から石油箱三個に余る多量の土器破片が出土した。

石壇と埋甕 尖石第二八竪穴住居址の中央に口径四五釐、高さ三〇釐の底部の欠けた土器が口縁を地床と水平に埋め、なおこの南七五釐に口径一五釐のこれも底部の欠けた他の一小土器が口縁を地床と平に埋めてあつた。

そして、これらの土器を中央にしてその東と北の両側に各々石を敷く。北側は小さい四角形の安山岩塊一六個を石壇のように敷き詰め、東側はまた、長さ一米、幅二〇釐の細長い鉄平石一枚を地床よりやや小高く土盛りして、雑壇のように平に設け、その周囲に石を敷き並べ、全体があたかも祭壇に似せた恰好に設けてあつた。そして、この大きな鉄平石の上面には完形の黒曜石石鏡一点が、また石壇の背後の地床からは鋭利な石匙一点と未完製の小形磨石斧一点とが出土した。この遺構中北側の敷石は、その前方に地床炉址があるので、その炉をめぐつて設けられた座席の敷石とも想像されるが、東側の石壇は何の目的であろうか。仮にこの壇上に土偶か石棒のような崇拜物が遺されてあれば、地床に埋めた土器とともに宗教的祭祀の跡とも推定されよう。

これに対し与助尾根の第七住居址においては、石壇の炉址の北側から北壁までの七五釐の狭い空地に、西に寄せて石壇を設けて、中央に角柱状の石一基を樹立する。これはその形態から真南に正面する。この石壇は、東西の長さ一米、南北の幅三〇釐で、ほぼ等大の盤石二枚を掘えおき、その接続面の縫み目にこの石柱を固定して樹立する。この盤石の東西の両側には、これを区画するようにそれぞれ一個ずつの扁平石を縦に植え込む。なお、東に統いて扁平石二個を敷き、西には小塊石二個を置く。石柱の根元には、これの動搖を防ぐため小塊石二個を詰め、これから北の側壁にかけて三個の塊状石が並ぶ。

石柱は、鉄平石の四角柱であつて、各面の幅ほぼ六釐、全長六七釐のものを地上に五〇釐の高さにして、以下一七釐を地中に埋め、僅かの力によっては抜がないよう固定してあつた。石柱の各棱とともにその生地の銳を打蔽して磨滅せしめてあつた。殊に注意すべきは、この石柱の基部の前面に、長さ九・五釐、幅二釐の黒曜石の一破片が意識的に斜めに差しこんであつた。

石壇の周囲からは、黒曜石小破片の出土が割合に多量で注意に上り、また石壇の周囲からは裝飾土器が三個、この石棒に対し供えられたような状態に遺存し、明らかにこの石壇が祭壇として築造されたものと認められた。

また与助尾根の第一五住居址にも、石壇が設けてあった。この石壇は炉址の北側と北壁との狭い空間に、西北隅の主柱穴に東接する。東西の長さ九〇釐、南北の幅三〇釐に六個の盤石を敷き並べる。この石壇の最西端に厚さ二〇釐、縦横とともに三〇釐の台石を据え、その下の北側に小石を詰める。これはやや南に傾く。最初平に据えたがこれが埋没する前に酷寒のため凍て上ったもので、自然の日受けにより南傾したものであろう。この台石の上に粘土紐文による装飾された朝顔形土器一個が倒置されていたが、台石の傾斜とともに南にずれ下がり、台石から滑り出して口縁部の一端を地床につけて停止した。土器は現高六〇釐で底部を欠く。これは後日耕作により鍬で鋤きとられたものである。

この台石の東に他の台石が接し、この下にも小石が詰めてあって南傾する。この石に幅一三釐と一〇釐の四角形の石柱が長さ二〇釐と二八釐との二個に断折し、その断折面を山形状に盛り上げて南に倒れる。この二個は元來同一体の角柱であって、これを組み合せると一基となる。これを台石の上に直立して安置したものが、台石の類斜とともにこの状態に倒れたものである。台石の下から磨石斧三点と打石斧三点とが出土した。

なおまた、与助尾根第一七址の炉址北側にもこのような石壇の遺構があった。これは、二段階に設けたもので後側は、扁平石六個を東西の長さ一・五〇米、南北の幅六〇釐に並べ、各石の下には詰石をする。その西端の石は最大のもので長さ幅とも四五釐あつた。これに対し一段低い前段を設ける。六個の扁平石を縦横とともに六〇釐に並べる。この東西の両側に扁平石を堅に植えこんで境界とする。

この石壇の中央には深さ五〇釐の直穴が掘られてあつた。この石壇の周囲から磨石斧四点と凹石二点とが出土した。

このように住居址内の各石壇とも、崇拜の対象であったのであらうか。その周囲には、装飾的土器や美麗な磨石斧等が遺存していた。

また与助尾根第一五住居址内の石壇に対し、その南側の東西両主柱穴間の中央からやや外側に向って、これらが描く二等辺三角形の頂点の地点に、底部を欠く土器を床面と平にして埋め、しかもこれに石蓋をしてあつた。この埋甕の遺構は他の住居址内にても発見された。即ち、与助尾根第四址にては、完形土器をこの位置に埋め、これに石蓋をし、尖石において、第一九址にては底部を欠いた土器をさかさまに、第二〇址においては、これも底部をかいだものを、口縁を地床と平にいすれも同一状態の位置に埋めてあつた。これとはちがつて、尖石第八址にては炉の西側に接し楕形土器を埋めて、その周囲には小孔が点在し、この土器を中心に何らかの行事があつたもののように思われた。

このように埋甕は、二例（尖石第八址・第二八址）を除く他の四例（尖石第一九・第二〇址と与助尾根第四・第一五址）にては、蓋石の有無はあっても、その位置はいずれも南側の東西両主柱穴の中間よりやや外側に向つた同一地点であった。この埋甕が、貯蔵目的であつたならば、出入の激しい南側よりむしる他の位置が選定せらるべき筈である。然るに、特にこの地点が等しく選定せられたからには、そこに何らかの強力な理由が存在していたに違いない。

また、この埋甕に対し与助尾根第四址においては、その北西隅の主柱穴の前には、一基の完形有頭石棒が倒れて、その周囲から土器・石器類が出土した。この石棒はかつてこの主柱を背に直立していたものであろう。同第二五址では、これも同じ方角の主柱穴の東の石壇に石柱は二個に断折していたが、これもかつては直立していたものであろう。このように埋甕に対し、同じ方角に石棒が祀られた資料が二例発見されている。

しかもこの北西隅の方角については、与助尾根第八址にては、信仰の対象とも見られるべき土偶の首部を安置してあつた土器が存在し、また、尖石にては第一址のこの方角に直立した土器があつて、それには見事な磨石斧が包蔵されていた。

これらの資料から家屋内の北西隅の位置が重視されていたらしい。それが尊崇によるか畏怖によるか、いずれにせよ、かかる行事の場として選定していたことは確かである。

石壇や石柱や土偶が信仰の対象とすれば、その位置を北西隅に限り定めたことは、一種の迷信であり、また、埋甕をかかる位置に選定したのも一時的の方便よりも、何か呪術的効果を祈願する思惟の所産と認めなければならぬ。

そして、これらの資料の発見された住居址は、径四メートル乃至五メートルの比較的小規模で、その築構は丹精をこめた整然たるものであり、その伴出土器、殊に埋甕土器は悉く縄文中期の末期に属するものであるから、これらの特殊施設は縄文中期終末の現象である。

堅穴 住居址内にはよく堅穴の遺構がある。

尖石第六址にては、北壁の中央に東西の径七〇厘米、南北の径四〇厘米、平面矩形で深さ三〇厘米の堅穴があり、この堆土から黒曜石屑や石英破片とともに完形石匙・小形磨石斧各一点が出土した。また同第七址の東北隅には、径一・四〇メートル、平面円形、深さ四〇厘米の直壁平底の堅穴が内包され、これが周溝に続き、第二九址にては径一メートル、平面方形、深さ三五厘米の堅穴がその西南隅にある。

与助尾根にては、その第七址にては、径九〇厘米平面円形、深さ一五厘米の浅いものが南側壁から半ば張り出し、第二四址にては、その西側に径二メートルの平面円形、深さ八五厘米、直壁平底の大なるものが、この住居址の床面に半分以上喰いこんで築構されていた。

これららの堅穴は周溝に統くところから、屋内に浸入した水溜りとも、または、貯蔵のために掘られたものでもあるうかともいわれている。

住居址外の特殊施設

これらの住居址の他に、次のような特殊施設が発見された。

竪穴群 最初この遺跡全域に亘って住居址が埋没しているものとの予想のもとに、第二九六三号と、第二九六四号の畠地二枚を発掘したところ、住居址は、南作場道に沿って連接し、北の端では僅かに一ヵ所だけであつて、その中間の広大な区域には、これらの竪穴が埋没していた。

また、与助尾根にても、第一七号の北二メートルに一ヵ所、第一五号の北一八メートル東西に亘って続く三ヵ所を発見した。

竪穴は、直徑およそ一メートル、深さまた一メートル内外の平面円形で、直壁平底に赤土層深く穿たれたもので、これは單独に、時には五、六個も相接近し、相重複しつつ埋没していた。竪穴には、どれも黒土が充填し、その黒土には、炭屑が混在していたが、遺物は殆ど発見されなかつた。独立竪穴のうちには、その周囲に柱穴らしい径三〇厘米、深さまた三〇厘米の円形の穴を伴い、明らかに上家が構架されであったと想像される。この例として尖石第一二号及び第二六号があげられるが、これは屋外の貯蔵庫址であろうか。

それはそれとして、一体これらは相接近し相重複して発見された竪穴群は、何の目的で施設されたのであらうか。さしあたり貯蔵庫か、墓穴か、或は粘土を探集した坑としてのみしかあげられないが、然らば、貯蔵庫としてはならば、それほど数多く施設する必要はあるまいし、また重複して掘り重ねることもあるまい。仮にこれを墓穴と見るならば、或は現在土葬の行われている地方での墓地の覆土を除去するならば、その基盤の赤土層に形状こそ棺の形状に似せて四角形であろうとも、それらはこの石器時代の竪穴群のように、相接近し、相重複する竪穴を発見するであろう。尖石のような大集落地にあっては勿論、その附近にそれらしい遺址が発見せらるべきで

はあるが、まだこれに関する資料は発見されていない。強いて墓地としての遺址を求めるなら、これらの竪穴群が最もそれに近い資料とされる。また、この竪穴の周囲には焚火をした灰の堆積や無数の炭屑が散在していた。これにつき、地方によつては、埋葬に際し墓穴の近くで盛んに火を焚く土俗がある。ここに何らか相通ずる習俗が想起されるが、これを墓穴と決定すべき有力な資料、例えば遺骨の一片とか、副葬品とかは発見されていない。

次に、石器時代にあつては、土器の原料である粘土は、食料、石材とともに欠くべからざる資源であつた。しかも良質のものを豊富に容易に供給し得べき資源地を聚落の附近に求められたであろう。尖石にても、その附近にこの粘土採掘場址が発見せらるべき筈であるが、未だにそれらしい資料が発見されていない。尖石第三一住居址内の竪穴に貯蔵されてあつた赤土が土器原料の粘土であり、その赤土が、これらの竪穴内から採取する赤土と同質のものであるなら、これらの竪穴群中のあるものは、粘土採掘場址として想像されるかも知れない。然し、現在においては、これらの竪穴は未解決のまま残されている。

列石群 尖石遺跡の表土を剝ぐと現地表下三〇釐の深さ、即ち縄文時代の地表面に土台大の自然石の大塊二三個が、ほぼ等間隔をもつて、長さ一〇米に亘って飛石のように一列に並べてあつた。これらの中にはかつて炉縁石として使用されたらしく赤く焼けているものもあつた。これらは殆ど等大のものを選んだが、それが等間隔に並列してあつたからには、意識的になされたもので、何らかの遺址であることは確かである。

そして、これらの列石の中二、三につき、その地下を発掘したところ、そこには前記のような竪穴が存在していた。列石と竪穴とは、何らかの関係のあるものと思われる。

一大土器の独立出土 尖石において昭和一七年試掘業第九を調査して行くと、これらの列石遺構から北八メートルの距離に一大自然塊石が発見された。それは、長さ七〇釐、縱横とも二〇釐以上の角柱状安山岩であった。この石の存在面は縄文時代当時の地表面であつて、遺跡においてこのような状態は、何らかの資料の所在を語るものであ

るから、注意を喚起して発掘した。果してこの台石の下から、大なる土器口縁部が円形を描いて露出した。発掘を進めると環状把手が現われ、次いで腹、脚と黒土深く掘り下げ、ようやく基盤の赤土に掘りこんで底部となつた。土器は稀に見る大形のもので、高さ五五釐、口径四五釐に口縁広く開き、底部狭く径僅かに一五釐、形態は朝顔の花に似た瓈形で、これを隆起線文により縦に区画し、さらに四個の環状把手を対称的に加飾したものである。器内には炭屑の混入した黒土が充満し、その土器の口縁部大破片と、一〇釐平方位の板状安山岩一個を載せ、更にその上にこの角柱状の大石を目印のように置いてあった。

住居址の年代的形式別 さきに、この遺跡出土の住居址集成から通有性を求めてその標準形式を想定したが、この形式に合致する最も典型的のものとして尖石遺跡では、第四・第五・第八・第二〇・第三三址が、また与助尾根遺跡の第四・第七・第一二・第一五・第一六・第一七・第一八・第一九・第二八址等が挙げられる。

さて、これら住居址内に遺存された土器形式は、尖石式第三類即ち繩文式中期末に属する形式に分類されるから、当遺跡にかける中期末の住居址形式はこのようなものであると標準し得られるであろう。次に、この住居址形式を基準とし、他の住居址をこれと比較し検討すると、なお、異同のある住居址が存在することを発見した。それは尖石第一八址と与助尾根の第二址である。

この兩住居址においての炉址は、いずれも地床に廢物の土器を埋めて火壺としたものである。尖石第一八址の火壺土器は、頸部の廢物を埋め、これに他の底部破片を口縁に補填したもので、その頸部のものには、両側竹管による二条平行線文を下垂し、他の土器は、いわゆる「みみずばれ」ようの細粘土紐文で器体を帶状に区画し、その区画内と粘土紐文の両側に沿い、突刺文を添加して施文してあつた。また、与助尾根第二址において一個の火壺は、繩文を施した器体を沈線文で縦に区画した円筒形土器で、他の一個は、繩文を地文とし、これに両側竹管によつて二条平行線文による渦巻文を描いた。三点とも尖石第一類の形式に属するものであつた。

そして、両住居址とも、標準形式の住居址に対し、次のように特異の三点が指摘し得られる。即ち、

(1) 主柱穴の位置が、標準形式は壁柱であるのにこれは内柱である。

(2) 標準形式にては概ね周壁に溝が内層するが、これは全くこれを欠く。

(3) その炉址が、標準形式では一米に及ぶ大祭状石を堅に深く掘りこんだ平面方形の極めて大規模に、しかも整然と築構されているのに、これはまた、土器の廃物を利用し、地床に直ちに埋めて火壺とした極めて原始的稚拙なものであった。

このように、尖石第一八、与助尾根第二の両址をその出土土器の形式に従つて、縄文式中期初頭の住居址形式と基準する。この類例は、八ヶ岳西山麓所在^{註(1)}滝坂（富士見町池袋）、上ノ平（茅野町御作田）両遺跡からも発見されている。

次に、尖石遺跡にては、縄文式中期最盛期（尖石式第二類）の土器は、単独にて、或は破片になつて発見されているが、これに属する住居址は、いまだ発見されていない。

これは、この遺跡の調査発掘が主として地域の東端から南斜面の半ばにかけた範囲であつて、尖石式第二類の土器は、主として区域の西端にある第三四三二、第三四三四番等の畑から耕作に際し、また、中央林道の北側第三〇〇九番の芝生からも出土し、この区域がその中心地であつて、ここに縄文式中期最盛期の住居址が埋没するものと認められる。

一方、与助尾根遺跡にては殆ど全区域を発掘したが、ここは、第二址を除いて各住居址とも中期末期に属するものであった。

従つて両遺跡とも縄文中期最盛期の住居址形式は基準し得られないが、然し、この山麓の南端に所在する德利（富士見町南原山）、藤内（富士見町三里ヶ原開拓地）、九兵衛尾根（富士見町烏帽子）等の各遺跡からの出土例により、

縄文式中期最盛期（尖石式第二類土器形式）の住居址形式を次のように基準し得るであろう。

径五米乃至六米（大なるものは七米近いものもある）、平面円形もしくは橢円形の規模大なる竪穴の床面中央に、径五〇厘米、深さ二〇厘米くらいのこれは至極小規模の埋甕か石甕の炉址があり、柱穴は总数一〇ヶ所以上の多数が内床の位置にあって、この柱穴をつらねて、たまたま溝が穿たれている場合がある。

こうして、尖石出土の竪穴住居址をその出土土器に対応させ、三形式に分類し、編年的に基準した。即ち、

第一形式（尖石第一類土器）

径四米内外の平面不整橢円形もしくは円形で、床の中央は埋甕または石甕による径五〇厘米、深さ二〇厘米くらいの小規模の炉址があり、八ヶ所内外の柱穴が内床にあって溝はない。

第二形式（尖石第二類土器）

径六米内外、七米近いものもある大規模で平面橢円形もしくは円形、床の中央に埋甕または石甕による径五〇厘米、深さ二〇厘米位の小規模の炉址があり、一〇ヶ所以上の柱穴が内床に位し、柱穴をつらねて一条の溝がある。

第三形式（尖石第三類土器）

径四米乃至五米内外の平面円形または隅の丸い方形で、床の中央より奥によつて炉址がある。これは扁平な石四枚で竪穴方形に囲み、極めて丹念に構築し、径一米近く、深さ五〇厘米位の巨大なものである。柱穴は四ヶ所・六ヶ所・七ヶ所多くても八ヶ所位で、内四もしくは六の主柱が床の中心をよぎる対角線上の四分点に配備され、北側は壁柱で、南側は内柱である。側壁には溝が内周し、規模極めて整然たるものである。

そして、住居址によりその北側（住居の奥の位置）に石壇を設け、中央に石柱を樹立して祀る。これに相対し南側（入口）の両主柱穴の間の中央から、外側にやや離れた地点に埋甕し、これに石蓋をする。この埋甕の土器はいずれも尖石第三類に属するものであった。

集落の形成と住居址の分布 次に、この編年的に基準した住居址形式に準拠し、それに出土土器形式を資料として、集落の形成を考察する。

尖石遺跡にあっては、区域の一部が発掘されたのみであるから、それによつて、全地域を考察するのは至難であるが、ともかく、第一八址が示すように、縄文式中期にここに発端し、そして、この地域から出土する土器第二類が示す如くに、中期最盛期に繁榮し、やがて末期に至るに従い、この台地の南斜面から東端にかけ住居が軒を並べるようになったことが知られる。

縄文中期の終末の期間も相当長年月に亘ったものであろう。住居址でも柱の総数が多数に上り、これによつて住居の改築や増築をしたことがわかる。また第二一址乃至第二五址の一群が第一四址乃至第一六址の相重複する住居址群は相当長年月を経過したものと思われる。

これに比し与助尾根台地では、住居址の独立のもののみにて、また各住居址とも、その柱穴の総数に相近似しているから、各住居とも殆ど同時代に構築されたものであろう。それは出土土器により縄文中期も全くの終末期であったことが知られる。

尖石台地における住居の配列は、主として地形に制約された。この地形が東西に長い台地であつて、しかも、その南斜面が溪に臨みやや彎曲するので、住居は南向きに構えて、それがこの線に添い、巨石尖石を中心にはぐらきながら東西に続く。

最初、昭和一五年の発掘には、住居址が殆ど壁一重に近接して発見されたので、この状態をもつて、住居址が全地域埋没するものと予想したが、昭和一七年の発掘により、この見込は見事に裏切られ、住居址以外に他の遺構が発見された。

即ち、南作場道から南の傾斜面にかけ、住居址三三ヶ所と石匂炉址一四ヶ所を発掘し、從つて総計四七ヶ所の

住居址が東西に長く分布する。さらに、この以西の地域は未発掘ではあるが、裏々この調査により炉址も遺物も発見されているから、住居址が、なお、この方面にも埋没することは確かである。この地域をこの集落の主要な地位を占める南住居地区と呼ぶ。

これに対し、この北を東西に通ずる林道に沿い、住居址一ヵ所と石畠炉址が七ヵ所発見され、ここにも北の一定住居地区が想定される。この方面的用水堰を越えて、北の溪に臨む最北端まで拡がるものと推定される。

また昭和五年第二九六〇番の柔畠の古株を掘りとった際、地床炉址と多数の遺物が発見されたから、この方面にも一つの西住居地区が想定される。

これらによつて尖石の住居分布は中央の地区をめぐつて南、西、北の三方面に構成されたものと仮定される。

既に住居址の問題に關聯して記述したように、この三方面の住居地区を外郭とし、その中央に広大な地域を占めて特別造構の地区があつた。即ち、ここには、径一米深さ一米の円形、直壁平底の竪穴が近接し重複しつゝ連の竪穴群として埋没していた。また一大甕形土器が、家屋外の広場に単独に埋められ、これに自然石を目印とも重しともして載せてあり、更に一群の自然石を、この土器をめぐるように敷き並べるなどの造構が群落し、いわば共同的とも社会的とも思われる地区が介在していた。

また与助尾根台地にては、区域と推定される範囲は第三〇八四番の畠地を除き殆ど発掘し、ここに約二八ヵ所の住居址で構成するところの一集落址を調査し得た。

この集落は、台地の南斜面の頂上線、即ち延長一二〇メートルが地形に即し弧を描きつつ東西に亘り、相接して一線上に分布する。従つて、住居は、常に溪を臨む斜面の頂上線を選び南向きに營まれ、集落はこれにより東西に発達した。

また与助尾根にては充分の発掘調査をなし得なかつたが、ここにも尖石とともに集落の北側にある平坦な地域

において、住居址は発見されなかつたが、竪穴が、即ち第一七址の北二米に一ヵ所、第一五址の北一八米に三ヵ所、計四ヵ所が発見された。これにより、なお、この地域に数多くの竪穴が埋没するものと予想される。

戸数と人口 第三形式の住居址には、炉址に竪穴と石囲との二形態があるが、これは、併存したものであろうか。或は石囲のものを最後のものとし、これは竪穴炉から進歩發展したものであろうか。その遺存状態からは、竪穴は本来の構造ではなく、石囲に構築されたものが後日炉石だけ撤去されたと認められる筋がある。このような住居址の遺物は至つて乏しい。仮に遺物の多寡は、その住居の富貴の差によるとしても、殆ど皆無に近いとすれば、それは何らかの理由により撤去されたものとして考慮されなければならない。

一体、この石囲いの炉はその材料である炉石も適当なものが選ばれ、しかもこれに加工し極めて丹念に構築された。従つて、当時は炉石も重要視され、その住居から撤去するに際し、他の什具とともに搬出したものであろう。

何時の世でも住みなれた家屋から退去することは、忍び難いことであつて、殊に、利器に乏しい当時にあつて一つの住居を構築するには、相当な日数と労力とを要する容易ならざる事業であつたであろう。

従つて安住の地を他に移転するとすれば何らかの理由がなければならぬ。

与助尾根においては、約半数の住居址の炉址はこの竪穴形態であつて、かかる退去が屢々行わられた。従つて、住居址の総数をもつて直ちに集落を構成した家屋の員数と看做することは出来ない。

この仮定により与助尾根の最後の日の戸数を住居址総数二八ヵ所の半数である一五戸とし、この人口は何人位であったであろう。

これに関するは、まず、当時の一家族は、どのような構成にあつたであろうか。まずこの問題から解決されなければならないが、ここでは、それはそれとし、直ちに、関野克博士によると一竪穴住居に住み得る人間の数を

計算する公式「それは人間一人の生活面積を竪二米、横一・五〇米の矩形三平方米とし、畑に一人分の面積を考えて竪穴面積をA、家族の数をnとして $A = 3(n + 1) m^2$ 但し $n = 2$ とすれば $n = \frac{A}{3} - 1$ の式が出来る」によれば径四・五〇米の円形の面積一六平方米の一住居の収容人員は四人となり、これにより与助尾根集落最後の日の総人口は六〇人前後の計算になる。

住居址集成

尖石遺跡発掘住居址細目集成

第五址	第四址	第三址	第二址	第一址	出土位
南北径四 東西四 内二〇 米 径六 不規方形 米	徑六 方形 〇〇米	南北径格 四五 内形 一〇 〇〇米 米	徑四 か 〇〇米	徑四 丸方 〇〇米	平面形
堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	床
(2) 地 南 偏 在 北 偏 在 五 石 伊 に 重 復 深 六 火 深 さ 四 五 釐	(1) 方 形 深 北 偏 在 五 石 伊 に 重 復 深 六 火 深 さ 四 五 釐	(2) 方 形 深 南 偏 在 五 石 伊 に 重 復 深 六 火 深 さ 四 五 釐	(1) 方 形 深 東 偏 在 五 石 伊 に 重 復 深 六 火 深 さ 四 五 釐	徑石 六 圓 北 偏 在 五 石 伊 に 重 復 深 六 火 深 さ 三 〇 釐	方 形 土 器 片 石 ・ 圓 火 深 さ 三 〇 釐
徑北 六 〇 兩 主 所 、 深 さ 六 〇 釐	五 ヶ 所 北 格 七 四 主 所 内 柱 南 内 柱	六 ヶ 所 北 格 七 四 主 所 内 柱 深 さ 五 〇 釐	五 ヶ 所 口 主 所 三 〇 釐	三 ヶ 所 徑 三 〇 柱 内 柱 深 さ 四 〇 釐	四 ヶ 所 柱 三 〇 柱 内 柱 深 さ 六 〇 釐
高全周 南北 一 七 五 釐 幅	高全周 南北 二 七 〇 釐 幅	高全周 南北 二 七 〇 釐 幅	高全周 二 〇 釐	高 北 側 二 五 釐 幅	南 西 を 欠 く 二 〇 釐
深幅全 さ一 周 一 〇 五 釐 幅	全 周 三 〇 釐	全 周 八 釐	全 周 八 釐	北 側 の み 六 釐 幅	南 一 〇 釐 幅
		合 第二 う 社 と 棲 い	半 掘 第三 社 と 重 複	り の 石 上 壁 に 通 接 あ	特 殊 造 構

	第三〇址	第二九址	第二八址	第二七址	第二六址	第二五址	第二四址	第二三址
徑丸六・方九〇米	南北径不整円形 北西四四 三一 〇〇 米米	南北徑不等五邊形 北西四五 七〇 〇〇 米米	南北現未北西在元 三六 四〇 〇〇 米米	南北徑不整形 北西四五 一〇 〇〇 米米	南北徑推定圓形 北西四五 〇一〇〇 米米	南北徑推定圓形 北西五六 〇八〇〇 米米	徑五・四〇米形	徑四・八〇米
堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平
(1) 徑一形 北二五 深さ二 五メ ト	徑矩 深南東西 北さ三 〇一〇 〇〇 米米	徑矩 深南東西 北さ四九七六 〇五五 在○五五 幅	(3)(2)(1) (2)(1)地 の床 火炉 北方並 方地か に床 あり	(8)(2) (2)(1)地 の床 火炉 北方並 方地か に床 あり	(1) 徑石 深南東西 北さ北西等 地地三九八六 床床〇〇〇〇 火炉幅	なし	徑不 南北六 九一〇 〇六 火炉	徑方 深南東西 北さ二七六 九五・火 爐一 五メ
八 四 カ 所 在	深径 九 カ 三 〇 主 所 幅	徑 九 カ 三 〇 主 所 幅	六 カ 所	深径 九 カ 三 〇 主 所 幅		六 主 所	一 カ 所	三 カ 所 主 数 不明 深 さ 三 〇 幅
高周	高周 高さ二〇 幅	高全周 高さ二〇 幅	高東 東側と西側 一五 軸	高周 高さ三〇 幅		高東 東側のみ 一〇 幅	北と東に 東三〇 幅	高か 東から 雨に 高さ二〇 幅
全周	なし	幅全周 一六 幅	周壁に内周	られる 東側に認め		する 側壁に内周	する 側壁に内周	する 側壁に内周
		あり 西 南 面 に 堅 穴	數 二 所 造 構 二 二 カ 所		貯 未 藏 庫 か	探 けり 北側 出に堅 穴が 七 八 メ ト	未 考 査	柄 の 北 に 堅 穴

第三址	第二址	第一址	噴出位土
南北径不整圓形 北西四五 ・四〇〇米 米	南北径不整圓形 北西四五 ・五〇〇米 米	南北径不整圓形 北西四五 ・一五〇米 米	平面形
堅水 圓平	堅水 圓平	堅水 圓平	床
深徑不等 四四五 五五形 木免六 火	中央火 二所	深徑方 北さ九〇 偏在四〇 在圓穴 火	炉 址
径五六 内柱七主 柱 深さ五〇 厘米	内柱 七 内柱 三九主 柱 深さ四〇 厘米	径三六 内柱 一主柱 内深さ三 三 〇厘米	柱 六
高さ 北三 三五 厘米	南北高さ 一五五 厘米	高さ 南北三 五〇 厘米	側壁
深幅全周 一五 五厘米	なし	なし	溝
址南 が西 崩 いに 込む四		と重複 南西隅第二址	特殊造構

与助尾根遺跡発掘住居址細目集成

第三三址	第三二址	第三一址
徑円形 一〇米	圓形 一〇米	
て凸水 凹あ平 弱り凹	堅水 圓平	
徑矩形 深南北西四八一 偏在四五 五五 厘米	徑矩形 深南北西石 石偏在四八一 四五 五五 厘米	(3) (1) 延 深さ九〇 偏在四八一 四五 五五 厘米
深径九六 内柱三九主 柱 深さ三 三 〇厘米	九 九 内柱三九主 柱 石三柱 あり	(2) 深さ九〇 偏在四八一 四五 五五 厘米
高全周 南北三 五〇 厘米	高全周 南北二 一〇 厘米	深径二四 〇 厘米
高全周 一五 五厘米	全周	
	半掘	

第一九址	第一八址	第一七址	第一六址	第一五址	第一四址	第一三址	第一二址
南北徑不正凸形 北西五五 •• 〇二〇〇 米米	南北徑不正凹形 北西四五 •• 八〇〇 米米	南北徑凹形 北西五四 •• 八〇〇 米米	径五 • 四〇米	径四 • 九〇米	南北徑不正形 北西四 •• 大二〇〇 米米	径四 • 八〇米	径四 • 五〇米
堅水 固平	堅水 固平	堅水 固平	堅水 固平	堅水 固平	水土赤 軟平脣褐色 面に面色	堅水 固平	堅水 固平
径五 深南東角 北さ北西形 偏在二片 在五••便 偏二〇右 〇〇米米	深径方 北さ七形 偏在〇種六 輕	径方 北九形 偏在〇種六 火	径方 北八形 偏在〇種六 火	径方 北八形 偏在〇種六 火	深南東石 中北七八四 偏在五〇〇 種六火	深北 中北七一 五〇〇種六 火	径方 北一形 偏在〇六 〇〇米
径六 七 鷹柱五主所 鷹柱 深さ六五輕	北深径 内さ四六〇主所 柱二五輕 四輕	深径 内さ三 床〇主所 柱二五輕 四輕	六 六力 六〇主所 柱二五輕 四輕	深径 内さ四 柱六〇主所 柱二五輕 四輕	深径 内さ四 柱六〇主所 柱二五輕 四輕	深径 内さ三 柱六〇主所 柱二五輕 四輕	深径 内さ三 柱六〇主所 柱二五輕 四輕
高全周 南北一 一三 一四 輕輕	高全周 南北一 一三 一四 輕輕	高全周 南北一 一三 一五 輕輕	欠く 接一 触五 面五 をと輕	を接 触五 面五 をと輕	高 さ三 五輕	なし	高 さ北 三〇輕
深幅全 さ一 一〇 輕輕	深幅全 さ一 一〇 輕輕	深幅全 さ一 一〇 輕輕	深幅全 さ一 一〇 輕輕	深幅全 さ一 一〇 輕輕	幅東南 部輕なし	幅二〇 輕	全周
		石爐 爐址 多の 北側 に		(2) 炉 あり 裏蓋穴 あして 埋め	(1) 炉 主柱 を柱 間に主柱 が第か	統一 ら炉 三接の にす 溝が第 か	込一 東側 は喫い第

八址	第二七址	第二六址	第二五址	第二四址	第二三址	第二二址	第二一址	第二〇址
径不整円形 南北西二二・八六〇米	南北西二二・九〇〇米 径内不整精円形	南北西三四・八〇〇米 径内不整精円形	南北西五・三〇〇米 内四形・二〇〇米	南北西五・三〇〇米 内四形・二〇〇米	南北西五・三〇〇米 内四形・二〇〇米	南北西五・三〇〇米 内四形・二〇〇米	南北西五・三〇〇米 内四形・二〇〇米	南北西四・八〇〇米 不整円形
軟水 弱平	堅水 固平	堅水 固平	不明	や水平 軟弱や	堅水 固平	堅水 固平	堅水 固平	堅水 固平
径方形石頭堅六外 北七形石頭堅六外	深径方 北六形 偏在〇體 堅六外 深六外 三〇體	径方 北六形 偏在〇體 堅六外 深六外 三〇體	不明	深径方 北六形 偏在〇體 堅六外 深六外 三〇體	(2) 埋 (1) 地 深径方 床中三〇體 炉中央三〇體 八體六 爐	深径方 北六形 偏在〇體 堅六外 深六外 三〇體	深径方 北六形 偏在〇體 堅六外 深六外 三〇體	深底炬 深南東形 北北西四七 偏在〇四體 堅六外 深底炬 深南東形 北北西四七 偏在〇四體 堅六外 深底炬
四主所柱 内柱深欠二きく五〇體	壁怪 柱二〇北主所 内柱深欠二きく五〇體	五 カ 主 所 内 柱 深 欠 二 き く 五 〇 體	なし	柱穴と推定される穴 あ	壁怪 柱二〇主所 内柱二	四 カ 主 所 内 柱 五 主 所 柱 體	深怪 内さ 柱五 主所 柱 體	深怪 内さ 柱三 主所 柱 體
高さを欠く	南北全周 南北三〇〇體	高全周 南北二五〇〇體	高全周 南北二五〇〇體	高西を欠く 二〇體	高全周 二〇體	高全周 二〇體	高全周 一五體	全周 一五體
幅南を欠く	全周	なし	なし	全周	深幅全周 一二二體	て穴側の 溝をつら ね柱	北側のみ	全周 一五體
を敷くに盤石		一西床 基造存 上に石棒	堆積する 赤土塊	が八径二 五五體大、接する 深探穴		あり堅六 南北側の通 構外		深幅全周 一五體

第二	南北 東西三四
第三	南北在 東西三六〇種 内柱
第四	北偏在 南北七
第五	北二〇種
第六	北偏在 南北七

尖石式土器の形式

尖石・与助尾根西遺跡住居址から出土した土器で復原し得たもの七八点、その他破片多数に上るが、これらは凡て、嘗て鳥居龍藏博士が提唱された山岳式土器に属し、南関東から中部山岳地帯の甲信地方を分布圏とし、繩文式前期後半以来の土器制作技術、装飾方法等の諸要素が最高潮に達した器壁の厚い（一側内外）器形の大きい（口径四〇厘米・高さ五〇厘米に達するものがある）いわゆる厚手式土器であつて、一般に、土質粗く、稀に雲母粉末を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成良好に堅く、器形は壺形が多く、円筒形・深鉢形・皿形・壺形から釣手土器等實に千姿万態である。その形態は、口径極めて大なるに対し底径が小であつて、平底の壺形が常態で、これを基本の第一形態とすれば、これから口径へ発達した鉢形を第二形態、またこれと対応に底径へ発達を見せた円筒形を第三形態とする。第二形態は次第に深鉢から浅鉢に、これより盤状に、更に皿形にまで変移し、第三形態の円筒形は口縁部が更に緊縮し脣部が膨れた壺形にまで進化した。次に、第四形態として第三形態の円筒形に第二形態の鉢形を重ねた複合形態が生まれ、これが尖石式第一類に特長として見られる形態である。やがて尖石式第三類の形態である、口径開き頸部聚り脣部の張った朝顔花形にまで進展して姿態を整えた。この他種々複雑な

形態を一括して第五形態とすれば、深鉢形の口縁部が緊縮した番炉形土器、釣手を添加した釣手土器、及び変形した瓢形土器さえある。

特に尖石第二類土器には、その基部に特殊な形態をもつものがある。つまり器体の胴の下部が縮約し再び円く張った脚部となって、底部に移行する形態であって、一種の形態的装飾の効果をあげるとともに安定感をも与える。次に底面は大体平底であるが、台脚付土器も制作されたように、台脚部分だけ発見されている。

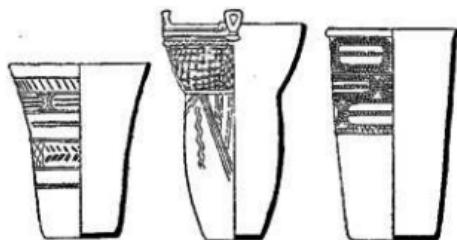
土器の装飾の方法として、施文・彩色と把手加飾の三つが挙げられる。

施文は、地肌が纏文と無文の二種類あるが、これに関東地方の纏文前期に盛用された竹管文と細粘土紐文が踏襲され、これが太形粘土紐による隆起線文が、竹管文はまた、半肉彫による彫刻文に発達し、次に中期の雄渾豪華の文様を頂点とし再び平静の感を与える沈線文として下った。

把手は、この遺跡の初期の土器に発生し、疣状の小形把手が口縁帯に対称的に加飾された。これが最盛期には纏文の先端が脛部の肩に二個、または四個の対称的に「X」字形、或は環状把手となり遂に口縁部にのびて立体的の把手となつた。

これは種々の意匠を凝らし雪帽子形・鳥形・獸形・躍動する蛇体となり、遂には人面を把手に象り、容器を人体に模した土器まで生まれた。

然しこの異形の装飾把手で、豪華な文様も、この極盛期を頂点とし次第に弱退化し、遂に口縁部を波状形に作り、その名残を留めるに過ぎなかつた。この時期に彩文による装飾手法が現出した。多く酸化鉄から精製された赤色顔料により、抹消纏文の器面を朱彩し、或は、無文土器の内外両面に纏文を描いたものであ



第 図 98 尖石式第一類土器実測図

る。

次に、これを編年に分類する。
尖石式第一類 前期の施文法が発達しつつ続く。これを手法により分類する。



第 図 99 尖石式第二類土器実測圖

(A) 細隆起線文 「みみばれ」のような粘土紐を貼付する。
(B) 両側竹管文 竹管または禾本科の茎等を両側より切截し、その二股の先端を施文具として二条平行線文を器面全体に施す。

(C) (A)(B)の両施文法を同一器体に併用したもの。

尖石式第二類 これは厚手式土器として中期の最盛期に当る。器

体雄大に、器壁厚く、これに独特の自由奔放な意匠を盛り、施文がよく狩猟生活による勇猛果敢な精神を表現したものである。これを手法により分類する。

(D) 隆起線文 太き粘土紐を駆使して雄大剛毅な隆起文で施文し、これに立体的の把手が飾される。

(E) 彫刻文 器全面に巧緻な半肉彫文を施す。

(F) 刻線文 粘土紐文に代り太き刻線にて隆起線文を現わす。

(G) 沈線文 沈線文で器体を区画し区内を刻線文で埋める。また区画内の縦文を抹消し、これに丹彩したものもある。

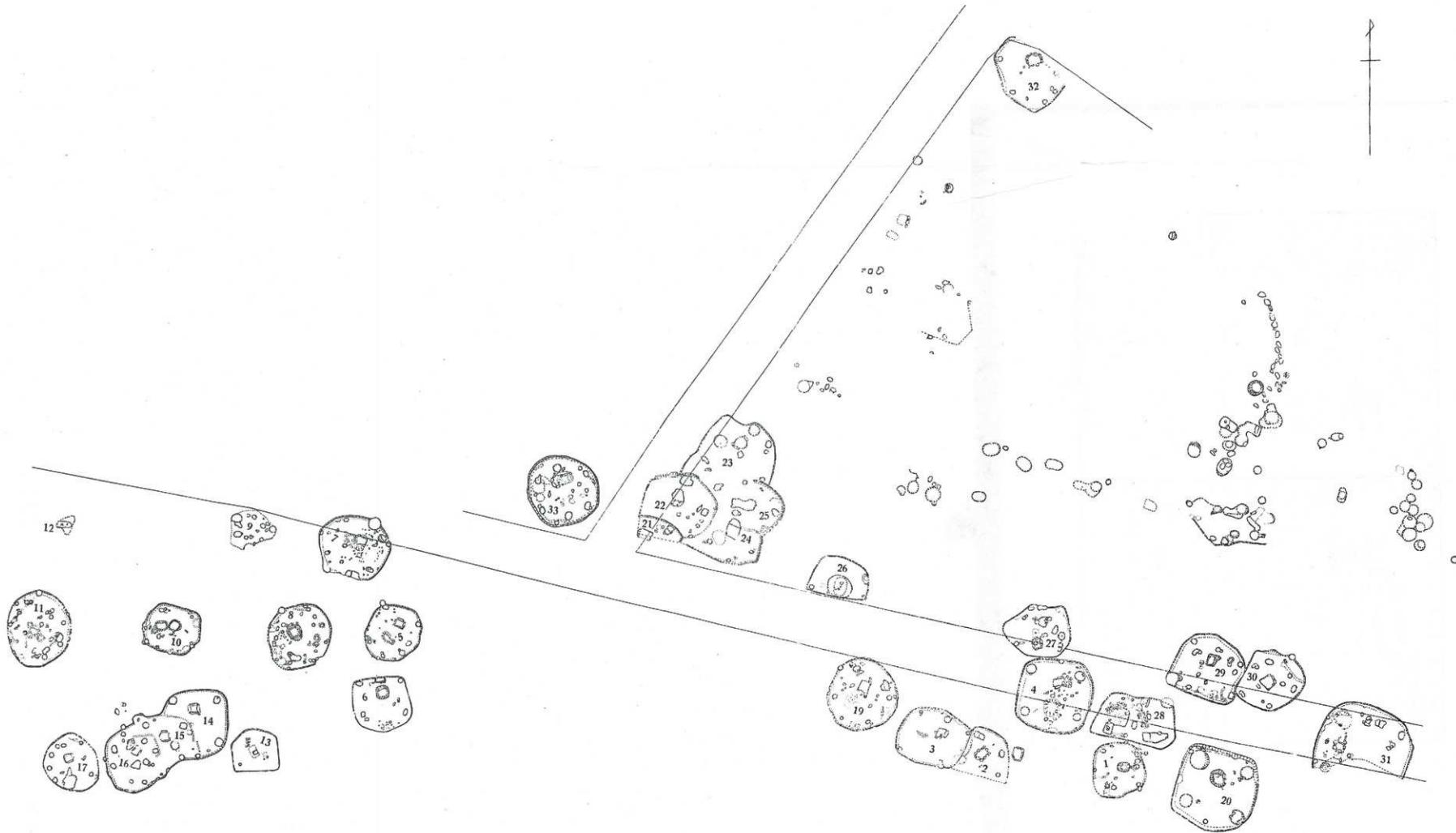


第 図 100 尖石式第三類土器実測圖

る。

(H) 丹彩文 無文の器体の内面或は外面に弁柄で渦巻文を描く。
次に出土土器をこの形式に従い各住居址別に分類表示する。

尖石遺跡発掘豎穴住居址分布図



尖石遺跡住居址出土土器集成

与助尾根遺跡住居址出土土器集成

出 現 場 所		形 式		完 形		そ の 他	
一五	一四	一三	一二	一〇	九	八	七
*	*	*	*	*	*	*	*
一 初 期 形 変	四 一 鉄 手 土 器	一 二	一 一	一 〇	九	八	七
一 底 部 を 欠 き 埋 蔵	四 一 鉄 手 土 器	一 一	一 復 原	一 一	一 土 器 着 火 部 偏 出	一 二	一 田 舎 形
に 堆 積 す る 中 心	口 縫 等 破 片	分 石 油 あり 一 個	片 脱 表 土 器 裏 一部 個 器 裏	粒 堆 地 表 土 文 型 文	多 数 あり	堆 土 中に 少	破 片
計	址 平 地 網	小 糸 六	二 八	二 七	二 六	二 五	二 四
三 四	*	*	*	*	*	*	*
一 四	*	*	*	*	*	*	*
	土 十 十 土 器 口 縫 部	火 薬 上 より 出					

尖石遺跡住居址出土石器細別表

住居址集成	分類														製作別	
	住居址別							種別								
一六	一五	一四	一三	一二	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	砾塊・敲石	
二				一	一				一	二				一	自然石	
五				二				一		二	六		一	三	石凹	
			破小					一	破二					破二	虱石	
破一六			破一					破二	一		二			珪岩二一	鐵石	
								二	一						錐石	
一			一						一	一					器石細形円	
一									一						刀小石	
三			一						三	二					匙石	
破三五			破一〇	二	七	二	一	三	三	一			一	一	斧石	
二								石英一三		二					石片剝成末	
															他のそ	
破			破二		一				一		一			一	斧石式州遠	
二	一					一			一		一			二	斧石式角定(小)	
破一				一	二	一			一						斧石式角定(大)	
															他のそ	
破二六八	一	〇	〇	〇	破一七	五	八	四	破二六	破一六	六	一八	一	二	破一〇	計集別址居住

種別 類計	三三	三二	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二〇	一九	一八	一七
八															一
二															
三七	三	一						一	三		一	二	二		二
破三二															
破一四〇一	四				一			二	破二			一〇	破五	破三二	
五	一													一	
五													一		
九	二							二		一				二	
二						一									
破四八五	破二二							一	破二		一	破二	一		
八															
一石榆												石榆			
破六五	破三														
二						一							一		
破一八	一				一								一		
一黑 馬鹿 石 右	馬鹿 石 右											大木平施 砾變石次 石灰	石花 材 砾 岩	肩黑 壁 石 五 石	塊 黑 石 五 石
破一九 三九	破一 五三	〇	二	〇	〇	三	〇	〇	七	破三六	二	三	破一 六一五	八	破一 八

与助尾根遺跡住居址出土石器細別表

												住居 址別	分類 種別	製作別			
六	五	四	三	二	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一			
											一				礫塊・敲石		
															石磨	自 然	
六	二	一	一		二						一				石圓	回	
					破										皿石	石	
	一				三							一		二	鐵石	打	
															錐石		
															器石彎形円		
															刀小石		
															燧石		
三															斧石	石	
	三														石片剥成未	製	
															他のそ		
															斧石式州遠	磨	
															斧石式角定(小)	製	
															斧石式角定(大)		
															他のそ		
															計集別址居住		
六	六	六	一	一	〇	破	四	六	〇	一	〇	破	二	〇	砥石 石錠	無石	

種別集計	堅六	二八	二七	二六	二五	三四	三三	三一	二〇	一九	一八	一七
一												
一							一					
一八							二	一				二
破一												
一〇				一						一	一	
一												
三										一		
六											一	二
破一 四四			一			二	一		二			一
三											石船一	
四				一								
破一				一								六
堅石 石縛 二二					石縛一							花崗岩 一
破七 六六		〇	四	一	〇	六	二	〇	六	〇	二	一〇

後記

私が、この尖石・与助尾根両遺跡を調査し始めたのは、實に、今から二十有余年前の昭和五年からのことで、その間、尖石遺跡については、昭和二十三年、蓼科書房から「原住民族の遺跡」を刊行し、また与助尾根遺跡については、昭和二十五年考古学雑誌三十六卷第三、四号に「八ヶ岳西山麓与助尾根先史聚落の形成についての一考察」の一編をよせ、その他、時時、關係雑誌に発掘調査を報告したが、これの綜合的成果については、遂に、今日まで公刊するに至らなかつた。

一体、考古的調査は発掘を基礎とし、その結果を記述してこそ初めて目的が達成され、これが、また発掘者の責務である。私は、この自責に悩まされながら、今日まで、それを成し遂げ得られなかつたのは、私が、単なる田舎の一小学校教師であつて、その能力にかけておつたが故である。

然るに、今日ここに、尖石遺跡研究の一半である住居址篇が上梓されるに至つたのは、一つに、東京大学講師八幡一郎先生の激励と指導としかも全篇を通じての校閲によるものである。

私は、昭和五年にこの遺跡で顔面把手を発掘し、これが手記を先生宛に送つたところ、先生は、これを当時の信濃考古学誌第三卷第一号によせられた。これが、先生から指導をうける始まりで、爾来、先生は、この尖石遺跡の有力な理解者であつて、中央学界において繁多な日常を過ぎながらも、遠いこの地の発掘から、今日この報告書の刊行されるまで、實に、長い期間に亘つて文字通り影の形にそう如くこの私に対し指導と激励とを惜しまれなかつた。またその間、先生は、當時東京帝國大学文学部長として在職された故今井登志喜先生とともに中

央学界へもさかんに紹介された。

これにより、時の文部省宗教局史跡保存課斎藤忠先生には、昭和十五年この遺跡を視察され、以後度々出向かれ、その結果同十七年九月二十四日、文部省「史跡保存地」として指定され、なお終戦後も数度の調査により、昭和二十七年三月二十九日、文化財保護委員会から「特別史跡石器時代尖石遺跡」として指定されるに至った。またこれとともに、同二十六年、出土品保存のため収蔵庫を新設するよう指示されその計画を樹てたが、大蔵省により削除されたので同年はこれが実現を見るに至らなかつたが、斎藤忠先生等文化財保護委員会は努力を続け、同二十九年予算に計上され翌三十年完成の上同年十一月三日その開館式を挙げ、ここに出土品が永久に保存されるに至つた。このように、斎藤先生には昭和十五年来十数年に亘り尖石遺跡の保存顕彰のため心血をそがれた。

長野県にても、昭和二十五年五月知事林虎雄氏と県会議員一行および長野県教育委員会が遺跡を視察され、その保存施設のため補助金を交付された。これにより地元豊平村では、道標を建て、見学道路を新設し、また、与助尾根に敷地を買収して古代公園を造成し、民家の一室を陳列室に改造する等、見学者のために、また、出土品保存のために大いに施設された。

更に、時の豊平村長小平吉一氏は、当初からこの発掘の理解者でしかもその協力者であつて、昭和二十七年六月には、豊平中学校に第一回尖石大学講座を設け、中央学界から芸術大学教授藤田亮策、文部技官、文学博士黒板昌夫、同文学博士斎藤忠、東京大学講師八幡一郎、京都大学講師小林行雄の五先生を講師として招かれたところ、長野県下の教職員は勿論一般の同好者等千三百有余名が来会され熱心に聽講された。次いで、この講座は、同二十八年六月講師八幡一郎先生により第二回目が、同二十九年六月講師斎藤忠・黒板昌夫・八幡一郎の三先生により第三回目が設けられ、尖石遺跡の顕彰とともに社会啓蒙のために大いにつくした。

同村長は、収蔵庫の建設が内示されるや、直ちに、二十八年八月豊平村議会に謀つてこれを議決し、翌二十九

年十一月、南大塙区の中央に敷地をトし起工式を挙げた。また、同年七月には遺跡調査のために三笠宮殿下をお迎えした。

次いで、三十年二月一日町村合併により豊平村が茅野町となつたが小平吉一氏は引き続ぎ尖石保存会委員長として同年十一月収蔵庫の開館式を挙げ、なお一般から篤志寄附を仰ぎその醸金により本館一棟を併設し、同三二年五月この落成式を行い、ここに初めて尖石考古博物館としての体を整え、今や尖石遺跡は、名実ともに小平吉一氏の卓越せる識見とその果敢なる実行力とにより完備するに至つた。その他、この発掘調査については、旧友高橋巳喜之助氏が、当初以来長い年月に亘って物心両面から温い手を差しのべて研究に専念し得るようにしてくださり、昭和十六年には、中央公論社国民学術協会が、金一千円を、同十八年東亜考古学会が金三百円を、二十一年十月文部省科学研究奨励金五百円を、同二十二年四月信濃教育会特別研究助成金千円を、同二十三年十月文部省人文科学研究費補助金一万円等を交付または寄贈され、同二十四年四月南信日日新聞社が「尖石を守る会」を結成しこれに醸金された金六万二千円を研究費として、また同二十五年二月諏訪教育会が会員の教職員から醸金された金二万二千円を、泉野村内の各子弟からもそれぞれ研究費をよせられた。同二十五年四月には、ブラジル国サンパウロ市に存在せられる井口吉三郎氏が帰朝されて遺跡を視察され、遠くケヤー物資を贈られて激励された。四方から寄せられたこれらの方々の温かき手によつて、私は、容易に研究を続けることが出来た。

また発掘について、当初地元の人々は、好事家の仕事くらいに嘲笑視していた。僅かに区民の小平幸衛氏と、これに、当時小・中学生であった吉久雄・長久・虎次・昭久の四人の兄弟が手伝つてくれたのみであつたが、終戦後は、学校の教科目に社会科が設けられ、歴史も科学的に研究されるようになり、郷土史への関心が急激にたかまつたので、地元の豊平青年会員や豊平中学校の生徒は勿論遠く郡の内外から各高等学校の郷土班員が参加され、これに四男昭久と岡谷市増沢賢氏の両人が中心となつたので作業は順調に進捗した。そして、発掘の実況

は、牛尾政一・矢島奏・中沢博の三氏が撮影され、実測については、終始一貫、矢島数由氏の手を煩した。

私が、一田舎教師として勤めた三十五年間、この研究のため日曜日や長期の休業を利用したとはいえ、決して私一個人の力のみでよくなし得たものではない。かく四方からよせられた援助の手によって、両遺跡の発掘がなり、尖石遺跡は特別史跡として指定され、その土器は尖石考古博物館に保存された。しかも、私の責任において最後にのこされた報告書の刊行が、今日、茅野町教育長小口伊乙先生の計画立案により、しかも、同先生の奔走と尽力とによりその実現を見、これに、日本考古学協会委員長藤田亮策先生等の序文をもって、遂に、株式会社座右寶刊行会の好意により茅野町教育委員会発行として刊行されるに至った。只今、私は、多くの方々の浄財によつて成ったこの清らかな研究室に籠つて身も心も温かく、感謝の念をもつてこの最後の筆をおく。

(昭和三三、一〇、一五)

著者 宮坂英式

跋

東京大学考古学教室

八 横 一 郎

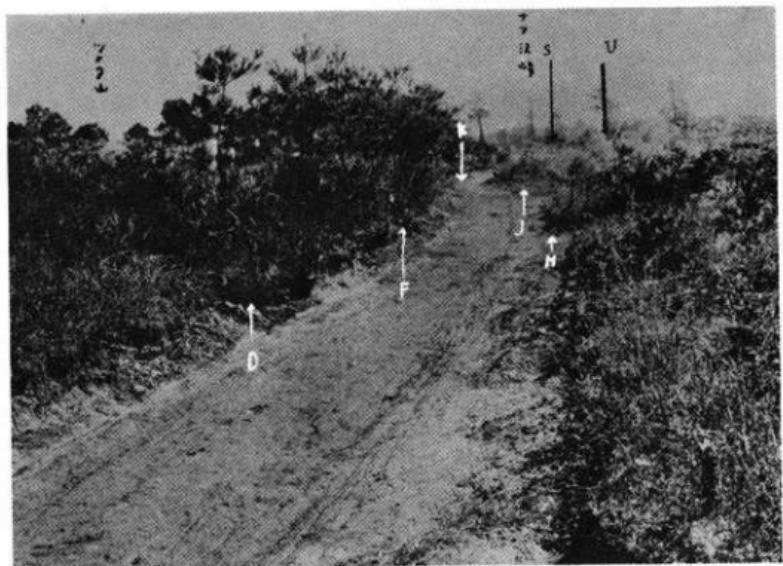
宮坂英式氏が尖石遺跡を調査するために払った異常の努力や、その結果驚くべき成果を挙げたことについては、改めて書く必要はない。本報告書一巻がその間の消息を雄弁に物語っているからである。

報告書の印刷が順調に進み完成の日近しとの小口教育長の書信を十一月五日夕、ラオス国の首都ウェンチャンに於て受け取った。その夜は十四日の月が皓々と照り、虫の音が水の流れのようであった。メコン河の畔りで夜更けるまで、尖石や宮坂氏との三十年に近い因縁を回想して、軒だ感慨無量であった。跋文を求められるのであるが、何一つ書くべきことがないようでもあるし、又書かねばならぬことが無限にあるようでもある。ただ宮坂氏はこの報告書を出せば一切終ったとはせず、豊かな経験と莫大な資料によつて、尖石遺跡を中心に龜文式中期文化の総括的研究を続けておられる。これが完成のために自愛自重せられんことを遙かに數千里の旅中に折るのみである。この一語を以つて本報告書の上梓を祝う辭としたい。

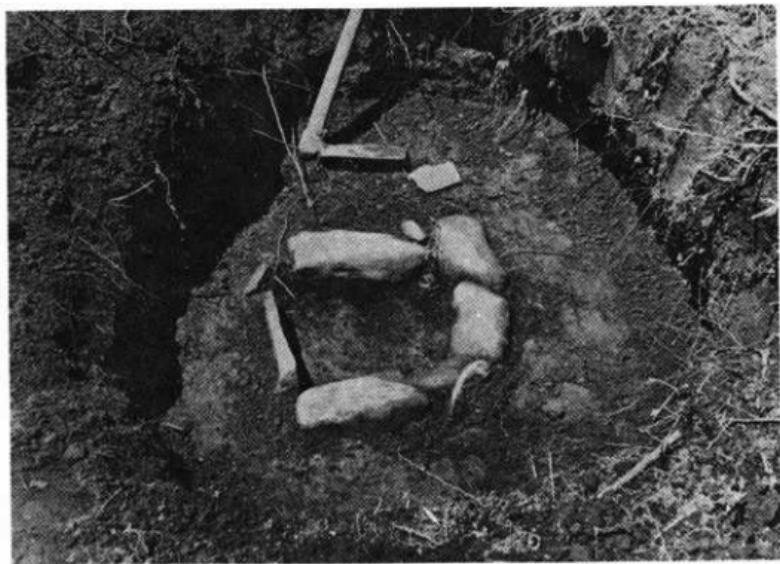
図

版

図 版 1



炉址が多数発見された林道

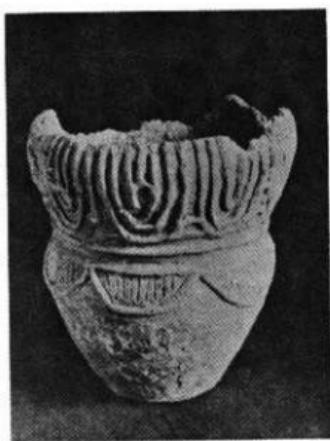


林道で発掘した一炉址（昭和八年八月）

図 版 2



林道F地点で発見された甕入りの炉址



右炉址内の土器

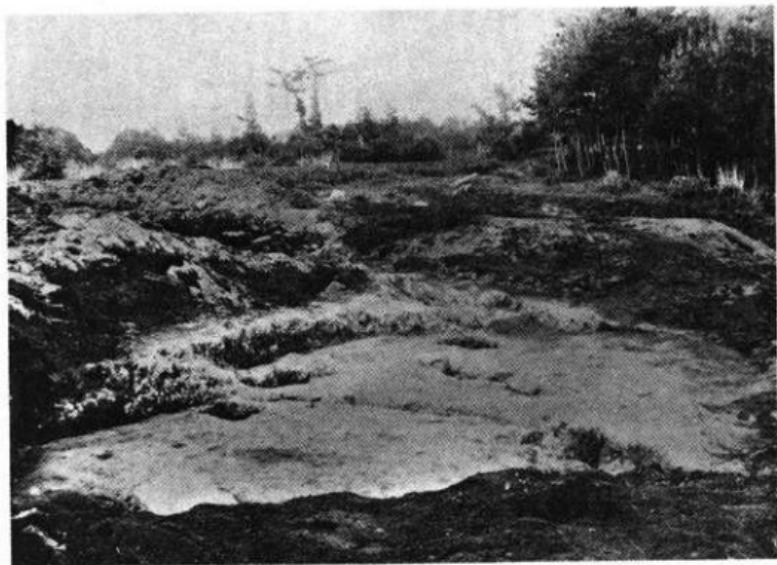


林道J地点の甕入り炉址

図 版 3



第一住居址 一西方より一



第二住居址（右）及び第三住居址（左）一西方より一

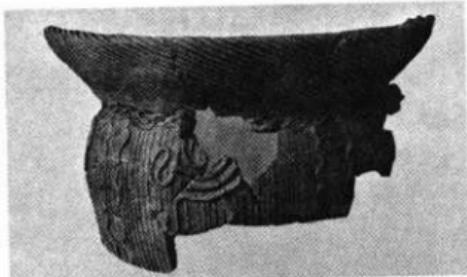
図 版 4



第三址上層より出土せる土器



第二址出土土器



第二址出土土器



第四址出土土器

図 版 5



第四住居址 一西方より一



第六住居址（手前）と第五住居址（先方）一南方より一

図 版 6



第七址炉中出土土器



第七址出土土器

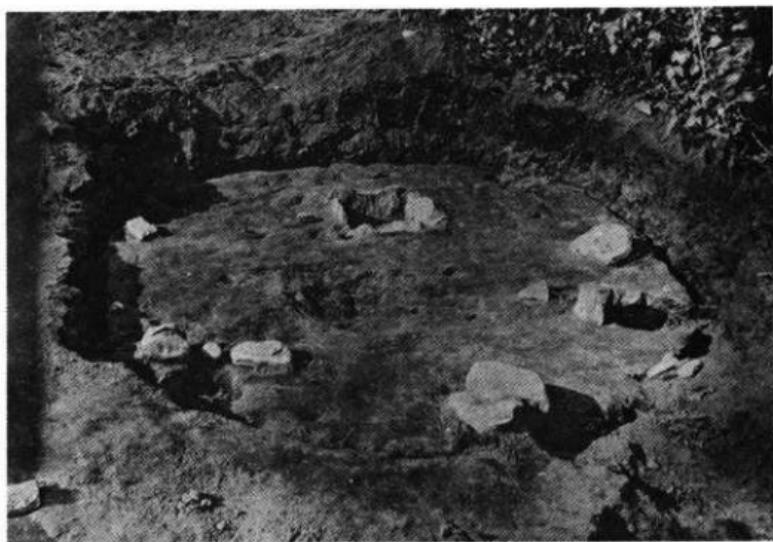


第八址床上出土土器



第七住居址

図 版 7



尖石第五住居址 一南方より一



第八住居址 一東方より一

図 版 8



第九住居址 一南方より一



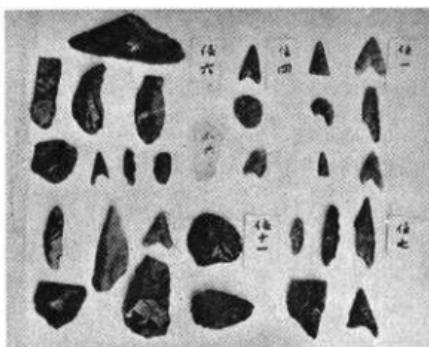
第一〇住居址 一北方より一



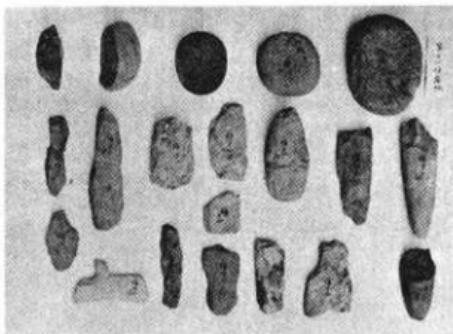
第五址床上出土土器



第五址石圈炉

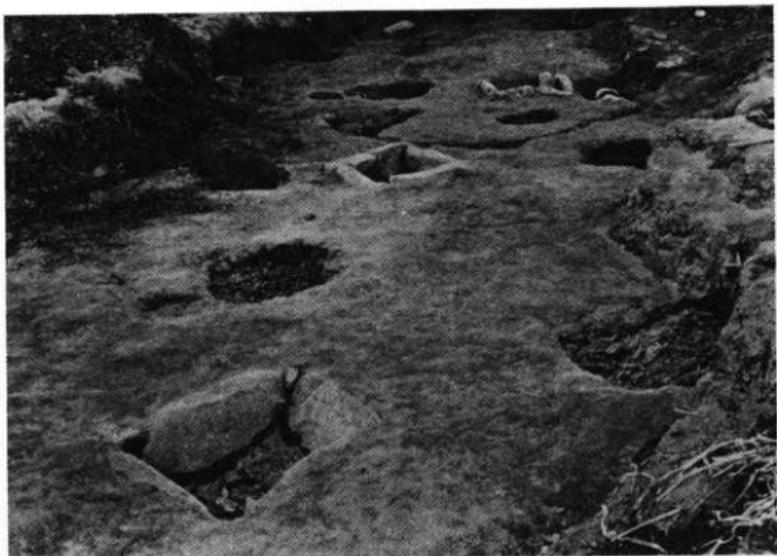


諸住居址出土小石器類



第一一址出土中形石器類

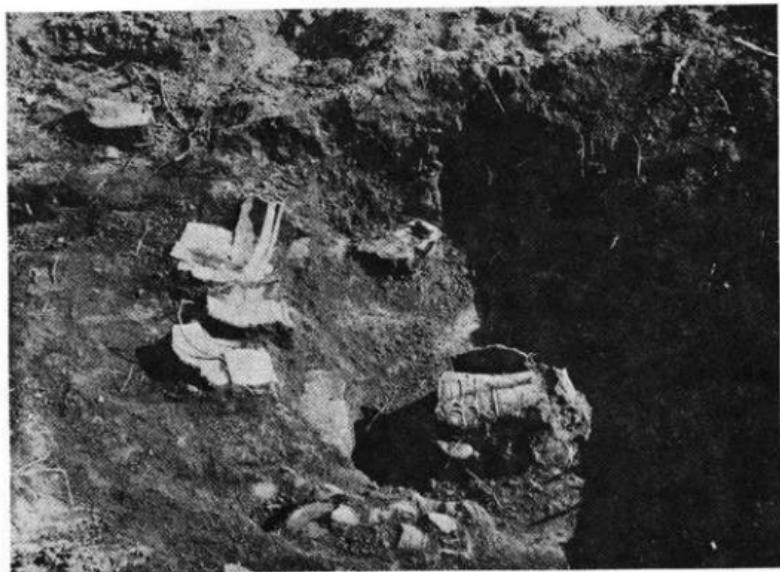
図 版 10



第一四・第一五・第一六各住居址の重複 一北方より一



第一四・第一五・第一六各址出土の土器

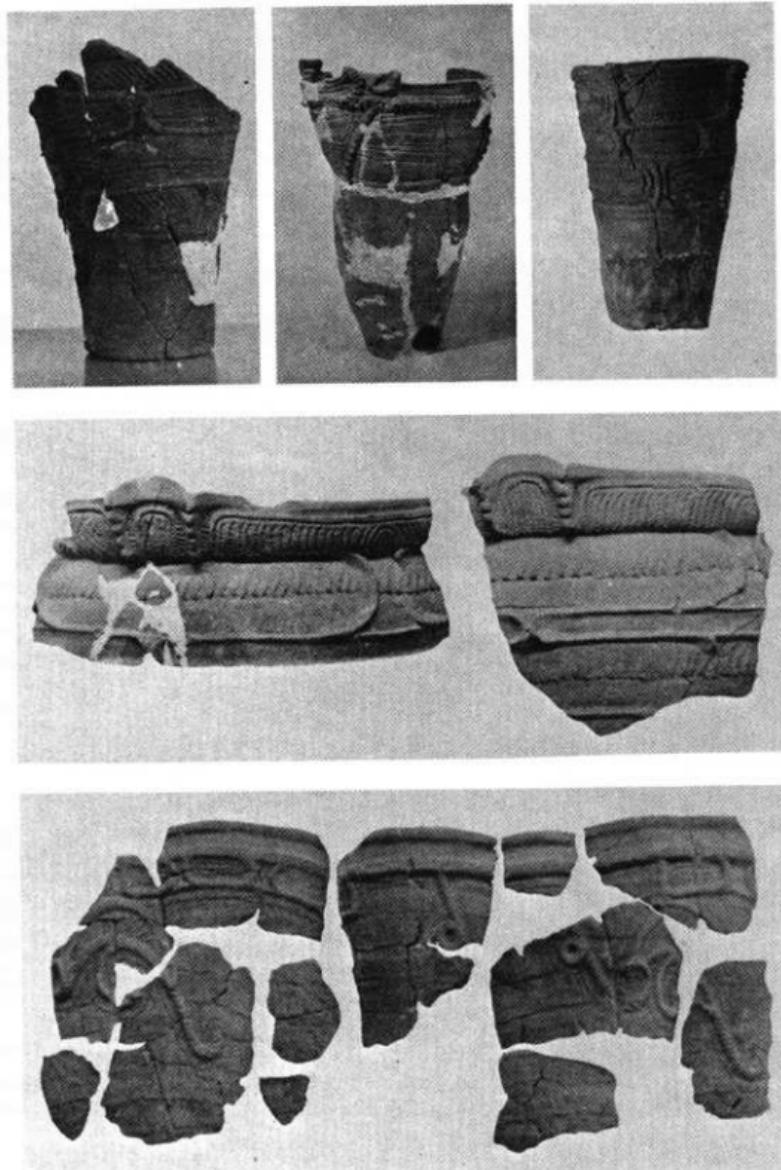


第一八号堆土中に集積散乱する土器



第一八号居址

図 版 12

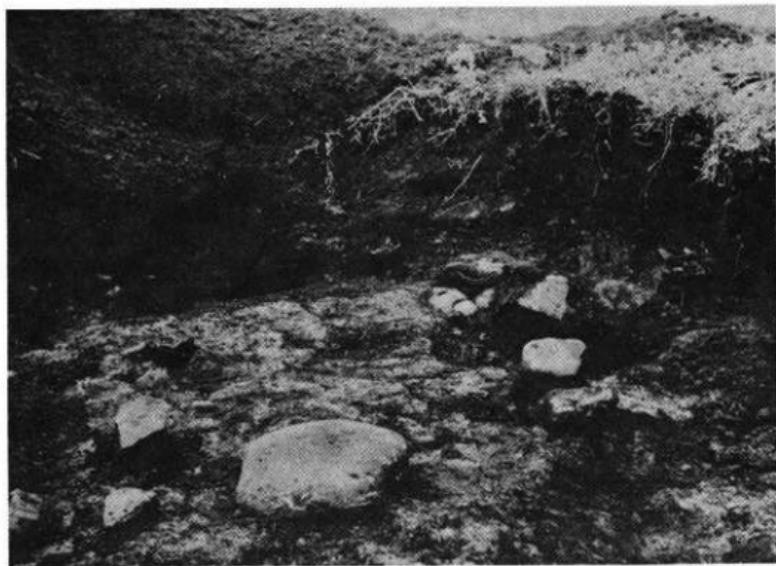


第一八址堆土中より出土せる土器

図 版 13



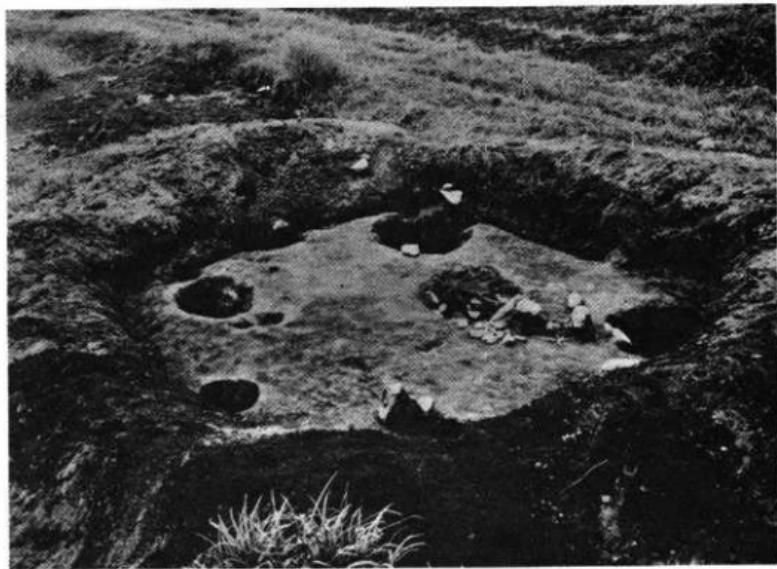
第一九住居址 一東方より一



第一九住居址の部分



第二〇址に埋めてあった甕



第二〇住居址 一東方より一



第二四住居址の発掘 一南方より一

宮坂 八幡 島村 矢島



第二四住居址 一西方より一

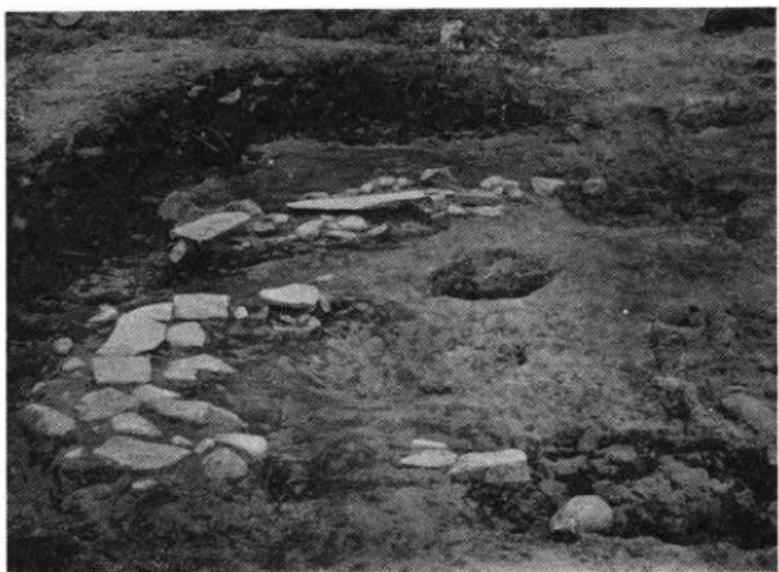
図 版 16



第二六住居址床上の特殊遺構



第二六住居址特殊遺構を除きたる下の穴



第二七住居址

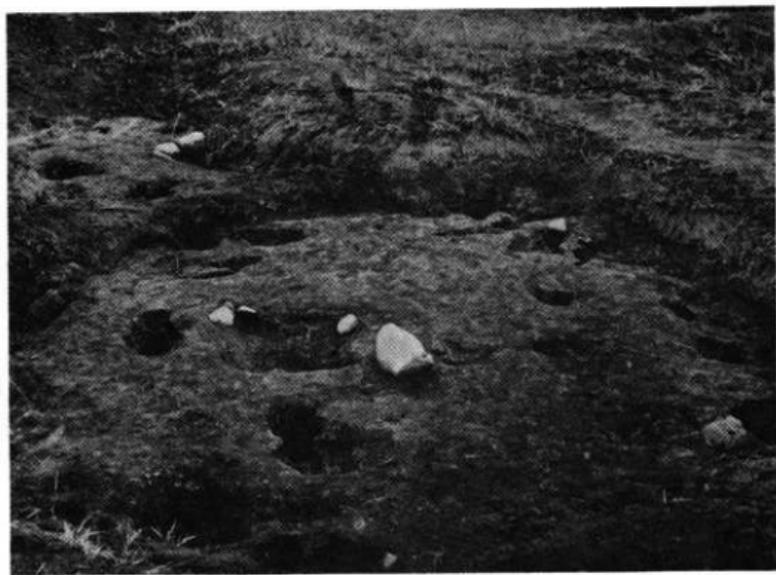


第二七住居址内の特殊造構

図 版 18



第二七址床上の敷石

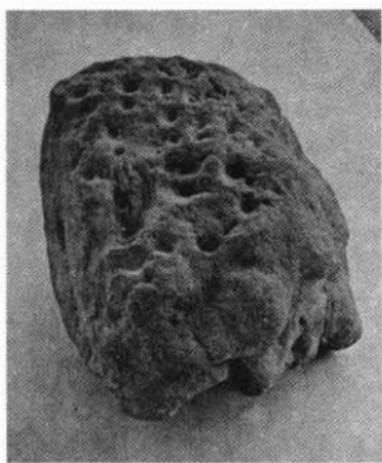


第二八住居址（右）と第二九住居址（左）—西方より—



第三〇住居址 一東方より一

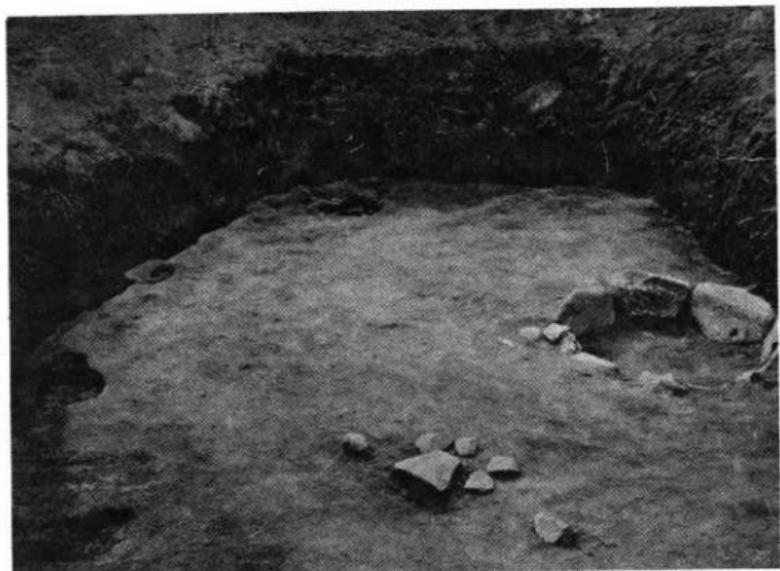
上位石窯（左）大穴（中央）粘土入りの穴（右）



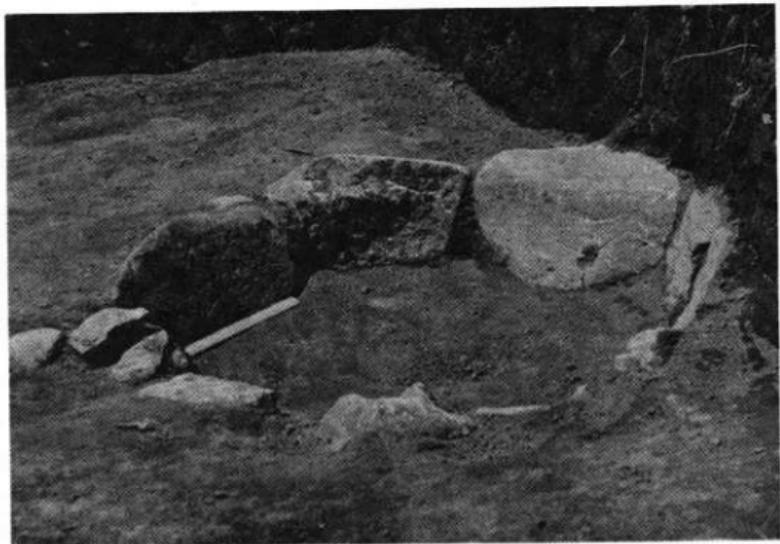
第三〇址出土の蜂巣石と土器



図 版 20



第三一住居址 一南方より一

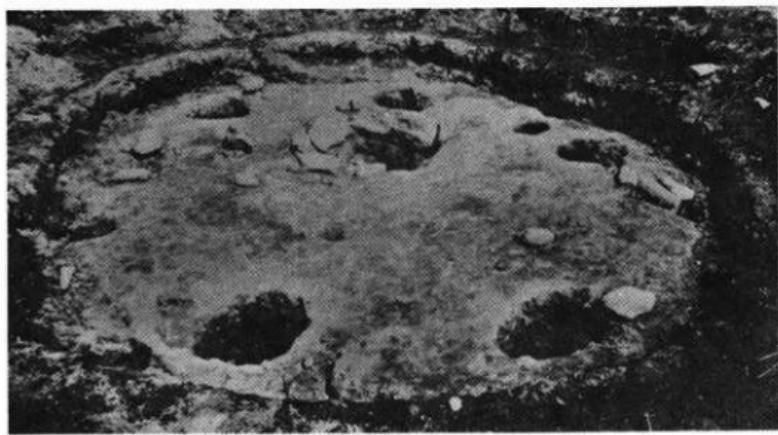


第三一住居址の石圓炉

図 版 21



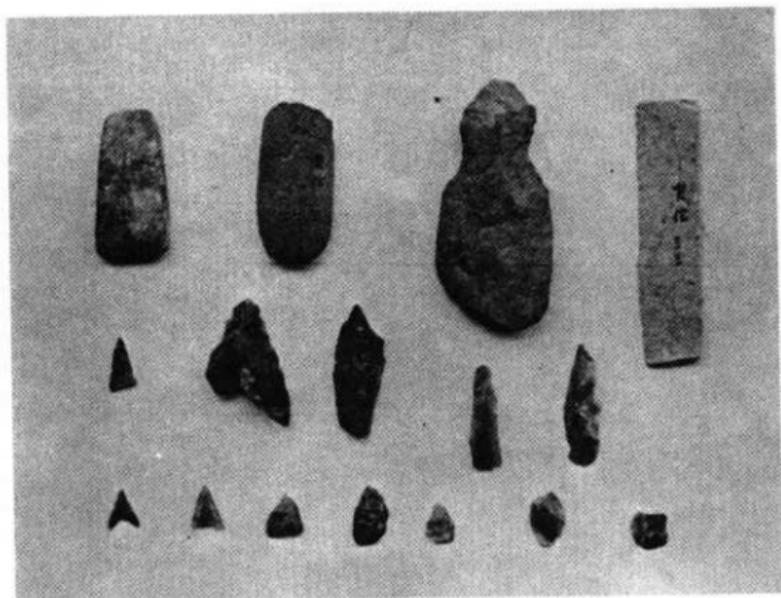
三笠宮殿下、第三三住居址を御発掘



第三三住居址



第三三址出土土器



同上石器類



与助尾根第一住居址 —東南隅より—



与助尾根第三住居址（右）と第四住居址（左）—東方より—



与助尾根第四住居址 一東方より一



同上址出土の土器と石棒



中尾根石器炉址出土鉢状口縁



第三址出土土器



第六址出土土器



第四址より石蓋して出土



第四址出土石棒

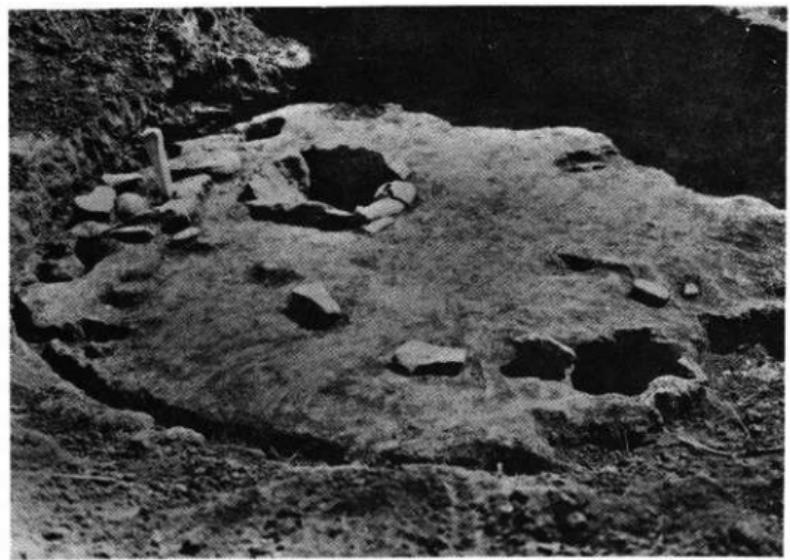


第五址出土土器

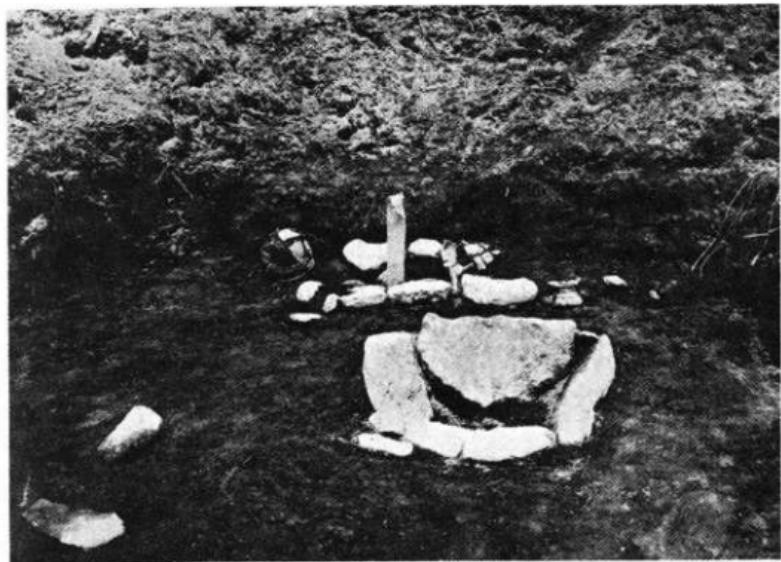
与助尾根各住居址出土土器と石棒



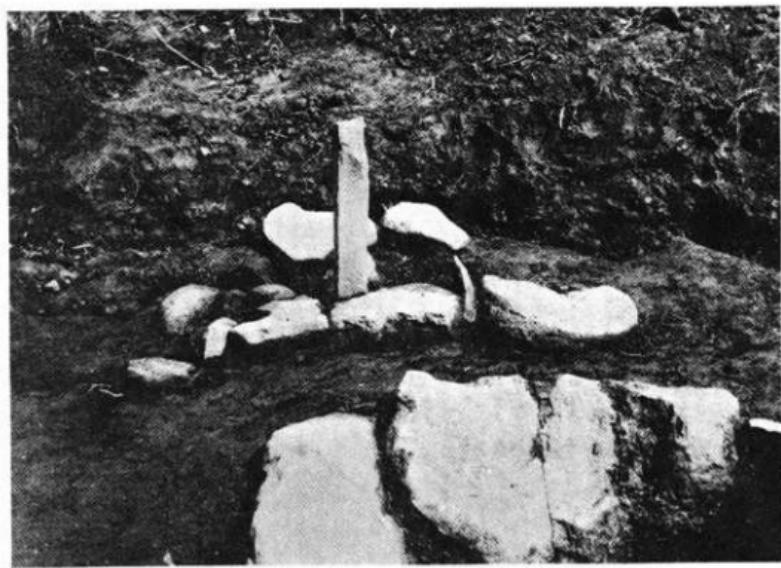
与助尾根第六住居址



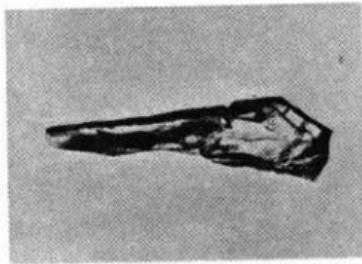
与助尾根第七住居址 一西方より一



与助尾根第七址の石窯と石塚



同上石塚の近景



与助尾根第七址石塚周間出土遺物



与助尾根第八住居址 一東方より一



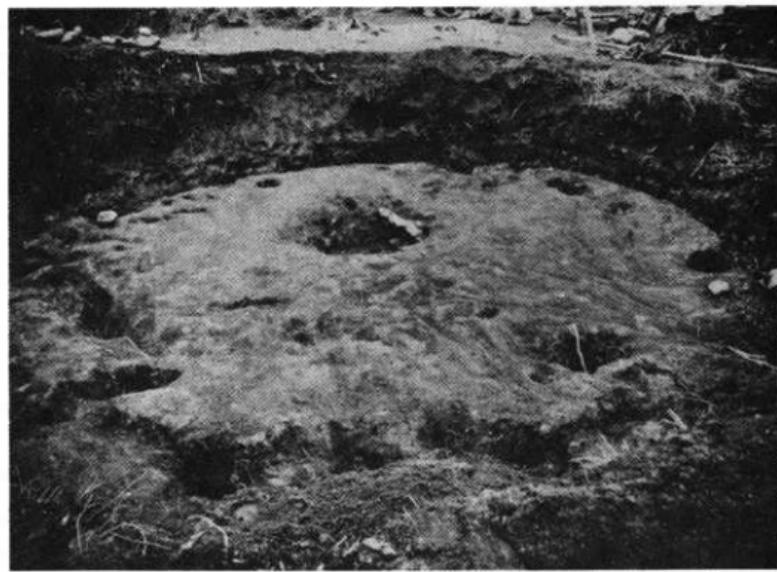
同上発見遺物



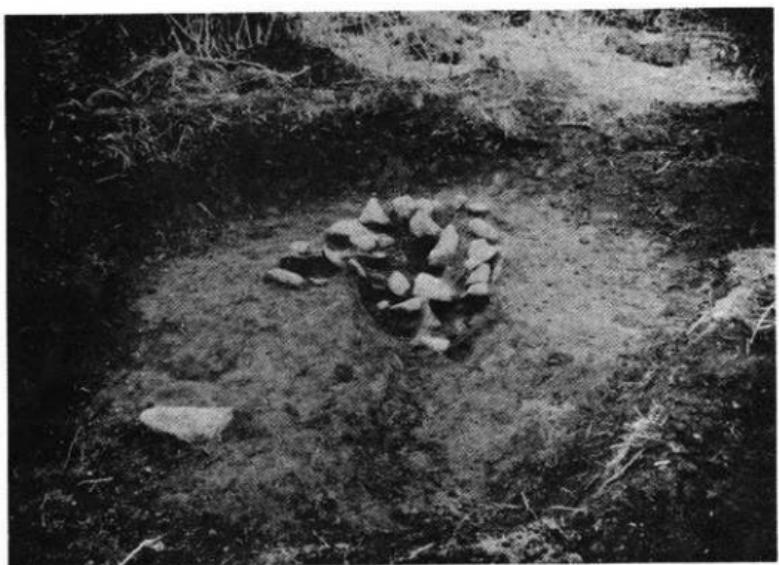
図 版 30



与助尾根第九住居址



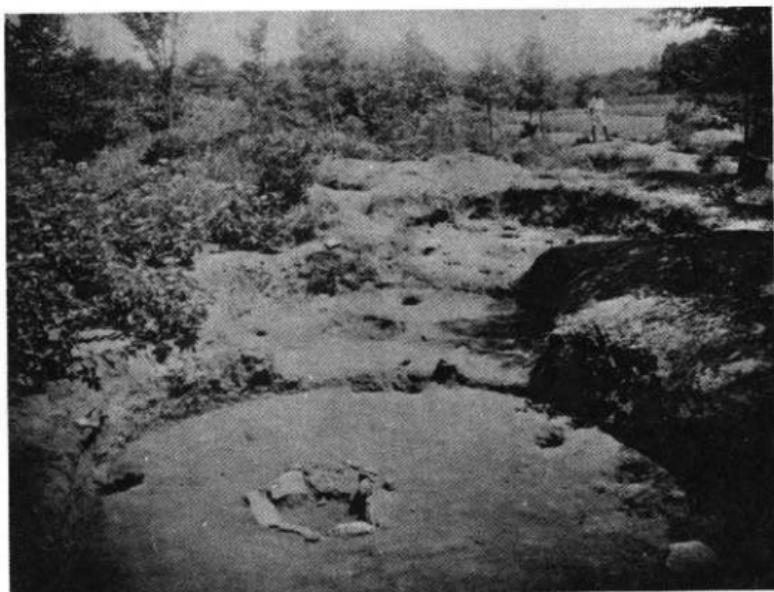
与助尾根第一〇住居址



与助尾根第九址石積



与助尾根第一二住居址の発掘作業

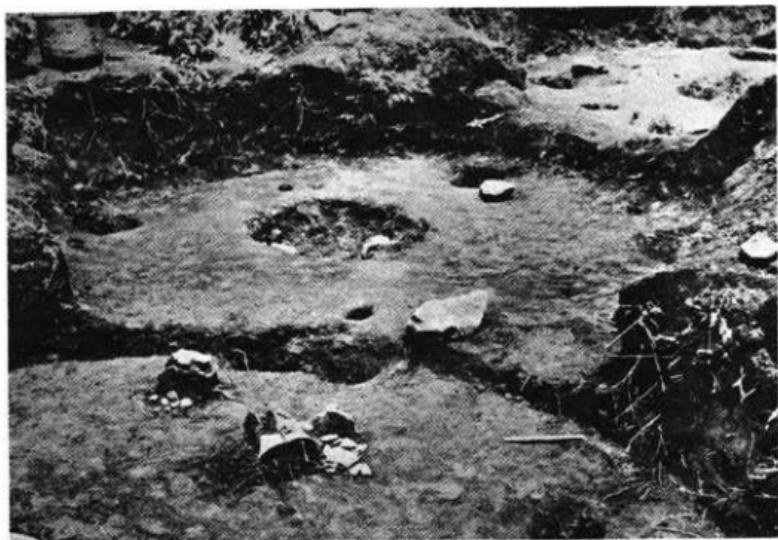


与助尾根住居址の連続

第一二住居址（手前）・第一一住居址（中央）・第九住居址（上手）



与助尾根第一二址床上大甕



相模の尾根の相隣る住居址

第一二住居址（手前）・第一一住居址（中央）・第九住居址（上手）



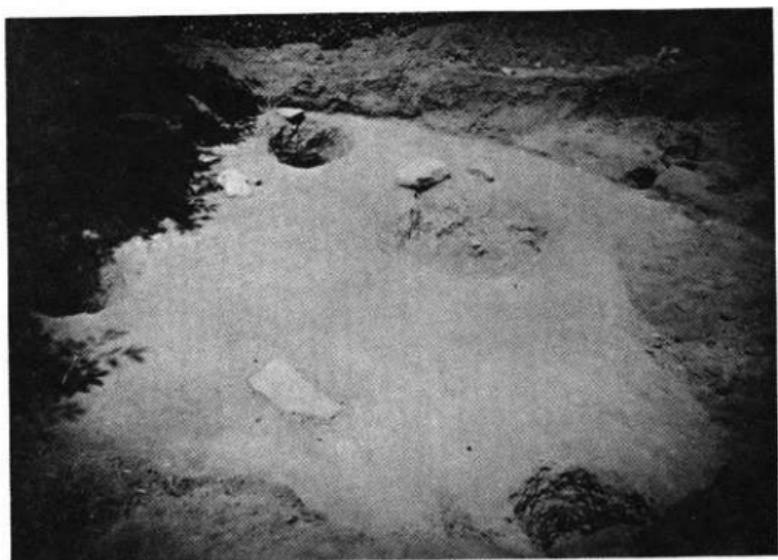
1. 第一一址出土

2. 第一二址出土

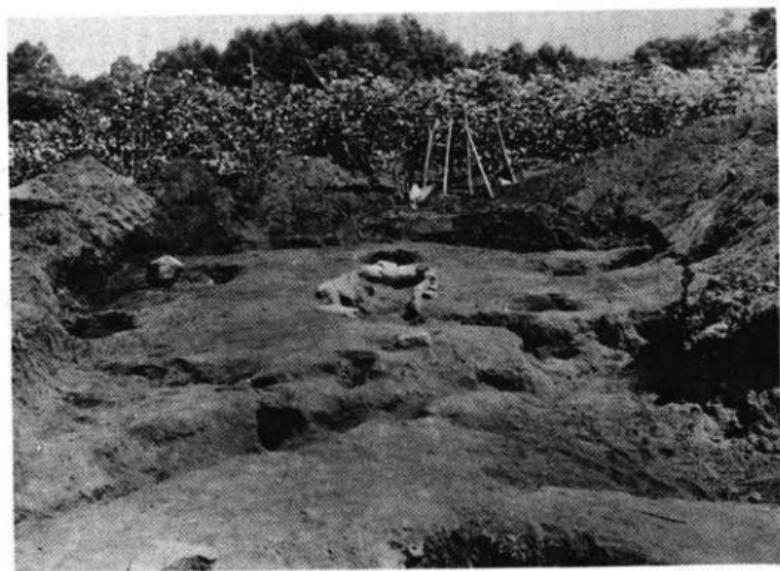
3. 第三四址出土

4. 第三四址出土

5. 第一一址出土



与助尾根第一三住居址

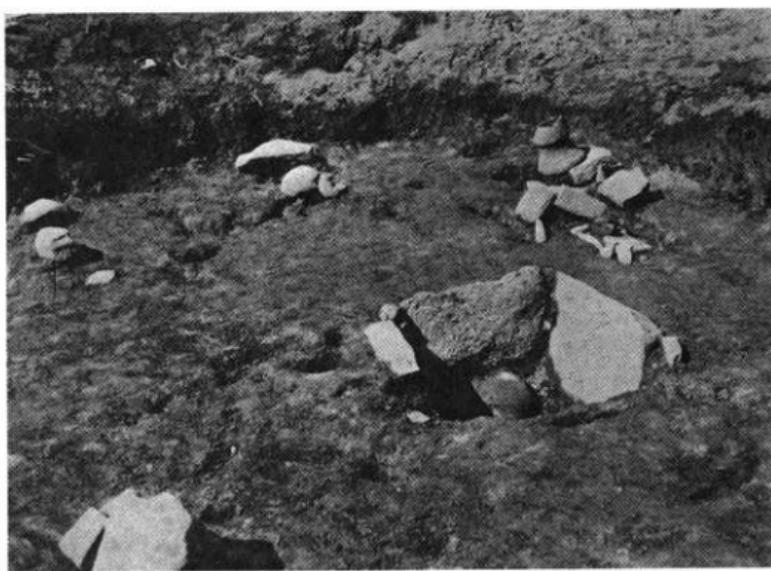


与助尾根第一四住居址

図 版 35



与助尾根第一四址の石窯

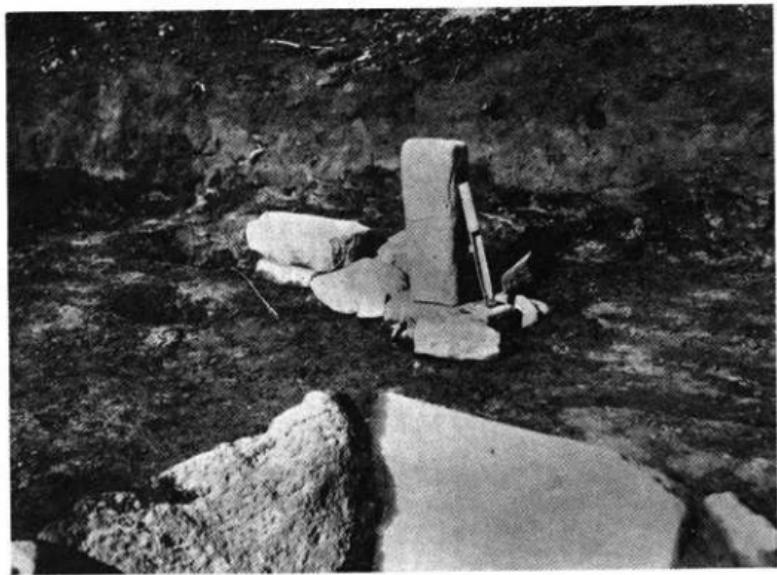


与助尾根第一五住居址 一東方より一

図 版 36



与助尾根第一五住居址 一北方より一

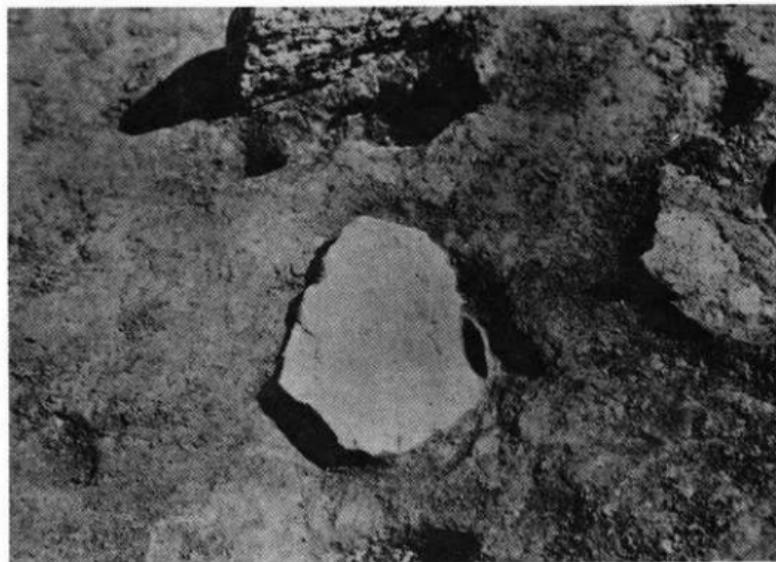


同上北西隅にある石壇の復原

図 版 37

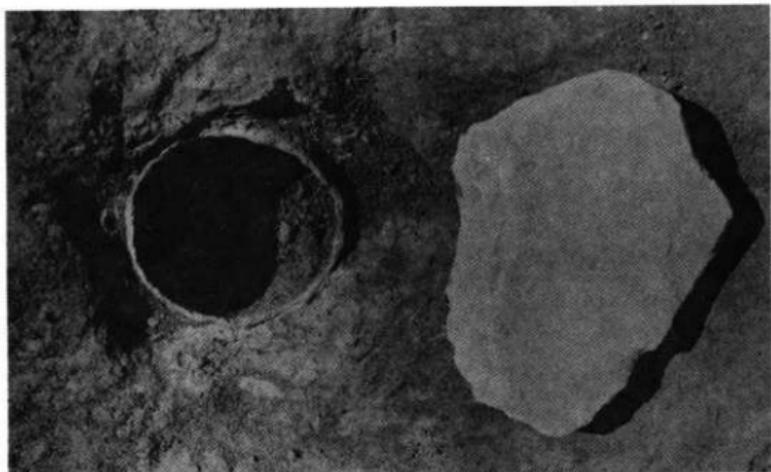


与助尾根第一五址に於ける一土器の出土状態



与助尾根第一五址の石蓋せる伏壺

図 版 38



与助尾根第一五址の石蓋を外した伏窓

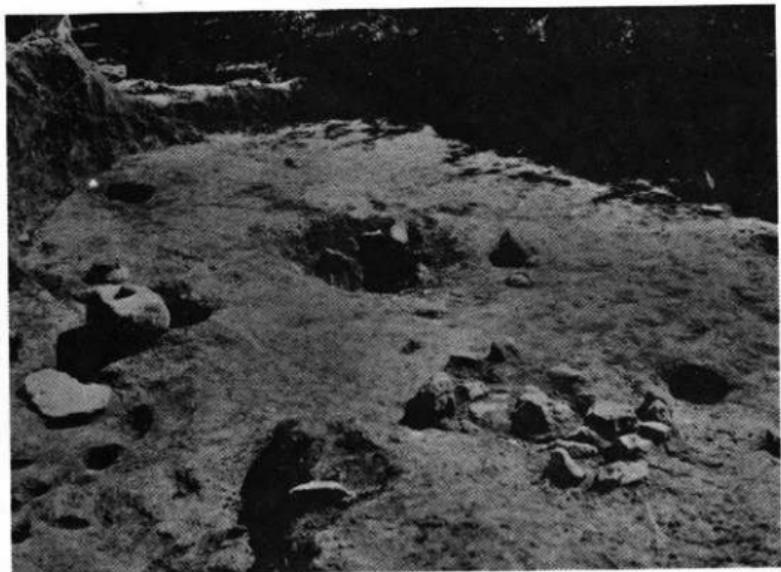


与助尾根第一五址伏窓

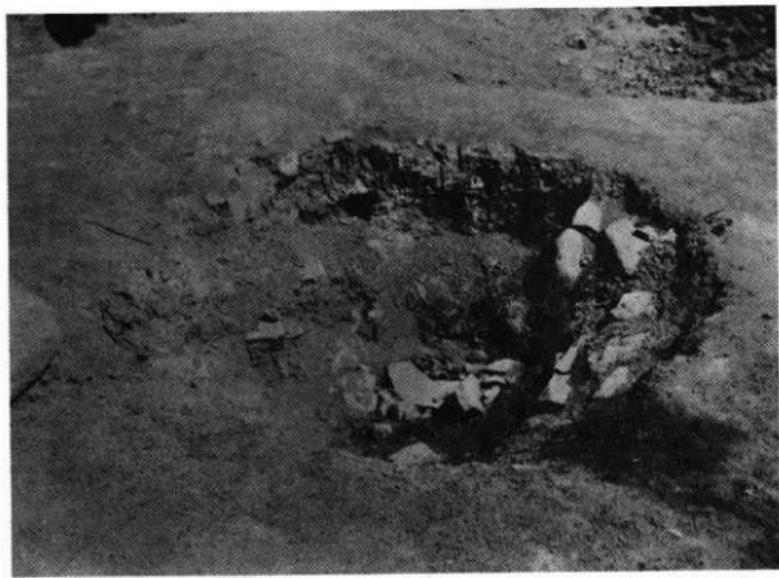


与助尾根第一二址的手土器

図 版 39



与助尾根第一六住居址



同上内穴炉

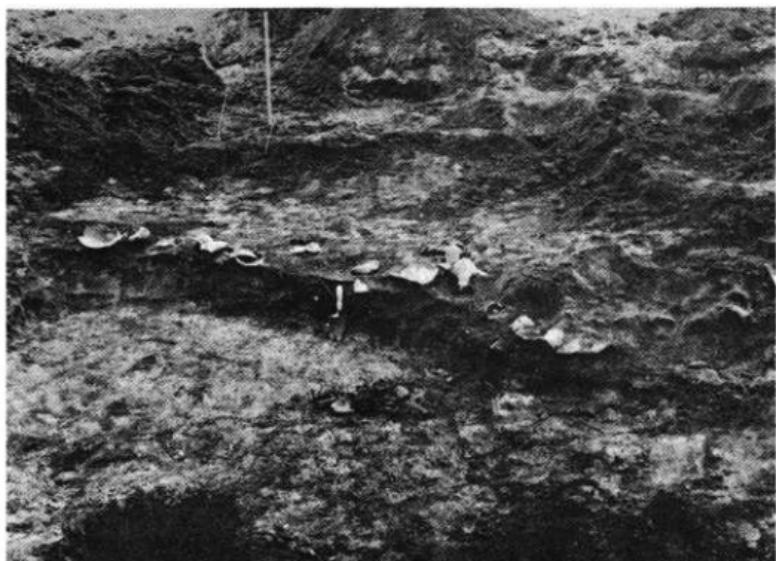
図 版 40



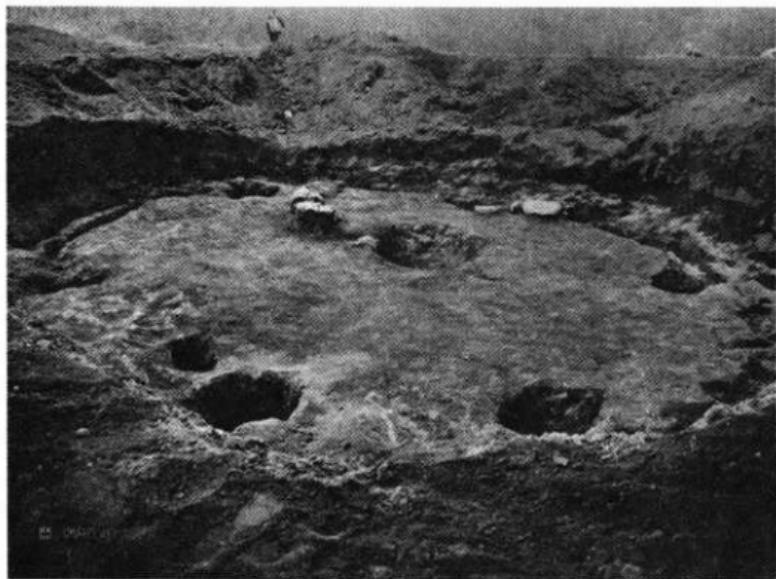
与助尾根第一七住居址



同上の穴炉と石壙

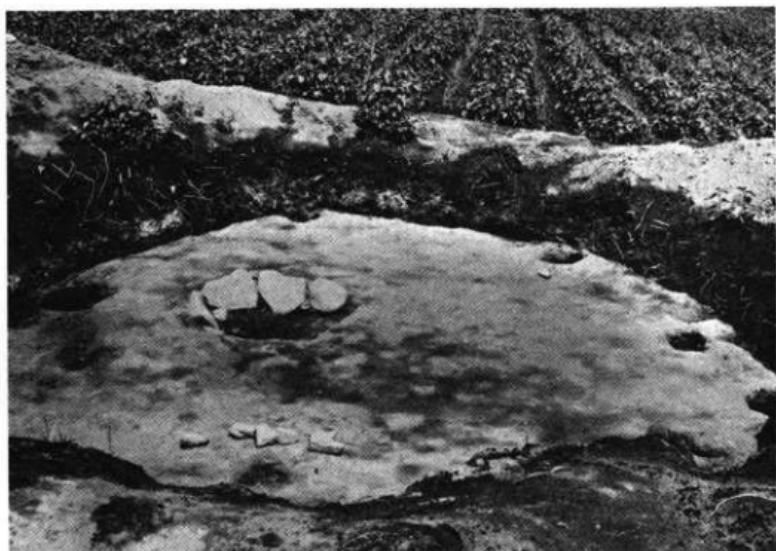


与助尾根第一八住居址堆土中の土器層と床面との関係

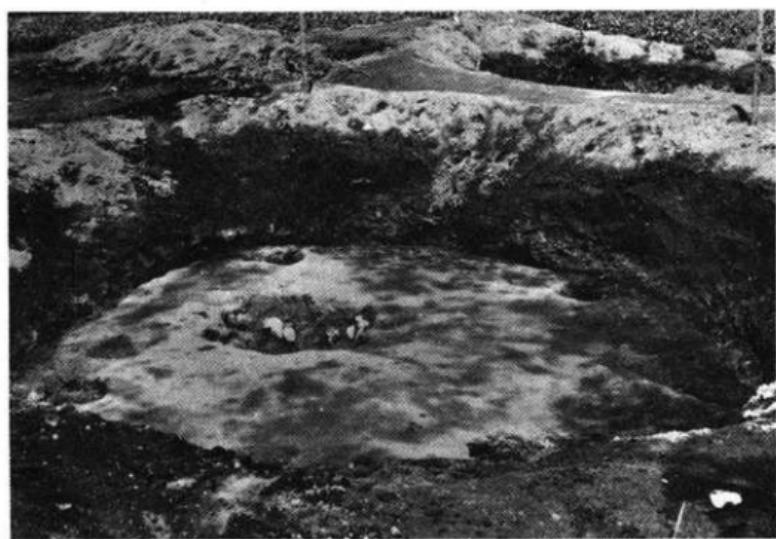


与助尾根第一八住居址

図 版 42



与助尾根第一九住居址

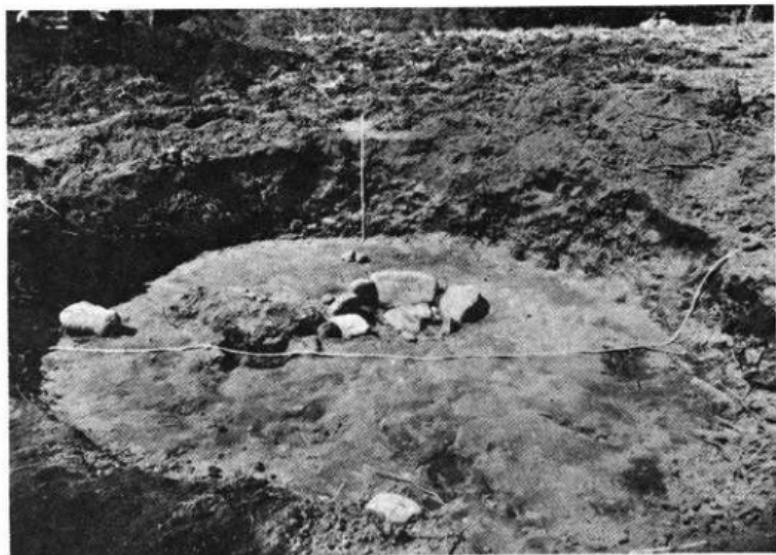


与助尾根第二〇住居址 —西方より—

図 版 43



与助尾根第二一住居址



与助尾根第二五住居址

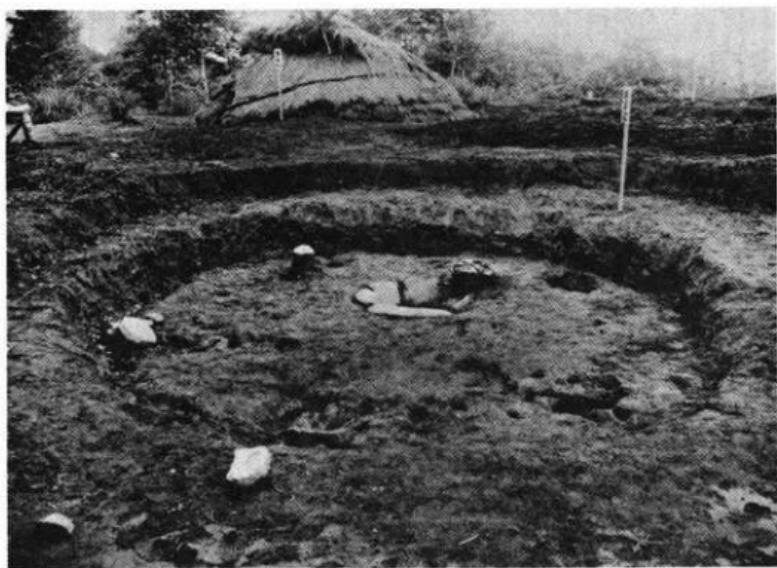


与助尾根各址出土土器

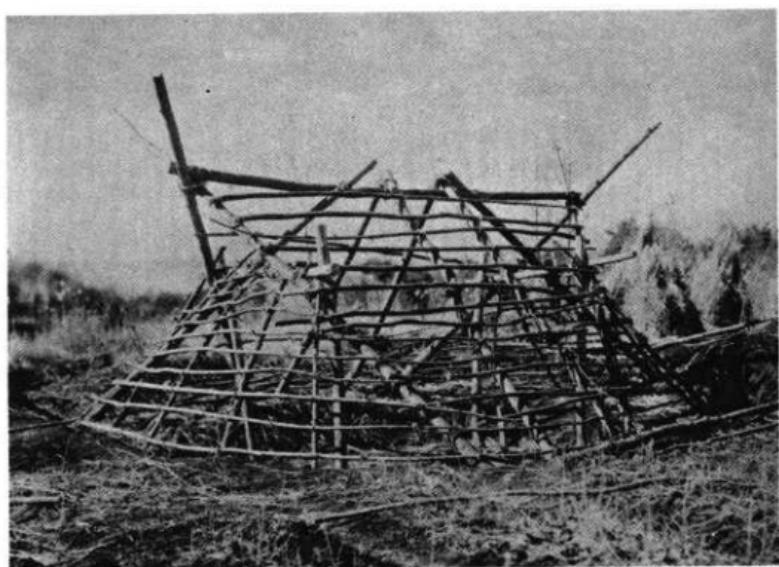
図 版 45



与助尾根第二七住居址



与助尾根第二八住居址



与助尾根第七住居址に復原せる上屋骨組（堀口博士設計）

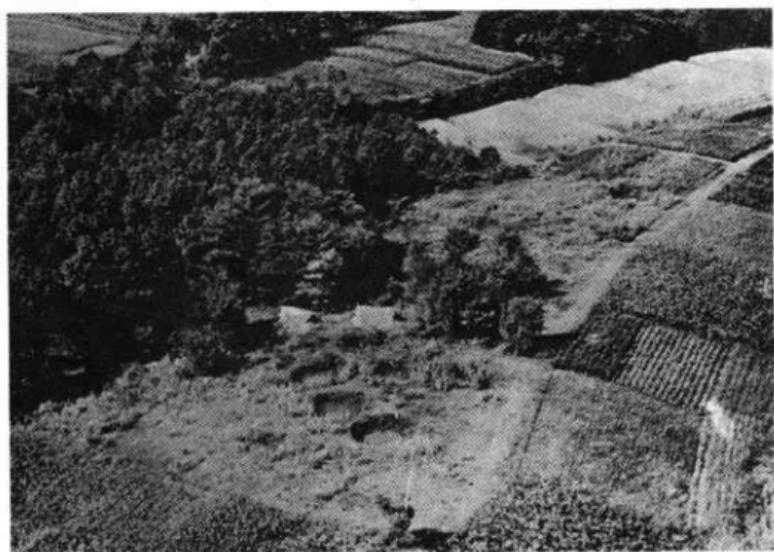


同第一〇住居址に復原せる上屋骨組（関野博士設計）

図 版 47



与助尾根第七住居址に架した復原家屋



与助尾根遺跡 一空より—（中部日本新聞社機撮影）



尖石考古博物館前景

尖石

著者

宮坂英式

昭和三十二年十二月十五日 印刷
昭和三十二年十二月十五日 発行

発行者	堯行者
印刷	コロタイプ 印刷
活版印刷	活版印刷
製本	製本
小口伊乙	株式会社 東京寫真印刷所
中央製本印刷株式会社	中央製本印刷株式会社
株式会社下島大光堂	株式会社下島大光堂
茅野町教育委員会	茅野町教育委員会
株式会社座右寶刊行会	株式会社座右寶刊行会
発売	発売

昭和三十三年



宮坂英式先生 年譜

明治二〇年

宮坂吉成三男として長野県諏訪郡豊平村南大

塩に生まれる

南大塩尋常小学校入学

合立豊平高等小学校入学

上諏訪町高島高等小学校第二学年転入

諏訪郡立諏訪実科中学校（現諏訪清陵高校）

入学
同校卒業（第六回卒）

上京して苦学
三月まで）

伏見宮博英上殿下尖石遺跡御发掘に奉仕する
尖石遺跡等をしばしば发掘して石碑等を發

見する

豊平村塩之日日向上遺跡にて初めて豊穴住居

址を発掘する

尖石遺跡にて初めて豊穴住居址二ヶ所を発掘

尖石遺跡にて豊穴住居址三ヶ所を発掘調査

尖石遺跡が文部省の史跡保存地に指定される

与助尾根遺跡にて豊穴住居址二八ヶ所を発掘調査する

豊平中学校に転任

日本考古学会第一回会員となる

書房より刊行する「尖石遺跡の研究」を蓼科教育功労者として長野県教育委員会より表彰される

「尖石遺跡」特別史跡に指定される

第一回信毎文化賞を受賞する

豊平中学校退職

「尖石」を茅野町教育委員会より

刊行される

無土栽培報告書「諏川」を刊行する

長野県考古学会初代会長に推される

茅野市文化財審議委員を依頼される

第一回中日文化賞（中部日本新聞）を受賞

する

発掘報告書「蓼科」を刊行する

熱四等瑞宝章を授与される

茅野市名譽市民に推される

尖石考古庭庭に胸像を建立される

学生社より「尖石」を刊行される

茅野和田遺跡を調査団長として発掘し報告書刊行される

「阿南町新野遺跡」を阿南町教育委員会より刊行される

第八回吉川英治文化賞を受賞する

米方を迎える

復刻版「尖石」を茅野市教育委員会より刊行される



現在の尖石考古館



与助尾根遺跡復原家屋

復刻版「尖石」あとがき

このたび、茅野市教育委員会にて、原田茅野市長の復刻版の序文にあるような趣旨によつて、宮坂英式先生の著書「尖石」の復刻版を刊行することになりました。

この尖石遺跡の発掘調査並びに報告書「尖石」につきましては、原版の藤田亮策先生外の方々の序文等によつて、明らかでありますので、省略させていただきまして、先生の人となりと申しますかお人柄について少し申させていただきます。

私は先生とは、同郷同村の出身でありますこともあって、三十数年前から尊敬と親愛の念を持つておりました。時には私の勤務していた学校にお話においていただいたこともあります。

私も縁あって、昭和四十三年四月より茅野市教育委員会にご厄介になるようになります。先生は尖石考古館長であり、市の文化財審議委員としてお働きいただいておりましたので、さらにさらに、先生のお人柄に尊敬と親愛の念を深くされて参りました。

先生を考古館にお尋ねすることは、数多くございますが、とくに先生といろいろの機会に同行して旅に出かけましたときは、この感を深くしました。三笠宮殿下を皇居の書陵部にお伺いしたとき、万博の折大阪市博物館に出掛けたとき、また文化財の審議員の方々との木曾路の研修の折等數え上げますればいく度もの思い出がござります。

温和・誠実・着実・篤実・篤學等はほんとうに文字通りびつたりする先生のお人柄であります。静かに物を眺め、そしてゆっくり考えて語り、それが時には俳句として表現されております。このご人格こそ、かかる大事業をなされました原動力であったことと想います。

次に、私の先生と同行いたしましたときの、先生の句を二、三、ここに載せさせていただきます。

茅柳や皇居の内の潮見坂 東京 皇居にて

玉椿細波刷ける砂清し 京都 大徳寺にて

懸樋水受くる柄杓に紅葉かな 木曾 興禪寺にて

原田市長さんのご理解と教育委員の方々のご協力、それに中央印刷の石井取締役さんのご尽力によりまして、予定通り順調に上梓出来ましたことを、有難く厚く御礼申し上げます。
おわりに、この復刻版頒布募集のチラシ「復刻版『尖石』の刊行について」を付け加えておきますので、ご覧いただければ幸いに存じます。

昭和五十年二月

茅野市教育長 木 川 千 年

復刻版「尖石」の刊行について

近時における考古学の進歩発達はまことにめざましいものがあり、諸開拓とともにあって、大規模な発掘調査がつぎつぎに行なわれるようになった。そして從来解明し得られなかつた古代集落構成の研究も一段と進歩し、考古学の重要なテーマの一つとなつてゐる。

さて、縄文時代集落研究の端緒ともいえる地方の一老学徒宮坂英式先生の、特別史跡「尖石石器時代遺跡」の発掘調査報告の集成「尖石」が茅野町教育委員会から発刊されたのは、今から十数年前の昭和三十二年である。今日、なおその学術的価値は高く評価され、かつまた新しい角度から検討されて、集落研究の貴重な資料として、ひろく研究者に引用されるところである。しかし、當時発行部数が少なく、その後再版もされなかつたため、充分に研究者並びに好学の士の需めに応じられない現状である。

また、一方宮坂先生は昭和四十九年四月第八回吉川文化賞を受賞され、五十年一月には米寿を迎える。これらを記念して「尖石」を復刻刊行し、いささかでも学会に裨益することができれば誠に幸とするところである。何とぞ、研究者はもとより研究機関・団体・学校・図書館等に備えられて、資料として活用され、また好個の読物とされることが願うものである。
なお、本書は多数の方々の利用に応えられるよう、でき得るかぎり廉価にて復刻することを主眼とし、子約制といたしますので、何とぞこの刊行事業達成のためにご協力くださることをお願いする次第である。

昭和五十年一月

茅野市教育委員会

昭和五十年三月二十日復刻

尖石

(非亮品)

著者
発行者
印刷者

宮坂英式
茅野市教育委員会
株式会社 中央印刷

長野県茅野市川岸一〇八

